

造山第2号古墳

付 伝・千足古墳出土遺物

2000年3月

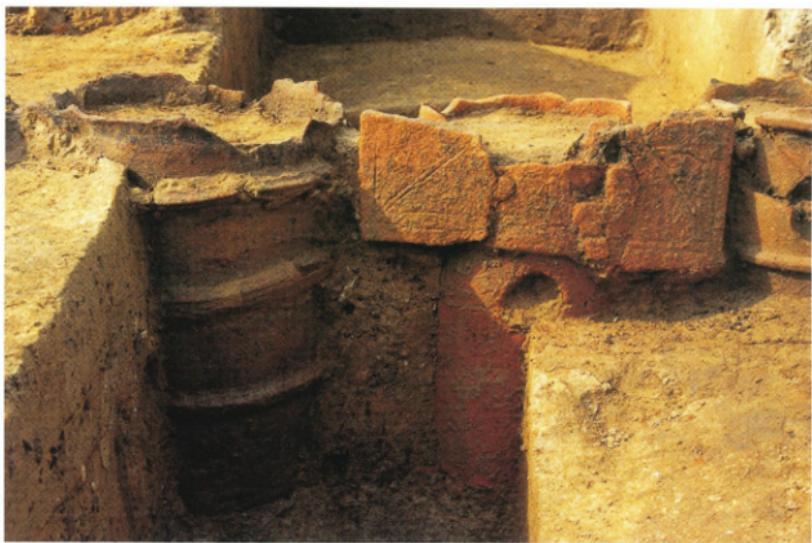
岡山市教育委員会

正 誤 表

頁	行	誤	正
挿図目次	第 49 図	ヨコハケ原体の分類	ヘラ記号のバリエーション
挿図目次	第 50 図	ヘラ記号のバリエーション	ヨコハケ原体の分類
13	第 4 図	造山古墳・陪墳遊歩・のルート	造山古墳・陪墳遊歩道のルート
15	30	埴輪76横倒し	埴輪76が横倒し
106	18	連鎖菱形文	重格文
106	33	連鎖菱形文	重格文
107	35	界線やはり	界線はやはり
109	13	衣蓋形埴輪	蓋形埴輪
111	32	向かって上方に向かって	上方に向かって
113	12	連鎖菱形文	重格文
116	34	衣蓋形埴輪	蓋形埴輪



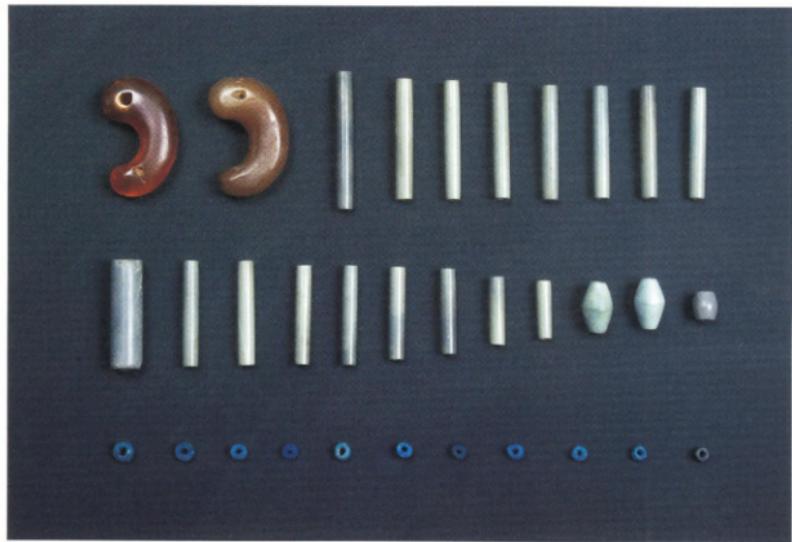
埴輪76



埴輪26・27出土状況



伝・千足古墳出土鏡



伝・千足古墳出土玉類

造山第2号古墳

付 伝・千足古墳出土遺物

2000年3月

岡山市教育委員会

序

吉備路のひとつの核をなす史跡・造山古墳は全国第4位、自由に立ち入りできる古墳ではわが国最大の大きさをもつ古墳です。市内にこうした重要な史跡をもっていることは、我々市民の誇りであります。それゆえ観光資源にという要望も強く、文化財としての保護や活用と調整、両立していくことは岡山市教育委員会の重要な課題のひとつとなっております。

このたび報告いたします史跡・造山古墳第二古墳は、造山古墳に隣接する小規模な古墳です。調査では多量の埴輪が列をなしている様子を目の当たりにして、その価値を改めて認識した思いがします。周辺遊歩道整備の工事中の不時発見という後手に回る事態になってしまいましたが、地元の方々と事業者である岡山市観光物産課、高松支所産業建設課、および工事関係者のみなさんのご理解とご協力により調査の実施と現状で保存することができました。同時に、当教育委員会としましては史跡の範囲に対する認識や周辺整備に対する姿勢に注意を喚起された思いがいたします。今後、この古墳をはじめとする造山古墳、造山古墳群の史跡整備と活用に努力を惜しまない所存であります。

最後になりましたが、調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々、ならびに関係機関に対して厚くお礼申し上げます。

平成12年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 戸 村 彰 孝

例　　言

1. この報告書は、岡山市教育委員会が平成9年12月18日から平成10年3月4日にかけて実施した造山第2号古墳関連遺構の調査報告書である。この遺跡は岡山市新庄下1174-2ほかに所在し、岡山市経済局商工観光部観光物産課が実施した造山古墳・陪塚遊歩道整備事業に伴い発見された。
2. 調査と報告書の作成は岡山市教育委員会生涯学習部文化課が行った。
3. 調査は安川満文化財保護主事が担当し、1月12日以降、河田健二文化財保護主事の応援を受けたほか、藤井裕之、木村真紀が参加した。
4. 遺物の実測、写真撮影は安川が、トレイス、図版の作成は安川、伊原史子が行った。本書の執筆、編集は安川が行った。また校正においては、延原絢子の協力を得た。
5. 第V章には遊歩道整備事業に伴い実施した柳山古墳(造山第1号古墳)周辺の立会調査の成果をあわせて報告する。さらに、付章として調査中に寄贈を受けた伝・千足古墳出土遺物を報告する。また、出土した形象埴輪群について岡山大学大学院生・和田剛氏から玉稿をいただいた。
6. この報告書において用いている高度値は標準海抜高度とする。なお、高度値は岡山市教育委員会・岡山県発行500分の1「造山古墳群」に記載されている造山古墳前方部南隅角のベンチマーク・海拔9,379mを基準とした。また、方位は磁北である。
7. この報告書においては古墳時代の時期区分は特に断らない限り10期編年(広瀬和雄1991「前方後円墳の畿内編年」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国)に、円筒埴輪の編年は川西宏幸の円筒埴輪編年(川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2)に従うものとする。
8. 第2図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「総社東部」「倉敷」を、第7図は岡山市発行の2,500分の1岡山市域図14-1を複製、加筆したものである。第4図、第54図、第58図は岡山市教育委員会・岡山県「造山古墳群」に加筆、改変したものである。
9. この報告書で報告した遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会で保管している。

目 次

第I章 位置と環境	1
1) 周辺の景観と古墳の位置		1
2) 歴史的展開と周辺の遺跡		3
3) 造山古墳群をめぐる研究の現状		7
第II章 調査の経緯と経過	12
1) 遊歩道事業の経緯と概要		12
2) 増輪列の発見と保存の経緯		13
3) 調査の経過		14
第III章 遺構	18
1) 調査の方針・方法		18
2) 増輪列		20
3) 周溝状遺構		26
4) 測量調査と周辺の状況		28
5) まとめ		29
第IV章 遺物	30
1) 増輪列出土埴輪		30
2) 周溝出土遺物		54
3) まとめ		66
第V章 遊歩道整備事業に伴う立会調査	84
1) 柳山古墳(造山第1号古墳)周辺の調査		84
2) 造山古墳前方部西端の調査		87
第VI章 調査の成果と展望	89
付章1 伝・千足古墳出土遺物	93
付章2 形象埴輪から見た造山第2号古墳 和田 剛	99

挿 図 目 次

第1図 造山第2号古墳の位置	1
第2図 造山第2号古墳と周辺の遺跡 (1/25,000)	3
第3図 伝・第2号古墳の石室蓋石 (1/20)	9
第4図 造山古墳・陪墳遊歩道のルート (1/2,000)	13
第5図 3号線(埴輪列部分)の設計変更	14
第6図 現地説明会	15
第7図 調査区の位置 (1/4,000)	17
第8図 造山第2号古墳と調査区 (1/400)	19
第9図 墓輪列・調査区と各トレンチの配置 (1/250)	20
第10図 墓輪列(1) (1/50)	21
第11図 墓輪列(2) (1/50)	22
第12図 トレンチ1(埴輪列部分) (1/40)	23
第13図 トレンチ2 (1/40)	24
第14図 トレンチ3 (1/40)	25
第15図 トレンチ4 (1/40)	25
第16図 トレンチ5 (1/40)	26
第17図 トレンチ1(周溝部分) (1/40)	27
第18図 第2号古墳周辺の現状 (1/800)	28
第19図 墓輪各部の呼称	30
第20図 墓輪列出土埴輪(1) (1/3, 1/4)	31
第21図 墓輪列出土埴輪(2) (1/3, 1/4)	32
第22図 墓輪列出土埴輪(3) (1/3, 1/4)	33
第23図 墓輪列出土埴輪(4) (1/3, 1/4)	34
第24図 墓輪列出土埴輪(5) (1/3, 1/4)	36
第25図 墓輪列出土埴輪(6) (1/3, 1/4)	37
第26図 墓輪列出土埴輪(7) (1/3, 1/4)	38
第27図 墓輪列出土埴輪(8) (1/3, 1/4)	39
第28図 墓輪列出土埴輪(9) (1/3, 1/4)	41
第29図 墓輪列出土埴輪(10) (1/3, 1/4)	42
第30図 墓輪列出土埴輪(11) (1/3, 1/4)	43
第31図 墓輪列出土埴輪(12) (1/3, 1/4)	44
第32図 墓輪列出土埴輪(13) (1/3, 1/4)	46
第33図 墓輪列出土埴輪(14) (1/3, 1/4)	47
第34図 墓輪列出土埴輪(15) (1/3, 1/4)	48
第35図 墓輪列出土埴輪(16) (1/3, 1/4)	50

第36図	埴輪列出土埴輪(17) (1/3、1/4)	51
第37図	埴輪列出土埴輪(18) (1/3、1/4)	52
第38図	埴輪列出土埴輪(19) (1/4)	53
第39図	周溝出土埴輪(1) (1/3、1/4)	55
第40図	周溝出土埴輪(2) (1/3、1/4)	56
第41図	周溝出土埴輪(3) (1/3、1/4)	57
第42図	周溝出土埴輪(4) (1/3)	58
第43図	周溝出土埴輪(5) (1/3)	59
第44図	周溝出土埴輪(6) (1/3)	60
第45図	周溝出土埴輪(7) (1/3、1/4)	62
第46図	周溝出土埴輪(8) (1/3、1/4)	63
第47図	周溝出土埴輪(9) (1/3、1/4)	64
第48図	周溝出土須恵器 (1/2)	65
第49図	ヨコハケ原体の分類 (1/1)	66
第50図	ヘラ記号のバリエーション	67
第51図	円筒埴輪口縁部と調整、ヘラ記号の相關関係 (1/2)	68
第52図	埴輪76と伝・柳山古墳出土埴輪 (1/8)	71
第53図	作山古墳出土埴輪(倉敷考古館蔵)	71
第54図	柳山古墳周辺の遊歩道と立会区間 (1/1, 000)	84
第55図	柳山古墳出土埴輪(1) (1/3)	85
第56図	柳山古墳出土埴輪(2) (1/3)	86
第57図	柳山古墳周辺出土須恵器 (1/2)	86
第58図	造山古墳前方部西端立会地点 (1/1, 000)	87
第59図	造山古墳前方部西端出土埴輪 (1/3)	87
第60図	吉備中坂地域における埴輪生産体制	91
第61図	伝・千足古墳出土鏡 (1/1)	94
第62図	伝・千足古墳出土鏡(拓本) (1/1)	95
第63図	伝・千足古墳出土巴形銅器 (1/2)	96
第64図	伝・千足古墳出土玉類 (1/1、1/2)	97
第65図	玉類の計測部位	97
第66図	盾形埴輪の部分名称	99
第67図	盾形埴輪分類(案)と高橋(1988)、田中(1994)、伊達(1997)の対応関係	100
第68図	円筒形基部先行製作技法	101
第69図	盾面部・円筒基部併行製作技法	101
第70図	第I群の細分類と各要素の対応関係	102
第71図	各群における鋸歯文の形態とその変遷	103
第72図	第2号古墳出土埴輪の規格比較 (1/12)	110
第73図	造山古墳表採の形象・器財埴輪 (1/6)	112

表 目 次

表 1	第2号古墳出土埴輪属性分析表	69
表 2	埴輪列出土埴輪観察表	72~79
表 3	周溝出土埴輪観察表	79~83
表 4	柳山古墳周辺出土埴輪観察表	88
表 5	柳山古墳周辺出土須恵器観察表	88
表 6	造山古墳前方部西端出土埴輪観察表	88
表 7	玉類計測表	97

図 版 目 次

卷頭図版 1	埴輪76
	埴輪26・27出土状況
卷頭図版 2	伝・千足古墳出土鏡
	伝・千足古墳出土玉類
図 版 1	造山第2号古墳遠景(造山古墳から)
	埴輪列(東から)
	埴輪列(西から)
図 版 2	埴輪列(埴輪1~4)
	埴輪列(埴輪5~7)
	埴輪列(埴輪8~11)
図 版 3	埴輪列(埴輪12~15)
	埴輪列(埴輪16~19)
	埴輪列(埴輪20~23)
図 版 4	埴輪列(埴輪24~27)
	埴輪列(埴輪28~31)
	埴輪列(埴輪32~35)
図 版 5	埴輪列(埴輪36~39)
	埴輪列(埴輪40~43)
	埴輪列(埴輪44~47)
図 版 6	埴輪列(埴輪48~51)
	埴輪列(埴輪52~55)
	埴輪列(埴輪56~59)

- 図 版 7 塗輪列(塗輪60~63)
塗輪列(塗輪64~67)
塗輪列(塗輪68~71)
- 図 版 8 塗輪列(塗輪72~75)
塗輪列(塗輪76・109)
塗輪列(塗輪107・108・111・77・78)
- 図 版 9 塗輪列(塗輪79~82)
塗輪列(塗輪83~86)
塗輪列(塗輪87~90)
- 図 版 10 塗輪列(塗輪95~98)
塗輪列(塗輪99~102)
塗輪列(塗輪103~106)
- 図 版 11 トレンチ 1 (塗輪列側)
トレンチ 2
トレンチ 2 b-b' セクション
トレンチ 2 c-c' セクション
トレンチ 2 塗輪78掘り方の状況
トレンチ 3
- 図 版 13 トレンチ 4 塗輪26掘り方の状況
トレンチ 4 溝状遺構
トレンチ 5
- 図 版 14 造山第2号古墳墳丘とトレンチ 1
周溝状遺構(塗輪列側から)
周溝状遺構(墳丘側から)
- 図 版 15 塗輪 3 胃部分
塗輪 9
塗輪 26
- 図 版 16 塗輪 27
塗輪 15・39・105
塗輪 51
- 図 版 17 塗輪 74・75
塗輪 107
塗輪 108・111
- 図 版 18 塗輪 106
塗輪 110
周溝出土円筒埴輪(14)
周溝出土不明形象埴輪(82)

- 図 版 1 9 周溝出土朝顔形埴輪
周溝出土円筒埴輪
周溝出土円筒埴輪(19)
- 図 版 2 0 周溝出土蓋形埴輪(77)
周溝出土蓋形埴輪(78)
周溝出土盾形埴輪(87)
- 図 版 2 1 周溝出土形象埴輪
周溝出土須恵器
ヨコハケ原体の分類 A類(55)
B類(68)
C類(74)
- 図 版 2 2 柳山古墳周辺出土埴輪
柳山古墳周辺出土須恵器
造山古墳前方部西端出土埴輪
- 図 版 2 3 伝・千足古墳出土巴形銅器
埴輪列埋め戻し状況
調査後の状況

第Ⅰ章



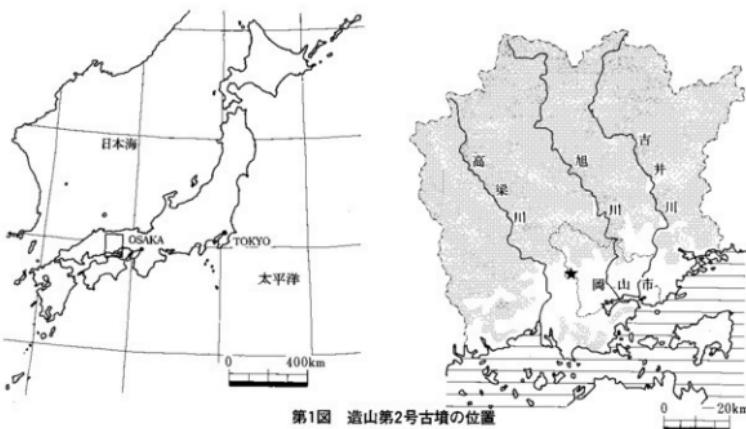
位置と環境

1) 周辺の景観と古墳の位置

造山第2号古墳は、造山古墳の陪塚群と言われる古墳群中の古墳である。行政的には岡山市新庄下にあたり、律令制下には備中国都宇郡河面郷に属していた。周辺は最大級の古墳が密集する一大古墳群であり、丘陵や山麓には多数の古墳が築かれている。付近には、新庄上、新庄下、千足などの集落があるが、多くが水田、畑地、果樹園であり、造山古墳や造山古墳群の古墳も1972(昭和47)年に当時の高松町が買収するまでは柿などを栽培する果樹園や畑地として利用されていた。

周辺の地理的環境 造山古墳の面する総社平野、足守川流域平野は瀬戸内海の多島海と吉備高原と呼ばれる隆起準平原の山並みに挟まれた平野群—広義の岡山平野の一部である。北を吉備高原の南縁、南を都窪丘陵などで挟まれ、平野内も三手丘陵、黒住丘陵やその他の独立丘陵が存在する。

この地域は隆起運動の不活発な地域であり、吉備高原や都窪丘陵などの山塊は老年期の山地～準平原が隆起したものである。そのため、頂に比較的なだらかな旧輪廻の地形を残しており、侵食輪廻の地形の発達段階では幼年期にあたる。隆起準平原面は大きく標高400～700mの吉備高原面と300m以下の瀬戸内面(瀬戸内丘陵群)に分けられる。これらの山地、丘陵の母岩はほとんどが花崗岩類からなっている。この花崗岩類は中生代白亜紀末から新生代古第三紀にマグマが貫入して形成され、その後の地殻変動と浸食作用によって地表に露出したものである。また、東の中山丘陵や都窪丘陵の最高峰・福山(標高302m)周辺には砂岩質・泥岩質の古生層が分布している。また、都窪丘陵は南部・西部では比較的急峻な斜面をなすが、北部・北東部では標高60～70mの丘陵が続き、なだらかな傾斜地、低丘陵となって平地に続いている。造山古墳群をはじめとする数多くの古墳はこうした丘陵上に立地するものがほとんどである。



第1図 造山第2号古墳の位置

足守川は吉備高原の高陣山に水源が求められ、深い渓谷をつくりつつ南流し足守付近で吉備高原を出る。造山古墳の前面、岡山市三手付近で血吸川、前川を合わせた砂川と合流、岡山市古新田で笛ヶ瀬川に合流する。また、古くは高梁川が総社市湛井付近から東に曲流し足守川に合流していたという。氷期には海平面の低下により瀬戸内海は陸地化していたといわれ、塩飽諸島付近を分水嶺として東流した流れは古大阪川に合流し紀伊水道から、西流したものは豊後水道から太平洋に注いでいた。侵食された老年期の山地が後氷期の海進により水没した姿が瀬戸内海の多島海である。足守川流域平野も海進により谷部に浸入した海を埋める形で発達した沖積平野ととらえられる。海進の最盛期には沖積地部分は大半が水没していたと思われるが、その実態はほとんど未解明である。弥生時代～古墳時代には高梁・足守川は庭瀬、撫川付近で吉備穴海に注いでいたといわれており、弥生時代、古墳時代の集落遺跡もこの付近が南限となっている。

この地域は現在では農業を主とする田園地帯となっており、吉備の中枢地域であった頃の様子を窺うことは難しい。沖積地部は夏には水稻、冬にはイ草やムギを、山寄りの丘陵地ではブドウ・モモなどの果樹栽培を行う。気候は少雨であることと日照時間が長いことが特徴であり、そのためこの地域でもため池が多く作られている。一帯は「吉備路風土記の丘県立自然公園」「吉備史跡県立自然公園」の二つの県立公園に指定され景観保全に一定の規制が課せられている。しかし、かえって周辺の開発、遺跡の破壊を加速させた感は否めない。かつては岡山の典型的な農村であったこの地域も、岡山・倉敷に10km前後という距離もあり、急速に宅地化が進んでいる。現在付近を山陽自動車道・岡山自動車道が通り、工業団地の誘致、ゴミの埋め立て処分場、山土採取など変化の波は確実に押し寄せている。

造山古墳群付近の地形と景観 造山古墳・造山古墳群は都窪丘陵東部の仕手倉山(標高224m)から北側に派生する尾根の末端、西側を三須丘陵、東側を黒住丘陵の標高60～70mの丘陵に挟まれた広い谷のほぼ中央に突き出した標高10～40mの低丘陵上に立地する。なお造山古墳はこの丘陵最末端を整形・盛り土して築造されていると考えられる。造山古墳群の立地する丘陵の両側の低地部は、現在では一面に水田が拡がっているが、江戸時代末期以来のは場整備などの開発以前は低湿な後背湿地であった。これらの開発に際しては、多量の土砂が造山古墳群の丘陵から採取され低地部に埋められたと伝えられ、この際造山古墳群の古墳も大きく損なわれたと言われる。しかし、それほど多量の土砂を採取しながら、滅失した古墳は「柳山南丘」古墳と新庄車塚古墳のみで、造山古墳をはじめとする現存する古墳が思った以上によく旧状を残していることは、ひとえに地元住民の先人の墳墓に対する畏敬の念があったためと思われる。

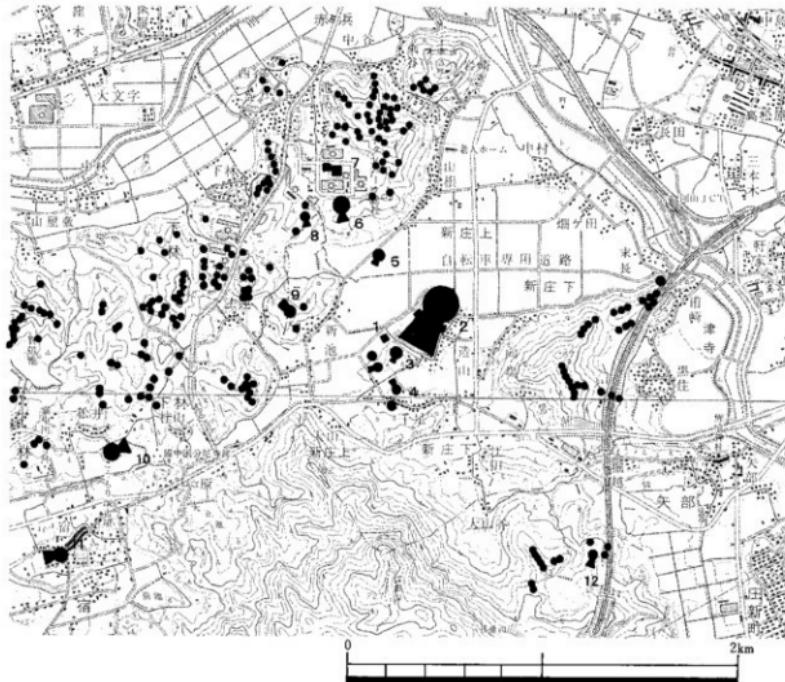
参考文献

- 高橋達郎・福岡義隆・斎藤伸英ほか 1983 『岡山県史』第1巻 自然風土
 安藤久次・海津正倫・中村和郎・山中二男 1995 「東西にのびる内海と山なみー中国・四国の自然」『日本の自然 地域編 6 中国四国』岩波書店
 光野千春・沼野忠之・高橋辰朗 1982 『岡山の地学』山陽新聞社
 西川宏 1975 『吉備の国』学生社

2) 歴史的展開と周辺の遺跡

旧石器・縄文時代 この地域に人類の痕跡が認められるのは旧石器時代からで、浅尾遺跡⁽¹⁾、宝福寺裏山遺跡⁽²⁾など総社平野北辺の丘陵上などから散発的に石器の出土が知られている。縄文時代には縄文時代早期の遺構・遺物が総社市真壁遺跡⁽³⁾、長良山遺跡⁽⁴⁾、倉敷市矢部奥田遺跡⁽⁵⁾などで出土している。海進によって現出した新たなる環境である沖積地に本格的に人々が進出するのは、縄文時代後期以降とみられる。総社市南溝手遺跡⁽⁶⁾、同窪木遺跡⁽⁷⁾、真壁遺跡では縄文時代後期、晚期の多くの遺物が出土、吉野口遺跡⁽⁸⁾では晚期の土器とともに堅穴住居と見られる遺構、炉跡などが検出されている。

弥生時代 弥生時代前期になると遺跡は増加し、高梁川分流域では真壁遺跡、総社市山津田遺跡⁽⁹⁾、南溝手遺跡、窪木遺跡など、足守川流域では東山遺跡⁽¹⁰⁾、川入遺跡⁽¹¹⁾などで遺構・遺物が検出されている。弥生時代中期前葉～中葉には新郎貝塚⁽¹²⁾、吉野口遺跡などがある。前期～中期を通じて全体的に遺跡は小規模で、旭川流域平野における津島遺跡・南方遺跡などのような拠点的集落は形成されないようである。



第2図 造山第2号古墳と周辺の遺跡 (1/25,000)

- 1, 造山第2号古墳
- 2, 造山古墳
- 3, 榊山古墳(造山第1号古墳)
- 4, 千足古墳(造山第5号古墳)
- 5, 新庄車塚古墳
- 6, 小造山古墳
- 7, 折敷山古墳
- 8, 夫婦塚古墳
- 9, 錢瓶塚古墳
- 10, こうもり塚古墳
- 11, 宿寺山古墳
- 12, 矢部大塚古墳

弥生時代後期になると、足守川流域に高塚遺跡⁽¹³⁾、津寺遺跡⁽¹⁴⁾、矢部南向遺跡⁽¹⁵⁾、上東遺跡⁽¹⁶⁾など大規模な集落が出現する。一方、高梁川分流域には真壁遺跡、窪木遺跡、美野田遺跡⁽¹⁷⁾などが存在する。また、後期後半には攝築弥生墳丘墓⁽¹⁸⁾をはじめ、鯉喰弥生墳丘墓⁽¹⁹⁾、雲山鳥打弥生墳丘墓群⁽²⁰⁾、矢藤治山弥生墳丘墓⁽²¹⁾、宮山弥生墳丘墓⁽²²⁾など大規模な墳墓が築造される。攝築弥生墳丘墓は矢部丘陵に所在する双方中円形の弥生墳丘墓である。両突出部を含めると全長70mを超える当時最大の墳墓であり、円丘部には巨大な立石を並べ、特殊器台を伴っており、この地域におさまらず吉備全城に力を及ぼし得るような首長の墳墓と見られる。また、矢藤治山弥生墳丘墓、宮山弥生墳丘墓の両墳丘墓は前方後円形の墳形と最新段階の特殊器台を伴っており、規模、主体部、副葬品など共通点が多い。また墳形が奈良県藤向石塚墳丘墓と類似するとも指摘されており、古墳出現直前の墳墓として注目される。

古墳時代 古墳時代前期においても津寺遺跡を中心とする遺跡群はさらに拡大する。しかし、備前南部の旭川下流域、吉井川下流域に比べると古墳の築造は低調といえる。1期・2期にこそ特殊器台形埴輪が知られる矢部大塙古墳⁽²³⁾をはじめ、足守川を挟んだ対岸の吉備中山山上に尾上車山古墳⁽²⁴⁾、中山茶臼山古墳⁽²⁵⁾が築かれるものの、これに続く古墳は川西編年2期の埴輪を持つ平野北部の小盛山古墳⁽²⁶⁾のほかは有力な古墳は見あたらない。尾上車山古墳、中山茶臼山古墳も基盤となる地域が備前側の一宮平野であるのか、足守川流域平野であるのか意見が分かれしており、これをのぞくとさらに旭川下流域の古墳の乱立状況とは対照的なようと言える。小盛山古墳も墳長105mという規模を持ちながらも、墳形は造り出し付円墳であることは象徴的である。

こうした状況の中、古墳時代中期になると墳長360mという全国的に見ても際だった規模の造山古墳が突如として築造され、続いて総社市作山古墳をはじめとする大形前方後円墳が次々と築造されるようになる。造山古墳群の西側の丘陵上、三須丘陵の東端部には小造山古墳⁽²⁷⁾、夫婦塚古墳⁽²⁸⁾、銭瓶塚(銭瓶ぐろ)古墳⁽²⁹⁾、折敷山古墳⁽³⁰⁾などが築かれる。三須丘陵の南から南西の平野部には県下第2位、全国第9位の規模を誇る作山古墳⁽³¹⁾、宿寺山古墳⁽³²⁾、角力取山古墳⁽³³⁾などが存在する。また、三須丘陵など周辺の丘陵には数多くの中小の古墳が築かれている⁽³⁴⁾。さらに当該期のこの地域、特に造山古墳群において注目されることは、朝鮮半島系の遺物が目に付くことである。詳しくは後述するが、柳山古墳(造山第1号古墳)からは国内唯一例の馬形帶鉤をはじめ伽耶系の陶質土器が出土しており、高塚遺跡、津寺遺跡などの集落遺跡からも朝鮮半島系の土器が多く出土している。奥ヶ谷窯跡⁽³⁵⁾といった初期須恵器段階の窯跡も確認されており、陶邑TK73型式段階には同時期の他地域のものとは異なる特徴的な一群がこの地域に限定的に認められる⁽³⁶⁾。のことから、この時期に多くの渡来人がこの地域に存在しており、吉備勢力の一翼を担っていたことが窺われる。

造山・作山古墳以降、古墳は規模を縮小し、古墳時代後期には一時目立った古墳が築造されなくなるが、6世紀後半になると、全長約100mのこうもり塚古墳⁽³⁷⁾、全長45mの江崎古墳⁽³⁸⁾といった前方後円墳が相次いで築かれ、一大群集墳地域となる。こうもり塚古墳は全長19.4mという吉備最大の巨大な横穴式石室をもち、「浪形石」と呼ばれる岡山県井原市産の貝殻石灰岩製の家形石棺がおかされている。江崎古墳は石室全長13.8mを測り、同じく貝殻石灰岩製の家形石棺を備える。周辺にも綠山古墳群⁽³⁹⁾など準巨石墳と言えるような有力古墳が存在する。また、平野北辺の山麓には千引遺跡、カナクロ谷遺跡などの製鉄関連遺跡⁽⁴⁰⁾が存在し、集落遺跡では窪木薬師遺跡⁽⁴¹⁾、吉野口遺跡のように鍛冶構造を伴う集落が知られており、鉄の精錬から製品の生産までこの地域で一貫して行われていたことが窺われる。

古代以降 古代にはこの地域は、備中の中心地として備中国分僧寺・国分尼寺が築かれ、備中国府も

総社平野のはば中央部に想定されている。また北部の鬼城山には古代山城「鬼ノ城」があり、この麓には吉備大宰府が存在したのではともいわれる。都窪丘陵の北麓には官道・山陽道が通り、津幡駅が置かれた。中世末には織田・毛利両軍の激突する最前線となり、備中高松城の水攻めなど羽柴秀吉の天下取りの舞台として知られるようになる。江戸時代にはこの地域は、岡山、足守、松山、蒔田、岡田、庭瀬など各藩の所領が入り組み、近世西国街道の宿場は東の板倉、西の川辺に置かれ、そのため農村的景観が定着して行った。

周辺の遺跡　ここでは造山古墳・造山古墳群に關係の深い周辺の中期大形古墳を中心に見ていくこととする。

小造山古墳(岡山市新庄上・総社市下林)

全長約135m、後円部径約92m、同高さ約12m、前方部前端幅約86m、前方部高さ約9mを測る三段築成の前方後円墳である。後円部の周囲には周溝が存在する。かつては造山古墳に先行すると考えられてきたが、出土埴輪から川西編年の4期、5世紀後葉に位置付けられる。

夫婦塚古墳(岡山市新庄上・総社市下林・赤浜)

小造山古墳の南西約150mの尾根上に立地する全長約45mの帆立貝式前方後円墳である。後円部のほぼ中央に堅穴式石室が存在する。円筒埴輪片のほか挂甲片が採集されている⁽⁴²⁾。その特徴から6世紀代の築造と考えられる。本墳の南約40mには編笠古墳が存在する。

銭瓶塚(銭瓶ぐろ)古墳(岡山市新庄上・総社市下林)

小造山古墳の南方約500mに位置する前方後円墳で、全長約50m、後円部径約35m、同高さ約8m、前方部は長さ幅とも約15mを測る。後円部中央に盃掘孔があり、「兜」を出土したとの伝承もある⁽⁴³⁾。

折敷山古墳(総社市赤浜)

小造山古墳の谷を隔てた北側の尾根上に立地する一辺約40mの方墳である。円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか短甲など形象埴輪が出土しており、5世紀の第2四半期ごろに比定されている。

作山古墳(総社市三須)

全長286m、後円部径174m、同高さ約24m、前方部長110m、同前端幅174m、三段築成の前方後円墳。各段には円筒埴輪列が巡る。埴輪には円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか蓋、肩甲の形象埴輪が知られている。円筒埴輪は大半が無黒班で外面の二次調整はB種ないしC種ヨコハケ、川西編年の4期に位置付けられる。5世紀中葉の築造とみられている。

宿寺山古墳(都窪郡山手村宿)

全長118~120m、後円部径64ないし75m、同高さ10m以上、前方部前端幅62m、前方部高さ8.5mを測る二段築成の前方後円墳で、周囲に盾形の周溝の跡がある。1889年、1920年に地元の人により発掘され、堅穴式石室から変形四神鏡、盤竜鏡、刀剣、鉄鎌、鋤子、玉類などが出土した。前方部にも堅穴式石室があったとの伝えもある。また、円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか蓋などの形象埴輪が採集されている。円筒埴輪は無黒班で二次調整にB種、C種ヨコハケを施すもので、川西編年4期に位置付けられる。築造時期はこれら特徴から作山古墳に後続する時期とされている。

角力取山古墳(都窪郡山手村東三軒屋)

作山古墳の南方に所在する一辺38mの大形方墳で、出土埴輪から造山古墳とほぼ同時期と考えられている。また、角力取山古墳の南東には一辺23mの方墳、赤阪童塚古墳⁽⁴⁴⁾が存在する。

注

- (1) 鎌木義昌・小林博昭 1987「浅尾遺跡」『総社市史』考古資料編
- (2) 間壁蘋子 1967「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館研究集報』第2号
　　鎌木義昌・小林博昭 1987「宝福寺裏山遺跡」『総社市史』考古資料編
- (3) 村上幸雄・高田明人・谷山雅彦 1987「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編
- (4) 村上幸雄 1987「長良山遺跡」『総社市史』考古資料編
- (5) 高畠知功ほか 1993「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82
- (6) 平井泰男ほか 1995「南構手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100
　　平井泰男ほか 1996「南構手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107
- (7) 岡田博ほか 1997「窪木遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』120
- (8) 草原孝典ほか 1997『吉野口遺跡』岡山市教育委員会
- (9) 高田明人 1984「山津田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』総社市教育委員会
　　高田明人 1987「山津田遺跡」『総社市史』考古資料編
- (10) 乗間実 1990「岡山市域における最近の発掘調査成果」『古代吉備』第12集
- (11) 正岡睦夫 1974「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集
- (12) 近藤義郎 1953「備中新邱貝塚」『古代学研究』8
- (13) 岡本寛久ほか 1991「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』20
- (14) 大橋雅也ほか 1993「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98
　　亀山行雄ほか 1996「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104
　　亀山行雄ほか 1997「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106
- (15) 江見正己ほか 1996「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94
- (16) 伊藤晃ほか 1974「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集
- (17) 村上幸雄 1987「美野田遺跡」『総社市史』考古資料編
- (18) 近藤義郎 1992『幡築弥生墳丘墓の研究』幡築刊行会
- (19) 近藤義郎 1980「矢喰・鰐喰・幡築」『鬼ノ城』鬼ノ城学术調査委員会
- (20) 近藤義郎 1986「雲山鳥打弥生墳丘墓群」『岡山県史』考古資料
- (21) 近藤義郎ほか 1995「矢藤治山弥生墳丘墓」矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
- (22) 高橋謙・鎌木義昌・近藤義郎 1987「宮山墳墓群」『総社市史』考古資料編
- (23) 白石太一郎・春成秀爾・杉山晋作・奥田尚 1984「箸墓古墳の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第3集
- (24) 水内昌康 1986「尾上車山古墳」『岡山県史』考古資料
- (25) 近藤義郎 1986「中山茶臼山古墳」『岡山県史』考古資料
- (26) 草原孝典 1996「小盛山古墳の測量調査—岡山市足守地域の地域史研究—」『古代吉備』第18集
- (27) 中田啓司・近藤義郎 1987「小造山古墳」『総社市史』考古資料編
　　村上幸雄・前角和夫 1993「小造山古墳の埴輪について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
- (28) 谷山雅彦 1987「夫婦塚古墳・編笠古墳」『総社市史』考古資料編
- (29) 高田明人 1987「錢瓶塚古墳」『総社市史』考古資料編
- (30) 谷山雅彦 1987「折敷山古墳」『総社市史』考古資料編
　　村上幸雄・前角和夫 1993「折敷山古墳の調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10

- (31) 春成秀爾 1983 「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』
葛原克人 1986 「作山古墳」『岡山県史』考古資料
- 村上幸雄・前角和夫 1993 「周辺古墳出土の埴輪について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
- (32) 梅原末治 1925 「備中郡の二三の墳墓について」『歴史と地理』15-1
西川宏 1986 「宿寺山古墳」『岡山県史』考古資料
- 村上幸雄・前角和夫 1993 「周辺古墳出土の埴輪について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
- (33) 西川宏 1975 『吉備の國』学生社
- (34) 岡山大学考古学研究部 1976 『三須丘陵遺跡分布調査報告』
- (35) 柴田英樹 1997 「奥ヶ谷窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121
- (36) 中野雅美 1991 「須恵器の編年一山陽一」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 雄山閣
- (37) 葛原克人 1979 「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35
- (38) 近藤義郎ほか 1987 「江崎古墳」『総社市史』考古資料編
- (39) 近藤義郎・北條芳隆ほか 1987 『岡山県総社市緑山古墳群』総社市文化振興財團
- (40) 武田恭彰 1991 「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』1
- (41) 島崎東ほか 1993 「彦木葉師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86
- (42) 和田剛氏のご教示による。
- (43) 永山卯三郎 1937 『吉備郡史』巻上
- (44) 注33文献

3) 造山古墳群をめぐる研究の現状

この古墳群は造山古墳の前方部前端の堀切を挟んで南西に位置し、現在6基の古墳が存在する。1921年(大正10年)に国指定史跡に指定されている。地元ではかつては「七つくり」と呼ばれていたという^⑩。1912年(明治45年)古墳群中の榎山古墳(第1号古墳)、千足古墳(第5号古墳)が発掘され、馬形帶鉤をはじめとする多量の遺物を出土、千足古墳では直弧文の装飾をもつ石室が明らかになった。1913年(大正2年)官命により両古墳を調査に訪れた和田千吉の報告^⑪では古墳群中に7基の古墳が存在したようである。1930年発行の『岡山縣通史』の永山卯三郎の記述^⑫では「大正八年以来の調査に係るもの」として

加茂造山古墳	大字新下庄	前方後円式前方部に石棺あり
榎山東丘	同上	円丘高二尺、直径一五六尺
同西丘	同上	今竹林方丘の如きは切落の結果高一五尺、径九〇尺
同中丘	同上	今切落されて三角形となれり、復元せば径七〇尺高一五尺
同坤丘	同上	円丘高二尺、径一四〇尺、丘下埴輪破片多し
同南丘	同上	全然崩されて平地となれり
千足下の古墳北	同上	円丘高二尺、径一九〇尺、石室存す
千足下墳、南丘	同上	円丘高一八尺、直径一〇五尺、今果園となる

としており、規模や方角、現状から東丘が榎山古墳、西丘が第2号古墳、中丘が第3号古墳、坤丘が第

4号古墳、南丘が現存しない1基にあたると思われる。

1936年(昭和11年)には梅原末治らによって調査され、円墳とされていた千足古墳が帆立貝形の前方後円墳であること、同墳石室の実測図が報告された⁽⁴⁾。

戦後、西川宏による徹底した現地観察に基づく研究が特筆される。西川はこの古墳群を造山古墳被葬者の陪臣・陪從者の墓、すなわち陪塚であると評価し「原初的な官僚とでもいうべき層が結集したことの反映」と考えた⁽⁵⁾。これに対し、春成秀爾は造山古墳の外帶の区画と第2号古墳の南辺西辺が一致するとし、少なくとも第2号古墳のみは陪塚としてよいとや慎重なとらえかたをする⁽⁶⁾。宇垣匡雅は埴輪などの検討から、古墳群中の古墳にある程度の時期差を認めながらも陪塚として評価する⁽⁷⁾。古墳群が陪塚群であるか否かは、主墳である造山古墳との築造時期の関係はもとより、主墳を含めた規格性の追及、周辺の他の諸古墳との対比、さらには「陪臣」自体の性格の追及が必要と考えられる。たしかに古墳群中の古墳は造山古墳に対し極めて近接した関係にありながらも、計画的な配置のもとに築造されているようには見えない。また、副葬品などの実態のある程度判明しているものが柳山古墳、千足古墳の2基のみという現状では、その被葬者たちの性格を追及することはもとより、陪塚か否かを判断することは難しいというほかない。

それでは古墳群中の各古墳に関して概要を見ることとしよう。

造山古墳⁽⁸⁾は全長360m、後円部径224m、同高さ32.5m、前方部前端幅230m、前方部高さ27mを測る、岡山県最大、全国第4位の規模を誇る前方後円墳である。墳丘は三段築成でくびれ部の両側に造出しが付属する。各段には円筒埴輪列があり、葺石を敷設している。後円部からは盾、蓋、韌、家の形象埴輪が採集されている。円筒埴輪は外面の二次調整は簾状痕のあるB種ヨコハケ、C種ヨコハケであり、黒斑のある野焼きのものを含んでいるようである。前方部には阿蘇凝灰岩製⁽⁹⁾の削り抜き式の長持形石棺(舟形石棺)がある。この蓋には妻部分に直弧文⁽¹⁰⁾が描かれており、熊本県鴨籠古墳の石棺との類似が指摘されている⁽¹¹⁾。この石棺は前方部に建つ神社社殿前から出土したと言われる⁽¹²⁾。

墳形や区画、築造時期に関しては、各研究者の被葬者觀や吉備政權觀とも相まって、見解が分かれている。春成秀爾は窖窯焼成の埴輪の存在を重視し430~440年前後とする⁽¹³⁾。また松木武彦は造山古墳出土の蓋形埴輪の特徴は5世紀前葉の終わりごろから中葉のものと指摘している⁽¹⁴⁾。それに対し、葛原克人は墳形に大阪府仲津良山古墳との類似を指摘し、窖窯焼成の埴輪は副次的なものと考え、築造時期を5世紀第1四半期とする⁽¹⁵⁾。墳丘外の区画に関しては、周溝は存在しないものとされてきたが、春成が周囲に「周溝なき外帶」を想定にするのに対し、葛原は渡り土手を伴う盾形の周溝の存在を主張している。

柳山古墳(第1号古墳)⁽¹⁶⁾は造山古墳前方部前端の堀切を挟んだ正面に位置し、現状では径約35m、高さ約65m、二段築成の円墳状を呈する。墳頂部と墳丘裾には円筒埴輪列が巡る。帆立貝形前方後円墳といわれるが、前方部(造出)の位置に関しては西北西側、南西側、南東側など諸説ある⁽¹⁷⁾。1912年の発掘でコウヤマキ製の割竹形木棺が出土、変形三神三獸鏡、馬形帶鉤、碧玉製卵形品、銅鈴、刀劍、槍、斧など多数の遺物が発見されたという。これらの遺物は、同時期に発掘された千足古墳の出土品と混在・混亂しているとの説もある⁽¹⁸⁾。また、墳丘南西側からは伽耶系の陶質土器、須恵器が発見されている⁽¹⁹⁾。この古墳出土と伝えられる円筒埴輪も知られており、川西編年4期に位置づけられる。

第2号古墳は柳山古墳の北西約100mに位置する、一辺約21m、高さ4mの方墳状の古墳である。永山卯三郎の記述によれば方墳を呈するのは周溝を削られたためであり、もとは円墳であったという⁽²⁰⁾。しかし、古墳の周囲は北側~北西側に同じ幅の方形の水田区画が取り巻いており、もともと方墳であったと

考へて良いと思われる。また、先述のとおり春成秀爾は南辺西辺が造山古墳外帯の区画に一致するとし、造山古墳と同時に企画、設計されたものとしている⁽²⁰⁾。造山古墳の外帯の存在はともあれ、第2号古墳東側の丘陵裾は造山古墳前方部の延長線で切られたようになっており、東辺西辺がこの延長線とほぼ平行することからも、第2号古墳が造山古墳の企画と密接な関係をもって築造されている可能性は高いものと思われる。また、墳頂には古銅輝石安山岩の板石が散乱しており、竪穴式石槨の石材と考えられるほか、造山古墳前方部上には第2号古墳の石槨の蓋石と伝えられる大形の安山岩板石が存在する⁽²¹⁾。

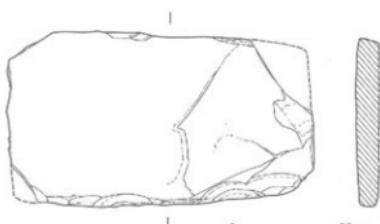
第3号古墳は第4号古墳の北西約50mに位置する。周囲を大幅に削平され墳形、規模などを復元することは困難だが、残丘や周囲の水田区画から径30m程度の円墳と考えられる。なお、消滅した柳山南丘はこの第3号古墳と第4号古墳の南西付近にあったものと思われる⁽²²⁾。

第4号古墳は柳山古墳の南西約120mの位置にある。現状では径約35m、高さ5.5m程度の円墳状を呈しており、かつては円筒埴輪列が存在したという⁽²³⁾が、現在は確認することができない。1991年の隣接地の調査で、周溝状の遺構と多量の埴輪が検出され、前方後円墳、あるいは帆立貝形古墳である可能性が高くなった⁽²⁴⁾。埴輪には円筒、朝顔形の他、短甲、蓋、家などの形象埴輪が知られている。このうち円筒、朝顔形埴輪は窯窓焼成と判断され、川西編年4期に位置づけられる。

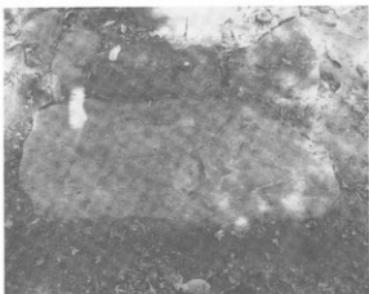
千足古墳(第5号古墳)⁽²⁵⁾は第4号古墳の南東約150mに位置する帆立貝形前方後円墳。全長約74m、後円部径約54m、同高約6.8mを測る。後円部のほぼ中央に横穴式石室の玄室が開口している。これは1912年の発掘で開口したもので、その上部には粘土槨が存在したという。玄室は長さ3.45m、幅2.5m、高さ2.7m、板石を小口積みにした持ち送りの強い石室で、赤色顔料が塗布されている。玄室奥を切石で区画して棺床を作りつけ、その前面の障壁には上面に健手文、前面に直弧文が彫刻されている。棺床上から半円方形帶変形五獸鏡、碧玉製勾玉、障壁と石室側壁との間から鉄齒が、石室上方の粘土槨から変形五獸鏡、巴形銅器、玉類、刀劍、斧、甲冑が出土した。

第6号古墳は千足古墳の南約100mの位置にある。現状は径約30m、高さ約5mの円墳である。

また、造山古墳の北西300m付近に新庄車塚古墳がかつて存在しており、径約70mの円墳、あるいは全長120m程度の前方後円墳であったと言われる。永山卯三郎によると付近に三吉塚址、車塚址の2基の削平された古墳を挙げており⁽²⁶⁾、車塚址がこれにあたると思われる。削平の際出土したと伝えられる円筒埴輪が知られている⁽²⁷⁾。また、三吉塚址に関しては「もと前方後円式なりしを破却して水田とす」とされ



第3図 伝・造山第2号古墳の蓋石(1/20)
(注7文献より一部改変)



ており、新庄車塚古墳北側の水田畦畔にその痕跡を残している⁽²⁰⁾。

一方、高橋護は造山古墳前方部前面の掘割の対岸に、造山古墳に付属する施設が存在すると主張する。この部分には多数の埴輪片が散布しているといい、埴輪の特徴は造山古墳出土のものと一致するという。掘割が北西部で狭くなっているのも、この施設が存在するためとする⁽²¹⁾。しかし、この地点は榎山古墳とも近接しており、埴輪の出土が即古墳以外の施設の存在につながるとは考えられない。また、埴輪の特徴もより詳細に検討する必要があるだろう。

註

(1) 「ぐろ」とは稲藁などを積み上げた塚状のものをいう。また、間壁忠彦・間壁蘿子は「造山もふくめ、七つ塹と称された」としているが、後述するように7基の古墳がかつては存在したようである。

間壁忠彦・間壁蘿子 1985 『日本の古代遺跡 23 岡山』保育社

(2) 和田千吉 1919 「備中郡新庄下古墳」『考古学雑誌』第9卷第11号

(3) 永山卯三郎 1930 『岡山縣通史』上編

(4) 梅原末治 1928 「備中千足の裝飾古墳」『近畿地方古墳墓の調査 3』

(5) 西川 宏 1975 『吉備の国』学生社

なお、西川はこれに先立つ「陪塚論序説」と題する論文中において、配置状態の3類型中A型—「丘陵上などに、主墳の前方または後方もしくはその両方に一ないし数基存在するもの」の例として造山古墳をあげている。

西川 宏 1961 「陪塚論序説」『考古学研究』第8巻第2号

(6) 春成秀爾 1983 「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』

(7) 宇垣匡雅 1992 「吉備の中期古墳の動態—使用石材の検討からー」『考古学研究』第39巻第3号

(8) 西川 宏 1986 「造山古墳」『岡山県史』考古資料

(9) 間壁忠彦・間壁蘿子 1975 「石棺研究ノート(1) 石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』第9号

(10) 宇垣匡雅 1993 「造山古墳前方部所在石棺について」『古代吉備』第15集

(11) 鶴籠古墳の石棺は阿蘇凝灰岩製で、枕部を高くする、蓋に直弧文を施すなど造山古墳の石棺と共通する特徴を多く持つ。春成秀爾によってその類似が指摘された(注6文献)。また、高木恭二是造山古墳の石棺が熊本県氷川下流域で製作された可能性が高いことを指摘している。

高木恭二 1986 「鳴別と鶴籠」『Museum KYUSHU』第21号

(12) 和田千吉によると、約70年前、すなわち1860年代に前方部より出土したと伝えられている。また、造山古墳の北西にかつて存在した新庄車塚古墳から出土したという説もある。いずれも伝聞による記事であり、現在この真偽のほどを論することはできない。1860年代といえば、永山卯三郎の記す新庄車塚古墳の破壊された時期に一致しており気になる所ではあるが、永山の記事に石棺の出土に関しての記載は見えない。一方、和田の記する所伝は石槨等は存在しなかったなど具体的で、かつこの石棺についての最も古い出土に最も近い記事であるといえる。また、宇垣匡雅が指摘するように、新庄車塚古墳から出土したものとした場合、蓋身とともに500m程も離れた造山古墳の前方部に運び上げることに不自然さを感じざるを得ない。

(13) 注6文献。宇垣匡雅も同様の理由から、これに近い位置付けを与えている。

(14) 松木武彦 1994 「吉備の蓋形埴輪—器財埴輪の地域性研究に関する予察ー」『古代吉備』第16集

- (15) 葛原克人 1991 「巨墳の造営」『岡山県史』原始・古代 I
 　　1992 「造山古墳とその時代」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社
- (16) 西川 宏 1986 「柳山古墳」『岡山県史』考古資料
- (17) 現状ではこれらの各方向に突出部状の平坦面が付設しているようにみえ、いずれとも判断し難い。西川宏は西北方向に幅・長さとも25m程度の造出しを想定し、形態・方向とも千足古墳と類似するものとする(注16文献)。また、南西側の平坦面からは陶質土器・須恵器が出土しており、これを造出したとする説もある(注20文献)。一方、春成秀爾は注6文献中の図1に南東方向に幅広の造り出しを描いている。
- (18) 特に馬形帶鉤に関しては、千足古墳出土との脱がある。また、東潮は柳山・千足古墳からの馬形帶鉤の出土自体に疑問を提出している。
- 東潮 1992 「朝鮮渡来の文物」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社
- (19) 島崎東 1982 「備中柳山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』第3号
- (20) 注3文献
- (21) 注6文献
- (22) 付近の民家に置かれていたものを現在の位置に移動したものらしい。
- (23) 宇垣匡雅は削平された古墳を「柳山中丘」とし、その位置を柳山古墳と第4号古墳の間に比定している(注7文献)。しかし、永山卯三郎の「切落されて三角形となれり」という記述から「柳山中丘」は第3号古墳にあたるとと思われ、「平地となれり」とされる「柳山南丘」が現在存在しない1基であることは疑い得ない(注3文献)。その位置に関しては、和田千吉の示した造山古墳周辺の古墳分布図(第一図)には、第3号古墳と第4号古墳と思われる近接した2点の西に古墳を示す点が記されている(注2文献)ほか、明治20年の新生上切絵図には第3号古墳の西に隣接して古墳の痕跡と思われる円形の地割りが存在しており、これが「柳山南丘」にあたる可能性が高い。なお、永山の方角の記述は、造山古墳の主軸をほぼ南北の軸として述べられているようである。第4号古墳にあたる「柳山坤丘」の「坤」は南西を示しているため、第4号古墳の位置に合わないようであるが、規模などの記載から第4号古墳であることは疑い無く、「坤」は「巽」の間違いである可能性が高い。
- (24) 西川宏 1971 「岡山県造山古墳とその周辺の前半期古墳」『古代学研究』第60号
- (25) 安川満 1998 「造山第4号古墳」岡山市教育委員会
- (26) 西川宏 1986 「千足古墳」『岡山県史』考古資料
- (27) 注3文献
- (28) 注6文献
- (29) 宇垣匡雅氏のご教示による。
- (30) 高橋謹監修 1989 『学習漫画 岡山の歴史』2 吉備の大王 山陽新聞社

第Ⅱ章



調査の経緯と経過

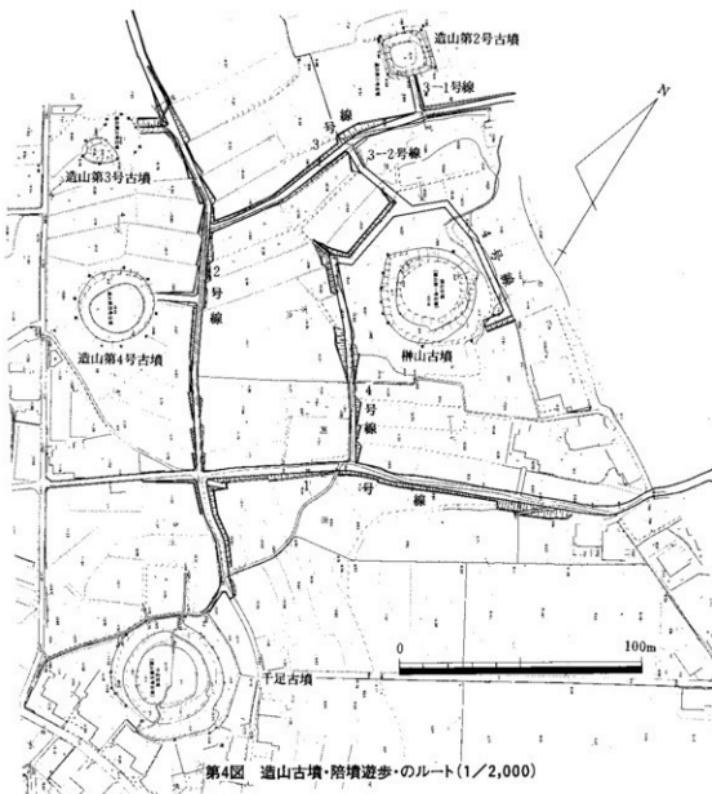
1) 遊歩道整備事業の経緯と概要

造山古墳・陪墳遊歩道整備事業は観光資源としての造山古墳、造山古墳群を周遊できる遊歩道を、観光客、地元住民の両方からの要望に応えるため、岡山市経済局商工観光部観光物産課が当教育委員会文化課と協議しつつ整備を計画したものである。1996(平成8)年度から1997(平成9)年度にかけて実施された。

そもそも、1920(大正10)年3月に造山古墳、造山古墳群が国の史跡に指定されて以来、地元住民は開発行為の制限、見学者等による私有地への無断進入など一方的に奉仕を強要されながらも、造山古墳に対する深い思い入れからこれを甘んじて受け入れてきたと言える。1969(昭和44)、1970(昭和45)年には造山古墳、および柳山古墳(第1号古墳)、第2号古墳、第3号古墳、千足古墳(第5号古墳)、第6号古墳の指定範囲が国庫補助事業として当時の高松町(1971(昭和46)年に岡山市へ合併)によって買収され、また、1972(昭和47)年には吉備路風土記の丘県立自然公園に指定されるなど、景観を含めての保存が図られている。しかし、総社市域の備中国分寺周辺が「特別地域」に指定され、歴史的環境整備、遊歩道、公衆便所、駐車場などの公園施設整備が県事業で図られているのに対し、造山古墳周辺では「普通地域」と言うことで公園としての整備が施工されないままの状況にあった。こうした不均等な施策に対し地元町内会、保存団体、地域振興団体は再三、付近一帯の整備、指定範囲の見直し、土地の買い上げ、学術調査の実施などを県、市に対し要望してきたという経緯がある。

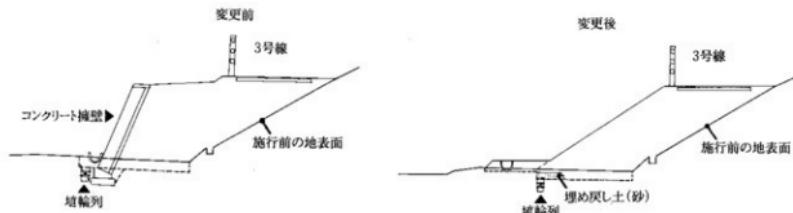
遊歩道整備に当たっては、観光客がグループで通行することを想定し2~3mの幅員とした。また、工法も現況の歴史的景観の保存を図った上で、極力掘削施工をさけるため盛り土や芝付けなどを採用し、擁壁や側溝設置を必要とする箇所も、原則的には掘削は表土にとどめることとした。それぞれの古墳にとりつく部分や古墳に近接する部分などに関しては掘削時に文化課職員が立ち会うこととした。実際の工事は、平成8年度には造山古墳前方部南端から千足古墳北側を通る1号線、千足古墳から第3号古墳、第4号古墳の東側を通る2号線などが、平成9年度には2号線から第2号古墳の南側を通り造山古墳前方部西端に至る3号線、1号線から丘陵をのぼり柳山古墳をまわる4号線などがそれぞれ施工された。

※この文章は平成10年1月19日付で岡山市長安宅敬祐から文化庁長官宛に提出された「埋蔵文化財発掘の通知」(文化財保護法第57条の3第1項)に添付された「岡山市新庄下造山古墳・陪墳遊歩道整備事業概略の説明書」を元に執筆した。



2) 墓輪列の発見と保存の経緯

平成9年度の立会調査は4号線の柳山古墳周辺を計画していた。柳山古墳は現状では円墳状を呈するが、帆立貝形古墳と目されており、造り出しの位置に関しては複数の説が提出されている。そのうち南側と北側の造り出し想定部分を遊歩道が通ることとなること、柳山古墳は周囲の平坦化が著しく、現状の墳壠の外側にも古墳に付属する施設が存在する可能性が考えられたためである。こうした中、1997(平成9)年11月18日、3号線の工事において、第2号古墳付近の表土を掘削したところ埴輪列が発見されたとの連絡が施工業者から文化課にあった。安川満文化財保護主事が現地に駆けつけたところ、表土直下に埴輪が輪を連ねるように20数本一直線に並んで見えている状況であった。建設作業員が興味から埴輪の脇を掘削した部分では、少なくとも検出面から10数cmは下に続いており、保存状態も良好であることが看取された。この地点は柳山古墳と第2号古墳のほぼ中間の、丘陵下端にあたり、第2号古墳の現状の墳壠から15mほど離れている。また、かなり下げが行われたことも聞き取り調査から知られており、立会調査の対象からはずれていた。この部分は遊歩道が柳山古墳側の丘陵から谷側の第2号古墳へおり



第5図 3号線(埴輪列部分)の設計変更

てくるルートにあたり、遊歩道計画の中でも最大の擁壁が設置される計画であった。この擁壁は基礎部分がちょうど発見された埴輪列にかかる設計になっていたため、観光物産課に対し設計の変更と埴輪列の現状保存を要請することになった。埴輪列部分は北側に用地を拡張した上、擁壁から埴輪列に土圧の及ばないよう緩やかな法を付けた土羽に、側溝に関しては現表土上にフリュウム管を上置きする工法へと変更された。また、埴輪列に関しては検出状況で簡単な調査・記録を行った後、保存措置を講じた上で埋め戻すこととなった。

現状保存の方針とその方法が決定したことを受け、遺跡発見の通知(文化財保護法第57条の6第1項)を平成10年1月5日付けで文化庁長官宛に提出した。一方、当初遊歩道整備事業全般に関しては、土木工事に伴う埋蔵文化財の発掘通知(文化財保護法第57条の3第1項)を提出していなかった。これは掘削が基本的に表土に限られること、計画ルートが史跡指定範囲の外であることはもとより、想定される古墳の範囲からも離れていると判断されたためである。この対応について、岡山県教育委員会から状況説明を求められ、一連の工事に対し埋蔵文化財発掘の通知を提出するよう口頭で指導を受けた。これを受け、平成10年1月19日付で岡山市長安宅敬祐から埋蔵文化財発掘の通知が文化庁長官宛に提出された。埋蔵文化財発掘調査の報告(文化財保護法第98条の2第1項)は岡山市教育委員会教育長戸村彰孝名で、平成10年2月23日付提出した。

また、埴輪列の調査に併行して柳山古墳周辺の立会調査も行った。また、遊歩道のコンクリート擁壁が景観上好ましくないと指摘を県教育委員会から受け、未着工部分のコンクリート擁壁は土囊、土羽および皿形水路の上置き設置工法に、すでに擁壁が設置された部分に関しても転落防止柵などを景観に配慮したデザインのものに変更した。

3) 調査の経過

調査・記録作業は、設計変更とそれに伴う用地買収の完了を待ち、発見からちょうど一ヶ月後の12月18日に安川を担当に開始された。調査開始当初は、基本的に現状の記録—簡単な測量・実測のみを行い、終了後は埴輪を長期間露出させる保存上の問題もあり早々に埋め戻す予定であった。埴輪列は発見時に20数個体が露出しており、まずは埴輪列の範囲、存在状況、埴輪の総数を把握するためその検出につとめた。また、年末年始の休みが迫っていたこともあり、調査現場の保安・管理上の問題から報道機関

への公表は、調査・埋め戻しのめどり立つ年明けを予定していた。にもかかわらず、25日、作業終了後にNHK岡山の記者らが、調査担当者に無断で調査区内に立ち入り、埴輪列を覆うシートをひらいて埴輪列を撮影、そのまま放送するという事件が起きた。インターネットでも造山古墳周辺で発掘調査が行われているという情報が流れていたといい、情報化社会の恐ろしさを改めて痛感することとなった。かくして、年末の作業最終日でもある翌26日は各報道機関の取材の対応に追われ、TV各局ではその日のうちに放送され、新聞各紙はその日の夕刊か翌日の朝刊に記事が掲載されることとなった。そのため、休業中の現場の管理、防犯について岡山市高松支所担当者、工事関係者を交え協議し、厳重にシートで覆った上、ロープ等で調査区を囲み、立入禁止の立て看板を設置した。また、休業中は工事関係者が定期的に見回ることとした。1998(平成10)年は1月5日から作業を再開した。11日には現地説明会を実施。造山古墳関連のはじめての「発掘調査」と言うこともあり、地元の方々や考古・古代史ファンの关心は高く、雨天にも関わらず約500名もの参加を得た。

1月9日頃までには、埴輪の範囲と総数がほぼ判明し、約35mの範囲に106個体が存在することが明らかとなり、検出した西端の個体から順に個体番号を設定した。埴輪列は円筒埴輪、朝顔形埴輪、盾形埴輪から構成され、規則性をもって並べられていることも判明した。しかし、埴輪列は西で調査範囲外に、第2号古墳の墳丘から想定される範囲を大きく超えて続いているほか、埴輪の検出されない部分があるなど未解明の問題も多く残されていた。特に、第2号古墳墳丘と埴輪列の範囲の関係からは、造山古墳に付属する施設である可能性も指摘されるようになり、こうした問題を解明する内外からの要求は日増しに高まっていた。そればかりでなく、埴輪の保存状態や設置状況など基礎的な資料を得るためにも、部分的にトレンチを入れなどの「本格的」調査が必要と考えられた。したがって、現地説明会の終了後に計5カ所にトレンチを設定し、埴輪列の堀込み面まで掘削することとした。12日には第2号古墳との関係を追求するために、3-1号線のコンクリート擁壁に沿って埴輪東端から現状の第2号古墳墳端までトレンチ1を設定し、掘削を開始した。統いて13日には、埴輪76周辺にトレンチ2を設定した。この部分は埴輪列が検出されず、埴輪76横倒しになっているなど他の部分と大きく様相が異なっており、埴輪列がとぎれている可能性や埴輪76が埴輪棺である可能性を考え設定したものである。同様に、2月5日からは埴輪27周辺にトレンチ4、10日からは埴輪51周辺にトレンチ3、埴輪1~7付近にトレンチ5を設定し、掘削を開始した。トレンチ調査では、トレンチ1で周溝と考えられる溝と葺石を検出したほか、埴輪列の堀方、埴輪列の前面に溝が存在することなどを確認、埴輪の一部は基底部まで露出させその場で実測した。同時に、それ以外の埴輪に関しても現地でできる限り詳細に観察・記録することとした。調査は周辺の測量も含め、3月3日までにほぼ終了し、4日には砂で埴輪列を保護した後埋め戻した。

調査にあたり、あくまで緊急の記録作成と言うことで、対策委員会の設置などは行わなかったが、岡

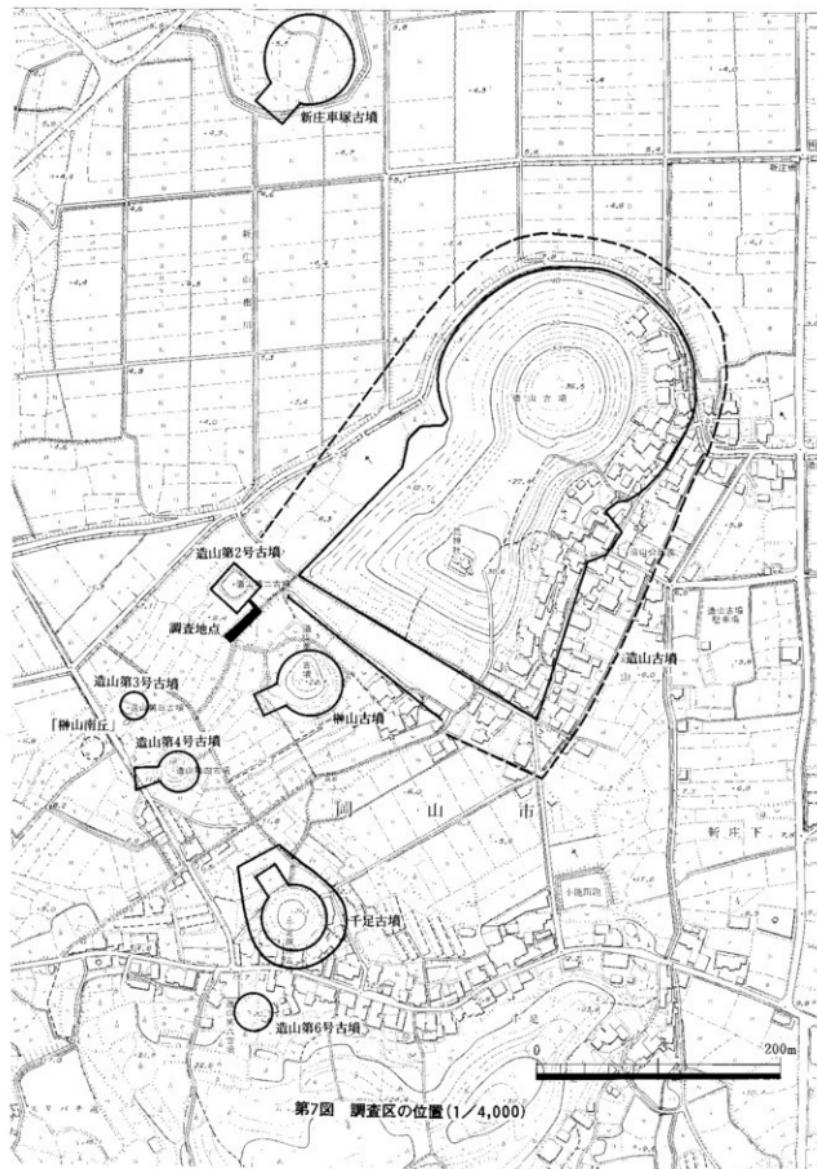


第6図 現地説明会

市教育委員会が通常の発掘調査で対策委員を委嘱している、稲田孝司、狩野久、西川宏、間壁忠彦、水内昌康の各先生方には調査から保存に至るまで幅広いご指導をいただいた。また、高松地区担当の岡山市文化財モニターの林信夫、三垣英の両氏からご教示とご支援をいただいた。さらに、東潮、石黒勉、伊藤晃、宇垣匡雅、氏平昭則、大久保徹也、大橋雅也、荻能幸、小田富士雄、甲斐昭光、金田明大、亀田修一、喜谷美宣、葛原克人、藏本晋司、河本清、小林青樹、近藤義郎、島崎東、高田恭一郎、高橋謙、武末純一、中田啓司、新納泉、濱隆造、春成秀爾、平井勝、平井泰男、広田和司、福田正継、北條芳隆、松木武彦、薬師寺慎一、山田俊輔、山磨康平、横田美香の各氏からは諸々のご教示、ご助言をいただいた。整備工事の主管課である岡山市観光物産課と施工者の岡山市高松支所産業建設課の担当者および施工業者の方々には現作業において様々な便宜を図っていただいた。記録不備のためここから漏れてくれる方々も含め厚くお礼申し上げる。

調査日誌抄

- 1997(平成9)年11月18日 墳輪列発見。
 12月18日 調査開始。埴輪検出。
 12月22日 西川宏、間壁忠彦、水内昌康の各対策委員の現地視察と指導。
 新納泉岡山大学助教授、松木武彦岡山大学助教授の現地視察。
 23日 狩野久対策委員の現地視察と指導。
 25日 作業終了後、NHK岡山埴輪列を撮影・放送。
 26日 各報道機関取材。年末年始休業へ準備。
 1998(平成10)年1月5日 作業再開。
 11日 現地説明会。
 12日 測量基準設定。トレンド1掘削開始。
 13日 トレンド2設定、掘削。トレンド1、2にて埴輪列前面に溝状遺構確認。
 28日 トレンド1にて葺石検出。埴輪列検出・清掃作業終了。
 30日 トレンド1完掘。埴輪列実測開始。埴輪片(埴輪107)盗難。
 2月5日 トレンド4掘削開始。
 10日 トレンド3・5掘削開始。
 19日 完掘状況写真撮影。埴輪列実測完了。埴輪注記と図面修正開始。
 23日 大雨のためトレンド1崩壊。埋め戻す。
 3月3日 第2号古墳および周辺測量。
 4日 墓輪列埋め戻し。周辺測量、調査終了。



第三章 遺構

1) 調査の方針・方法

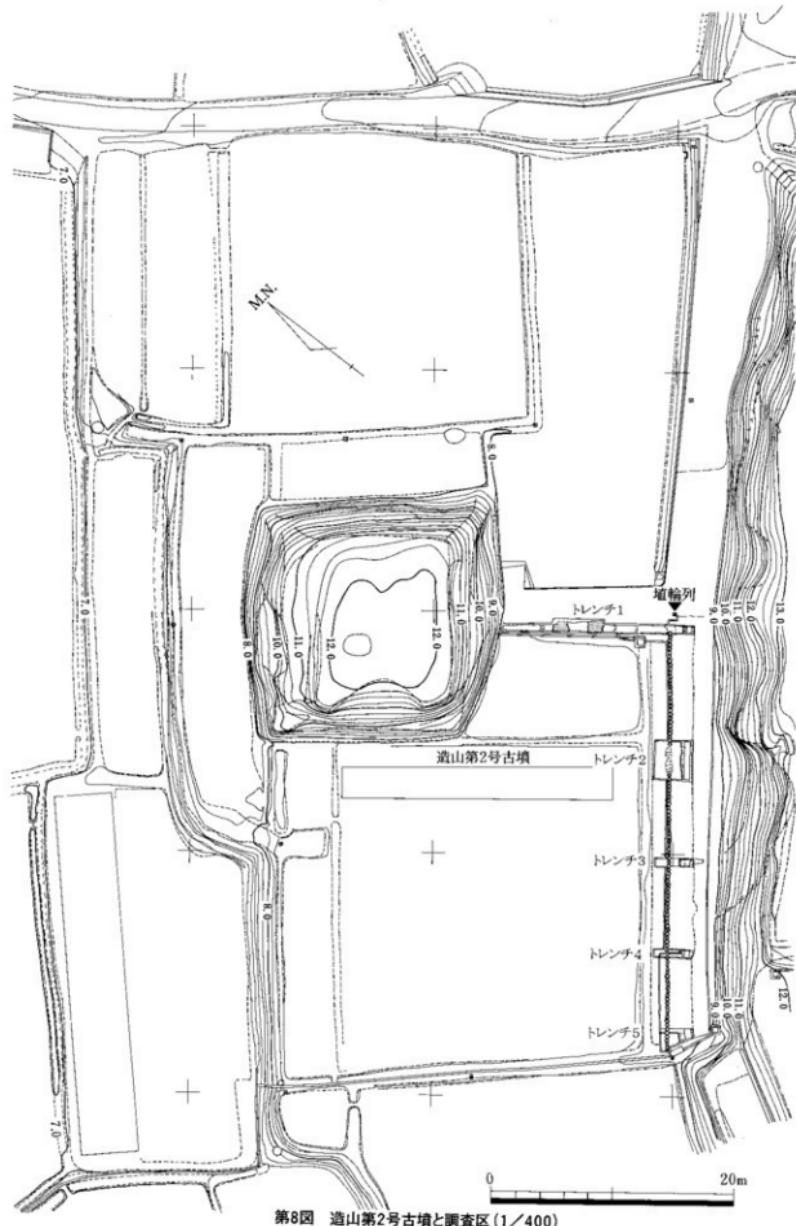
調査の基本方針　調査は、現状保存の方針が決まっていたこともあり、現状の記録一簡単な測量・実測のみを行い、埴輪も取り上げないこととした。埴輪列は発見時には20数個体が露出しており、まずは埴輪列の範囲、存在状況、埴輪の総数を把握するためその検出につとめた。検出した埴輪は西端の個体から順に個体番号を設定した。埴輪列の実測は縮尺1/10で平面図と立面図を作成し、実測の基準として、埴輪列の東端付近に任意に基準杭を設置、埴輪列に平行に任意のグリッドを設定した。レベルの基準は基準杭上面を仮0点とし、後に岡山市教育委員会・岡山県発行500分の1「造山古墳群」に記載されている造山古墳前方部南隅角のベンチマーク・海拔9.379mから仮0点を計測、海拔8.72mの実測値を得た。また、検出した埴輪は現地ができる限り詳細に観察・記録することとした。

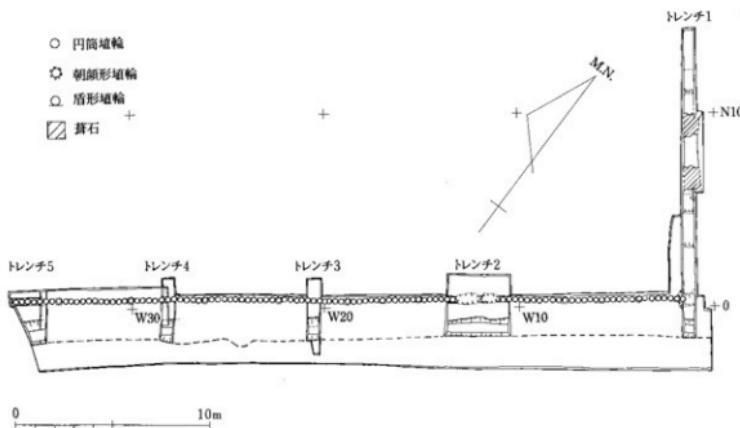
トレンチ調査　埴輪列と第2号古墳の関係や埴輪の残存状態、設置状況などを追求するために計5カ所にトレンチを設定した。トレンチ部分は埴輪列の堀込み面まで掘削することとし、埴輪の一部は基底部まで露出させた。

トレンチ1は主に埴輪列と第2号古墳との関係を追求するために設定したもので、3-1号線のコンクリート擁壁に沿って埴輪列東端から現状の第2号古墳墻端まで長さ約16m、幅約80cmを測る。埴輪106がセクションにかかるように設定し、地山である風化花崗岩まで掘削した。埴輪列と第2号古墳の間からは周溝と考えられる溝と葺石を検出した。埴輪106は検出面が三段目の上端付近で、高さ40cmほどが残存している。埴輪106は元位置を保っているが、埴輪105の中程から始まる溝状の擾乱坑内に入っている。したがって、基底部付近に掘方内埋土と考えられるにぶい黄褐色～灰黄色砂質土がわずかに残っていたものの、埴輪の堀方等は観察できなかった。

トレンチ2は埴輪76周辺に設定した。この部分は埴輪列が検出されず、埴輪76が横倒しになっているなど他の部分と大きく様相が異なっており、埴輪列がとぎれている可能性や埴輪76が埴輪棺である可能性を考え設定したものである。埴輪74から埴輪78までの幅約3.2m、長さ約3.2mのほぼ正方形のトレンチである。これも地山である風化花崗岩まで掘削し、埴輪76が擾乱坑内に倒れたものであることを確認、擾乱坑内から埴輪107～109、111を検出した。埴輪107～109はかろうじて元位置を保つ部分があったが、埴輪111は破片のみであった。埴輪75と109の間に埴輪76のほかにもう2個体分の間隔があるが、埴輪自体は存在しなかった。

同様に、埴輪51周辺にトレンチ3、埴輪27周辺にトレンチ4、埴輪1～7付近にトレンチ5を設定した。以上のトレンチ調査では、埴輪列の堀方、埴輪列の前面に溝が存在することなどを確認した。なお、基底部まで露出させた埴輪はその場で実測した。





第9図 調査区と各トレンチの配置(1/250)

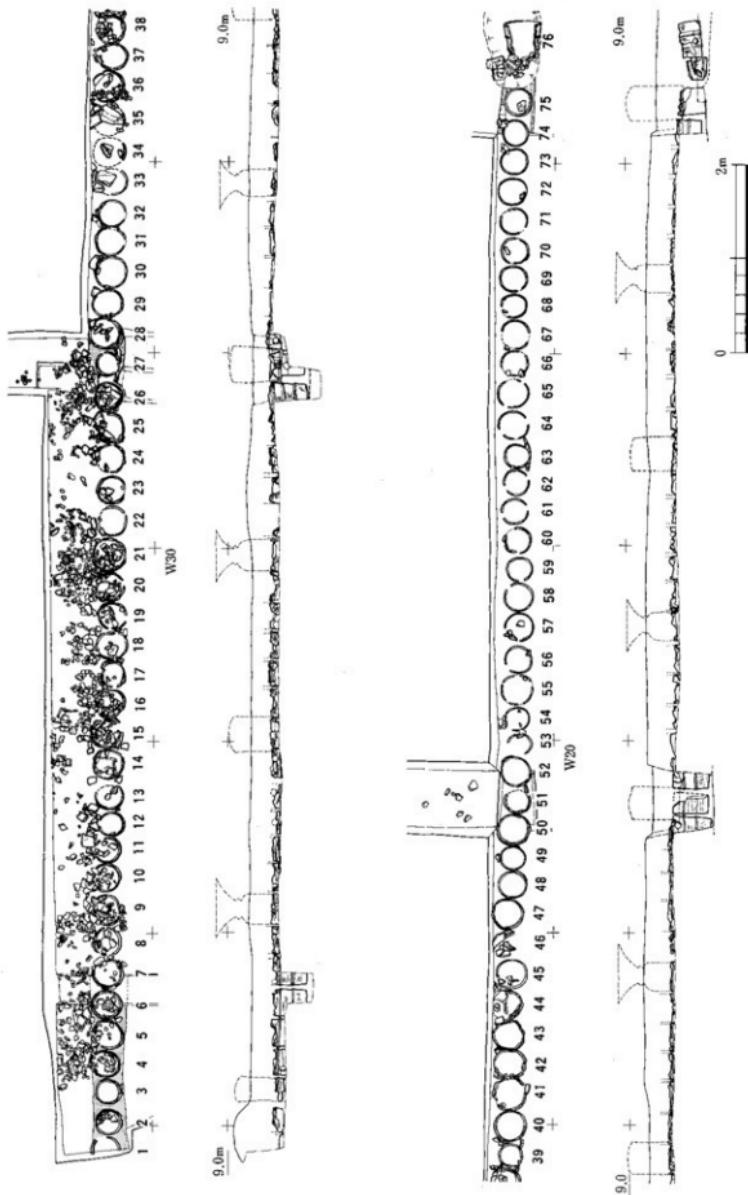
第2号古墳の測量 第2号古墳と埴輪列の位置関係、第2号古墳の墳形などを追求するために、平板測量で縮尺1/100の測量図を作成した。測量の基準には、埴輪列の基準およびグリッドを利用した。さらに、トレンチ1で検出した周溝状遺構の性格や範囲をおさえるため、現状の水田中に埋没する葺石をピンポールによる簡単なボーリング調査で追跡した。また、埴輪片の表探地点を測量図にできる限り記入した。

2) 墓輪列

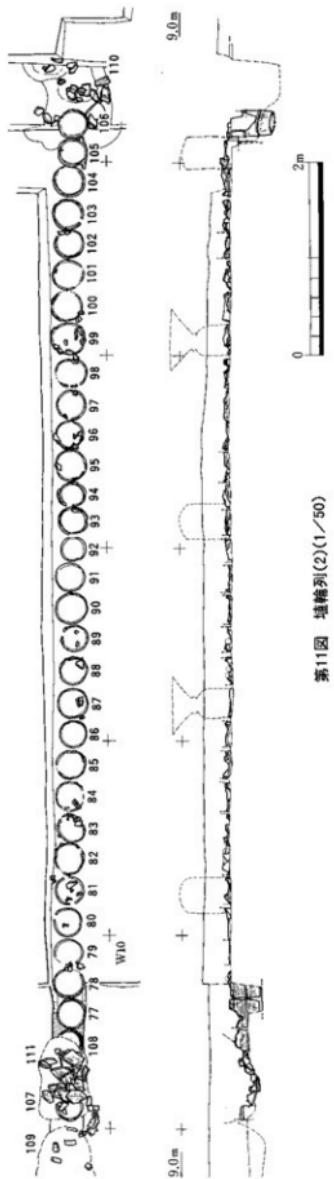
埴輪列の位置・範囲 墓輪列は現状の第2号古墳墳丘から南に約15mの位置に墳丘および南側の丘陵斜面に平行に35m程度の範囲にわたって検出された。この地点は、元々60cm程度高い畑地であったものを、現在の高さに地下げされたという。また、東側は丘陵端部まで埴輪検出面からさらに約60cm低い水田に開墾されている。そのため検出された東端の埴輪106は、かろうじて元位置を保っているものの大半が擾乱坑内に入っている。埴輪106の東側の擾乱坑内より破片の状態で埴輪110が出土したことから、埴輪列がより東に延びていたことが窺われるが、どのように埴輪列が展開していたかは不明というほかない。また、西端の埴輪1は半分ほどが調査区内にかかっており、埴輪1が埴輪列の西端をなすものかさらに続くのかは判断できない。

検出状況・検出面 墓輪列は畠地耕作土である表土直下から検出された。検出面は海拔約8.5mの高さである。検出面の土層は流土と考えられる黄褐色～明黄褐色砂質土であり、埴輪列の埋方などは観察できない。しかし、埴輪列の南約2mにこれと平行に元の丘陵端部と考えられる風化花崗岩との境界が検出された。この土層の境界には、トレンチ調査で溝状遺構が伴うことが判明している。

2) 塚輪列

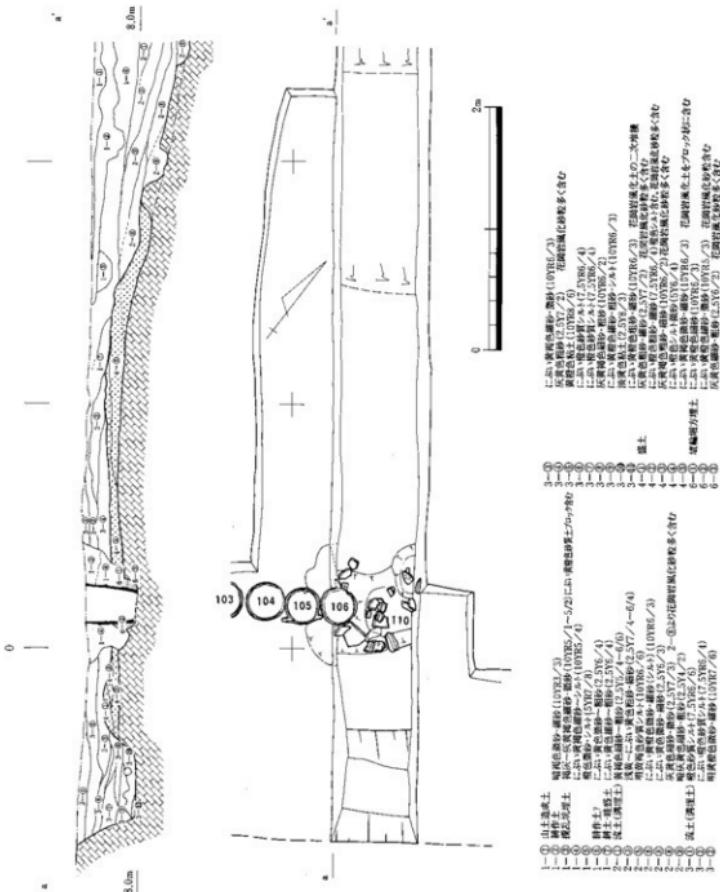


第10図 塚輪列(1) (1/50)



埴輪の数、構成 墓輪は検出面で、横倒しになつた埴輪76を含め106個体が検出された。埴輪の検出されなかつた埴輪76周辺は、トレンチ調査の結果擾乱を受けていることが判明し、元位置を保たないものを含め111個体が確認された。なお、埴輪76付近にはもう2個体分の空間があり、本来調査区内に113個体の埴輪が存在したものと考えられる。検出された埴輪には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、盾形埴輪が存在している。埴輪15、27、39、51、63、105は検出状況で盾形埴輪であることが確認でき、埴輪3、75も周囲の破片から盾形埴輪であることが解る。朝顔形埴輪は肩部以下は円筒埴輪と区別できないため、確認することが難しいが、埴輪9、21、33、45、57、111が周囲の破片群から朝顔形埴輪と考えられる。これらから、埴輪列は5本の円筒埴輪を挟んで朝顔形埴輪、盾形埴輪が交互に配置されていると思われる。そうであれば、検出状況や周囲の破片からは確認できないが、埴輪81、93は盾形埴輪、埴輪69、87、99は朝顔形埴輪である可能性が高い。なお、盾形埴輪のうち埴輪3、15、39には衝角付冑の破片と思われるものが含まれており、埴輪27、51にも部位不明ではあるが盾部ではない部分の破片が存在する。したがつて、盾形埴輪の、少なくともその多くが、冑を伴うものである可能性が高い。

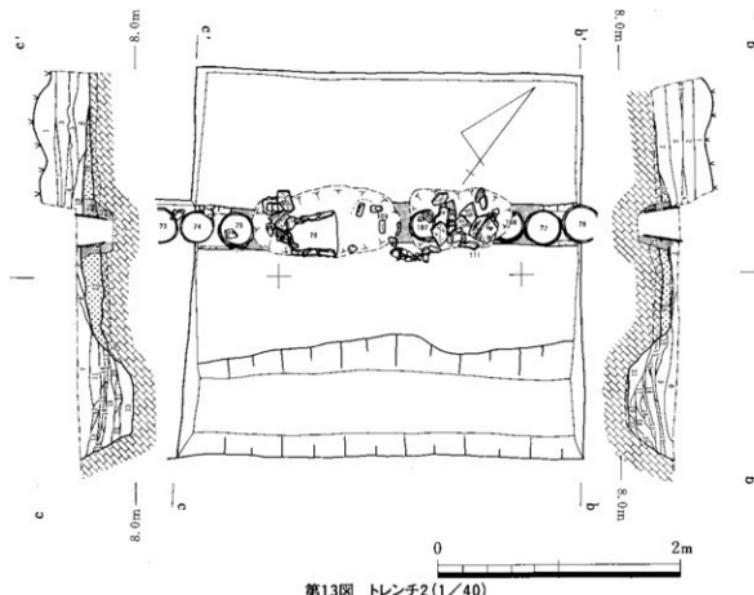
埴輪の残存状況 墓輪はトレンチ調査の結果、二段目の上端付近から三段目の上端付近の高さ30~40cmほどが残存していることが判明した。これまでに述べたとおり、埴輪76周辺、埴輪106以東は埴輪列に沿って擾乱を受けている。これらの擾乱坑は表土直下から掘り込まれており、埴輪76周辺は地下げに伴つて埴輪106以東は水田の開墾に伴つて埴輪が見つかったことが契機となつたものであろう。擾乱坑内の埴輪は埴輪76がほぼ完形、107、108などが口縁部の破片を含んでおり、地下げが行われるまではこれらの埴輪はほぼ完形の状態で埋没していた可能性が高い。これは埴輪列が比較的早い段階に、丘陵側からの流入土、崩落土によって埋没したこと示していると思われる。埴輪76などは保存状態もよく、こ



第12図 トレンチ1(埴輪列部分) (1/40)

の土砂の流入は激しい崩落などによるものではないと思われる。しかし、埴輪27付近から西側は埴輪列の周囲にかなりの埴輪片が散乱しており、埴輪列の埋没のしかたに差があったことがうかがわれる。また、埴輪26、28は掘方より上にでている部分が若干後ろへずれており、流入土の土圧による変形と考えられる。

埴輪の設置状況 堀輪列は幅30cmほどの溝状の堀方に設置されている。堀方は盛土、あるいは整地土と考えられる土層から掘り込まれている。盛土は花崗岩風化砂粒を含む黄褐色系の土層で、流土などによく見られる崩落した土層ではない。



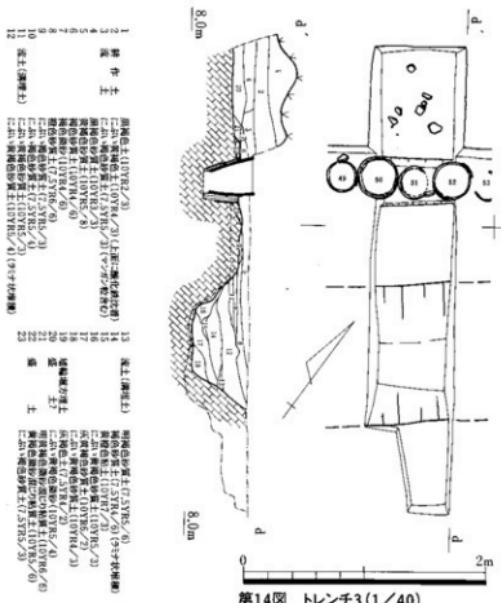
第13図 レンチ2(1/40)

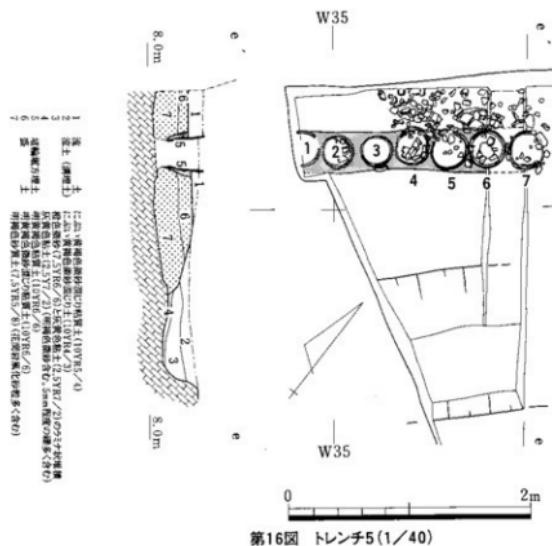
1. 土	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)	15. 盛土(耕作土)	盛土(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	16. 盛土(耕作土)	盛土(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	17. 盛土(耕作土)	盛土(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	18. 盛土(耕作土)	盛土(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	19. 盛土(耕作土)	盛土(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	20. 盛土(耕作土)	盛土(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	21. 盛土(耕作土)	盛土(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	22. 盛土(耕作土)	盛土(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	23. 耕作地(耕作土)	耕作地(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	24. 盛土	盛土 (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	25. 盛土(耕作土)	盛土(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	26. 盛土(耕作土)	盛土(耕作土) (2.5Y3/6~7)
	耕作土	耕作土(2.5Y3/7)(耕作地)	27. 盛土	盛土 (2.5Y3/6~7)

土質から区別することは難しい。埴輪列前面の溝状遺構が地山の花崗岩風化土層上面より上に立ち上がることから、その存在が判明した。盛土上面は、土砂の流出があるようでしっかりした平坦面になっていないが、レンチ2～5で標高8.35～8.42mとほぼそろっており、本来の盛土上面もこれに近いものと思われる。盛土の下面、すなわち地山面は各レンチで異なる。地山面のレベルはレンチ1で標高8.15m付近、レンチ2で標高8.35m付近、レンチ3ではさらに高く標高8.40m付近で、埴輪列周辺では盛土はほとんど認められない。逆にレンチ4、5では標高8.00～8.05mと低くなっている。また、地山面の状況もレンチ1～3がほぼ平坦になっているのに対し、レンチ4、5では細かい凹凸が目立っている。地山面には旧表土と考えられるような土壤化層は認められない。レンチ1～3ではこれは盛土を盛る以前に地山面が整形されたためと考えられるが、レンチ4、5では小規模な谷状地形で、土壤化層が形成されにくいためであろうか。

堀方の断面はほぼ逆台形を呈し、下面は標高8.10~8.17m、塙輪の基底部が下面から若干浮いて標高8.15~8.20m付近にくるものが多い。深さは現状で20cm弱、少なくとも円筒埴輪の二段目まで埋められていたようである。しかし、トレンチ1の埴輪106の部分では、堀方下面、埴輪基底部とも標高8.00m程度にあり、他のトレンチと様相が異なっている。確実な盛土上面も他のトレンチ部分よりも低く、仮に他のトレンチと同じ高さまで盛土があったとすると、埴輪106の三段目まで堀方内に埋まっていたこととなる。埴輪の特徴については第IV章述べるが、埴輪106は他の円筒埴輪に比べタガ間が幅広く、埴輪の高さをそろえるために深く埋められた可能性が高い。掘方内埋土はトレンチによりかなり様相が異なっている。トレンチ1、2では花崗岩風化砂粒を多く含む黄褐色～にぶい黄褐色砂質土で、盛土、流土と区別することが難しい。トレンチ3では灰褐色土、トレンチ4では花崗岩風化砂粒を多く含む明黄橙色シルト質土、トレンチ5では明黄褐色粘質土となっている。こうした埋土の差を平面で追求することはできなかったが、埋める単位などの関係もあるだろう。

溝状構造 塙輪列前面の溝状構造は下面のレベルが標高8.0m程度といずれのトレンチでも





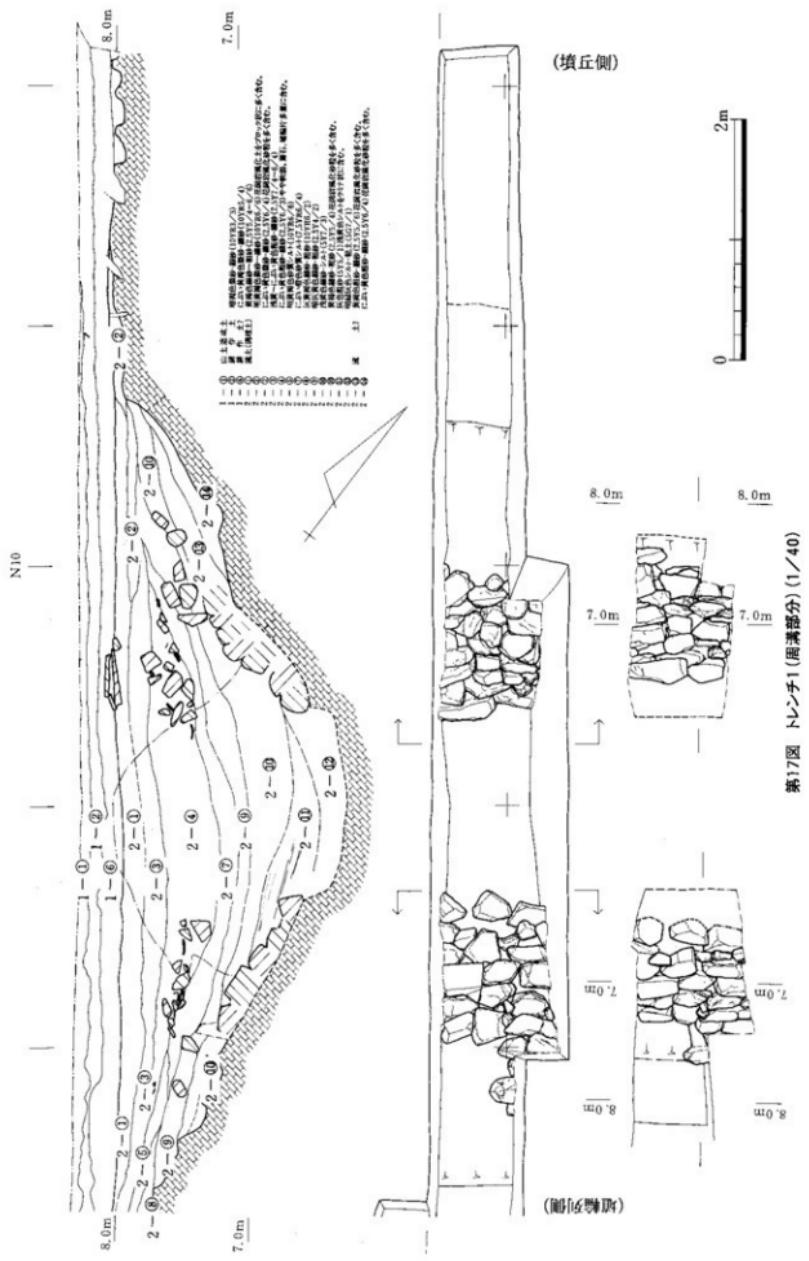
第16図 トレンチ5(1/40)

ほぼそろっており、幅約1m、検出面からの深さ約50cmを測る。溝状遺構の埴輪列の間は、先述の盛土上面、標高8.4m程度の平坦面となっている。丘陵側は現状では丘陵斜面下端まで1.8mほどの空間があるが、これは開墾に伴うものである可能性が高い。溝状遺構の埋土は花崗岩風化砂粒を含むもので基本的に丘陵側からの流入土と考えられる。トレーンチ1、2、4では、粗い砂質土と砂質シルト土層が互層状になっている状況が観察できる。

3) 周溝状遺構

トレーンチ1で埴輪列と第2号古墳の間から検出した溝状遺構は、その位置と葺石を伴うことから第2号古墳の周溝の可能性が高い。溝中央部で現状の第2号古墳墳頂から約6.5m、埴輪列から約7.5mの位置にある。幅は検出した葺石の上端で3.8m程度、土砂の流出のためかなり広がっているものと思われるが、検出面では8mほどを測る。底面は湧水のため厳密に調査できなかったが、標高6.1m程度と見られ、現地表面からの深さは2m強となる。溝の斜面は埴輪列側で約25°、墳丘側ではやや崩れが激しいようだが35°程度の傾斜と推定され、埴輪列側の斜面がやや緩やかになっている。葺石は20~30cm角の角礫・亜角礫で、塙方などをもたず、地山に若干段をつけた上に直接のせられているようである。なお、埴輪列側の葺石が残存する部分より上の地山面に凹凸があるのは、葺石の痕跡である可能性がある。また、葺石の石材は大半が花崗岩、一部に粘板岩と考えられる堆積岩を含む。粘板岩は付近では吉備中山丘陵や都窪丘陵の山頂付近の古生層に分布しており、地元産出の石材と見られる。

溝内の埋土は墳丘内外からの流入土と考えられ、特に埋土の上層(第17図2-③、④層)は葺石、埴輪片を多量に含んでいる。埴輪片は基底部の破片が多く、墳丘側から転落したものである可能性が高い。下層の状況は、湧水と壁の崩落のため詳細に観察することができなかつたが、最下層に近い部分(第17図2-⑩層)でも地山などから緩やかに流入したと見られる灰色粗砂と浅黄色シルトの互層状を呈しており、有機質を含む粘質土など滞水した環境で見られるような土層は観察できなかつた。

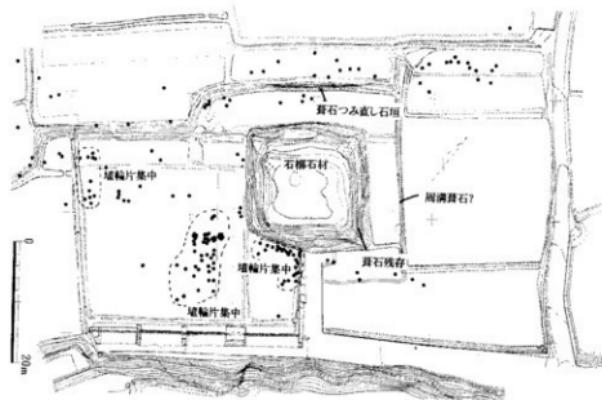


第17図 レンチ1(周溝部分)(1/40)

4) 測量調査と周辺の状況

第2号古墳は現状で1辺20m、高さ4mほどの方墳である。墳丘の北辺、東辺には幅6mほどの畠地区画が取り巻いており、現在は1面の水田に開墾されている埴輪列側の南東辺にも、かつては同様の一級高い畠地があったという。西側は埴輪列が検出された面を含めた30m四方程度の範囲が、他の周囲より約60cm高い一面の畠地となっており、旧地形や墳形を窺う情報に乏しい。現状の墳丘には南辺、東辺に葺石が残存している部分があり、他の斜面より旧状をよく残しているようである。墳丘の最高所も墳頂平坦面の北西側に偏っており、この周辺に石室石材と見られる安山岩板石が散在することからも、北辺・西辺が大きく損なわれている可能性が高い。墳丘北側の畠地北辺には葺石と同じ石材で積んだ石垣があり、開墾時に削られた斜面に存在した葺石を積み直したものであろうか。また、ピンポールによるボーリング調査では、一段高い畠地があったという南東辺から東側の畠地東辺にかけ、葺石と思われるものが深さ10~70cmの位置に存在していることが判明した。

一方埴輪片は、すべてが第2号古墳のものであるかどうかは分からぬものの、周辺のかなり広い範囲に分布している。特に西側の畠地には多いが、その中でも墳丘西側直下と畠地の北西部に集中する傾向がある。墳丘直下のものは、墳頂部や段など墳丘に並べられていた埴輪である可能性が高い。北西部のものもやはり、耕作の際に出土した埴輪片が隅に片づけられたものである可能性が高いが、検出した埴輪列の西端付近に直行する位置にあたっており、埴輪列が存在する可能性もある。



第18図 造山第2号古墳周辺の現状(1/800)

5) まとめ

第2号古墳の墳形と埴輪列の性格 墓輪列と第2号古墳の関係は、トレンチ調査や周辺の測量などの追求にも関わらず、埴輪列の区画や第2号古墳の墳形が不明な以上は厳密には不明といわざるを得ない。現状では、最も近接しているのが第2号古墳であり、かつ第2号古墳墳丘と平行に並べられていること、埴輪列前面の溝・周溝の存在、第IV章で述べる埴輪の特徴などから、第2号古墳の外堤に並べられたものととらえるのが最も自然であろう。しかし、単純に第2号古墳のものとするにはいくつかの問題点も上げられる。

特に問題となるのは、埴輪列が第2号古墳のものとしては墳丘に対し不自然に長く並べられていることである。これに対しては、埴輪列を第2号古墳に伴うものとした上で、第2号古墳の墳形から解釈する意見と、埴輪列を造山古墳や古墳群全体の施設である可能性を指摘する意見などがある。

第2号古墳は、調査成果や周辺の観察から一辺40m程度の二段築成の古墳と考えられる。埴輪列が第2号古墳に伴うものとした場合、現状の墳端から埴輪列までの距離が約15mであるのに対し、検出した西端の埴輪1は西側墳端から約25mの位置にある。この西側の空間に対しては次のようにいくつかの解釈が成立つ。

1. 第2号古墳の西側に突出部、あるいは前方部が付くとするもの。
2. 第2号古墳の西側の削平が予想以上に大きい。
3. 検出した埴輪列側は丘陵を大きく削っているため、作業量や丘陵上の柳山古墳との関係から十分な空間を造ることができず、他の部分より周溝などが幅の狭いものになっている。

1に対しては、第2号古墳の造られた5世紀代には、少なくともこの地域では前方後方墳は知られておらず、第2号古墳がそうである可能性も低いと思われる。2については、北辺・西辺が大きく損なわれている可能性はすでに指摘したが、周辺の地形や現状の地割りから見る限り、北側・西側に10m以上も墳丘が拡がるとは考えがたい。3も他の部分の周溝が明らかにならない以上は想像の域を出ない。

一方、第2号古墳と造山古墳では、古墳相互の区画や企画の関係も指摘されている⁽¹⁾ことから、造山古墳や古墳群としての施設に伴うものとする考えも無視し得ない。特に、埴輪列は造山古墳前方部の北西側の墳端に平行しているとも見ることができ、埴輪列を真っ直ぐ北西側へ延長すると造山古墳の北西隅角に至ることから、造山古墳に至る墓道に伴うものとの解釈⁽²⁾も有力な説のひとつといえる。また、造山古墳の堀切を挟んだ対岸の丘陵上に埴輪列が存在したとも言われ⁽³⁾、造山古墳関連の施設が周辺にも及ぶ可能性はある。しかし、造山古墳墳丘から採集されている埴輪は、かなり幅広い特徴を持つとはいえ、第2号古墳および埴輪列出土の埴輪より古い特徴を持つ。造山古墳に伴うものとするためには、造山古墳墳丘と周辺の整備に時間差を見込むなど第2、第3の解釈が必要となる。

いずれにしても、今回の調査からはこの問題に結論を出すことはできない。今後、国指定の範囲の見直しを含め、範囲や構造を確認していくことが必要であろう。

注

- (1) 春成秀爾1983『造山・作山古墳とその周辺』『岡山の歴史と文化』
- (2) 近藤義郎先生のご指摘による。
- (3) 高橋謹監修1989『学習漫画 岡山の歴史』2 吉備の大王 山陽新聞社

第IV章

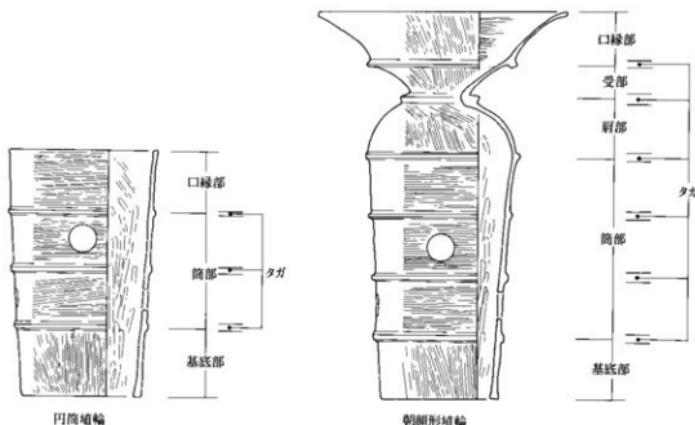
遺物

出土遺物の大半は埴輪である。埴輪列では現状保存の方針から、散乱する埴輪片、元位置を損なっているもののみを取り上げ、他は現地で観察した。取り上げた埴輪片は出土位置、現地での観察に基づき個体別に分類した。また、トレンチ調査において基底部まで露出させた個体については、現地で実測した。なお、埴輪各部の呼称に関しては第19図に従い、縮尺は径を復元したものが $1/4$ 、破片が $1/3$ である。

1) 墓輪列出土埴輪

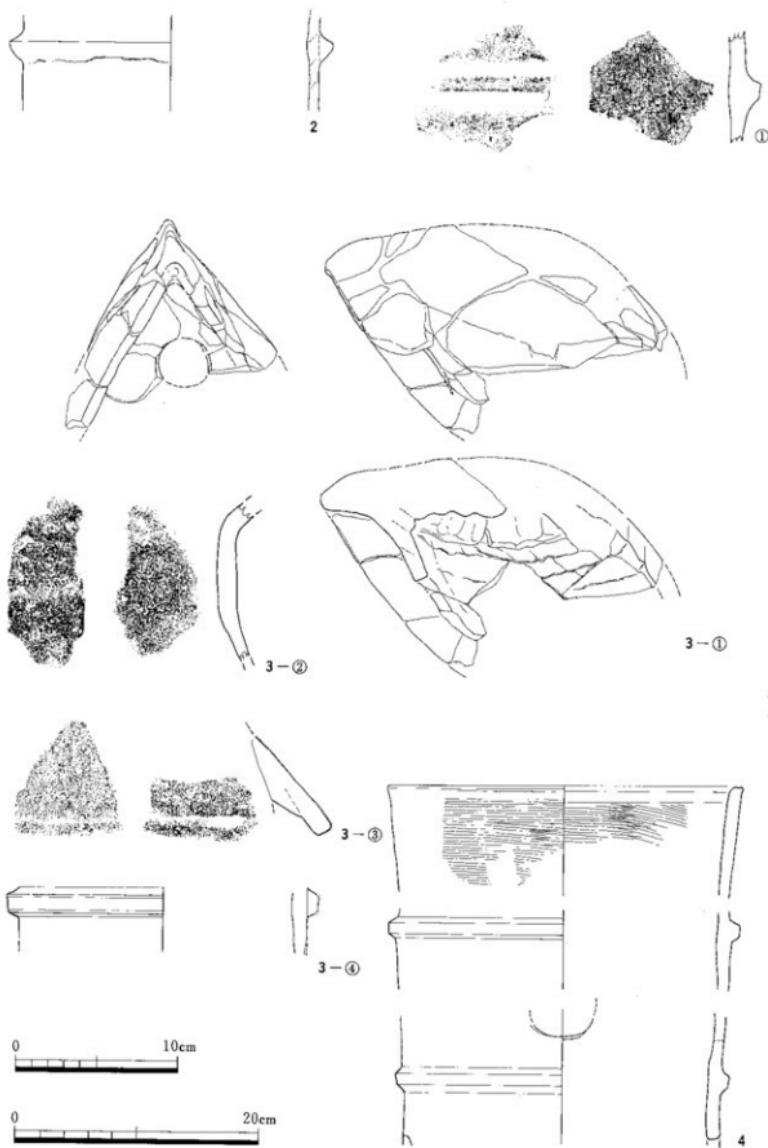
埴輪列の埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪、盾形埴輪からなり、111個体を数える。内訳は円筒埴輪91個体、朝顔形埴輪9個体、盾形埴輪11個体と考えられる。なお、前述の方針から、基底部まで観察できたのは攪乱坑出土のものとトレンチ調査で露出させたものに限られ、他の多くは、現地の観察でも、取り上げた破片でも三段目以上のものが大半を占める。

朝顔形埴輪 墓輪9、21、33、45、57、111が周囲の破片群から朝顔形埴輪と考えられる。また、朝顔形埴輪であることの解る部分は存在しないが、出土位置や配列の状況から墓輪69、87、99は朝顔形埴輪である可能性が高い。このうち、口縁部～肩部の調整などを観察できるのは墓輪9、21のみで、ほかはこの部分が存在していてもきわめて小さな破片か、風化が激しいものが多い。また、焼成や胎土などに

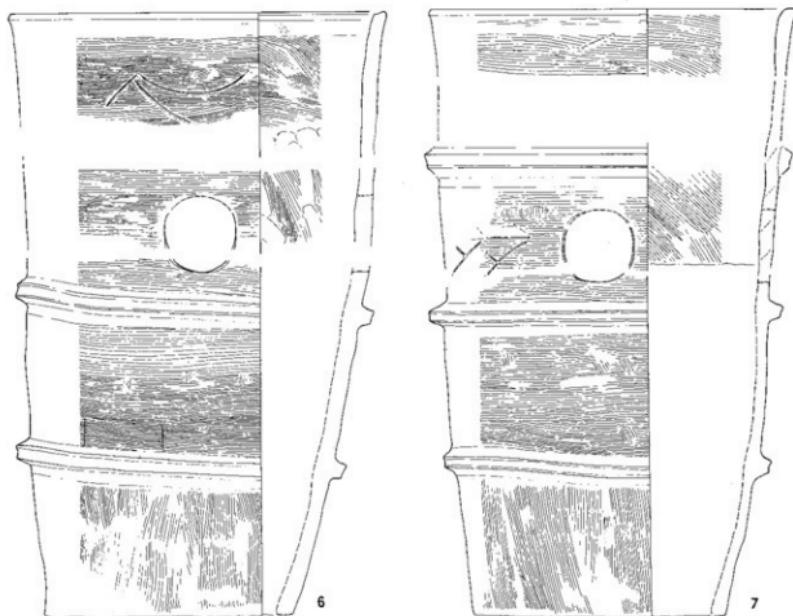
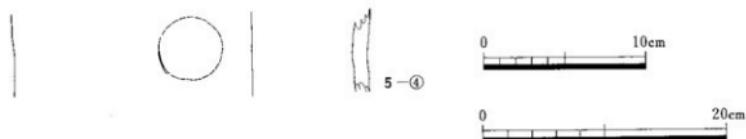


第19図 墓輪各部の呼称

1) 塚輪列出土埴輪

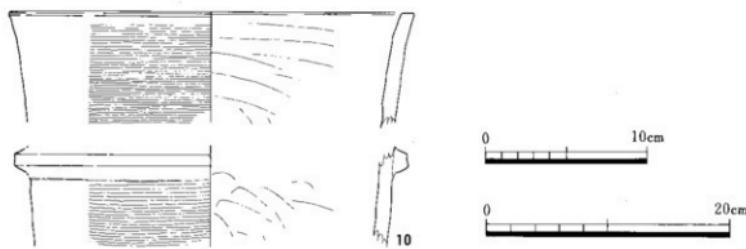
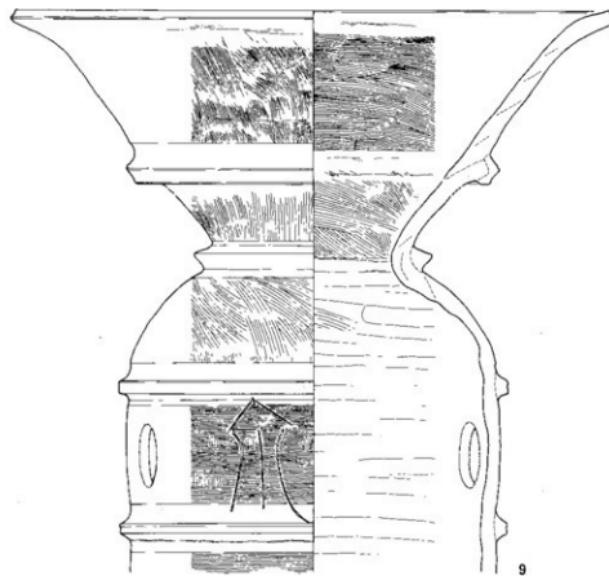
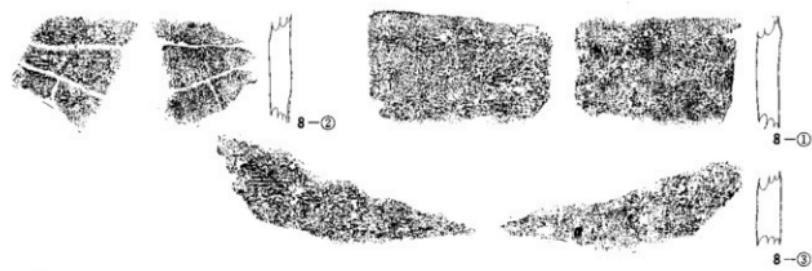


第20図 塚輪列出土埴輪(1)

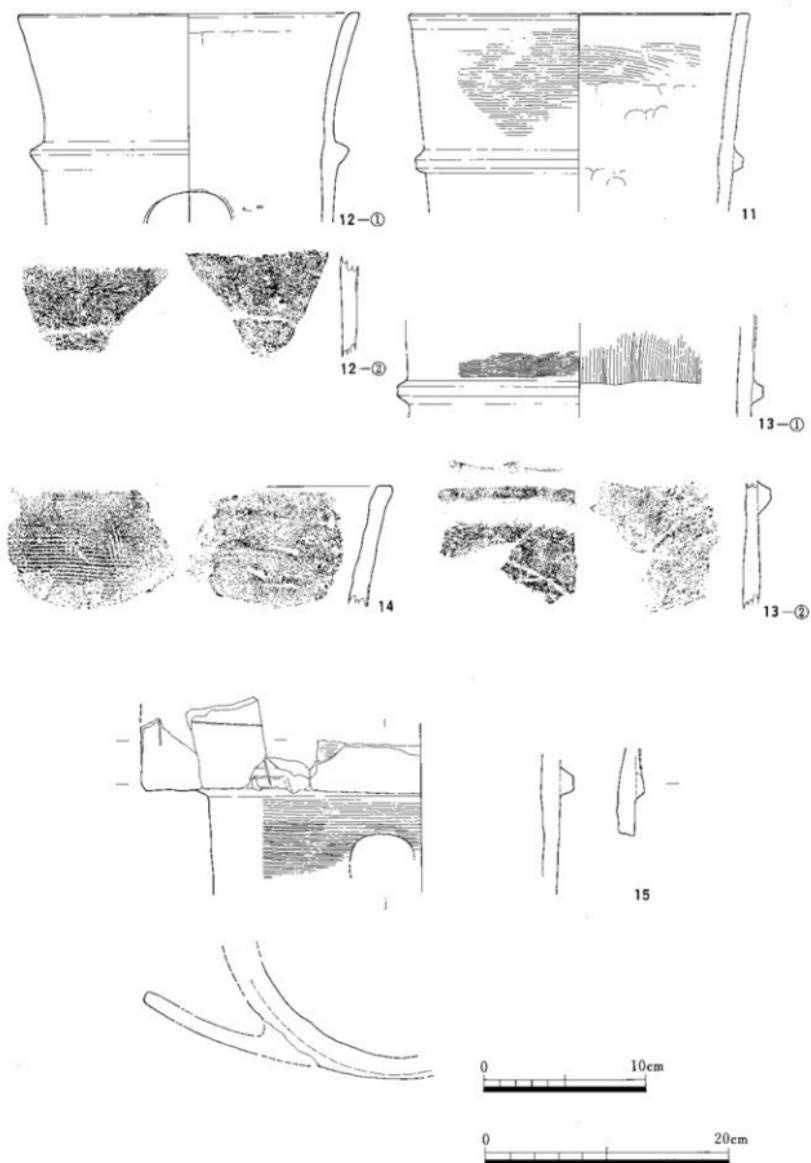


第21図 塚輪列出土埴輪(2)

1) 塚輪列出土埴輪



第22図 塚輪列出土埴輪(3)



第23図 墓輪列出土埴輪(4)

際だった特徴はなく、口縁部～肩部以外では円筒埴輪と区別することは困難である。

朝顔形埴輪は黒斑をもつものではなく、すべて窯窯焼成と考えられる。口縁部は受部からわずかに屈曲して立ち上がり、強く外反する。口縁部～肩部の外面調整はタテハケで、タガ周辺や口縁端部をヨコナデする。埴輪9では口縁部のタテハケは9～10本/cmと受部、肩部のタテハケ・5本/cmより細かく、肩部より下のヨコハケと同じ密度となっている。埴輪21では筒部のヨコハケも一次調整のタテハケも5本/cmの密度で区別できないが、口縁部には二次調整のタテハケが施されるものと考えられる。口縁部～受部の内面は横～斜め方向のハケメで、受部上端のタガ裏面付近にヨコナデを施す。内面のハケメも、埴輪9では外面の二次調整と同様9～10本/cmの密度で、二次調整に相当する調整ととらえられる。肩部以下は横方向の強いナデで、一部に一次調整と見られる5本/cm程度の縦方向のハケメが認められる。また、埴輪9には筒部最上段にヘラ記号が認められる。

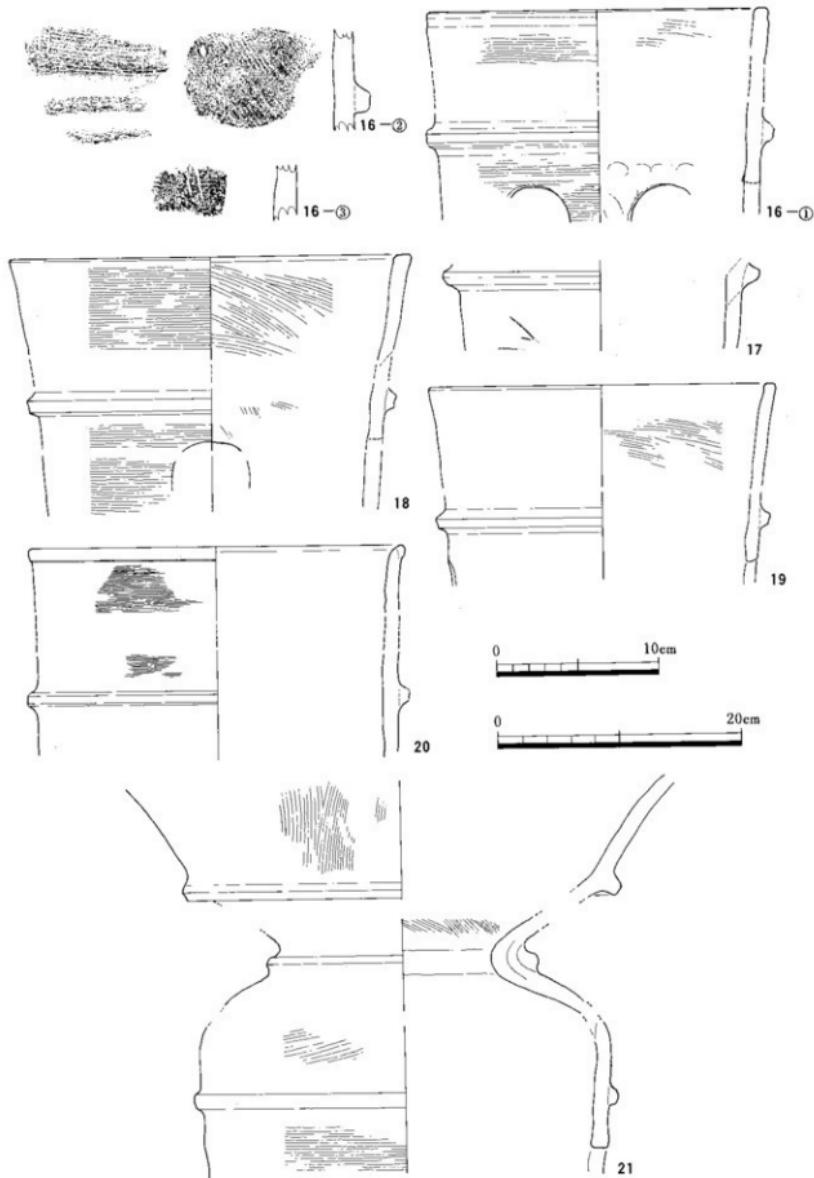
朝顔形埴輪の法量は、検出面の径は27.2～33.5cmと円筒埴輪より若干大きい傾向がある。口径は埴輪9で50cm程度に復元できる。高さは、肩部より下が三～四段と考えられるので、70～80cmになるものと考えられる。

円筒埴輪 円筒埴輪はすべて窯窯焼成と判断でき、検出面での径は23.0～33.2cmとばらつきがあるが、高さ約50cm、口径30cm前後、口縁部、基底部を含め四段の大きさのものと考えられる。形態は直立あるいはわずかに上部が括がる円筒形で、断面形もゆがみが若干あるものの正円形と見てよい。なお、ほぼ完形で取り上げた2個体、トレンチ調査で露出させたもの以外は、小破片が多く、部位も三段目より上の部分にほぼ限られる。ここでは取り上げた2個体、トレンチ調査にかかるものを中心に、調整などの特徴的なものを加え述べていく。

埴輪76はほぼ完形で取り上げたもので、トレンチ2の擾乱坑内に横倒しになっていた個体である。高さ51.0cm、口径32.4cm、基底径24.6cmであり、基底部の高さは12cm程度、タガ間の幅は約10cmを測る。口縁部はほぼ直立しており、口縁部の上端はナデにより面をなしている。二段目、三段目にそれぞれ2づつ、交互に透かし孔をもつ。外面調整は一次調整のタテハケ(5本/cm)の後に、タガ間に二次調整のC種ヨコハケ(5本/cm)を施す。ヨコハケ原体の幅は約8cmで、一段につき2周程度させている。基底部は二次調整を省略しており、一次調整のタテハケが残されている。また、口縁端部、タガ周辺はヨコナデされており、口縁部には逆三角形状のヘラ描き沈線文がある。内面調整は口縁部が横方向のハケメ(5本/cm)で、一部に指頭圧痕が残る。三段目以下は縦方向の強いナデが施されている。口縁部-三段目、三段目-二段目のタガ裏面はヨコナデされている。タガは断面M字形で、高さ0.9cmとやや扁平なものである。胎土は長石の砂粒が目立つもので、1mm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。また、1～3mm大の赤褐色粒をまれに含んでいる。焼成は良好で、内外面とも橙色～浅黄橙色を呈している。

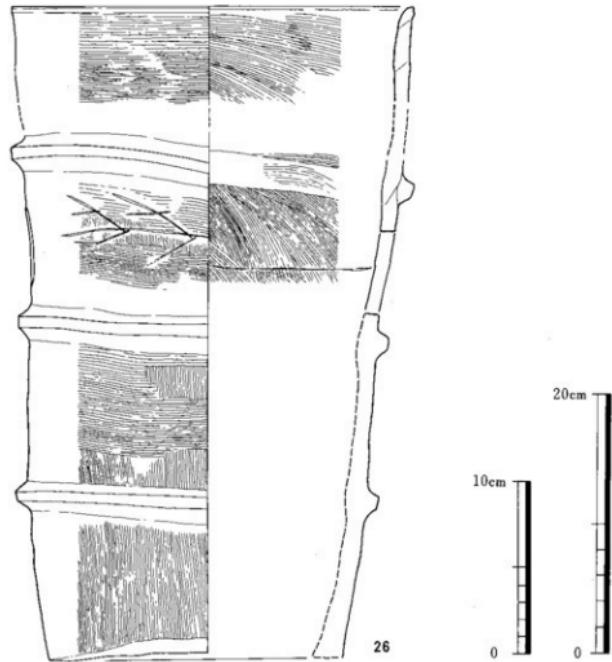
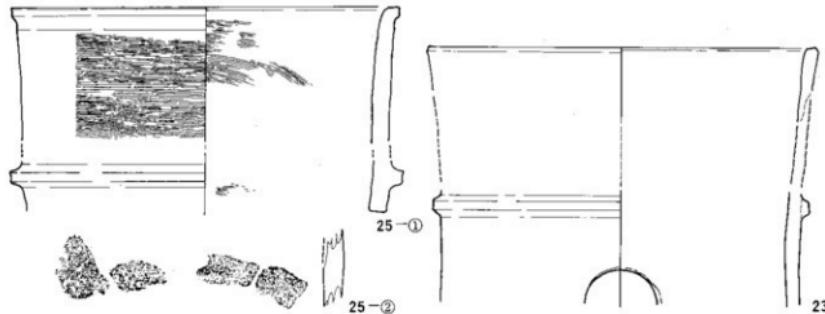
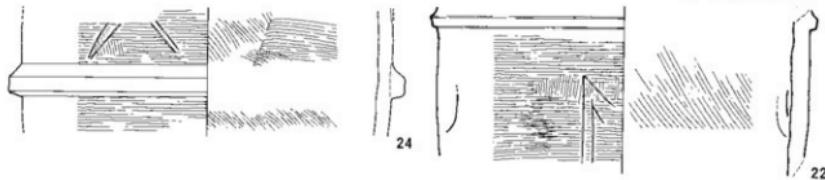
埴輪107、77、78などは調整や胎土、焼成の特徴、107では口縁部の形態なども76に類似している。

埴輪106は口縁部の大半を欠くものの三段目以下はほぼ完存している。高さは残存部で約51cm、口縁部付近の径29.8cm、基底部径23.0cmである。タガ間がやや広く13cmほどで、第III章で述べたように他の埴輪より5～10cm深く埋められていることからも、總高は60cm程度になるようである。三段目に2孔の透かし孔をもつが、二段目には透かし孔が存在しない。調整は風化などのため不明瞭な部分が多いが、外面は一次調整のタテハケ(5本/cm)の後、ヨコハケ(C種？・5本/cm)を施しているようだ。基底部はタテハケがわずかに認められるが、ケズリの存在等は判断できない。下端部付近に横方向のヘラケズリ、

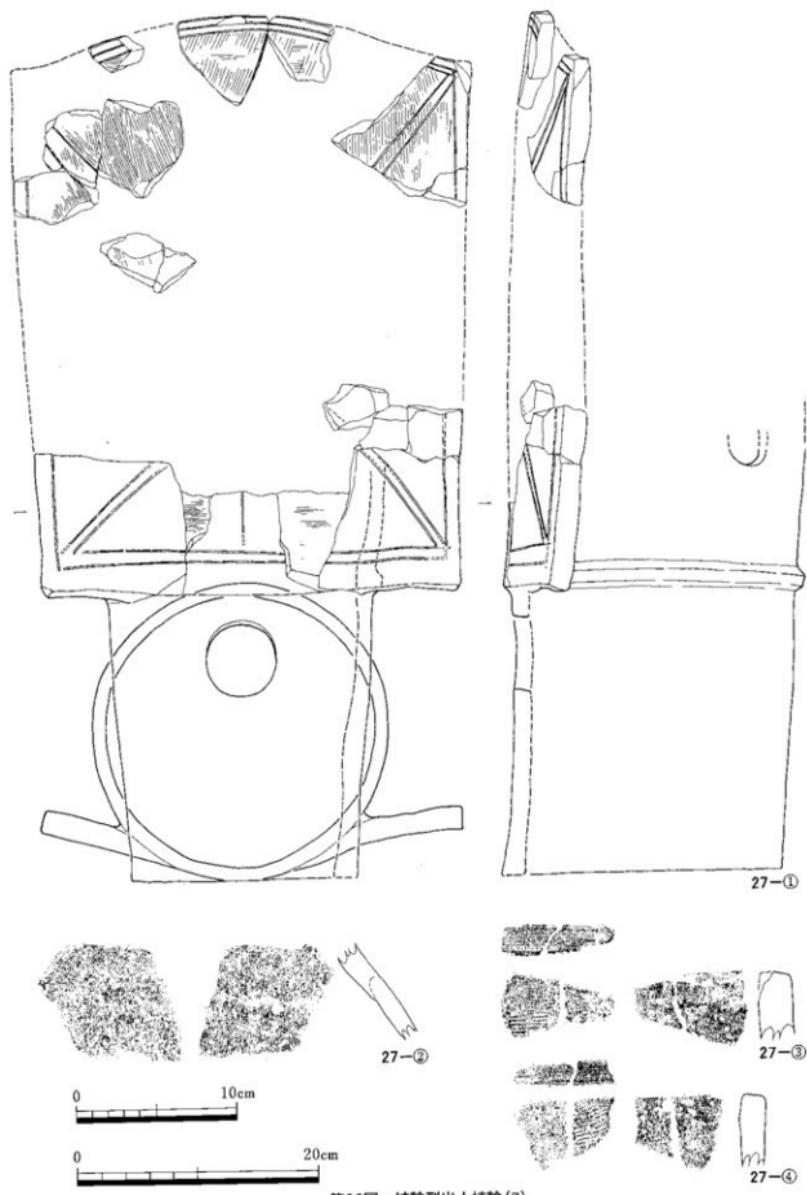


第24図 墓輪列出土埴輪(5)

1) 墓輪列出土埴輪

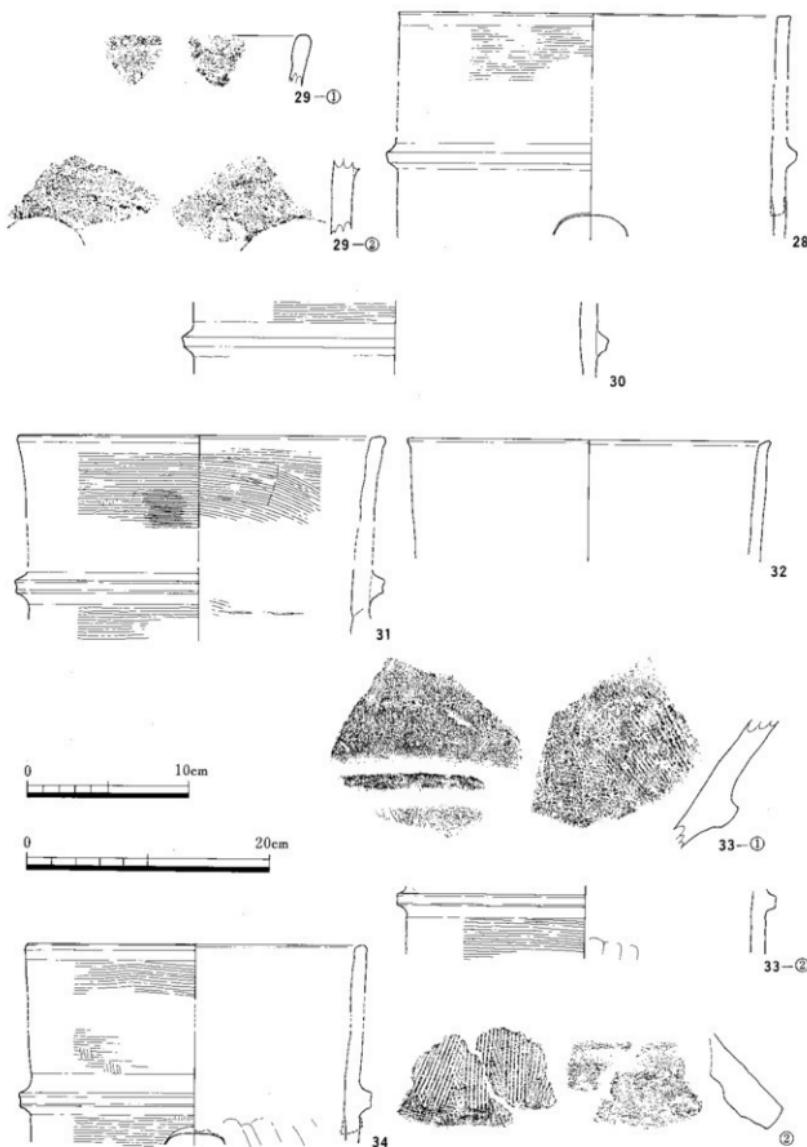


第25図 墓輪列出土埴輪(6)



第26図 塗輪列出土埴輪(7)

1) 墓輪列出土埴輪



第27図 墓輪列出土埴輪(8)

あるいは工具ナデを施している。口縁部外面にはヘラ描き沈線文が認められ、曲線を組み合わせた連続文様になるものと思われる。タガは風化もあり断面台形で、高さ約0.8cmとやや扁平である。また、最下段のタガは押圧技法のようにタガ面が平坦になっており、高さも0.5cmとかなり扁平なものである。この押圧技法類似の技法を持つものに埴輪74、周溝出土の17、18などがあり、タガ面を板状の工具でナデているようである。胎土は1mm以下～2mm大の長石・石英粒を多量に含んでおり、1～5mm大の焼土状の赤褐色粒、鉱物質の暗赤色粒を比較的多く含む。焼成はややあくまで赤橙色～橙色を呈する。

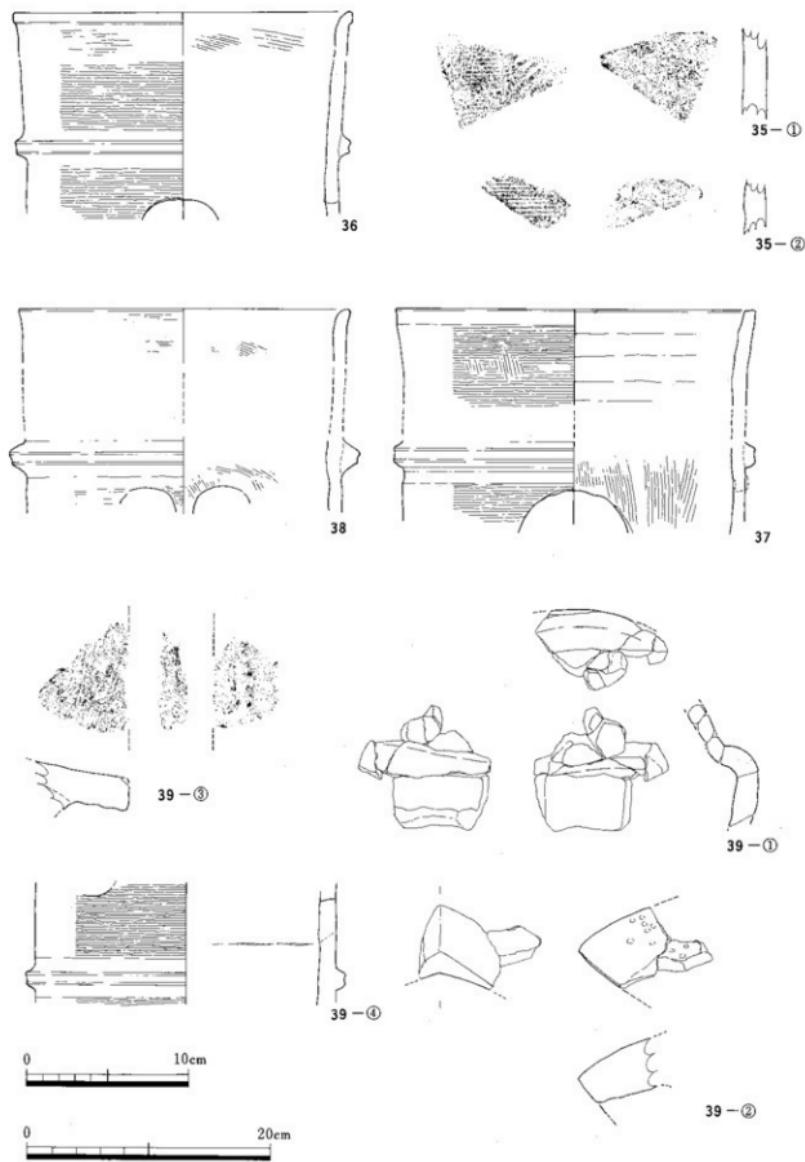
口縁部に連続文様をもつものには埴輪108がある。この埴輪は口径約28.0cmに復元できるもので、口縁部の高さは、接合しないため不正確ではあるが、約15cmと他の埴輪より若干高い。口縁部は上端を丸くしわざかに外反している。外面調整はタテハケ(7～8本/cm)の後に、停止間隔3～4cmのB種ヨコハケ(10本/cm)、停止間隔が約9cmのB種ヨコハケ(10本/cm)、C種ヨコハケ(5～10本/cm)を施している。内面は縦方向のハケメ(8本/cm)である。胎土は1mm大からそれ以下の長石・石英粒を含むもので、1～3mm大の赤褐色粒を含むが極まれである。焼成はふつうで、赤橙色～橙色を呈する。口縁部の高さから、他の埴輪より絶対高さもやや高くなる可能性が高く、調整は異なるように見えるが106と同種の埴輪である可能性が高い。108、106の文様は曲線を逆三角形形状に組み合わせたものを1単位とするもので、瀬戸町陣場山遺跡出土の埴輪転用棺にも認められる。このモチーフは岡山市前池内8号墳、同甫崎天神山遺跡出土の埴輪転用棺の口縁部などに施された文様が崩れたもの、あるいはこの省略形であると考えられる。

埴輪110はトレーンチ1の擾乱坑内より、散乱した状態で出土したものである。三段目～基底部の破片があり、基底部径23.0cmに復元できる。調整は外面が、タテハケ(5～8本/cm)の後ヨコハケ(C種？・5～8本/cm)。基底部はタテハケの後に部分的に縦方向のケズリを施し、下端付近に横方向の工具ナデが認められる。内面は縦～斜め方向の強いナデとなっている。胎土は1mm大からそれ以下の長石粒が多く、赤褐色粒もわずかに含む。焼成は良好で、赤橙色～橙色を呈する。

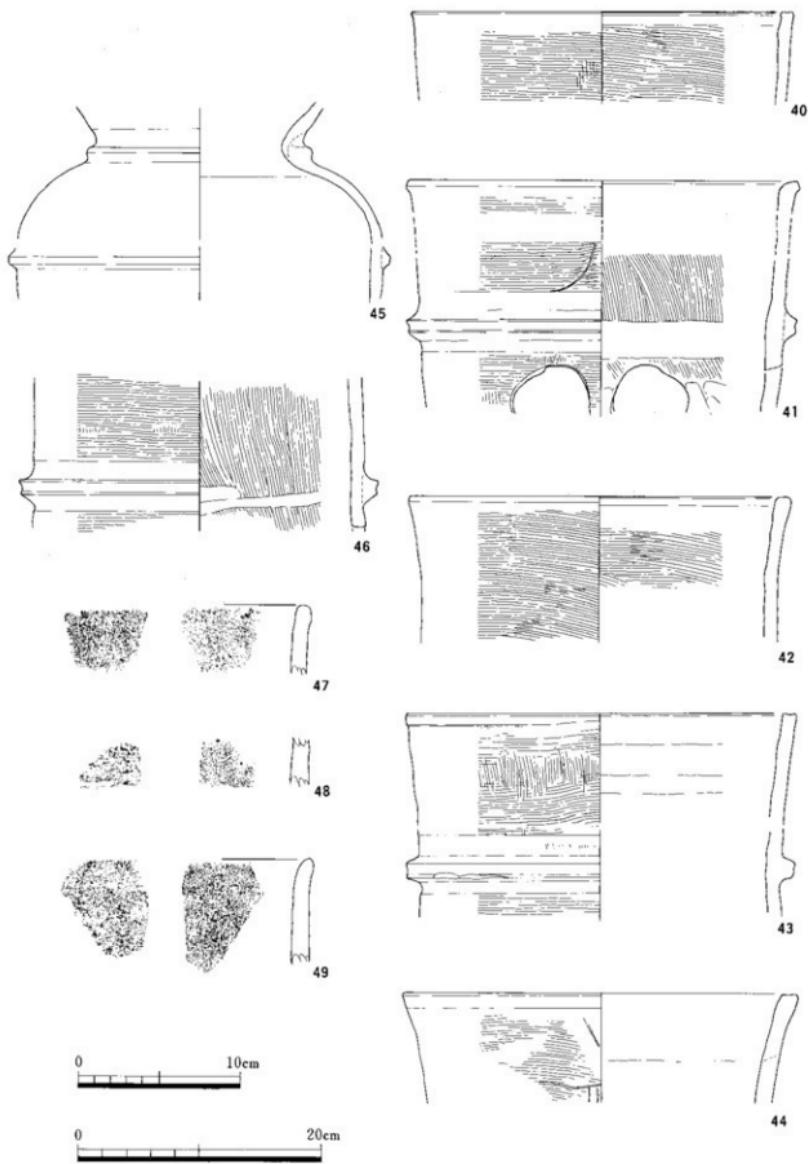
埴輪6はトレーンチ5で露出させたもので、3段目下端以下を現地で実測、取り上げた三段目および口縁部の破片を復元、合成した。検出面の径は28.0cm、口径は約31.0cmに復元できる。基底部の高さは11～12cm、二段目のタガ間の幅は10.5cm、総高は49～50cm程度になるものと思われる。口縁部はほぼ直立しており、口縁部の上端はナデにより面をなしていないが、やや内側に傾斜しておりわざかに外反するよう見える。三段目に2孔の透かし孔をもつが、二段目には透かし孔が存在しない。外面調整はタテハケ(5本/cm)の後、原体幅約7cmのヨコハケ(6～11本/cm)を一段につき2周程度施す。ヨコハケは大半がC種ヨコハケだが、二段目の下のヨコハケのみがB種ヨコハケになっている。基底部は二次調整を省略している。口縁端部やタガ周辺はヨコナデされており、タガは断面M形で幅・高さとも約1cmと、他の埴輪のものよりしっかりした印象を受ける。口縁部外面には曲線を組み合わせたヘラ描き沈線文が描かれている。内面は縦～斜め方向のハケメ(6～11本/cm)の後、三段目から口縁部下端以下に縦方向の強いナデが施されている。胎土は1mm大からそれ以下の長石・石英粒を多くふくむもので、1mm大の黒灰色粒、2～3mm大の赤褐色粒をまれに含んでいる。焼成は良好で、黄橙色から灰黄色を呈する。

埴輪7も、埴輪6同様現地で実測した3段目下端以下に、三段目、口縁部の破片を復元、合成したものである。検出面の径は27.9cmを測り、口径は31.3cmに復元できる。基底部の高さ約11cm、二段目の幅約10cmで、総高は50cm程度になるだろう。口縁部は上端を丸くしわざかに外反している。これも三段目に2孔の透かし孔をもつが、二段目には透かし孔が存在しない。外面調整はタテハケ(6本/cm)の後、原体幅約7cmのC種ヨコハケ(5～10本/cm)を、一段につき2周程度施している。基底部の二次調整は省略。

1) 塚輪列出土埴輪

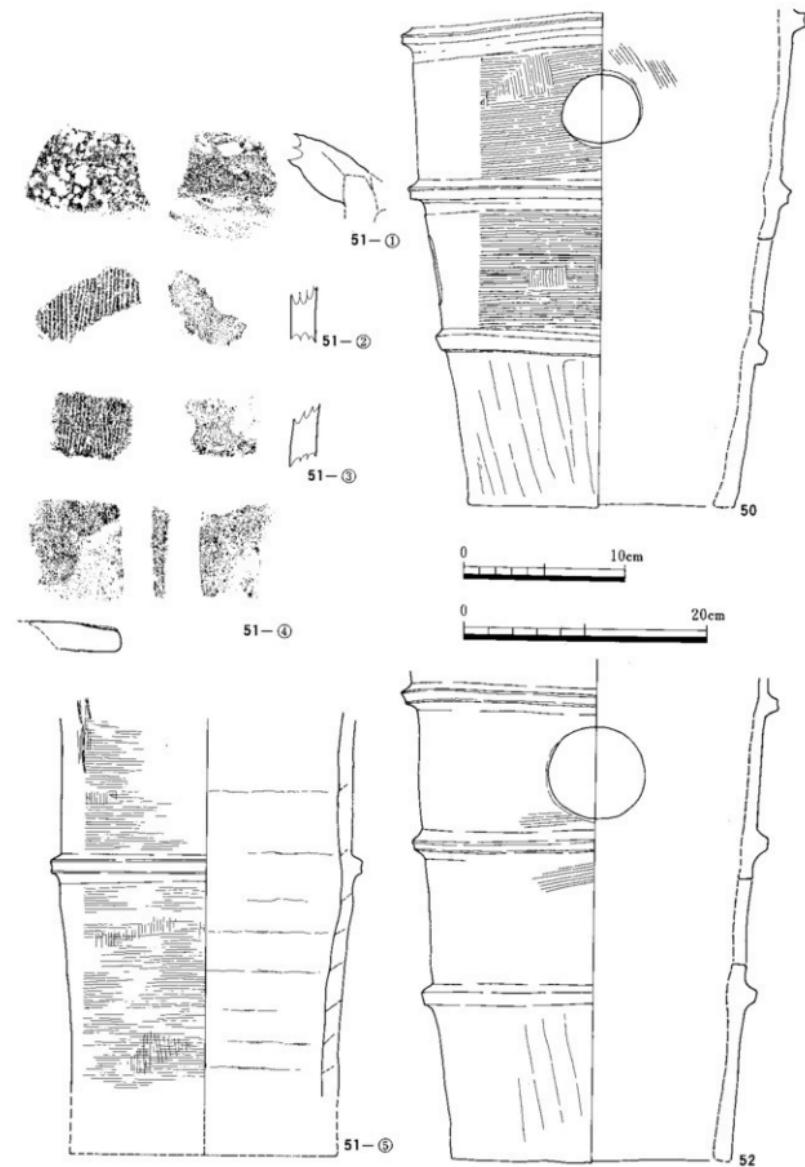


第28図 塚輪列出土埴輪(9)

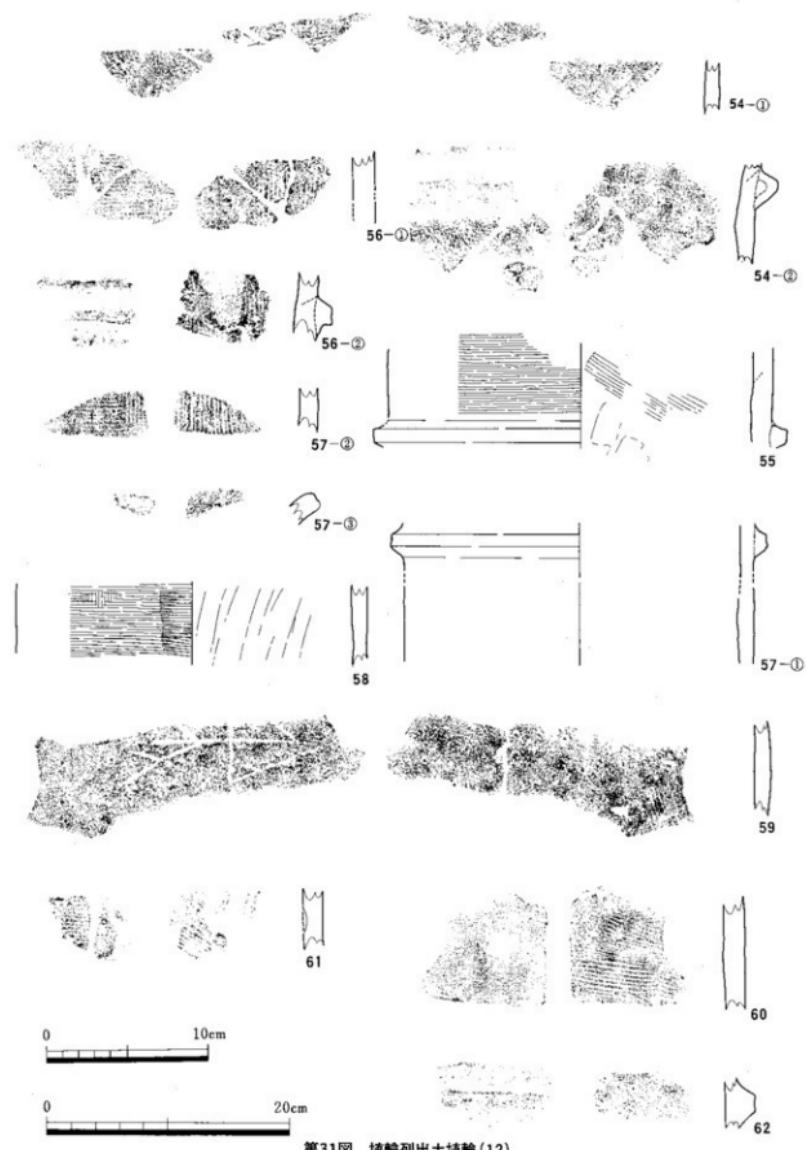


第29図 墓輪列出土埴輪(10)

1) 塗輪列出土埴輪



第30図 塗輪列出土埴輪(11)



第31図 塩輪列出土埴輪(12)

口縁端部、タガ周辺はヨコナデしている。タガは二段目一三段目間、最下段のものはしっかりした断面M形のものだが、最上段のものはやや扁平で、タガ下部の高まりの低いものになっている。また、三段目に木の枝状のヘラ描き沈線文が描かれている。内面調整は二段目以下は観察できなかったが、上部は横～斜め方向のハケメ(5～6本/cm)が施されている。胎土は1mm以下の長石・石英粒が目立つもので、2～3mm大の長石粒、1～3mm大の赤褐色粒まれに含む。焼成はふつうで、明赤褐色からにぶい橙色を呈する。

この埴輪7と同じ特徴を持つものに埴輪26がある。埴輪26は検出面の径29.0cm、基底部径22.6cmを測り、口径は32.2cmに復元できる。基底部の高さは10.0～11.5cm、一段の幅は約10cm、総高は50cmほどになると思われる。口縁部の形態、透かし孔、内外面の調整、ヘラ描き文、胎土など埴輪7と共に通しており、同種の埴輪と考えられる。同じヘラ描き文は13、17、54、59、68、89などにも認められ、口縁部の形態や、最上段タガの形態、調整の特徴なども合わせると、12、29、30、38、49なども同種の埴輪である可能性が高い。

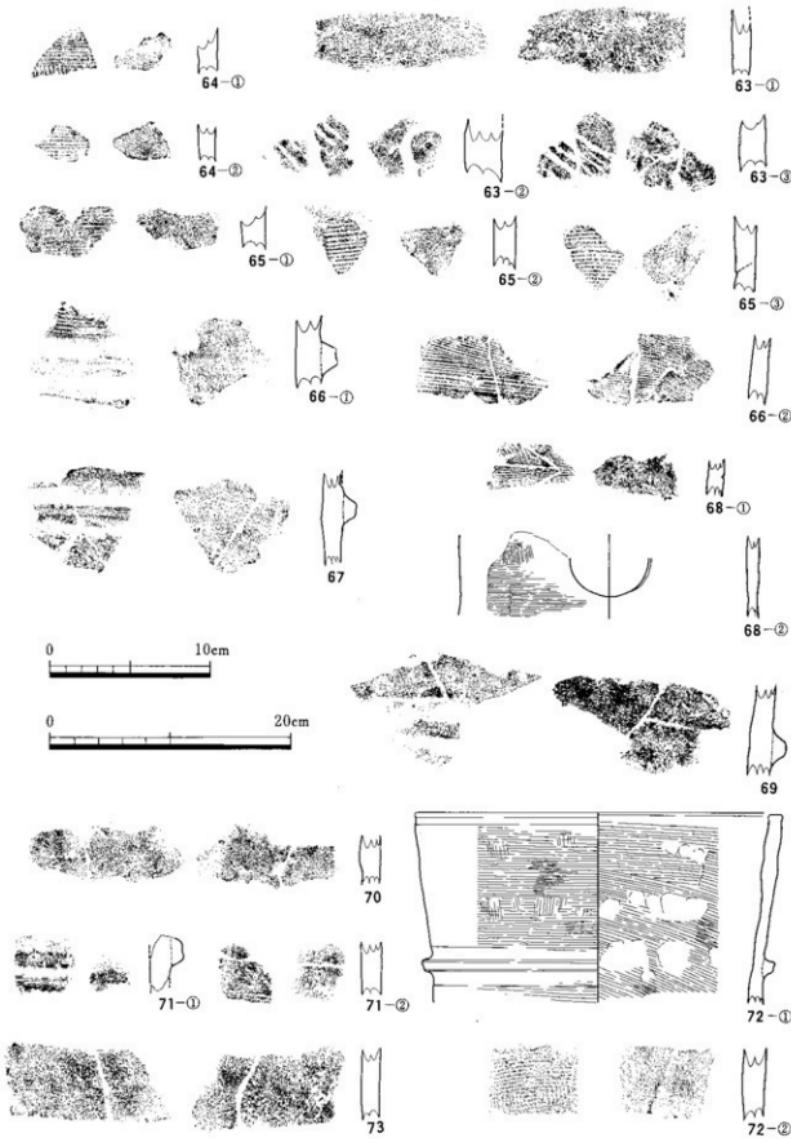
埴輪50、52はトレチ3で露出させたもので、現地で実測した。50は検出面径31.6cm、基底部径21.9cm、52は検出面径29.6cm、基底部径23.0cmを測る。基底部の高さ、タガ間の幅はいずれも約12cm、約10cmである。二段目、三段目にそれぞれ2づつ、交互に透かし孔をもつ。50の調整は内面はほとんど観察できなかったが、タテハケ(4本/cm)の後、原体幅約10cmのC種ヨコハケ(4～5本/cm)が施されており、一段中のヨコハケの重複は観察できなかった。基底部は縦方向のケズリ(単位2～2.5cm)が施されている。最下段のタガには、押圧技法状の板状工具によるナデが認められる。52は風化のため調整が不明瞭になっているが、基底部は縦方向のケズリが観察できる。どちらも、胎土は1mm以下の長石・石英粒が多く、1～3mm大の赤褐色粒をまばらに含むもので、焼成は良好、明赤褐色～橙色を呈する。

埴輪74はトレチ2で露出したものである。基底部径23.0cm、検出面での径24.8cmを測る。ヨコハケは条線の密度が他の埴輪より目立って細かい7～14本/cm程度のもので、B種およびC種ヨコハケが観察できる。基底部は風化のため調整を観察できないが、一部に縦方向のケズリかハケメの痕跡と思われるものが認められる。最下段タガは押圧技法類似の板状の工具でナデるものである。内面の調整はナデで、一部にナデに先行する荒いハケメが認められる。基底部は接合痕をよく残している。胎土は1mm以下の長石・石英粒、1mm大の石英粒を多く、赤褐色粒をわずかに含む。焼成はややあまく、橙色～にぶい橙色を呈する。

同じく非常に細かいヨコハケを施すものに埴輪20、25がある。20は検出面の径が29.6cm、口径は31.0cmほどに復元できる。25は検出面の径28.5cm、口径は30.0cmに復元できる。口縁部はどちらも端部がわずかに突帯状に外反するもので、胎土や色調もよく似ている。

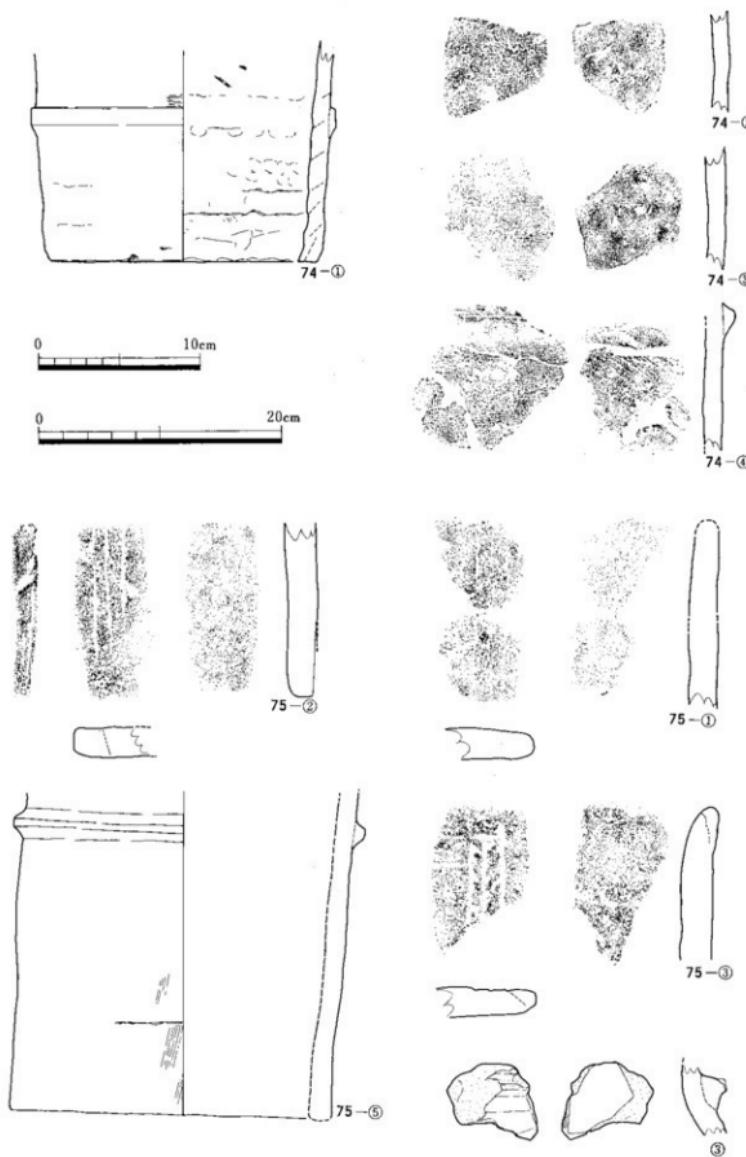
また、埴輪10、14、37、43などは口縁部内面の調整が横方向の強いナデとなっている。これらはほぼ直立する口縁部で、端部に面をもち、他のものよりも厚手な印象を受ける。外面の調整はC種ヨコハケ(5本/cm)。検出面の径も約30cm前後と他の埴輪より若干大きい傾向がある。

盾形埴輪 墳輪15、27、39、51、63、105は検出状況で盾形埴輪であることが確認でき、埴輪3、75も周囲の破片から盾形埴輪であることがわかる。検出状況や周囲の破片からは確認できないが、出土位置や配列の状況から埴輪81、93も盾形埴輪である可能性が高い。また、盾形埴輪のうち埴輪3、15、39には衝角付冑の破片と思われるものが含まれており、埴輪27、51にも部位不明ではあるが盾部ではない部

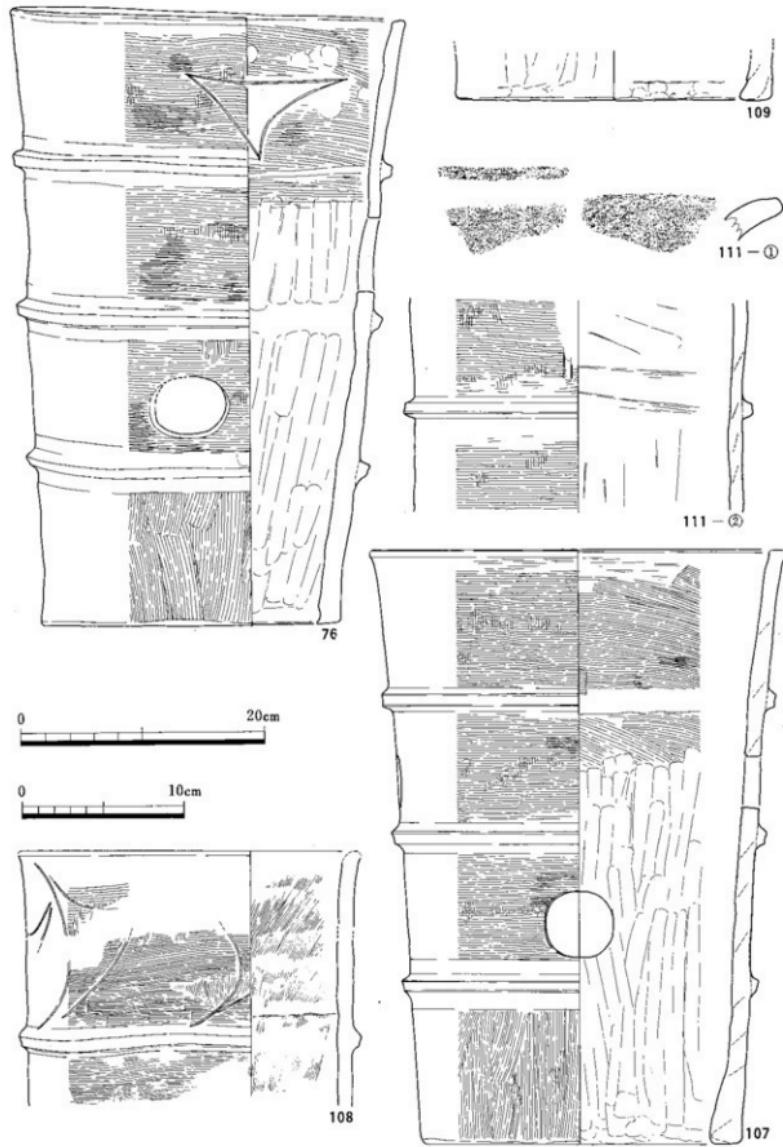


第32図 塗輪列出土埴輪(13)

1) 塚輪列出土地輪



第33図 塚輪列出土地輪(14)



第34図 地輪列出土埴輪(15)

分の破片が存在する。したがって、盾形埴輪の、少なくともその多くが、胄を伴うものである可能性が高い。

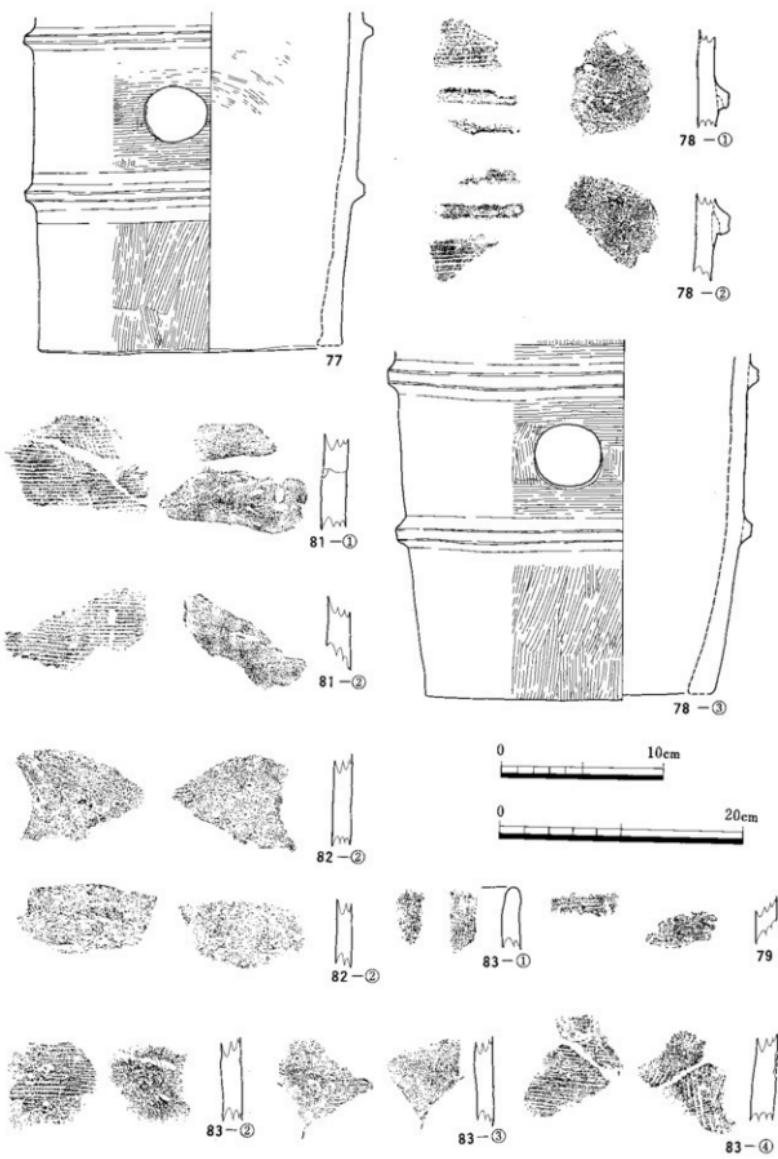
埴輪3は、検出面の径23.5cmを測る。盾部の破片などは残っていないが、周辺に衝角付き胄の破片が散乱しており、もとは盾形埴輪の上に胄をのせたものと考えられる。筒部の調整は風化やマンガンの付着のため不明瞭だが、6~8本/cm程度のヨコハケのようであり、内面はナデている。胄部は、外面は風化のため調整や文様は不明だが、鏡部分の一節とみられる破片3-③では下端付近に一条の沈線が認められる。内面は接合痕を残すナデ、ユビオサエが観察できる。胄部の正面、顔に当たる部分には透かし孔が存在する。胎土は1mm以下の長石・石英粒、1mm程度の長石粒が多く、1~3mm大の赤褐色粒をまれに含んでいる。焼成はややあまく、赤褐色~橙色を呈する。

埴輪15は、検出面での筒部径29.0cm、盾部幅約40cmを測る。風化が激しく図示できないが、胄の一部と考えられる破片が存在する。盾部は最下段のタガを下端として貼り付けられており、薄手で、盾の縁辺に沿った沈線が一条施されている。筒部の盾部直下には正面に透かし孔1孔が存在する。筒部外面の調整はヨコハケ(C種?・4~5本/cm)であり、内面はナデしている。最下段のタガは盾が貼り付く部分は薄く削られているようで、盾が剥離した部分には剥離防止の刻みが入れられているのが観察できる。胎土は1mm以下の長石・石英粒を多く、3mm程度の淡褐色~淡赤褐色粒をまれに含むもので、明赤褐色~橙色を呈する。

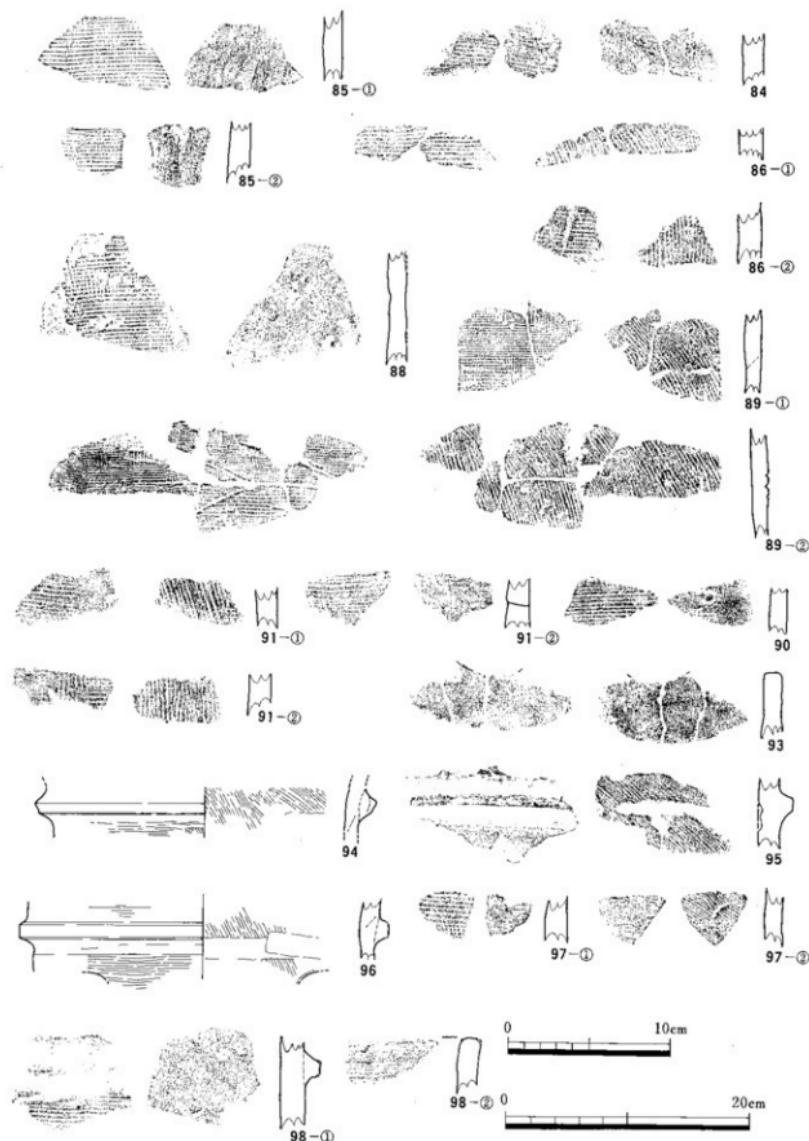
埴輪27はトレンチ4で基底部まで露出させたもので、基底部付近を現地で実測した。基底部径18.9cm、検出面では筒部径24.5cm、盾部幅35.0cm、基底部高さ約23cmを測る。盾部はほぼ長方形で、上部は中央部が緩やかに盛り上がる。盾面は縦方向にハケメ(5本/cm)を施している。文様は復元こそできないが、上端、下端に沿って2条、左右の側縁に沿って1条の沈線、盾の隅角部から斜めに2条の平行沈線が描かれている。筒部には、基底部正面に1孔、二段目後ろより2孔の透かし孔が存在する。調整は盾部が剥離した面にヨコハケ(C種・4本/cm)が認められる。また、部位不明の破片も数点存在する。27-②は傾きのやや大きい薄手の破片で、筒部肩部、あるいは胄等の破片と思われる。27-③、④は盾の縁辺部に似る破片だが、盾部とは調整や厚さ、文様の有無などが異なっている。外面は横方向にハケメ(5本/cm)を施しており、端部はヨコナデ。かなり厚手で、平板な破片であり、胄の一部であろうか。胎土は1mm以下から2mm大の長石・石英粒を多量に、2~3mm大の赤褐色粒やや多く含む。焼成は良好で、橙色~黄橙色を呈する。

埴輪39は検出面での筒部径24.7cm、盾部幅約35cmを測る。これにも衝角付き胄の一部と見られる破片が伴っている。筒部の調整は外面がタテハケの後、C種(?)ヨコハケ、内面はナデを施しているようだ。二段目には位置は不明だが透かし孔が存在する。39-①は大きく屈曲した丸みの強い破片で、どの部位にあたるかは不明だが、胄の一部である可能性が高い。39-②は衝角の先端部と考えられる。外面は風化が激しく、雨だれ状の小孔が多数認められる。39-③は盾部の側縁と思われる。盾面はタテハケ(5本/cm)、裏面は縦方向の強いナデとなっている。文様などは認められない。胎土は1mm大からそれ以下の長石粒の目立つもので、1mm大の石英粒をまばらに含んでいる。胄部の破片には1~3mm大の赤褐色粒をまれに含むものもある。焼成はややあまく、明赤褐色を呈する。

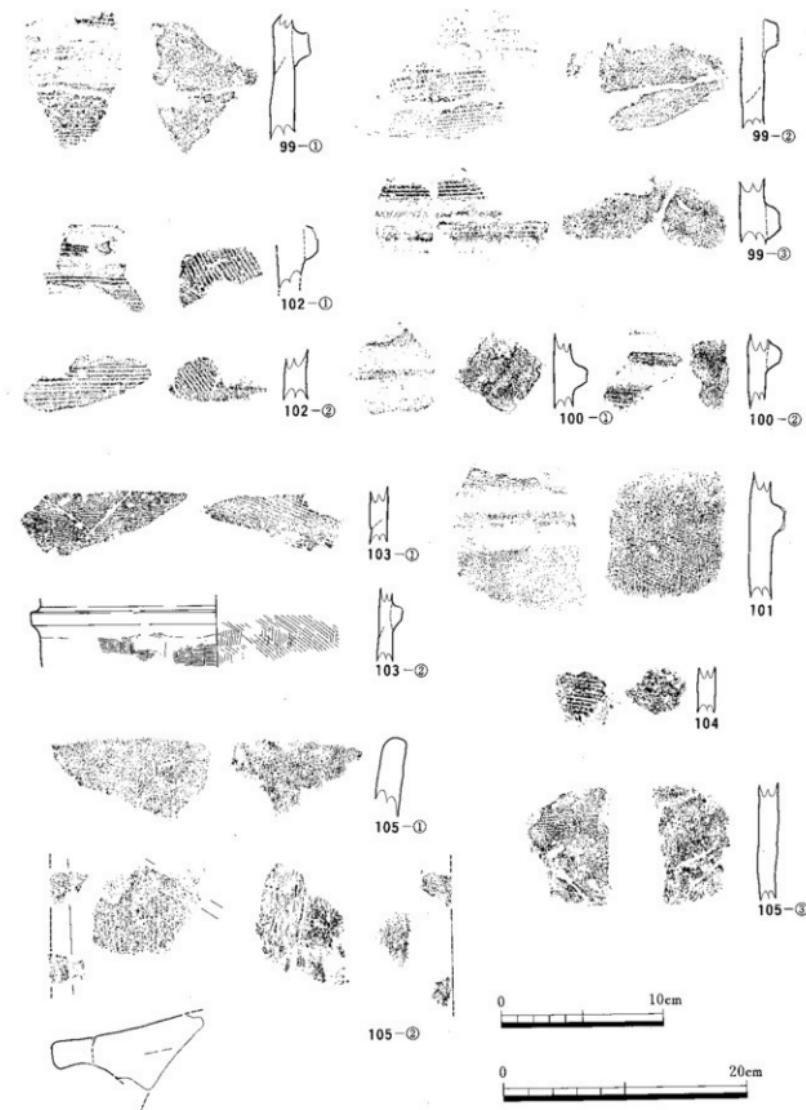
埴輪51はトレンチ3で基底部まで露出させた。残存状態が非常に悪く雨で完全に崩れてしまったため、残存部分を取り上げた。基底部径約22cm、検出面で約24cmを測る。基底部の高さは約22cm、外面は基底部も含めタテハケ(5本/cm)の後C種ヨコハケ(6本/cm)を施している。内面はナデしているようだが、接



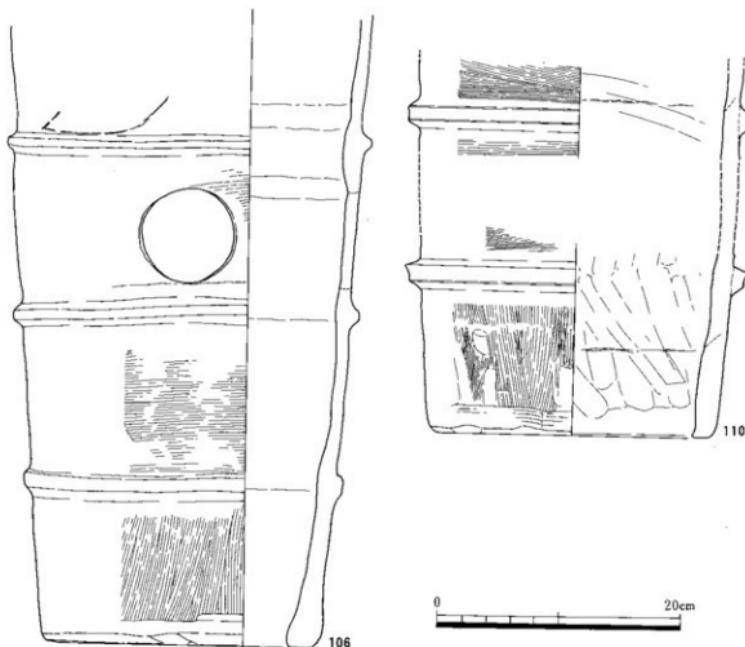
第35図 塗輪列出土埴輪(16)



第36図 墓輪列出土埴輪(17)



第37図 塗輪列出土埴輪(18)



第38図 塗輪列出土埴輪(19)

合痕を明瞭に残している。二段目の外面には盾部の剥離防止と考えられるハケメ状の条線が認められる。基底部には透かし孔は認められない。51-①は脛の一部、鐸部分の付け根付近と考えられる。外面は風化が激しく雨だれ状の小孔が多数認められる。内面は横方向にナデている。51-②、③、④は盾部の破片と考えられる。②、③には外面にタテハケ(5本/cm)、裏面にはナデが観察できる。胎土は1mm大からそれ以下の長石・石英粒が多く、暗赤褐色も少量含む。焼成は極めてあまく、明赤褐色を呈する。

埴輪63は検出面での径25.8cm、盾部幅35.5cmを測る。調整は風化のため内外面ともに不明だが、盾部の剥離痕にヨコハケ(5本/cm)が認められる。63-②、③は盾部の破片で、小破片のため位置や向きは不明だが、それぞれ6条?、8条の斜めのヘラ描き沈線文がある。胎土は1mm大～それ以下の長石・石英粒を多く、1～3mm大の赤褐色粒をまばらに含む。焼成はふつうで、橙色を呈する。

埴輪75はトレンチ2で露出させたもので、基底部径26.3cm、基底部高さ22cmを測る。筒部外面の調整は、風化のため不明瞭ながら基底部にタテハケ(5本/cm)が認められる。基底部には透かし孔は存在しない。75-①～③は盾部の破片である。風化のため調整は不明だが、側縁に沿って綾杉紋を施している。上下縁に沿っては2条の平行沈線が認められる。胎土は1mm以下から2mm大の長石粒を多く、2～3mm大の赤褐色粒まばらに含む。色調は浅黄橙色を呈する。なお、不明③は朝顔形埴輪の頸部に似た破片で

あるが、この埴輪の一部である可能性が高い。

埴輪105は検出面での径26.5cm、肩部幅32.5cmを測る。105-①は肩部の一部と考えられる。調整は風化のため不明瞭だが、わずかにタテハケが認められる。内面はナデの痕跡と思われる凹凸が認められる。外面に文様などは認められない。②は肩部の破片である。外面はタテハケ(4~5本/cm)で、側縁に沿つて縱方向の沈線1条とそれに斜行する2条平行沈線が描かれている。③は埴輪106周辺の擾乱坑内から出土したものだが、筒部の破片と見られ、外面にはタテハケの後にC種(?)ヨコハケ(6~7本/cm)が施されている。胎土は1mm大からそれ以下の長石・石英粒を多量に含むもので、1mm大の赤褐色~明赤褐色粒をまばらに含んでいる。色調は淡橙色~橙色を呈する。

埴輪81、93は盾形埴輪であることを示すものが存在しないが、出土位置から盾形である可能性が高い。81は検出面での径27.0cm。調整は外面がC種ヨコハケ(5本/cm)、内面が横方向の工具ナデである。胎土は1mm大~それ以下の長石・石英粒を多く含む。焼成も良好で、浅黄橙色を呈する。93は検出面での径26.3cm、外面にはC種(?)ヨコハケ(8本/cm)が認められる。胎土は1mm大からそれ以下の長石・石英粒、1~3mm大の長石・黒灰色粒をまばらに含むものである。焼成は良好で、浅黄橙色を呈する。

2) 周溝出土遺物

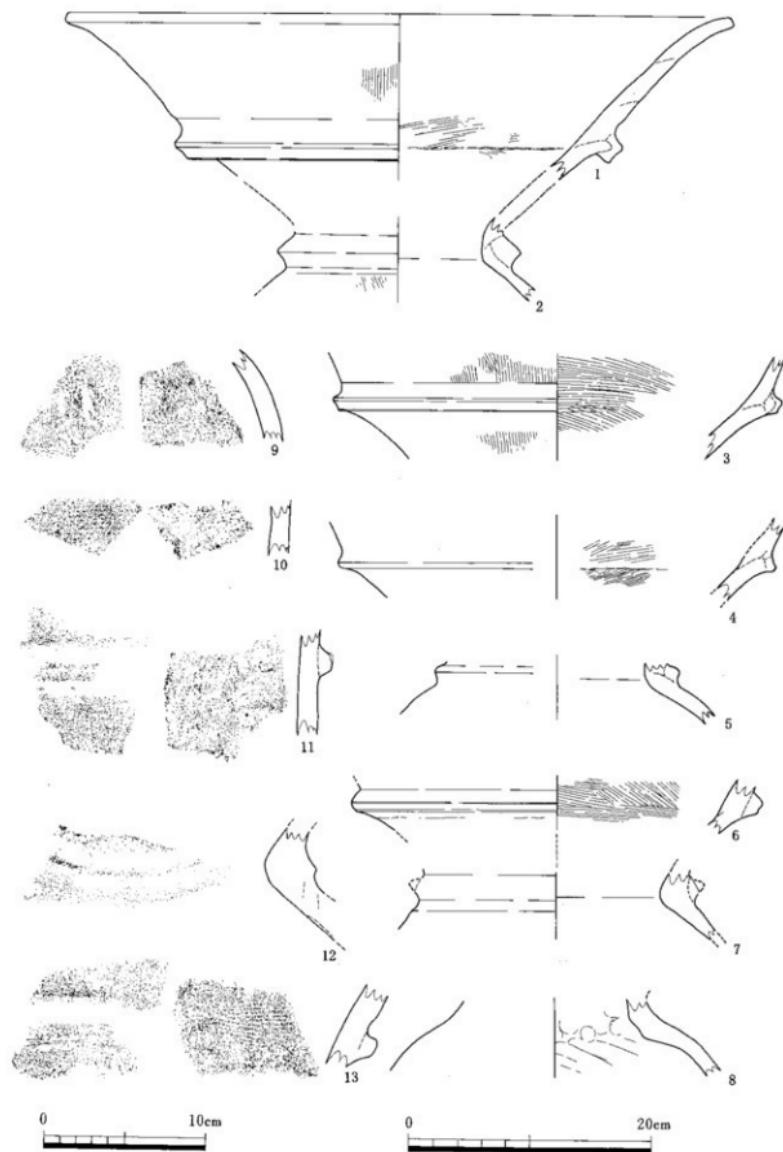
周溝出土遺物には埴輪片と須恵器が存在する。これらは土層の観察と埴輪列の残存状況などから第2号古墳墳丘から転落したものと考えられる。周溝内2-④層(第17図)を中心に、多数の葺石とともに埋設しており、出土部位には基底部が多い。埴輪の構成は埴輪列と若干異なり、円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、形象埴輪には盾形、蓋形、韌形などが含まれる。

a. 堀輪

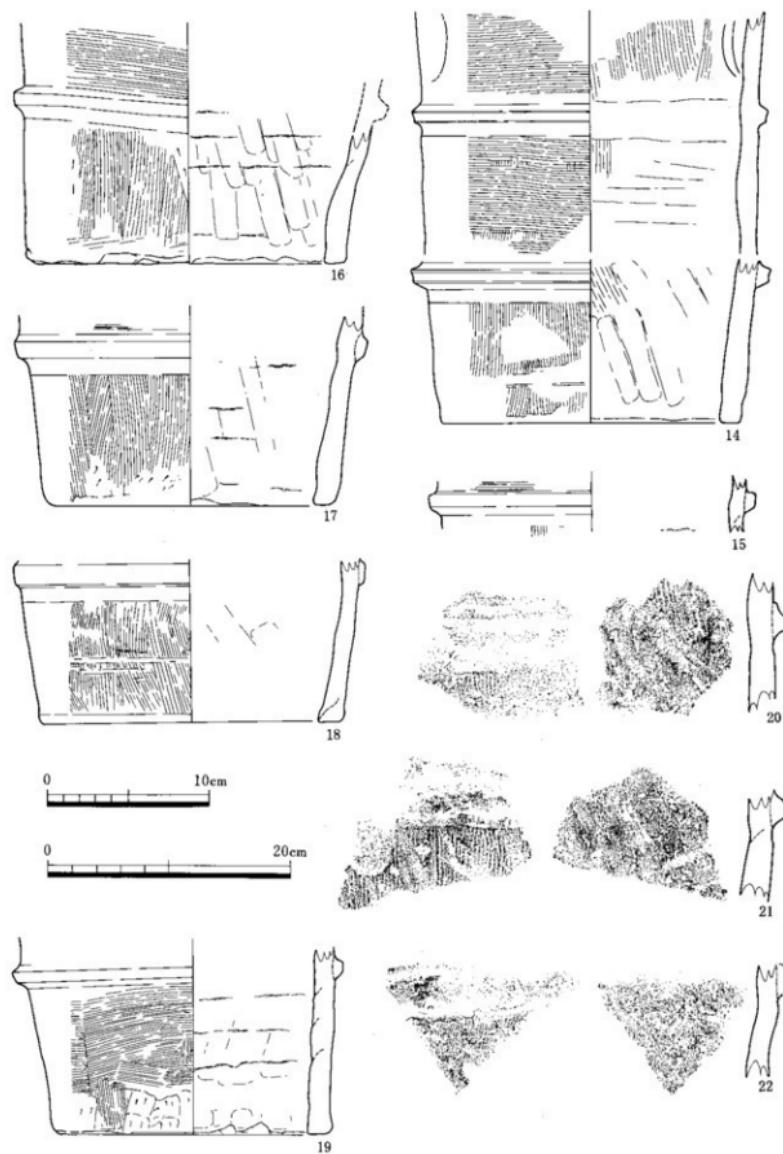
朝顔形埴輪(第39図1~13) 破片では、筒部~基底部は円筒埴輪と区別できないため、ここに分類できたのは口縁部~肩部のものに限られる。概して表面の風化が激しく、調整を観察できないものが多い。径などが復元できるものは多くないが、1は口径55cm程度、口縁部下端の径34.0~38.5cmに復元できる。1と同一個体と思われる2では頭部タガ部分で17.0~20.0cmに復元できる。他の個体でも口縁部下端のタガで35cm前後、頭部のタガで15~20cmの間に復元できるものが多い。

調整は口縁部~受部外面が縱方向のハケメ、肩部外面が盾~斜め方向のハケメ。口縁部~受部内面が横~斜め方向のハケメ、頸部以下は横方向のケズリになっているようである。焼成は黒斑は認められず、すべて窓窯焼成と考えられる。焼成の特徴、胎土は円筒埴輪等と区別できないが、色調は橙色~黄橙色と全体的に明るい色調を呈する傾向があるようだ。なお、33も破片上端が若干内湾している、内面調整が横方向のケズリになっていることから、朝顔形埴輪の肩部下端付近の破片である可能性が高い。

円筒埴輪(第40図14~第45図75) 破片、表面の状態とも残りが良いものは基底部付近のものが多く、特に径が復元できるものは基底部の破片に限られている。基底部径は25cm前後のものが大半で、埴輪列出土埴輪と同じサイズの埴輪と考えられる。しかし、74は基底部径が30cm程度に復元できるようで、形



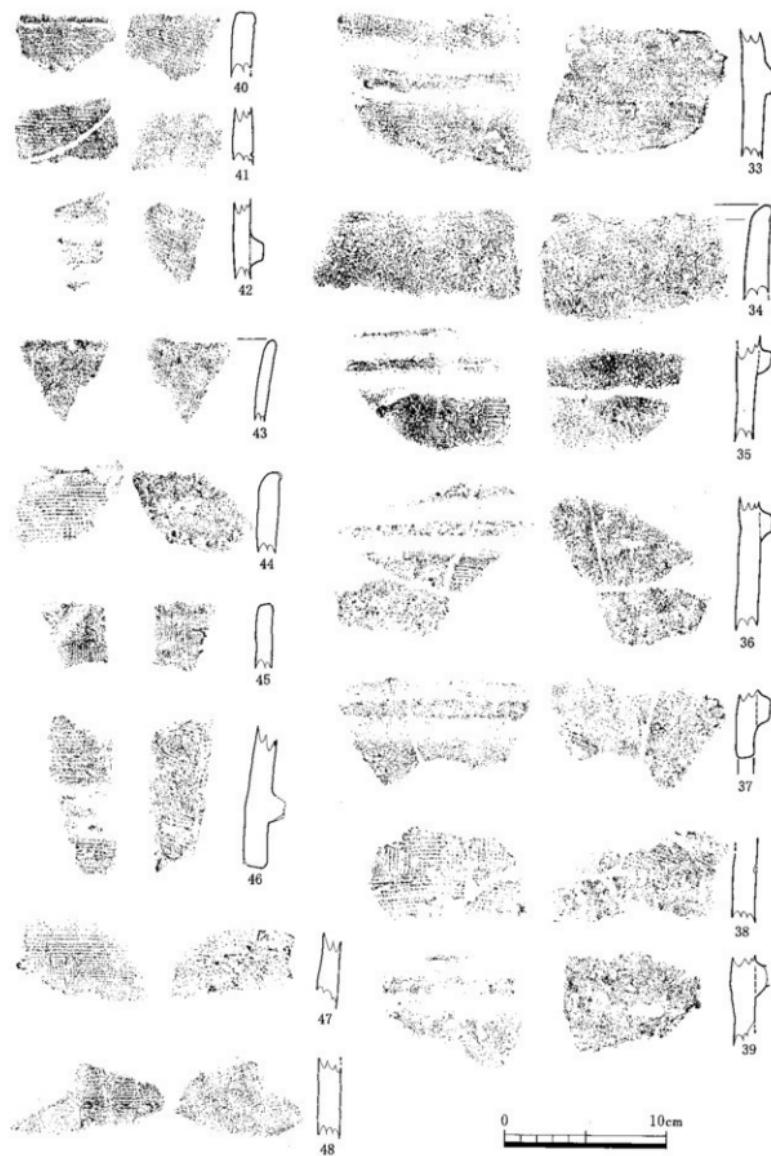
第39図 周溝出土埴輪(1)



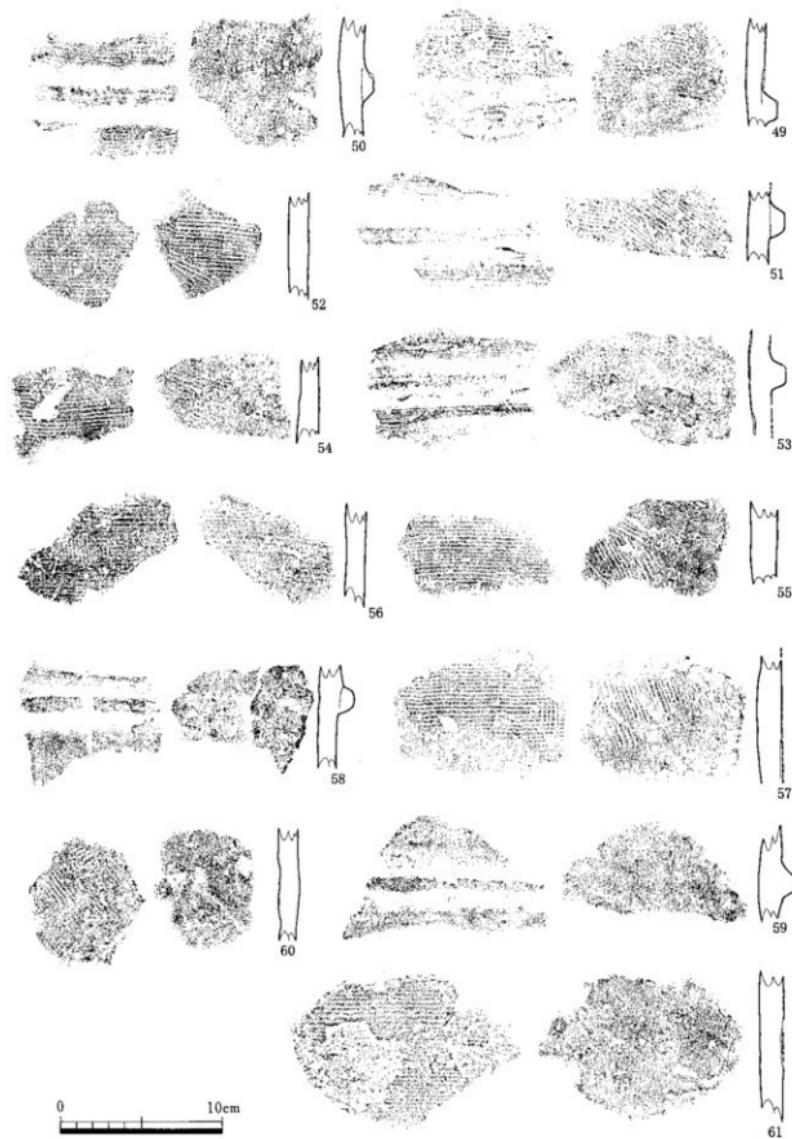
第40図 周満出土埴輪(2)



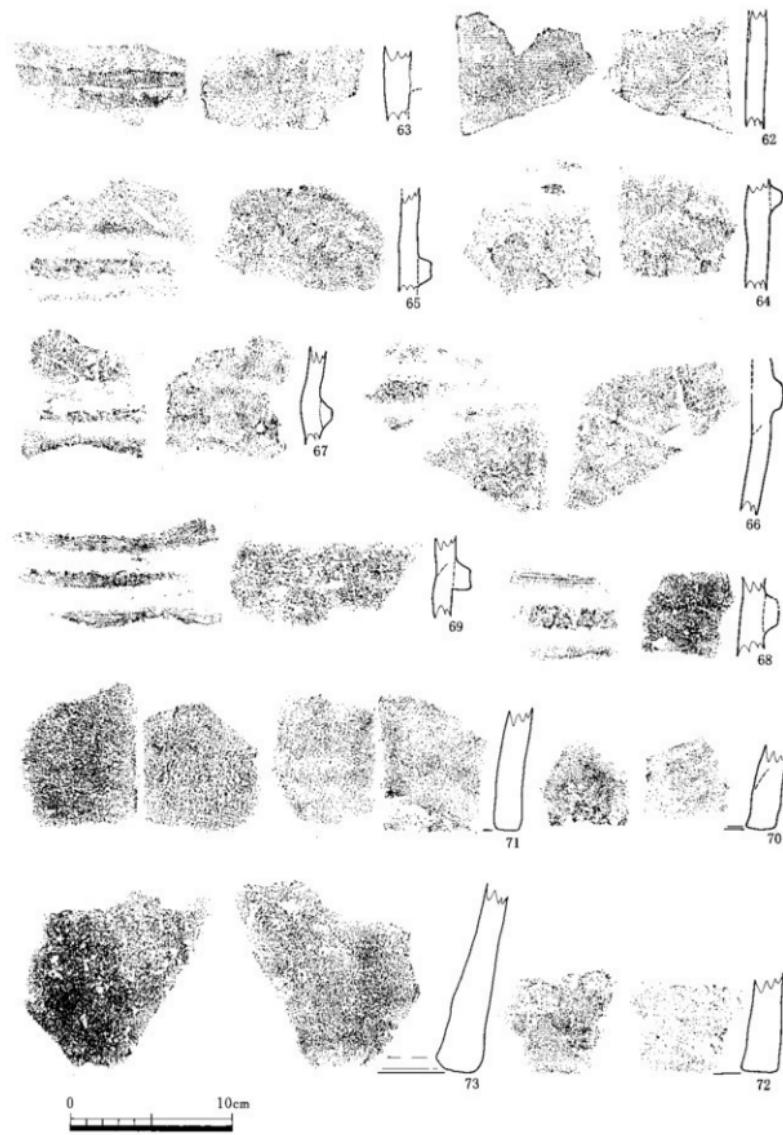
第41図 周溝出土埴輪(3)



第42図 周溝出土埴輪(4)



第43図 周溝出土埴輪(5)



第44図 周溝出土埴輪(6)

象埴輪などの基底部である可能性のほかやや大きなサイズの円筒埴輪も存在した可能性もある。

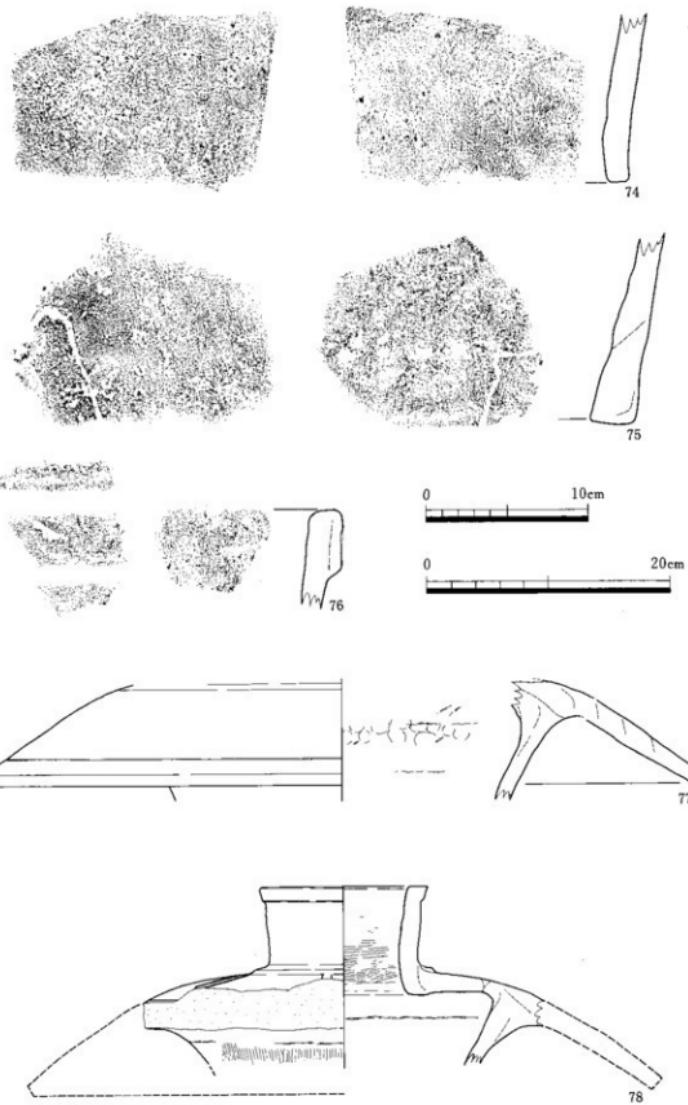
基底部の特徴では、外面の調整が二次調整を省略するもの(14、18)、部分的に縦方向のケズリを施すもの(16、17)、縦方向のケズリを全面に施すもの(23~29)がある。19だけはタテハケの後にヨコハケ(B種・5~8本/cm)を施しており、下端部に一部縦方向のヘラケズリが認められる。また、最下段タガには通常の断面M形を呈するものと、押圧技法に類似する上面を板状工具でなでるものとの二種類が認められる。ハケメの原体は、埴輪列出土埴輪と同じく4~5本/cm程度のものと5~10本/cm程度のものがあるようだ。胎土は1mm大~それ以下の長石粒が目立つもので、2~3mm大の焼土状の赤褐色粒、鉱物質の暗赤色粒などをまばらに含む。角閃石を含むものもある。黒斑は認められず窯窯焼成と思われる、赤橙色~黄橙色を呈する。

形象埴輪（第45図76~第47図92） 形象埴輪には蓋形、韌形、盾形のほか器種不明のものがある。

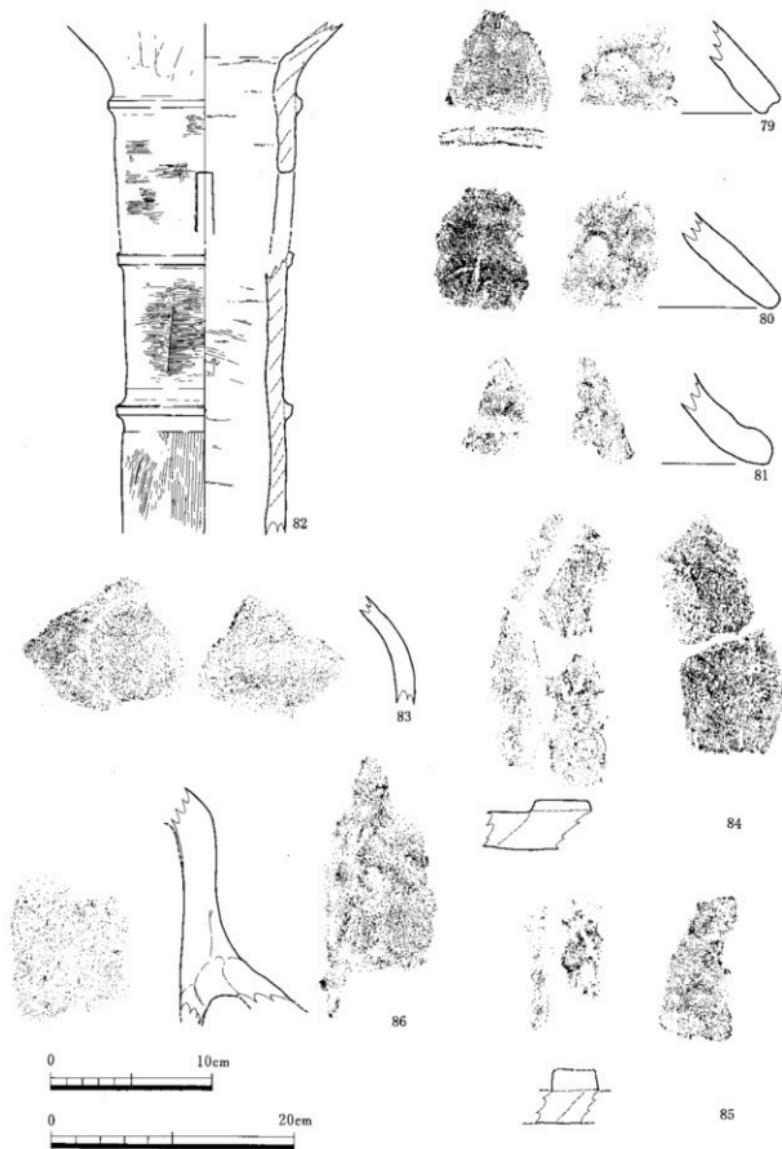
77~82は蓋形埴輪である。77は笠部から台部の大形の破片で、笠部径58.7cmに復元できる。笠部には、端部に平行して沈線が1条、笠部中央突帯の位置に2条の平行沈線がある。内外面の調整は風化のため不明だが、笠下面には横方向のケズリ状の痕跡が、笠部接合部の内面には指頭圧痕が認められる。胎土は1mm以下~2mm大の長石粒を多く含むもので、1~3mmの赤褐色粒~暗赤褐色粒まばらに含んでいる。焼成は良好で、窯窯焼成と見られる。78は笠部下半を欠く、軸受部から台部の大形の破片であり、軸受部径13.8cmを測る。軸受部下端突帯は扁平で、笠上半部に2条1組の垂線が存在する。この垂線はその間隔から1周に6単位程度ありそうである。笠部中央突帯にあたる位置には平行沈線が施されている。外面調整は笠部は風化のため不明ながら、軸受部外表面はヨコナデ、台部にはタテハケ(5本/cm)が認められる。内面は軸受部は横方向のハケメの後、上部にヨコナデ。笠部から台部の内面は横方向の強いナデが施される。胎土は1mm以下~2mm大の長石粒を多く含み、1mm大の石英粒、1~3mm大の赤褐色粒まばらに含む。色調は橙色を呈し、77に比べやや焼成があまいようで断面も黒灰色を呈するが、黒斑は認められず窯窯焼成と判断される。79、80は笠端部の破片と見られる。文様は破片中にはないが、外面は横方向のハケメ、内面には指頭圧痕が認められる。81も同じく笠端部の破片と思われるが、端部が突带上に肥厚している。

84、85は韌形埴輪の破片と考えられる。同一個体と見られ、いずれも外面に幅広の突帯を貼り付けていた。突带上には残りは悪いが綾杉文が描かれる。調整は不明、胎土は1mm以下~2mm大の長石・石英粒を多く、1~2mm大の赤褐色粒をまばらに含む。色調は橙色~黄橙色を呈する。

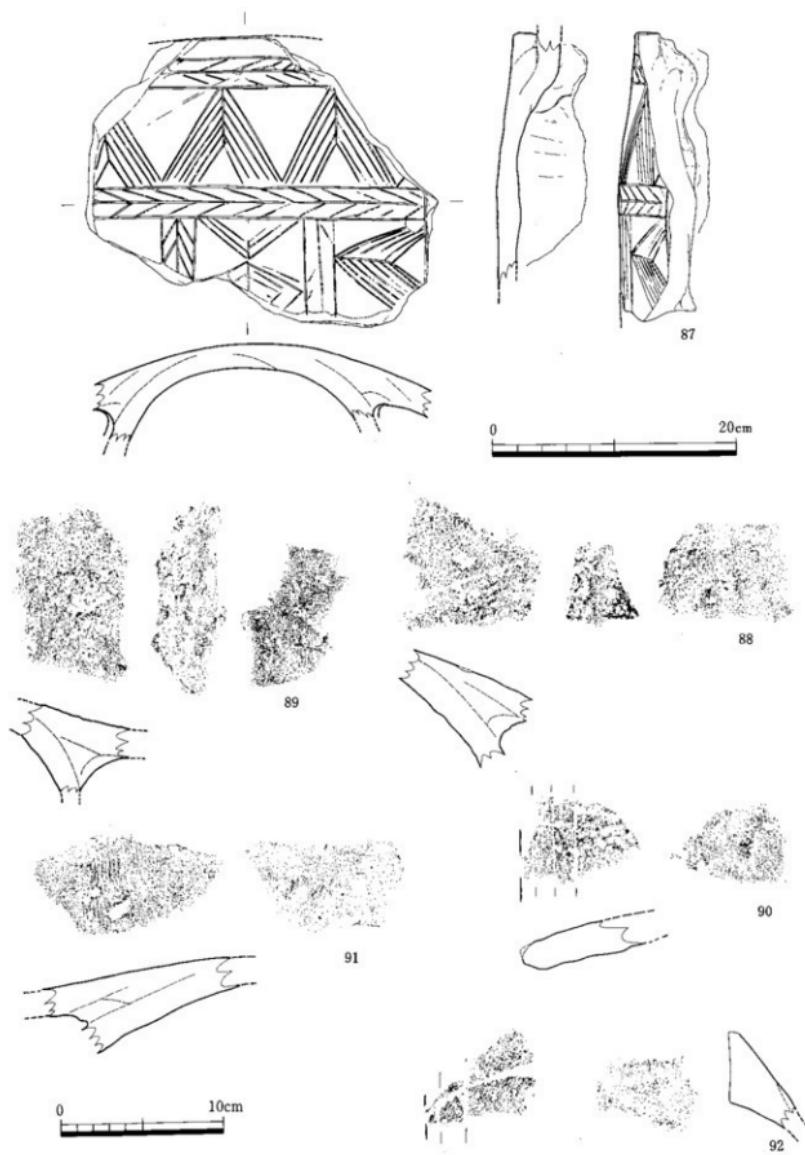
87~92は盾形埴輪である。87は盾部上部の大形の破片で、盾面には綾杉文、鋸齒文を組み合わせた文様が描かれている。筒部部分は上部が朝顔形埴輪の肩部のようにすぼまるようで、この上に胃が乗っていたものと考えられる。外面は風化のため調整不明だが、盾接合部には縦方向の強いナデが認められる。内面は横方向のナデである。胎土は1mm以下~2mm大の長石粒を多く含むもので、1mm大の石英粒をまばらに、1~3mm大の赤褐色粒を比較的多く含む。焼成は良好で黄橙色を呈する。88、89、90も同一個体と考えられる。91も盾形埴輪と考えられるが、筒部にあたる部分のカーブが緩く、かなり径の大きなものになる可能性がある。文様は破片中には認められない。盾面には縦方向のハケメ(4~5本/cm)、盾接合部には縦方向の強いナデが認められる。内面は強いナデであろうか。胎土は1mm以下~2mm大の長石粒が多く、角閃石もまれに含む。1~5mm大の赤褐色粒をやや多く含んでいる。焼成は87などに比べるとややあまいようで、橙色を呈する。92は接合の剥離面と端部が直行する関係にあることから、胃の



第45図 周満出土埴輪(7)



第46図 周溝出土埴輪(8)



第47図 周溝出土埴輪(9)

鏡部分の可能性がある。調整は風化のため不明だが、側縁に沿って沈線2条が存在する。胎土や焼成などは87などに似ている。

76は口縁端部のような破片で、端部外面に幅広の突帯を貼り付けている。破片の上下なども不明だが、端部のカーブなどから傾きは大きく傾かないようである。大形の円筒埴輪口縁部や蓋形埴輪の笠端部などの可能性も考えられるが、いずれも決め手に欠ける。

82はかなり細い筒状の個体で、形象埴輪の基部と考えられる。径は13.4~15.0cmを測る。現状の最下段は二次調整を省略することから基底部と考えられる。最上段は上に大きく拡がっており、上に形象部分が存在したものと思われる。外面調整は最下段がタテハケ(5本/cm)。二段目はタテハケの後、ヨコハケ(B種、8本程度?/cm)。三段目はタテハケの後ヨコハケ(8~13本/cm)。最上段は縦方向の強いナデか?。外面には赤色顔料がわずかに残存しており、三段目に長方形透かし孔が存在する。二段目には透かし孔は認められない。内面の調整は横方向の板状工具によるナデと思われる。胎土は1mm以下~2mmの大の長石粒を多く含み、石英粒は目立たない。1~3mm大の赤色~赤褐色粒を比較的多く含んでいる。焼成はふつうだが、胎土に砂粒が多く軟質な印象を受ける。

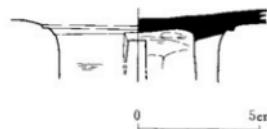
83は朝顔形埴輪の肩部のような破片で、外面にr状の文様が存在する。風化が激しく調整などは観察できない。

86は複雑な面構成の破片で、器種、部位などは不明である。胎土、焼成、色調などは84、85に類似しており、韌形の一部であるかもしれない。

b. 須恵器

高坏、あるいは器台などの坏部から脚部の付け根付近の破片1点が、周溝内2-④層の埴輪列側よりから出土している。

脚部の付け根で径7.5cmとかなり太い脚部のもので、坏部と脚の境界にはごく低い断面三角形の突帯がまわる。脚部には4方向に方形の透かし孔をあけているようである。付け根からやや下がった部分には、かなり細かい櫛描文がわずかに見られる。調整は外面がヨコナデと見られ、脚内面にはやや強いナデが認められる。脚内面の坏部底面にあたる部分には幅5mmほどのハケメ状の条線が1周している。胎土はかなり精良で、1mm以下の長石粒、黒灰色~暗赤色粒をまばらに含んでいる。焼成は堅緻で、坏部内面で2.5YR5/1~5PB5/1、外面から脚部内面で5B6/1~5B5/1を呈する。なお、脚部の付け根にごく弱い突帯をもつ例には、韓国東萊福泉洞25・26号墳などの高坏があり、これも伽耶系の陶質土器である可能性が高い。



第48図 周溝出土須恵器(1/2)

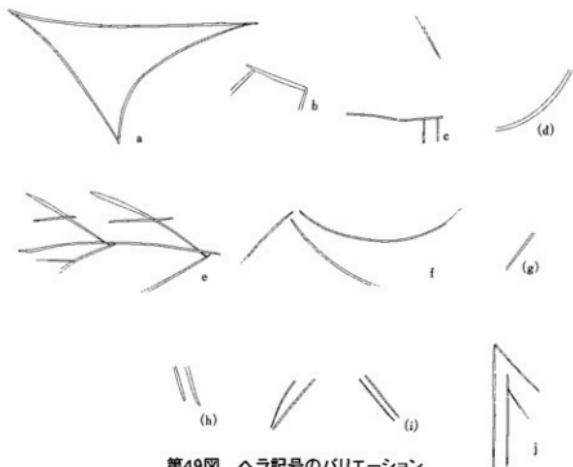
3) まとめ

a. 塚輪列出土塚輪と周溝出土塚輪

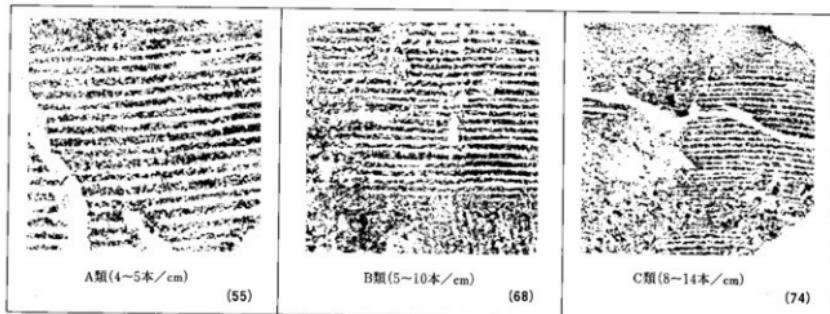
遺構の記述でも述べたが、塚輪列の性格、第2号古墳や他の古墳との関係を考える上で、塚輪列出土塚輪と周溝出土塚輪の関係を今一度検討してみよう。

周溝出土塚輪は周溝内2—④層(第17図)を中心に、多数の葺石とともに埋没しており、出土部位には基底部が多い。そのことから、並べられていた墳丘などとその外側に葺かれていた葺石とともに流出、埋没したものと考えられる。検出した塚輪列では塚輪が二段目～三段目まで残存していることから、この塚輪列の周溝側にもう1列塚輪列の存在を想定するのでなければ、周溝内の塚輪は墳丘にもともと並べられていたものである可能性が高い。それでは塚輪自体の特徴はどうであろうか。

円筒塚輪はどちらのものも口径30cm前後、高さ50cmほどに復元されるものである。周溝出土のものにはこれより大きくなるものも含まれる可能性があるが、数は多くないようである。この中で特に注目される特徴としては基底部の調整と最下段タガの特徴を上げることができる。塚輪列の塚輪では基底部の調整は塚輪76など二次調整を省略しており、一次調整のタテハケが残されているもの、塚輪110などタテハケの後に部分的に縦方向のケズリを施し、下端付近に横方向の工具ナデが認められるもの、塚輪50など全面に縦方向のケズリを施すもの、のバリエーションがある。最下段タガに関しては、押圧技法に類似する板状工具でタガ面をなでるものがあり注目される。この押圧技法類似の技法は春成秀爾が作山古墳の塚輪の紹介の中で「板状工具によるナデ仕上げ」と表現するもの⁽¹⁾であり、押圧技法の初現的なものと考えられる。周溝出土塚輪においても基底部の調整に同様のバリエーションが認められ、それぞれのバリエーションに押圧技法類似の最下段タガが伴うものがある。他の調整、胎土、焼成などの特徴においても両者に顕著な差は認められず、同時期の同じ塚輪群と考えて良いと思われる。



第49図 ヘラ記号のバリエーション



第50図 ヨコハケ原体の分類(1/1)

b. 円筒埴輪の分類

ここまでにも円筒埴輪の調整や形態の特徴などにいくつかのバリエーションが存在することについて述べてきたが、その組み合わせはいくつかのグループに分類できそうである。先に「同種の埴輪」と表現したものがこれである。まずは各属性を分類した上で、その組み合わせを検討してみよう。しかし、埴輪列では口縁部付近の特徴を観察できるものが多いのに対し、周溝では基底部が多く、口縁部の特徴と基底部の特徴を合わせて検討することは難しい。

ハケメ原体の分類 ハケメには条線の密度から、大きく分けて次の3種類の原体があるようである。

A類 4~5本/cmの密度のもの。

B類 5~10本/cmの密度で、条線の間隔が漸移的に変化するもの。

C類 8~14本/cmと非常に細かいもの。

これが原体の樹種の違いであるのか、材の位置や木取りの違いであるのかはわからないが、同じ原体なり、近い部材からとられた原体なり何らかの有意の差を表しているものと考えられる。

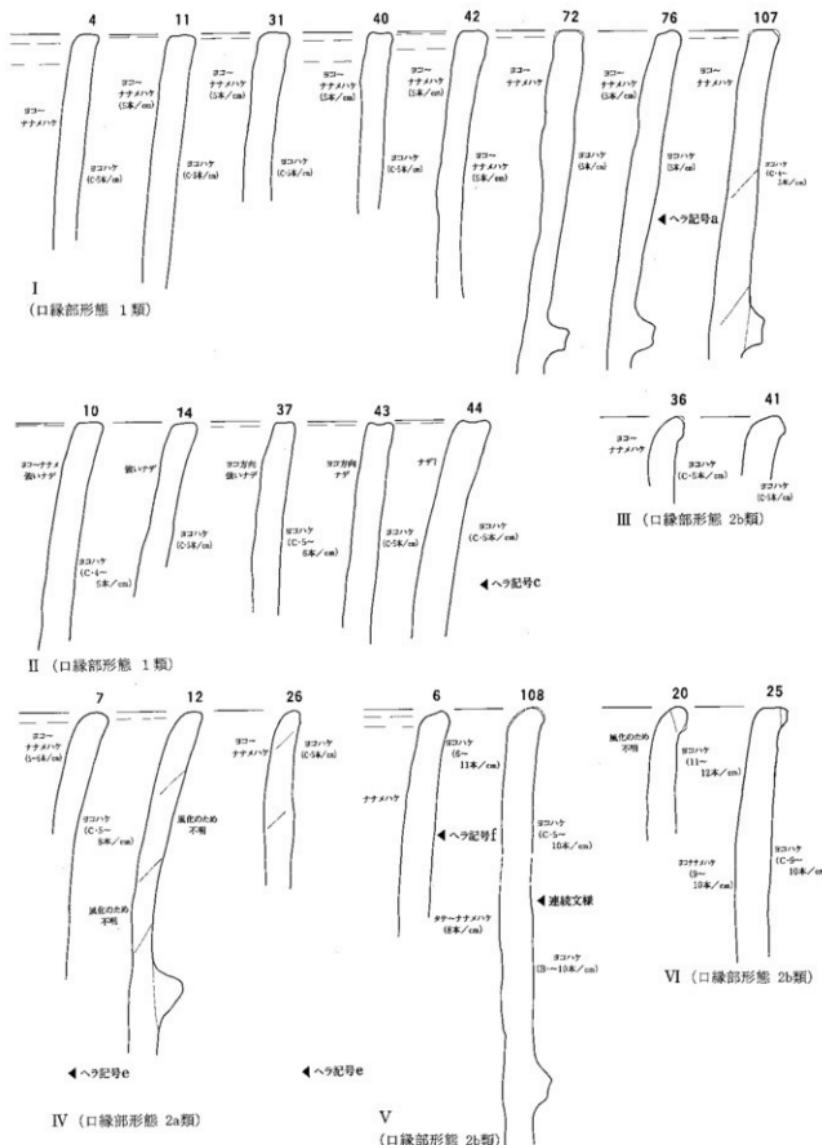
口縁部形態の分類 口縁部形態には上面がナデにより面をなすもの(1類)、上面を丸くしづかに外反させるもの(2類)がある。2類には外面上端を突帯状にするもの(2b類)としないもの(2a類)があるようだが、風化などにより区別が難しいものが多い。また、1類にもやや厚手で外面上端のわずかなふくらみが弱い印象を受けるものがあるが、区別することは難しい。

口縁部内面調整 口縁部内面の調整は大半が一次調整と思われる横~斜め方向のハケメが残る。一部に横方向の強いナデを施すものが認められる。

ヘラ記号 ヘラ記号には第49図のようなバリエーションが存在する。また、描かれる位置も口縁部のものと三段目のものがある。ヘラ記号とは言い難いが、口縁部に曲線を組み合わせた連続文様を巡らせるものもある。

透かし孔の位置 円形の透かし孔が二段目と三段目に互い違いに存在するものと、二段目には透かし孔が存在しないものがある。

基底部外面調整 周溝出土埴輪の記述や埴輪列出土埴輪との比較の部分で詳しく述べたが、二次調整を



第51図 円筒埴輪口縁部と調整・ヘラ記号の相関関係(1/2)

表1 造山第2号古墳出土埴輪属性分析表

	No.	口縁部形態		ヨコハケ原体			基底部外側調整		押圧技法		口縁部内面		ヘラ記号	二重口あわせ孔 有無	その他の特徴 ※1 ※2	
		1	2a	2b	A	B	C	省略	アズリ	有	無	ハケ	ナデ			
I	4	●			●							●				
	11	●				●						●				
	18	●				●						●				
	19	●										●				
	31	●			●							●				
	40	●			●							●				
	42	●										●				
	72	●			●							●				
	76	●			●							●		a	●	
	107	●					●					●				
II	10	●			●							●		b		
	14	●										●				
	37	●			●							●				
	43	●			●							●				
III	44	●			●							?		c		
	36			●	●							●				
	41		●	●	●							?		d		
IV	7		●			●		●			●	●		e	●	●
	12		●													
	13					●								e		
	17													e		
	26		●			●		●			●	●		e		
	29		●												●	●
	30					?										
	38		●													
	49		●													
	54													e		
V	59													e		
	68				●									e		
	89				●									e		
VI	6		●			●		●			●	●		f		
	108		●			●		●								
	106				?			●			?					
	20		●				●									
VII	25		●				●									
	74						●							g		
	77			●		●						●				
	78			●		●						●				
	周縁14			●		●						●				
	周縁15			●		●						●				
	50			●												
	52			?												
	周縁16			●												
	周縁17			●												
	周縁21															
	周縁18			?		●						●				
	周縁22			?		●						●				
	周縁24			●		●						●				
	周縁26			●		●						●				
	110			●		●						●				

※1 最上段タガの断面形が上部がやや高く、下部が低い。

※2 口縁部に連続文様

省略するもの、全面にケズリを施すもの、一部にケズリを施すものがある。

最下段タガ 押圧技法類似の板状工具によるナデが認められるものが存在する。

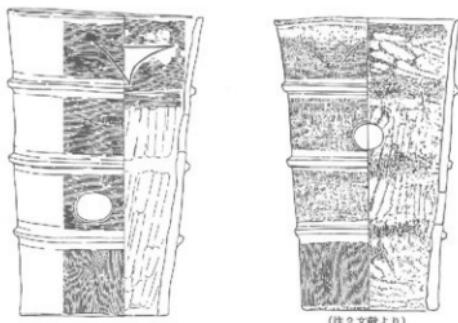
これら以外に、単独では判断が難しいが、タガの形態にも特徴的なものやある程度の傾向があるようである。

以上の特徴の組み合わせを整理したものが表1である。これを見ると、表下部に集めた基底部付近の特徴しかわからないものとの対応に問題を残すものの、特にI類、II類、IV類などはヘラ記号を含め諸特徴がよく一致することがわかる。また、II類は口縁部の形態が1類のうち、やや厚手で外面上端のわずかなふくらみが弱い印象を受けるものとしたもの。IV類は最上段のタガの形態が、タガ上部が高く下部が低いものや断面三角形に近い形状のものが目立つ。この分類には様々なレベルの属性の差が含まれ、その中にはさほど有意でないものを含んでいる可能性があるほか、それぞれの特徴をより細かく見て行くことでさらに細かく分類することも可能であろう。しかし、諸特徴を共通する一群の埴輪が存在することに注目したい。

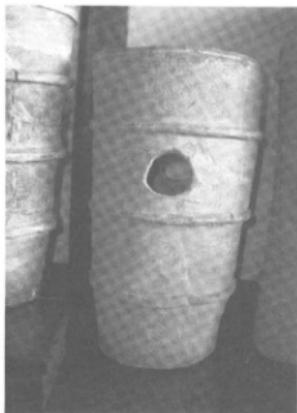
それではこれらのグループはどのような性格のものであろうか。これらの埴輪は、全体のサイズや段の構成などは、埴輪106のように若干背が高くなりそうなものもあるが、同じ企画で作られていると見られる。また、胎土は長石の砂粒を多く含むもので、おおかた似通ったものといえる。一方、風化の具合などによる見え方の差もあり肉眼では厳密に分けられないものの、グループごとに焼成や色調、混和剤などに傾向があるような印象を受ける。たとえばI類は焼成が比較的よく橙色～黄橙色を呈するのに対し、IV類は焼成がI類に比べややあまく色調も褐色を帯びたものである。従って、第2号古墳の円筒埴輪群とその各グループの関係は、埴輪の企画や胎土、混和剤の採集を同じくする集団と、その胎土、混和剤の供給を得て調整や胎土と混和剤の混合、焼成の状況に特徴のできるような集団内のグループや個々の工人差といった関係の現れではなかろうか。

c. 造山第2号古墳出土埴輪の位置づけ

第2号古墳の円筒埴輪は窯窯焼成、基底部の調整が二次調整を省略するもの、あるいは縦方向のケズリであること、外面の二次調整はC種ヨコハケ、B種ヨコハケが観察でき、7～8cm程度の幅の工具で一段につき2周ほど施している、さらに最下段のタガに押圧技法類似の技法が認められることなどから、川西編年の4期に位置づけられると考えられる。押圧技法類似の技法は春成秀爾が作山古墳の埴輪の紹介の中で「板状工具によるナデ仕上げ」と表現するものであり、畿内では大阪府堺市大山古墳、同藤井寺市市野山古墳に見られるようである。造山古墳群内では、基底部の調整が二次調整を省略あるいは縦方向のケズリを施すことであること、口縁部の直立傾向から、造山第4号古墳より新しく位置づけられると考えられる。第4号古墳の円筒埴輪は窯窯焼成ながらも、基底部の二次調整を残すなど川西編年4期でも古く位置づけられるものと思われる。第4号古墳と造山古墳の関係は、造山古墳の埴輪群がかなり多様なあり方をしているようで、表探資料しかない今それを判断するのは難しい。あくまで印象にすぎないが造山古墳の埴輪には窯窯焼成と判断できる埴輪は意外と多く、第4号古墳に先行するとしてもきわめて近接した時期と考えられる。一方、小造山古墳、宿寺山古墳の埴輪はタガ間のヨコハケも幅の広い工具で一度に施しているようであり、タガ、押圧技法も第2号古墳のものに比べるとかなり扁平なものになっている。ここで注目されるのは、島崎東氏によって報告されている伝・柳山古墳出土埴輪で



第52図 墓輪76(左)と伝・榎山古墳出土埴輪(右)(1/8)



第53図 作山古墳出土埴輪(倉敷考古館蔵)

ある⁽²⁾。この円筒埴輪は4段、高さ約50cmの完形の個体で、細部の調整、ヘラ記号まで第2号古墳の埴輪76と全く同一のものである。また、倉敷考古館に所蔵されている作山古墳出土の円筒埴輪は、上面に面を持つ直立した口縁部、基底部の外表面がタテハケをよく残す縦方向のケズリ、押圧技法、二段目に透かし孔を持たないなどの特徴を持つ個体で、第2号古墳では口縁部付近と基底部付近の特徴の関係がわかる例はないが、胎土を含めそれぞれの調整の特徴は全く同じといってよい。以上から、第2号古墳は榎山古墳、作山古墳ときわめて近接した時期に位置づけられ、しかもその埴輪の一部は同一工房から供給されたものを含むと考えてよい。

注

(1) 春成秀爾 1983 「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』

(2) 島崎東 1982 「備中榎山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』第3号

表2 造山第2号古墳埴輪列埴輪観察表

番号	種類	部位	伝量 (単位: cm)	調査	出土	角度	直角	傾き	備考
1	円筒	—	(検出量) 27.2	不明	1mm以下の長石粒多い。1~5mmの大粒の長石・石英・難赤褐色粒をまばらに含む。	外面: (2.5) 5YR5/6	ややあまい	調査範囲に半分程度かかる。取り上げ積片なし。	
①	円筒?	表面	タガ(下底) 2.0 (上底) 1.0 (高さ) 0.8	風化のため不明	1mm以下の大粒の長石・石英粒多い。1~3mmの大粒の赤褐色粒を多く含む。	外面: 10YR8/2 ~10YR7/2 内面: 10YR8/2 ~10YR7/2	ふつう	種類1の特徴がはつきりしないため比較できないが、種類1の可能性高い。	
2	円筒	二~三段目	タガ(検出面) 24.2 タガ(下底) 2.5 (上底) 0.6 (高さ) 1.4	風化のため不明	1mm以下の長石粒多い。1mmの大粒の長石・石英粒、2~3mmの大粒の赤褐色粒、長石粒、粘土粒を含む。	外面: 7.5YR7/4 ~3.5YR5/8 内面: 7.5YR7/4 ~5YR6/8	良好		
3	円筒	塔(検出面) 23.5 タガ(下底) 2.5 (上底) 1.5 (高さ) 1.1	風化のため不明 よう。	外面: 風化、マンゴン付着のため不明なが、6~8本/cm程度のヨカヘのよう。	1mm以下の長石粒多い。1mmの大粒の長石粒を多く含む。1~3mmの大粒の赤褐色粒まれ。	外面: 10YR4/4 ~10YR5/8 内面: 10YR5/8 ~2.5YR5/6	ややあまい		
	表面	ナナ	—	内面: ナナ	外面: 2.5YR5/8 ~4/6. 5YR6/8	ややあまい	内面に複合の釉薬帯をそのまま残す様。		
	頭部?	—	—	内面: 風化のため不明 ナナ: ユピオサエ	内面: 5YR5/8 外面: 5.5YR5/8	ふつう	図3-① 図3-②		
	不明	(青部?)	—	風化のため不明	外面: 5YR7/6 内面: 7.5YR6/8 ~7.5YR6/6	ふつう	釉薬が若干異なるようにも見え、別個体の可能性あり。図3-③		
4	円筒	二段目 ~口縁部	径(口径) (29.2) (検出面) 26.5 タガ(下底) 1.7 (上底) 0.8 (高さ) 0.6	外面: ヨコハケ(C種・5本/cm)、口縁部 部ヨコナデ。 内面: 口縁部内面横~斜め方向のハケメ (5本/cm)。ほか風化のため不明。	1mmからそれ以下の長石・石英粒多量に含む。1~5mmの大粒の赤褐色粒を含む。	外面: 7.5YR7/6 ~5YR7/6 内面: 10YR8/4 ~6.25YR7/4	良好	二、三段目に遡かしれ。	
5	円筒	二段目以上	径(口径) 29.3 タガ(下底) 1.8 (上底) 0.9 (高さ) 0.6	外面: タガヘ後ヨコハケ(C種・5本/cm) タガ(下底) 1.8 (上底) 0.9 (高さ) 0.6	1mm以下~2mmの大粒の長石・石英粒多量に含む。1~3mmの大粒の赤褐色~赤灰色粒を比較的多く含む。	外面: 10YR7/3 ~5YR5/0 内面: 7.5YR6/6 ~2.5YR5/6	良好	遡かしれあります。	
6	円筒	径(口径) (31.3) (検出面) 28.0 タガ(下底) 1.8 (上底) 1.0 (高さ) 1.0 総高 (49.0)	外面: 基底低部タガヘ(5本/cm)、二次側 壁部低部、二段目以上タガヘ後ヨコ ハケ(C種)、一部端、6~11本/cm、 原体幅7cm、タガ周辺、口縁部端 部ヨコナデ。 内面: 段~斜め方向のハケメ (6~11本/ cm) の後、三段目以下歛方向の強 いナナ。	1mmからそれ以下の長石・石英 粒多量。1~3mmの大粒の赤褐色~ 赤灰色粒を比較的多く含む。	外面: 2.5YR7/2~ 10YR7/4 内面: 7.5YR6/6 ~2.5YR5/6	良好	検出状況で実測。口縫 部外面にヘラ記号。三 段目に遡かしれ、一对あ り。(二段目に遡かし れ認められない。)		
7	円筒	径(口径) (31.3) (検出面) 27.9 タガ(下底) 2.5 (上底) 1.0 (高さ) 0.9 地高 (50.0)	外面: ヨコハケタガヘ(5本/cm)、二次側 壁部低部、二段目以上タガヘ後ヨコ ナデ(C種・5~10本/cm、原体幅7cm、 タガ周辺、口縁部端ヨコナデ。 内面: 段~斜め方向のハケメ (5~6本/cm)。 一段目以下不規則。	1mm以下の長石・石英粒多量。 1~3mmの大粒の長石粒、1~3mm大 粒の赤褐色粒まばらに含む。	外面: 2.5YR5/6 内面: 7.5YR7/4 ~5YR7/3	ふつう	検出状況で実測。口縫 部外面にヘラ記号。三 段目に遡かしれ、一对あ り。(二段目に遡かし れ認められない。)		
8	円筒	二段目以上	径(検出面) 26.7	外面: ヨコハケ(C種・5本/cm) 内面: 斜め方向の強いナナ。	1mm以下の長石・石英粒非常に 多い。1~3mmの大粒の赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 5YR5/8 内面: 6.25YR6/8 ~7.5YR7/2	ふつう		
9	朝顔形	二段目以上	径(口径) (49.0) (検出面) 32.0 ~28.5 タガ(下底) 2.0 (上底) 0.8 (高さ) 0.9 タガ(頭部) (下底) 2.8 (上底) 1.6 (高さ) 1.4	外面: 口縁部タガヘ(二段側面開 き、5本/cm)、口縁部、頭部は ハケメ強烈な横力ナナ。 内面: ヨコナデ(5本/cm)、口縁部 部とその外側面5cm程度ヨコナデ。 内面: 口縁部強烈ヨコナデ(9~10 本/cm)。口縁部下端のタガ基部強 いヨコナデ。頭部ヨコハケ? 屋根以 下横方向の強いナナ。	1mmからそれ以下の長石・石英 粒を含む。	外面: 10YR6/8 ~2.5YR5/6 内面: 5YR5/8 ~7.5YR7/1	三段目(?)にヘラ記号。 三段目に遡かしれあります。		
10	円筒	三段目以上	径(口径) (33.2) (検出面) 29.2 タガ(下底) 1.6 (上底) 0.8 (高さ) 1.0	外面: タガヘ後ヨコハケ (C種・4~6 本/cm)。口縁部、タガ周辺ヨコ ナデ。 内面: 段~斜め方向の強いナナ	1mmからそれ以下の長石・石英 粒を多く含む。1~3mmの大粒の赤褐色 粒を含む。	外面: 5YR5/6 ~5YR6/6 内面: 10YR7/3	良好	口縫部にヘラ記号	
11	円筒	三段目以上	径(検出面) 25.7 タガ(下底) 2.5 (上底) 1.1 (高さ) 0.6	外面: ヨコハケ(C種・5本/cm) 内面: ナナ? ヨコナデ上端~斜め方向 のハケメ (5~6本/cm)	1mm以下~1mmの大粒の長石粒をや や多く、1mm以下の石英粒、角 閃石をぐるわずか含む。	外面: 10YR7/6 ~7.5YR7/8 内面: 8.25YR6/9	良好		
12	円筒	三段目以上	径(検出面) 24.1 タガ(下底) 2.5 (上底) 1.1 (高さ) 1.0	外面: ヨコハケ(C種・5~6本/cm) 内面: ナナ?	1mm以下~2mmの大粒の長石・石英 粒多量。1~3mmの大粒の赤褐色粒 まばらに含む。暗石・石英粒も含む。	外面: 8.75YR7/8 ~8.75YR7/5 内面: 10YR8/2 ~10YR7/3	良好		
13	円筒	二~三段目 以上	径(検出面) 27.8 タガ(下底) 1.8 (上底) 1.0 (高さ) 1.0	外面: ヨコハケ (C種?・5本/cm) 内面: ヨコナデ	1mm以下の長石・石英粒を多く 含む。1~3mmの大粒の赤褐色粒を やや多く含む。難石・石英色粒も含む。	外面: 7.5YR7/4 内面: 8.75YR7/3	良好	三段目(?)にヘラ記号	
14	円筒	二~三段目 以上	径(検出面) 30.0	外面: タガヘ (5本/cm) 後ヨコハケ (C 種?・5本/cm) 内面: 段~斜め方向のケズリあるいは強 いナナ	1mm以下の長石・石英粒を多く 含む。1~3mmの大粒の赤褐色粒を 強約多く含む。	外面: 5YR8/6 内面: 7.5YR7/2	良好		

委託・属性	部位	寸法 (単位: cm)	調査	歯士	色面	後成	備考
15 鳴形 ~肩部	筋(突出部) 筋部幅 ~肩部幅	26.0 (約40)	外面: 南部(基底部)ヨコハケ(△僅? 4 ~5本/cm)、筋部、風化、剥離のため 調整不明。肩部が難面にヨコハケ (4~5本/cm)、肩部は外傷? その他? 右側縫、下端に沿ってそれぞれへラ 描き状線: 条。 内面: ナダ	1mm以下の長石・石英粒を多く 含む。3mm程度の淡褐色~淡赤 褐色粒をまれに含む。	外面: 5YR2/6 ~2.5YR5/6 内面: 3.75YR5/4	ふつう	基底部正面に透かし あり。出土状況に従い、 合成して実測。
	背部		風化・剥離して調整不明		外面: 5YR2/6 ~2.5YR5/6 内面: 2.5YR5/6	ふつう	風化激しく図示不能
					外面: 5YR2/6 ~2.5YR5/6 内面: 5YR4/6 ~10YR6/3	良好	三段目(?)にヘラ記号。
16 青角	三段目以上	筋(口縫) (28.0) (突出部) 26.8 タガ(下底) 2.0 (上底) 1.2 (高さ) 0.8	外面: ヨコハケ(△僅? 5本/cm) 内面: 縦から斜め方向の強いナダ? 目中から右縫部(△僅? 2本/cm) ナダ?	1mmだからそれ以下の長石・石 英粒を多く。1~3mmの大赤褐色 粒をまばらに含む。暗褐色 粒も少し含む。	外面: 5YR6/6 ~7.5YR7/6 内面: 5YR4/6 ~10YR6/3	良好	三段目にヘラ記号。
17 青角	三段目以上?	筋(口縫) 24.0 タガ(下底) 2.0 (上底) 1.2 (高さ) 1.5	風化により外表面とも調整不明。	1mmからそれ以下の長石・石 英粒多量。1~3mmの大赤褐色 粒比較的多い。	外面: 6.25YR6/6 内面: 7.5YR6/8	ふつう	三段目にヘラ記号。
18 円角	三段目以上	筋(口縫) (33.0) (突出部) 29.0 タガ(下底) 2.0 (上底) 1.0 (高さ) 0.7	外面: ヨコハケ(△僅? 5本/cm)タガ、 縫跡周辺ヨコナダ? 内面: 口縫斜め方向のハケメ(5本/ cm)、三段目以下のハケメナダ? ナダ?	1mmからそれ以下の長石・石 英粒多い。1~3mmの大赤褐色 粒をまばらに含む	外面: 7.5YR6/6 ~5YR6/6 内面: 7.5YR7/4 ~5YR6/6	良好	
19 円角	三段目以上	筋(口縫) (28.5) (突出部) 25.4 タガ(下底) 2.0 (上底) 0.7 (高さ) 0.8	外面: 風化のために調整不明 内面: 口縫斜め方向のハケメ(5本/cm) 三段目以下、風化のために不透明だが、 ナダと見われる凹凸が認められる。	1mm以下から2mmの大長石・石 英粒多く。1~3mmの大赤褐色 粒をまばらに含む。	外面: 7.5YR7/6 ~8.75YR7/4 内面: 10YR7/2 ~10YR6/6	ふつう	
20 円角	三段目以上	筋(口縫) (31.0) (突出部) 29.6 タガ(下底) 1.8 (上底) 0.8 (高さ) 0.9	外面: ヨコハケ(△僅? 11~12本/cm) 内面: 風化のために調整不明	1mmからそれ以下の長石・石 英粒多い。1~3mmの大赤褐色 粒多く含む。	外面: 7.5YR5/3 ~7.5YR6/6 内面: 10YR3/2 ~10YR7/4	ふつう	
21 鶴頭形	三段目以上	筋(口縫下端) (35.0) (突出部) 33.5 タガ(下底) 1.6 (上底) 1.3 (高さ) 0.9	外面: 頭部ヨコハケ(△僅? 5本/cm)、 肩部斜め方向(△僅? 5本/cm)。口縫 跡タガメ(5本/cm) 内面: 風化により不透明だが、 頭部に斜め方向のハケメが観察できる。	1mm以下から3mmの大長石・石 英粒多い。1~3mmの大赤褐色 粒をまばらに含む。 暗赤褐色も含む。	外面: 7.5YR7/6 ~10YR8/2 内面: 10YR4/6 ~10YR7/2	ふつう	
22 円角	三段目以上	筋(口縫) 28.8 タガ(下底) 1.5 (上底) 0.8 (高さ) 0.5	外面: タテハケ(5本/cm)後ヨコハケ(△ ~5本/cm)。タガ周辺ヨコナダ? 内面: 斜め方向のハケメ(5本/cm)。タガ 裏面はナダ?	1mm以下から2mmの大長石・石 英粒多く含む。1~3mmの大 赤褐色をまばらに含む。	外面: 7.5YR8/4 ~5YR6/4 内面: 8.75YR7/4	ふつう	三段目にヘラ記号。 三段目に透かし孔あり。
23 円角	三段目以上	筋(口縫) (30.0) (突出部) 27.7 タガ(下底) 1.8 (上底) 0.8 (高さ) 0.7	風化のため不透明内外とも調整不明。	1mm以下から2mmの大長石・石 英粒多く含む。1~3mmの大 赤褐色をまばらに含む。	外面: 7.5YR6/6 ~6.25YR7/6	良好	三段目に透かし孔あり。
24 円角	三段目 以上?	筋(口縫) 28.6 タガ(下底) 2.5 (上底) 1.3 (高さ) 1.0	外面: タテハケの後ヨコハケ(△僅? 5本/ cm)。タガ周辺ヨコナダ? 内面: 斜め方向(△僅? 5本/cm)に 含まれる。	1mm以下の長石・石英粒多い。 1~3mmの大赤褐色をまばら に含む。	外面: 5YR8/4 内面: 5YR8/4	ふつう	頭部? にヘラ記号
25 円角	三段目以上	筋(口縫) (30.0) (突出部) 22.5 タガ(下底) 1.5 (上底) 0.8 (高さ) 1.0	外面: ヨコハケ(△僅? 4~10本/cm)。タ ガ、口縫周辺切ヨコナダ? 内面: 斜め方向のハケメ(9~10本/ cm)。タガ周辺ヨコナダ?	1mm以下の長石・石英粒多い。 1~3mmの大赤褐色をまばら に含む。	外面: 6YR7/4 ~5YR5/4 内面: 7.5YR6/6	ふつう	外面(部位不明)にヘラ 記号の前と思われる 縹々伏れ。
26 円角		筋(口縫) (32.2) (突出部) 29.0 タガ(下底) 2.5 (上底) 1.3 (高さ) 0.9	外面: 基底部タテハケ(6本/cm)。二段目 以上はタテハケ(6本/cm)後ヨコハケ(△ ~5本/cm)。原体幅約7cm。タ ガ周辺ヨコナダ?	1mm以上の長石・石英粒を多く 含む。1~3mmの大赤褐色を まばらに含む。	外面: 5YR6/6 ~7.5YR7/6 内面: 5YR6/8	ふつう	検出状況で実測。三段 目にヘラ記号、透かし 孔あり。二段目には透 かし孔は認められない。
27 鷹形	基部~ 肩部下部	筋(基底部) (突出部) 18.9 筋部幅 タガ(下底) 2.0 (上底) 0.8 (高さ) 0.6	外面: 風化のため調整不明。頭部が剥離 した後にヨコハケ(△僅? 5本/cm)が 残る。1~3mmの大赤褐色を まばらに含む。横方向の 沈縫2条。横縫の沈縫2条からか つに向かって左側の沈縫2条が左右 それぞれ1本存在する。ほぼ中央に 斜め方向の沈縫1条がある。 内面: 調整不明	1mm以下から2mmの大長石・石 英粒を多量に含む。2~3mm大 の赤褐色やや多く含む。	外面: 7.5YR7/8 ~7.5YR7/6 内面: 7.5YR7/6	ふつう	検出状況で実測。三段 目にヘラ記号、透かし 孔あり。正面に、2段目後ろよ りに2の透かし孔あり。
	東部左側 腰?		外面: 縦一斜め方向のハケメ(5本/cm)。 左端に沈縫1条、左上がりの沈縫2 条。		外面: 5YR6/6 内面: 7.5YR7/6 ~8YR7/6	ふつう	右側縫跡やや上寄りの破 片である可能性あり。
	東部左上部		内面: 風化のため調整不明。		外面: 2.5YR6/6 内面: 6.25YR7/6	良好	
			外面: 頭方街のハケメ(5本/cm)。左端に 沈縫1条、上端に沈縫2条。左上角 から右上がりの沈縫2条。				
			内面: 風化のため不明。				

第IV章 遺物

番号	部位	量 (単位: cm)	調査	紹介	色調	地成	備考
27	面部 顎部上端		外面：縦方向のハケメ(5cm/cm)、上端面、面部から約5cmの幅でヨコナデ。上面を多量に含む。面部に沈殿痕。	1cm以下から2cm大の長石・石英粒を多く含む。	外面：2.5VIB/6 内面：7.5YET/8	良好	
	部位不明		外面：横～斜め方向のハケメ(5cm/cm)、上端部ナデ。内面：ナデ?	1cm以下の長石・石英粒、1~3cm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面：SYR7/4 内面：2.5YET/6	良好	面部面部に類似するが、面積を大きく。面部の凹縫部等では平滑な壁片。 図27-④
	部位不明		風化のため内外面とも調整不明。	1cm以下の長石・石英粒、1~3cm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面：7.5YET/6 内面：SYR7/4 ~2.5YET/8	良好	面部面部に類似するが、面積を大きく。面部の凹縫部等では平滑な壁片。 面部骨質、あるいは青等の遺物か？粘土後合灰を塗装色調変化。 図27-⑤
28	円筒	三段目以上 (検出面) (32.0) (検出面) 32.0 タガ(下底) 2.0 (上底) 0.8 (高さ) 0.8	外面：ヨコハケ(C種・5cm/cm)。口縫部、両端ヨコナデ。 内面：風化により不明。三段目以下観方のナデ？	1cm大からそれ以下の長石・石英、1~3cm大の赤褐色を多く含む。	外面：7.5YET/6 ~10YET/2 内面：7.5YET/4 ~10YET/3	ふつう	三段目に通かしもあり
29	円筒	三段目以上 (検出面) 30.1	外面：風化のため不明瞭だが、ヨコハケの痕跡が確認できる。 内面：口縫部による方向のハケメ。他は風化のため不明。	1cm以下の長石・石英粒を多く含む。1~3cm大の赤褐色粒を多く含む。	外面：10YET/3 ~2.5YET/7 内面：7.5YET/3 ~7.5YET/5	ふつう	三段目に通かしもあり
30	円筒	三段目以上 (検出面) 33.2 タガ(下底) 2.1 (上底) 0.7 (高さ) 1.0	外面：ヨコハケ(C種？・5cm/cm)。口縫部。 (検出面) 28.9 タガ(下底) 2.6 (上底) 1.1 (高さ) 1.0	1cm以下からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3cm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面：5YET/6 内面：10YET/4	良好	30.31は新土・色調などよく類似しており、黒辺から出土した口縫部破片等はどちらの個体の方の区別か難い。 31に含まれた口縫部破片は、口縫部-2段目の片内面にわずかにハケメが認められることが判斷した。
31	円筒	三段目以上 (検出面) (30.3) (検出面) 28.9 タガ(下底) 2.6 (上底) 1.1 (高さ) 1.0	外面：ヨコハケ(C種？・5cm/cm)。口縫部。 (検出面) ヨコハケ、タガ周辺ヨコナデ。 タガ(下底) 2.6 (上底) 1.1 (高さ) 1.0	1cm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3cm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面：5YET/6 ~7.5YET/4 内面：10YET/4 ~7.5YET/4	ふつう	
32	円筒	口縫部 (口縫) (29.8) (検出面) 25.5 タガ(下底) 1.9 (上底) 0.9 (高さ) 0.8	風化のため調査不明。	1cm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3cm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面：8.5YET/6 ~10YET/6 内面：7.5YET/6 ~10YET/4	やや あまり	
33	細頸形	三段目以上 (検出面) 約20 タガ(下底) 1.8 (上底) 0.9 (高さ) 0.8	外面：瓶外部表面はヨコハケ(C種・5cm/cm)。口縫部等が風化のため調査不明。 内面：口縫部ナデ？三段目以下強いナデ。	1cm以下から2cm大の長石・石英粒を多く含む。1~3cm大の赤褐色粒を比較的多く含む。	外面：10YET/2 ~7.5YET/3 内面：7.5YET/4 ~9.5YET/5	良好	
34	円筒	三段目以上 (検出面) (28.2) (検出面) 約27 タガ(下底) 2.3 (上底) 1.0 (高さ) 1.0	外面：ヨコハケ(C種？・5cm/cm)。口縫部、タガ周辺ヨコナデ。 内面：口縫部ナデ？三段目以下強いナデ。	1cm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3cm大の赤褐色粒をまれに含む。	外面：5YET/4 ~7.5YET/6 内面：5YET/4 ~9.5YET/4	ふつう	
② 形象？	部位不明		背面：タテハケ(5cm/cm)、縦部ヨコナデ 内面：ナデ	1cm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3cm大の赤褐色粒をまばらに含む。	外面：5YET/5 内面：6.25YET/7.8	良好	埴輪20件近くから出土。畫形の笠置部、青色の縦縫部等に類似。
35	円筒	口縫部？ (検出面) 約26	外面：ヨコハケ(C種？・5cm/cm) 内面：ナデ？	1cm以下の長石・石英粒をやや多く含む。角窓部をまれに含む。1~3cm大の赤褐色粒をまれに含む。	外面：8.5YET/4 ~10YET/3 内面：10YET/4 ~10YET/2	良好	検出部分、取り上げ部分少ない。
36	円筒	三段目以上 (検出面) (29.5) (検出面) 30.9 タガ(下底) 2.2 (上底) 1.1 (高さ) 0.6	外面：ヨコハケ(C種・5cm/cm)。口縫部、タガ周辺ヨコナデ。 内面：口縫部上部横～斜め方向のハケメ(5cm/cm)、口縫部下部以下ナデ？	1cm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3cm大の赤褐色粒をまれに含む。	外面：8.5YET/6 内面：8.5YET/4	良好	三段目に通かしもあり。
37	円筒	三段目以上 (検出面) (29.5) (検出面) 28.0 タガ(下底) 2.1 (上底) 1.3 (高さ) 0.8	外面：タテハケ後ヨコハケ(C種・5~6cm/cm)。口縫部、タガ周辺ヨコナデ。 内面：口縫部横～斜め方向のハケメ(5cm/cm)、口縫部下部以下ナデ？	1cm以下から2cm大の長石・石英粒を多く含む。1~3cm大の赤褐色粒をまれに含む。	外面：5YET/6 ~10YET/3 内面：7.5YET/3 ~7.5YET/4	良好	三段目に通かしもあり。
38	円筒	三段目以上 (検出面) (27.2) (検出面) 26.2 タガ(下底) 2.5 (上底) 1.0 (高さ) 1.5	外面：ヨコハケ、タガ周辺にヨコナデ 内面：斜め方向のハケメ (全体に風化強く不明瞭)	1cm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3cm大の赤褐色粒をまれに含む。	外面：6.25YET/6 内面：5YET/3	良好	三段目に通かしもあり。
39	壺形	基部～肩部 肩部 肩部側縫 不明 背部？ (裏角？)	外面：タテハケ(5cm/cm)後ヨコハケ(C種？・5cm/cm) 内面：ナデ 外面：縦方向のハケメ(5cm/cm) 内面：横～斜め方向のナデ 外面：ナダ？ 内面：ナダ	1cm大からそれ以下の長石粒を多く含む。1cmの石英粒をまばらに含む。背部破片には1~3cm大の赤褐色粒をまれに含むものもある。	外面：2.5YET/8 内面：5YET/6 外：5YET/6 内：2.5YET/6 外：3.75YET/6 ~3.75YET/4 内：2.5YET/5 外：3.75YET/6 内：3.75YET/6	やや あまり	通かしもあり(部位不明)。 図39-④
40	円筒	口縫部 (口縫) (31.3) (検出面) 30.0 タガ(下底) 1.8 (上底) 1.1 (高さ) 0.9	外面：ヨコハケ(C種？・5cm/cm)、口縫部ヨコナデ。 内面：横～斜め方向のハケメ(5cm/cm)	1cm以下の長石・石英粒を多く含む。1~2cm大の赤褐色粒をまれに含む。	外面：2.5YET/6 内面：2.5YET/4	良好	外に雨打れ状の小穴多數。 図39-⑤

部位	部位	位置	測定 (単位:cm)	測定	脚上	色調	度数	備考	
41	円筒	三段目以上	径(口径) (32.3) (横幅) (30.0) タガ(下底) (1.7) (上底) (1.0) (高さ) (0.8)	外側: ヨコハケ(C種・5本/cm)、口縁部 内側: ヨコハケ(C種・5本/cm)、口縁部 タガ(下底) (1.7) (上底) (0.9) (高さ) (0.8)	外側: ヨコハケ(C種・5本/cm)、口縁部 内側: ヨコハケ(C種・5本/cm)、口縁部 タガ(下底) (1.7) (上底) (0.9) (高さ) (0.8)	1mm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3mmの大赤褐色粒をまれに含む。	外側: 6.25TR7/6 内側: 5TR8/6 ~7.5TR6/3	良好	三段目に通かし穴あり
42	円筒	口縁部	径(口径) (31.6) (横幅) (29.3) タガ(下底) (1.7) (上底) (0.9) (高さ) (0.8)	外側: 口縫部、横~斜め方向のハケメ(一 次調整) (5本/cm)。口縁部周辺ヨコ ナデ。	外側: 口縫部、横~斜め方向のハケメ(一 次調整) (5本/cm)。口縁部周辺ヨコ ナデ。	1mm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3mmの大赤褐色粒をまれに含む。暗褐色も含む。	外側: 7.5TR7/6 ~10TR8/2 内側: 7.5TR7/4 ~7.5TR6/3	良好	
43	円筒	三段目以上	径(口径) (32.0) (横幅) (30.0) タガ(下底) (2.2) (上底) (1.1) (高さ) (1.0)	外側: タテハケ(B種・5本/cm)後ヨコハケ(C 種・4?本・原本幅5cm)上。口 縁部周辺ヨコナデ。	外側: タテハケ(B種・5本/cm)後ヨコハケ(C 種・4?本・原本幅5cm)上。口 縁部周辺ヨコナデ。	1mm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3mmの大赤褐色粒をまれに含む。	外側: 10TR7/4 ~2.5TR7/2 内側: 2.5TR7/6 ~6TR7/6	あまい	
44	円筒	口縁部	径(口径) (32.6) (横幅) (28.0) タガ(下底) (2.3) (上底) (1.2) (高さ) (0.8)	外側: ヨコハケ(C種・5本/cm) 内側: ナデ?	外側: ヨコハケ(C種・5本/cm) 内側: ナデ?	1mm大からそれ以下の長石・石英粒を多く含む。1~3mmの大赤褐色粒をまれに含む。	外側: 8.75TR7/3 内側: 10TR7/3	良好	口縫部付近にわずかに赤色顔料残存。内側は も一部付着。口縫部背面にヘラ記号
45	直頭形	三段目以上	径(横幅) (30.8) タガ(下底) (1.6) (上底) (0.6) (高さ) (1.0)	風化のため内外面とも調整不明	風化のため内外面とも調整不明	1mm以下~2mm大的長石・石英粒を多く含む。(1~2mmの大赤褐色粒の 目立つ)。1~3mmの大赤褐色粒を 多く含む。	外側: 7.5TR7/6 ~7.5TR7/6 内側: 7.5TR8/4	ふつう	
46	円筒	三段目以上	径(口径) (27.0) (横幅) (28.0) タガ(下底) (2.3) (上底) (1.2) (高さ) (0.8)	外側: タテハケ後ヨコハケ (C種・4~5 本/cm)タガ周辺ヨコナデ。	外側: タテハケ後ヨコハケ (C種・4~5 本/cm)タガ周辺ヨコナデ。	1mm以下の長石・石英粒多い。 1mm以下~3mm大的赤褐色・紫 色粒を多く含む。	外側: 7.5TR6/6 内側: 10TR7/3	良好	後出面には本来の位置 を保った破片なし。
47	円筒	口縁部	径(横幅) (29.8)	風化のため内外面とも調整不明	風化のため内外面とも調整不明	1mm以下の長石・石英粒多い。1~3mm大的赤褐色粒をまれに含む。	外側: 6.25TR8/6 内側: 7.5TR8/6	ふつう	
48	円筒	口縫部?	径(側面) (28.6) タガ(下底) (0.9) (上底) (0.9) (高さ) (0.8)	外側: ヨコハケ (C種・5本/cm) 内側: 風化のため不明	外側: ヨコハケ (C種・5本/cm) 内側: 風化のため不明	1mm大からそれ以下の長石・石 英粒を多く含む。1~3mm大的 赤褐色粒をまれに含む。	外側: 5TR8/5 内側: 7.5TR7/6	ふつう	ヘラ記号あり。
49	円筒	口縫部	径(後出面) (23.2)	風化のために内外面とも調整不明。	風化のために内外面とも調整不明。	1mm大からそれ以下の長石・石 英粒多い。(赤茶粒自立)。1~ 3mm大的赤褐色粒をまれに含 む。	外側: 6.25TR8/6 内側: 5TR8/4	あまい	
50	円筒	底(側面出) (31.6) (基底部) (21.9) タガ(下底) (1.8) (上底) (0.7) (高さ) (1.0) 最下段タガ (下底) (1.7) (上底) (1.2) (高さ) (0.7)	外側: 一次調整タテハケ(4本/cm)、後ヨ コハケ(C種・4~5本/cm・赤茶粒 10cm)、基底部周囲のケズリ(半 径2~2.5cm)。タガ周辺ヨコナデ 内側: 三段目、斜め方向のハケメ(4~6 本/cm)の後ナデ	外側: 一次調整タテハケ(4本/cm)、後ヨ コハケ(C種・4~5本/cm・赤茶粒 10cm)、基底部周囲のケズリ(半 径2~2.5cm)。タガ周辺ヨコナデ 内側: 三段目、斜め方向のハケメ(4~6 本/cm)の後ナデ	1mm以下の長石・石英粒多い。 1~3mm大的赤褐色粒をまれに含 む。	外側: 6.25TR5/6 ~7.5TR7/6 内側: 5TR8/6 ~7.5TR8/5	良好	検出状態で実測。二段 目、三段目に通かし穴 あり。最下段タガが貫 圧接法。	
51	壺形	基底部～ 二段目	径(側面出) (20.4) (基底部) (22.0) タガ(下底) (2.2) (上底) (1.0)	外側: タテハケ(5本/cm)後ヨコハケ(C 種・6本/cm)。二段目に底部合板後 と思われるハケメの条糸繊維。	外側: タテハケ(5本/cm) 内側: ナデ?	1mm大からそれ以下の長石・石 英粒多い。暗褐色粒も少量含む。	外側: 2.5TR5/8 ~2.5TR4/6 内側: 5TR4/6 ~5TR4/8	あまい	既存状態が非常に悪く 壺底全面崩壊。基底部に 通かし穴なし。回51- ⑤
		壺部?		外側: タテハケ(5本/cm) 内側: ナデ?			外側: 2.5TR5/8 内側: 3.75TR5/4.	あまい	回51-①
		壺部側壁		風化・剥離により不明瞭。壺部から内面 にかけてナデ			外側: 2.5TR5/4 内側: 2.5TR5/4	あまい	回51-③
		肩部?		外側: 風化により不明瞭。内面・ナデ			外側: 2.5TR5/6 内側: 10TR4/5 ~10TR4/4	あまい	回51-④
		肩部側壁		外側: 風化により不明瞭。内面・ナデ			外側: 2.5TR5/5 内側: 10TR5/5	あまい	外側は風化による凹凸 が激しく、本来と並 べている面と思われる。 回51-①
52	円筒	三段目	径(側面出) (29.6) (基底部) (23.0) タガ(下底) (2.3) (上底) (1.0) (高さ) (1.0)	外側: 風化のため不明瞭だが、タテハケ 後ヨコハケか? 基底部絞りのケズ リ	外側: 風化のため不明瞭だが、タテハケ 後ヨコハケか? 基底部絞りのケズ リ	1mm大からそれ以下の長石・石 英粒多い。1~3mm大的赤褐色 粒をまれに含む。	外側: 7.5TR8/6 ~5TR8/6 内側: 7.5TR8/6	ふつう	後出状況で実測
53	円筒	三段目 以上?	径(側面出) (26.0)	外側: 風化および縮出、垂り上げ部分が 少ないため調整不明	外側: 三段目、風化により不明	1mm以下の長石・石英粒やや多 い。3mm大的石英を主に含む。1~ 3mm大的赤褐色粒をまれに含 む。	外側: 5TR8/5 内側: 10TR2/6	良好	回51-不
54	円筒	三段目以上	径(側面出) (23.0) タガ(下底) (2.5) (上底) (0.5) (高さ) (1.2)	風化のため内外面とも調整不明	外側: 風化のため内外面とも調整不明	1mm以下の長石・石英粒多い。 1~3mm大的赤褐色粒をまれに含 む。	外側: 5TR8/6 ~8.75TR8/6 内側: 5TR8/7 ~5TR8/6	良好	三段目? へラ型号
55	円筒	三段目以上	径(側面出) (31.7) タガ(下底) (2.0) (上底) (1.2) (高さ) (1.2)	外側: タテハケ(5本/cm)の後ヨコハケ(C 種・5本/cm)。タガ周辺ヨコナデ。 内側: 斜め方向へのハケメ(5本/cm)。指 下?: に強いナデ?。口縫部内面はナ デ?	外側: タテハケ(5本/cm)の後ヨコハケ(C 種・5本/cm)。タガ周辺ヨコナデ。 内側: 斜め方向へのハケメ(5本/cm)。指 下?: に強いナデ?。口縫部内面はナ デ?	1mm大からそれ以下の長石・石 英粒多い。赤褐色粒は目立 ない。	外側: 10TR8/4 ~7.5TR6/6 内側: 10TR8/3 ~7.5TR6/4	良好	

番号	部位	断面	古量 (底位:cm)	測定	粒土	色斑	感成	備考
56 円筒	三段目以上	椎(側面)	2.6 (下底) 1.1 (上底) 0.8	外表面: タテハケヨコハケ(5種?・5本/cm) 内表面: 縦方向のハケメ	1mmからそれ以下の長石・石英を多量に含む。1~3mm大的赤褐色色粒をまれに含む。	外表面: 5187/4 内表面: ~5186/6 内面: 2.5185/8	良好	
57 球形	三段目以上	椎(側面)	28.8 (下底) 1.0 (上底) 1.0	風化のため内外面とも調整不明。タガ鋼 表面にタテハケ(5本/cm)が認められる。	1mmからそれ以下の長石・石英を多く含む。1~3mm大的赤褐色色粒をまばらに含む。	外表面: 5187/6 内表面: ~5186/8 内面: 6.25186/8	良好	
58 円筒	三段目以上	椎(側面)	29.0	外表面: ヨコハケ(5種・5本/cm) 内表面: 縦方向の強いナダ	1mmからそれ以下の長石・石英を多く含む。1~3mm大的赤褐色色粒をまばらに含む。	外表面: 5187/6 内表面: ~5187/4 内面: 5186/6 内面: ~5187/4	良好	
59 円筒	三段目以上	椎(検出面)	25.0	外表面: 黒化のため調整不明 内表面: 縦め方向のハケメ(5本/cm)、 一部ナダ	1mmからそれ以下の長石・石英を多く含む。1~3mm大的赤褐色色粒をまばらに含む。	外表面: 7.5186/8 内表面: 5186/8	ふつう	三段目に通かしもあり。
60 円筒	三段目	椎(検出面)	26.0	外表面: ヨコハケ(5種・8~14本/cm) 内表面: 縦・斜め方向のハケメ (4~6本/cm)	1mm以下の長石・石英・黒褐色 粒を多く含む。1~2mm大的赤褐色色粒をまばらに含む。	外表面: 8.75187/4 内表面: 8.75187/4 内面: ~8.75187/6	ふつう	三段目に通かしもあり。
61 円筒	三段目?	椎(検出面)	26.8	外表面: タテハケ後のヨコハケ(5種?5本/cm) 内表面: 縦・斜め方向のハケメ(5本/cm)、一部 ナダ	1mm以下の長石・石英含むが、赤褐色色粒 が少ない。赤褐色色粒立たない。	外表面: 5187/6 内表面: ~5187/8 内面: 5186/6	良好	
62 円筒	口縫部~ 三段目?	椎(検出面)	26.8 タガ(下底) 2.5 (上底) 1.0 (高さ) 1.0	外表面: ヨコハケ(5種・5本/cm) 内表面: 不明	1mmへそれ以下の長石・石英粒多 い。1mm程度の赤褐色色粒を まばらに含む。	外表面: 7.5185/6 内表面: 5186/8	ふつう	
63 箱形	箇部	椎(検出面) 新規編(検出面)	36.5	風化のため不明だが、検出部分薄剝離 してヨコハケ(5種・5本/cm)	1mmへそれ以下の長石・石英 粒多い。1~3mm大的赤褐色色粒 をまばらに含む。	外表面: 5187/6 内表面: ~5186/6 内面: 7.5187/6	ふつう	
	箇部			風化のため内外面とも調整不明。斜めの 色斑(6本?より)				小破片のため向き、部位等不明。図63-②
	箇部			風化のため内外面とも調整不明。8条の 約束の通りあり。				小破片のため向き、部位等不明。図63-③
64 円筒	三段目 以上?	椎(検出面)	30.5	外表面: タテハケ(5本/cm)後ヨコハケ(5 種・5~6 本/cm) 内表面: 斜め方向のハケメ(5本/cm)後ナ ダ	1mmへそれ以下の長石・石英 粒多い。赤褐色色粒含むが、目 立たない。	外表面: 8.75188/4 内表面: ~7.5187/3 内面: 7.5188/4 内面: ~7.5187/3	良好	
65 円筒	三段目 以上?	椎(検出面)	32.0	外表面: ヨコハケ(5種?・4~5本/cm) 内表面: ナダ	1mm以下の長石・石英粒を多 く含む。1~2mm大的暗赤褐色色 粒含まれて有り。	外表面: 7.5187/6 内表面: 5187/4	ふつう	
66 円筒	三段目?	椎(検出面)	28.1 タガ(下底) 2.2 (上底) 1.0 (高さ) 1.0	外表面: ヨコハケ(5種・5~7本/cm)。タガ 周辺ヨコナダ 内表面: 斜め方向のハケメ(5~7本/cm)。 タガ裏裏ナダ?	1mmへそれ以下の長石・石英 粒が多い。1~3mm大的赤褐色 色粒をまことに含む。	外表面: 5187/4 内表面: ~7.5187/4 内面: 7.5187/6 内面: ~7.5187/4	良好	外面上に赤色脚出わずかに残存。
67 円筒	口縫部~ 三段目?	椎(検出面)	29.5	風化により内外面とも調整不明 タガ(下底) 1.8 (上底) 0.8 (高さ) 0.7	1mmへそれ以下の長石・石英 粒が多い。1~3mm大的赤褐色 色粒比較的多い。	外表面: 5187/6 内表面: ~7.5186/6 内面: 7.5186/6	ふつう	
68 円筒	三段目	椎(検出面)	24.9	外表面: タテハケ(5~8本/cm)後ヨコハケ (5本より)5種?~8本/cm) 内表面: ナダ?	1mmへそれ以下の長石・石英 粒が多い。1~3mm大的赤褐色 色粒比較的多い。	外表面: 7.5188/4 内表面: ~7.5187/6 内面: 8.75186/6 内面: ~7.5187/4	ふつう	ヘラ記者、通かしもあり
69 球頭形	三段目?	椎(検出面)	27.2	風化のため内外面とも調整不明	1mmへそれ以下の長石・石英 粒が多い。1~3mm大的赤褐色 色粒まことに含む。	外表面: 7.5186/6 内表面: 7.5186/8	ふつう	朝顔形埴輪であること を示す破片は残されて いないが、位置的に は球頭形埴輪と考えら れる。
70 円筒	三段目?	椎(検出面)	27.7	風化のため内外面とも調整不明	1mmへそれ以下の長石・石英 粒が多い。1~3mm大的赤褐色 色粒をまことに含む。赤褐色色 粒多。	外表面: 5188/4 内表面: ~5187/6 内面: 5186/6 内面: ~7.5187/6	良好	
71 円筒	三段目?	椎(底面)	29.0	外表面: 風化のため不明瞭だが、5本/cm程 度のヨコハケと思われる	1mm以下の長石・石英粒多 い。赤褐色色粒をまれに含む。	外表面: 5186/4 内表面: ~5186/6 内面: 5186/4	ふつう	
72 円筒	口縫部~ 三段目	椎(底面)	33.6 (検出面) 30.7	外表面: タテハケ(5本/cm)後ヨコハケ(5 種・5本・原標記7cm?)。口縫 端部、タガ周辺ヨコナダ。	1mm以下の長石・石英粒多 い。赤褐色色粒をまことに含 む。	外表面: 5186/8 内表面: ~5186/4 内面: 6.25186/6	良好	
73 円筒	三段目?	椎(検出面)	27.5	風化のため内外面とも調整不明	1mmへそれ以下の長石・石英 粒多。1~3mm大的赤褐色色 粒まことに含む。	外表面: 2.5187/6 内表面: ~2.5186/6 内面: 6.25186/8 内面: ~6.25187/8	良好	
74 円筒	基底部以上	椎(検出面)	24.8	外表面: タテハケ(ヨコハケ原体と同じ?) タガ(底面) 2.0 (上底) 0.7 (高さ) 0.8	1mm以下の長石・石英粒多 い。タガ周辺ヨコナダ。基底部は 風化のため調査を観察できないが、 一概に縱方向のクズリハケの痕 跡と思われるものが認められる。	外表面: 5186/6 内表面: ~5185/4 内面: 5185/4 内面: ~8.75187/3	あまり	最下段タガに押抜技法
			23.0	(下底) 1.4 (上底) 1.4 (高さ) 0.5	内面: ナダ? 一部ナダに先づる死い ハケメが認められる。基底部は接合 部をよく残す。			

番号	部場	部位	工具 (単位:cm)	箇所	上部	色斑	度数	備考
③	脚場 影象	不明	タガ(下底) (上底) 0.9 (高さ) 1.1	外面部: タガ周辺ヨコナデ 内面部: 縦方向のハケメの後ナデ	1mm大~それ以下の長石・石英 粒が多い。	外面部: 2.5YR5/8 内面部: 2.5YR5/8	ふつう	
75	前頭	基底部	板(検出面) 28.0 (基底部) 26.3	外面部: 氷化のために調整不明。タガ剥離面 にタガハケ(5cm/cm)が認められる。	1mm以下から2mm大の長石粒多 く含む。2~3mmの大赤褐色粒 まばらに含む。	外面部: 7.5YR8/4 ~7.5YR7/8 内面部: 7.5YR7/8 ~7.5YR7/6	ふつう	検出状況で実測。
		唇部	板下除タガ (下底) 2.0 (上底) 0.7 (高さ) 0.9	氷化により内外面部とも調整不明。側縫隙 部に板状工具によるケズりに近いナデ。			偏綠線に沿って平行沈形三 条、縫合状と考えら れるが鮮綠色は氷化のた め見えない。図75-①	
		鼻部		氷化により内外面部とも調整不明			偏綠線に沿って蝶形紋と 考えられる平行沈形三 条。図75-②	
		眉器 (左上端)		氷化により内外面部とも調整不明			左側線、上鼻端に沿つて 縫合紋。図75-③	
76	両側	全	51.0 径(口徑) 32.4 (基底部) 24.6 タガ(下底) 2.0 (上底) 0.7 (高さ) 0.9	外面部: 一次調整タケハケ(5cm/cm)。二次 調整ヨコハケ(5cm/cm・原体幅約4cm)。 基底部に第二次調整済點。口縫 端部、タガ周辺ヨコナデ。 内面部: 口縫部、横方向のハケメ(5cm/cm)、 一部剥離圧痕部。三段目以下縫合 方向の奥深いナデ。口縫部・三段目・ 三段目二段目タガ周辺ヨコナデ。	1mm大~それ以下の長石・石英 粒が多い。1~3mmの大赤褐色粒 まれに含む。	外面部: 5YR7/6 ~7.5YR8/4 内面部: 7.5YR7/8 ~5YR6/5	良好	優乳状内歯土。口縫部に ヘラ記す。二段目、 三段目にそれぞれ2づ つ、交叉に透かし孔を もつ。
109	両側	基底部	板(基底部) 26.0	外面部: 縦方向のケズリ。 内面部: ナデ? 下端部に指壓痕底。	1mm大~それ以下の長石・石英 粒が多い。	外面部: 5YR6/8 内面部: 7.5YR6/6	良好	76と同一の優乳状内に 基底部約1/3周程度残 在。
107	両側	全	50.0 径(口徑) 34.0 (基底部) 25.5 タガ(下底) 1.9 (上底) 0.7 (高さ) 0.7	外面部: 一次調整タケハケ(5cm/cm)。二次 調整ヨコハケ(5cm/cm・原体幅約4cm)。 基底部に第二次調整済點。 内面部: 口縫部、横方向のハケメ(5cm/cm)、 一部剥離圧痕部。三段目以下縫合 方向の奥深いナデ。口縫部・三段目二 段目タガ周辺ヨコナデ。	1mm以下の大長石多い。石英粒は 目立たない。1~3mmの大赤褐色 粒まれに含む。	外面部: 5YR7/4 ~6.25YR6/4 内面部: 7.5YR6/8 ~7.5YR5/6	良好	優乳状内歯土。107は優 乳状内に基底部約1/2 周程度残在。二段目、 三段目各2つずつ交叉に 透かし孔をもつ。外面部 にわずかに赤色顔料残 存。
111	側頭部	口縫部・ 二~三段目	径(二~三段目) (77.8) タガ(下底) 1.8 (上底) 0.8 (高さ) 0.9	外面部: タガハケ(5cm/cm)後ヨコハケ(5cm/ cm)。タガ周辺ヨコナデ。 内面部: 1段目以下、縫合方向の板状工具に よるナデ。2段目以上横・斜め方向 の板状工具によるナデ。 口縫部、氷化により調整不 明。	1mm以下の大長石多い。石英粒は 目立たない。1~3mmの大赤褐色 粒まれに含む。	外面部: 2.5YR7/4 ~5YR7/4 内面部: 5YR7/6	ふつう	外面部ヘケメ条縫内、タ ガ下端などに赤色顔料 比較的面積に多く残存。 三段目にヘア記号あり。
106	両側	三段目以上	径(口徑) 28.0 (前側面) 25.5 タガ(下底) 2.0 (上底) 0.8 (高さ) 0.7	外面部: 口縫部、タガハケ(7~8cm/cm)後 ヨコハケ(5段・10cm・板厚1mm)。タガ周辺ヨ コナデ。内面部: 1段目以下、縫合方向の板状工具 によるナデ。2段目以上横・斜め方向 の板状工具によるナデ。 口縫部、氷化により調整不 明。	1mm以下の大長石多い。石英粒は 目立たない。1~3mmの大赤褐色 粒まれに含む。	外面部: 10YR6/6 ~3.75YR6/6 内面部: 3.75YR6/6 ~5YR5/6	ふつう	ハケメ条縫内に赤色 顔料残存。
77	両側	径(検出面)	28.6 (基底部) 25.1 最下段タガ (下底) 2.2 (上底) 0.8 (高さ) 0.8	外面部: 一次調整タケハケ(5cm/cm)。二段 目以上第二次調整ヨコハケ(5cm/cm・ cm・原体幅約11cm)。基底部第二次調整 済點。タガ周辺ヨコナデ。	1mm以下の大長石多い。 1~3mmの大赤褐色粒 まれに含む。	外面部: 10YR7/6 ~10YR7/4 内面部: 7.5YR6/6 ~10YR7/6	良好	検出状況で実測。二段 目に透かし孔。
78	両側	口縫部・ 三段目付近	29.5 (基底部) 22.5 最下段タガ (下底) 2.5 (上底) 1.0 (高さ) 0.7	外面部: 一次調整タケハケ(4cm/cm)。二 段目以上第二次調整ヨコハケ(5cm/cm・ cm・原体幅約9cm)。三段目は一部にB タガ周辺ヨコナデ。	1mm以下の大長石・石英粒を含む。 1mm以下の大赤褐色 粒まれに含む。	外面部: 7.5YR8/4 ~7.5YR7/3 内面部: 7.5YR7/6	良好	検出状況で実測。二段 目に透かし孔。
79	両側	三段目 以上?	径(検出面) 27.4	外面部: ヨコハケ (5~6cm/cm)。 内面部: ナデ	1mm以下の大長石を含む。1~2 mmの大赤褐色粒、暗赤色をま ぶらに含む。	外面部: 5YR6/6 内面部: 5YR7/6	良好	取り上げは解片散在の み。
80	両側	三段目 以上?	径(検出面) 26.2	氷化のため内外面部とも調整不 明。	1mm以下からそれ以下の長石・石英 粒が多い。石英粒やや多く含む。2~3 mmの大暗赤褐色粒をまばらに 含む。	外面部: 2.5YR7/8 内面部: 5YR7/6 内面部: 2.5YR6/8	ふつう	
81	前頭	翼部破片?	径(検出面) 27.0	外面部: ヨコハケ (5~6cm/cm)。 内面部: 橫方向の工具によるナデ。	1mm~それ以下の長石・石英 粒が多い。	外面部: 8.75YR8/4 ~8.75YR7/4 内面部: 6.25YR7/4	良好	位置的には前頭領域に 当たるが、前頭領域で あることを示すものは ない。調整・色調・構 成なども他の他の頭部 領域よりは、四頭領域のものに近い。
82	両側	三段目以上	径(後出面) 29.3	氷化のため内外面部とも調整不 明。	1mmからそれ以下の長石・石 英粒多い。2~3mmの大赤褐色 粒まばらに含む。	外面部: 5YR5/8 ~2.5YR6/6 内面部: 10YR6/6 ~2.5YR7/6	ふつう	三段目に透かし孔あり。
83	両側	三段目以上	径(後出面) 27.0 ~30.0	外面部: ヨコハケ (0種・5~6cm/cm)、重複 してヨコハケ (5種・4~5cm/cm)が存 在するよう。 内面部: 縦から斜め方向のハケメ (5~8cm/ cm)。部分的にナデ?	1mm以下の大長石・石英粒多い。 1mm以下の大赤褐色粒まれに含 む。	外面部: 3.75YR7/8 内面部: 5YR7/8 内面部: ~2.5YR7/8	良好	三段目に透かし孔あり。 透かし孔がやや大きい。

番号	形態	部位	位置 (奥行き:cm)	説明	出土	色調	地成	備考
84	円筒	三段目	後(後出面) 25.2	外面: ヨコハケ(C種?・5本)。 内面: ナデ?	1m以下の中石柱。1m以上の長石。英・赤褐色粒をやや多く含む。	外面: 1.25R7/6 内面: 10R5/8	ふつう	三段目に透かしもあり。
85	円筒	三段目	後(後出面) 29.0	外面: ヨコハケ(C種・5本/cm) 内面: 縦方向の強いナデ	1m以下の中石柱含む。1~3mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 5R7/6 内面: ~5R7/8	良好	外面に赤色顔料残存。
86	円筒	三段目?	後(後出面) 28.2	外面: ヨコハケ(C種・5本/cm) 内面: 縦方向のハメケ(5本/cm)	1mからそれ以下の長石・石英をやや多く含む。	外面: 2.5R7/6 内面: 2.5R7/6 内面: ~5R7/8	良好	
87	朝楕形	三段目以上?	後(後出面) 30.0	黒化のため内外面とも調整不明。	1mからそれ以下の長石・石英多い。	外面: 6.25R7/6 内面: 5R7/6	良好	位置的には楕形に当たるが、日焼跡へ頂部の繊維は不明。
88	円筒	三段目以上	後(後出面) 27.8	外面: タテハケ(5本/cm)。後ヨコハケ(C種・5本/cm)。 内面: ナデ?	1mからそれ以下の長石・石英や多く含む。1~3mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 6.25R7/6 内面: 6.25R7/6 内面: ~5R7/8	良好	
89	円筒	三段目以上	後(後出面) 25.3	外面: タテハケ後ヨコハケ(C種・6~7本/cm)。 内面: 斜め方向のハメケ(5本/cm)	1m以下~2mmの大長石・石英を含む。赤褐色粒をばらに含む。	外面: 6.25R7/6 内面: 5R7/6	良好	三段目に透かし記号。外面に赤色顔料残存。
90	円筒	三段目以上	後(後出面) 30.6	外面: タテハケ(5本/cm)後ヨコハケ(C種・5本/cm) 内面: ナデ?	1m以下の中石柱。暗赤褐色外壁を含む。	外面: 7.5R7/4 内面: 7.5R8/6	良好	
91	円筒	三段目以上	後(後出面) 29.2	外面: ヨコハケ(C種・5本/cm)後ヨコハケ(C種・5本/cm) 内面: ナデ?	1m以下~2mmの大長石・石英や多く含む。1~3mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 2.5R7/6 内面: 2.5R7/6 内面: ~5R7/8	良好	三段目に透かしもあり。
92	円筒	三段以上	後(後出面) 34.2	外面: タテハケ(5本/cm)後ヨコハケ(C種・5本/cm) 内面: ナデ?	1m以下の長石・石英や多粒を含む。2~3mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 5R7/6 内面: 5R6/6 内面: ~5R7/8	良好	三段目に透かしあり。
93	扇形?	面部破片	後(後出面) 26.3	外面: ヨコハケ(C種?・5本/cm)。 タガ(下底) 1.0 内面: 黒化のため調整不明。	1mからそれ以下の長石・石英含む。1~3mmの大長石・石英を含む。	外面: 8.75R7/6 内面: 8.75R7/7 内面: 7.5R7/6 内面: ~5R7/8	良好	位置的には扇形埴輪だが、扇形埴輪であることを示すものは存在しない。
94	円筒	三段目以上	後(後出面) 25.0	外面: タテハケ(7~8本/cm)後ヨコハケ(C種?・7~8本/cm)。 タガ(下底) 2.6 (上底) 0.8 (高さ) 1.0	1mからそれ以下の長石・石英含む。1~3mmの大赤褐色粒を比較的多く含む。	外面: 2.5R7/2 内面: 2.5R7/6 内面: ~3.75R7/6	ふつう	
95	円筒	三段目以上	後(後出面) 36.8	外面: ヨコハケ(10~12本/cm)。タガ(下底) 2.2 (上底) 0.7 (高さ) 0.9	1m以下から2mmの大長石・石英含む。1~3mmの大赤褐色粒を比較的多く含む。	外面: 5R7/6 内面: 5R7/6 内面: ~5R7/8	良好	
96	円筒	三段目以上	後(後出面) 28.0	外面: タテハケ(4本/cm)後ヨコハケ(C種・4本/cm)。 タガ(下底) 2.4 (上底) 1.2 (高さ) 1.0	1mからそれ以下の長石・石英含む。1~3mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 10R6/6 内面: 2.5R6/6 内面: 2.5R6/6 内面: ~2.5R6/8	ふつう	三段目に透かしあり。
97	円筒	三段目以上	後(後出面) 30.2	外面: ヨコハケ(C種・5本/cm)。タガ(下底) 2.2 (上底) 1.0 (高さ) 1.0	1mからそれ以下の長石・石英含む。1~3mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 6.25R7/4 内面: 5R7/6 内面: ~5R7/8	良好	
98	円筒	三段目以上	後(後出面) 32.4	外面: ヨコハケ(C種?・5本/cm)。タガ(下底) 2.2 (上底) 1.4 (高さ) 1.0	1mからそれ以下の長石・石英含む。2~3mmの大赤褐色粒を比較的多く含む。	外面: 2.5R7/6 内面: 2.5R7/6 内面: ~2.5R7/8	ふつう	位置的には朝楕形だが、口縁部へ頂部の破片は存在しない。円筒埴輪に比べ壁厚が厚い。
99	朝楕形	三段目以上	後(後出面) 36.0	外面: ヨコハケ(C種?・5本/cm)。タガ(下底) 1.8 (上底) 0.7 (高さ) 0.6	1m以下の中石柱。2~3mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 5R7/6 内面: 5R7/6 内面: ~5R7/8	良好	
100	円筒	三段目以上	後(後出面) 36.0	外面: ヨコハケ(C種・4~5本/cm)。タガ(下底) 1.8 (上底) 0.7 (高さ) 0.6	1m以下の長石・石英粒多い。1~2mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 5R7/6 内面: 5R7/6 内面: ~2.5R6/6	ふつう	
101	円筒	三段以上	後(後出面) 36.3	外面: ヨコハケ(C種?・8本/cm)。タガ(下底) 2.1 (上底) 1.2 (高さ) 0.9	1mからそれ以下の長石・石英多。2mmの大長石も立つ。1~3mmの大赤褐色粒をばらに含む。	外面: 2.5R6/6 内面: 10R5/6 内面: ~2.5R6/8	良好	
102	円筒	三段目以上	後(後出面) 28.4	外面: ヨコハケ(C種?5本/cm)、重複? タガ(下底) 2.0 (上底) 1.3 (高さ) 0.8	1mからそれ以下の長石・石英多。1~3mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 2.5R6/6 内面: 2.5R6/6 内面: ~5R7/6	良好	
103	円筒	段目以上	後(後出面) 28.8	外面: ヨコハケ(5本/cm)後ヨコハケ(重複?) タガ(下底) 2.3 (上底) 1.0 (高さ) 0.8	1m以下の長石・石英含む。停止開闢1~3cm。タガ周辺ヨコナデ。	外面: 7.5R7/6 内面: 7.5R6/6 内面: ~5R7/6	ふつう	赤色顔料一部に残存。口縁部(?)にヘラ記号あり。
104	円筒	三段目以上	後(後出面) 29.4	外面: 黒化のため透明だが、ヨコハケ(C種?・5本/cm) タガ(下底) 1.8 (上底) 0.8 (高さ) 0.6	1m以下の長石柱多い。1~3mmの大赤褐色粒をまばらに含む。	外面: 2.5R7/6 内面: 2.5R7/6 内面: 2.5R7/6	ふつう	
105	盾形	面部?	後(後出面) 32.5	外面: ヨコハケ(5本/cm)後ヨコハケ(重複?) タガ(下底) 2.3 (上底) 1.1 (高さ) 1.1	1mからそれ以下の長石・石英多量に含む。1mmの大赤褐色粒・明赤褐色粒をまばらに含む。透かし記号は認められる。内面はナデの痕跡と思われる凹凸が認められる。	外面: 6.25R7/6 内面: 6.25R7/6 内面: 6.25R7/6	ふつう	図105-①

南北	断面	部位	位置 (単位: cm)	調査	粒度	色調	塊成	構造
105	管部		頂部外層、タテハケ(4~5本/cm)。肩部 部から内面ナダ?	1cm以下~2mmの大長石・石英 粒多く含む。1cmの大明褐色 粒まばらに含む。	外: 2.5SYR7/8 内: 2.5SYR7/6	外: 2.5SYR7/8 内: 2.5SYR7/6	外: 2.5SYR7/8 内: 2.5SYR7/6	輪郭に沿って範囲方向の 化粧块。平行する平行 化粧3条。#105-(2)
			外面: タテハケ後ヨコハケ (C種?・6~7 本/cm) 内面: ナダ?	1cm大からそれ以下の長石・石英 粒多量に含む。1~5mm大の 暗赤褐色粒をまばらに含む。	外: 2.5SYR7/6 内: 2.5SYR7/6	外: 2.5SYR7/6 内: 2.5SYR7/6	106周辺層底灰出土 106に分離したが別個体 の可能性あり。#105-(2)	
			基底部	1cm以下~2mmの大長石・石英 粒多く含む。1~5mm大の 暗赤褐色粒を比較的多く含む。 暗赤褐色粒も含む。	外: 2.5SYR7/6 内: 2.5SYR7/6	外: 2.5SYR7/6 内: 2.5SYR7/6	ふつう	
106	円筒	三段目～ 基底部	径(基底部) 23.0 (ロ繩節付近) (29.8)	背面: 一次調整タテハケ (5本/cm)。基底 部の二ヶズレ位置のナダ? 2段目以上 はヨコハケ (C種?・5本/cm)と思わ れるが風化のため不明瞭。 下段タガ (下底) 2.5 (上底) 1.3 (高さ) 0.5 タガ(下底) 1.8 (上底) 0.5 (高さ) 0.8	1cm以下~2mmの大長石・石英 粒多く含む。ヨコハケ粒も含む。	外: 10R8/6 ~2.5SYR6/8 内: 2.5SYR7/6 ~2.5SYR6/8	外: 10R8/6 ~2.5SYR6/8 内: 2.5SYR7/6 ~2.5SYR6/8	ふつう 口縫部にヘラ記号があ るが、風化のため不明 瞭。三段目には透かし孔、 二段目には存在しない。
110	円筒	三段目～ 基底部	径(基底部) 23.0 最下段タガ (下底) 2.5 (上底) 1.4 (高さ) 1.1	背面: タテハケ (5~8本/cm) の後ヨコハ ケ (C種?・5~6本/cm)。基底部、一 部に縱方向のケズリ。下端部に横方 向工具ナダ。 内面: 細~斜め方向の塊ナダ。	1cm大からそれ以下の長石粒多 く含む。赤褐色粒も含む。	外: 2.5SYR7/8 ~5SYR6/8 内: SYR6/6 ~7.5SYR7/6	良好	複数坑内出土

表3 周溝出土壤輪観察表

番号	断面	部位	位置 (単位: cm)	調査	粒度	色調	塊成	構造
1	輪臘形	口縫部	径(口縫部下端) (34.0~36.5)	背面: 風化により調整不明。 内面: 横~斜め方向の(5本程度/cm)。 (風化度: 3)	1cm以下~2mmの大長石・石英 粒多く含む。赤褐色粒立たない。	外: 6.25SYR7/4 内: 6.25SYR7/6	外: 6.25SYR7/4 内: 6.25SYR7/6	やや 2と同一個体?
2	輪臘形	受部～翼部	径(翼部) (17.0~20.0)	背面: 風化により調整不明。肩部にす こかタグハケが見える。	1cm以下~2mmの大長石粒多 く含む。1cmの大赤褐色粒立たない。 2mm大の赤褐色粒立たない。	外: 6.25SYR6/6 内: 6.25SYR7/6	外: 6.25SYR6/6 内: 6.25SYR7/6	やや 2と同一個体?
3	輪臘形	口縫部 ～受部	径(口縫部下端) 約37	背面: タテハケ (5本/cm)。タガ周辺ヨコ ナダ? タガ(下底) 2.2 (上底) 1.1 (高さ) 1.2	1cm以下~2mmの大長石粒多 く含む。1~3mm大の赤褐色粒立たない。 赤褐色粒まばらに含む。	外: 10R8/2 ~10R8/3 内: SYR6/4	外: 10R8/2 ~10R8/3 内: SYR6/4	良好
4	輪臘形	口縫部 ～受部	径(口縫部下端) 約36	背面: 風化のため調整不明。 内面: 横~斜め方向のハケメ (5~10本/ cm)。	1cm以下~2mmの大長石粒多 く含む。1~2mm大の石英粒まれ、赤 褐色粒まばらに含む。	外: 6.25SYR7/8 内: 6.25SYR7/6	外: 6.25SYR7/8 内: 6.25SYR7/6	ふつう 5と同一個体?
5	輪臘形	翼部	径(頸部) 約20	背面: 調整不明。 内面: 調整不明。	1cm以下~2mmの大長石粒多 く含む。1~3mm大の赤褐色粒立たない。	外: 5YR7/6 ~2.5SYR8/6	外: 5YR7/6 ~2.5SYR8/6	4と同一個体?
6	輪臘形	受部	径(口縫部下端) (33.7)	背面: タガ周辺ヨコナダ。 内面: 横~斜め方向のハケメ (4本/cm)。	1cm以下~2mmの大長石・石英 粒多く。1~2mm大の赤褐色粒 立たない。	外: SYR7/3 ~5YR8/3	外: SYR7/3 ~5YR8/3	ふつう 7と同一個体?
7	輪臘形	翼部	径(頸部) (16.5~18.0)	背面: 風化のため調整不明。 内面: 風化のため調整不明。	1cm以下~2mmの大長石粒多 く含む。1~2mm大の赤褐色粒まれに含 む。	外: 5YR7/6 ~7.5SYR7/6	外: 5YR7/6 ~7.5SYR7/6	6と同一個体?
8	輪臘形	翼部	外	背面: 風化のため調整不明。タガ剝離。 内面: 斜め方向強ナダ、頸部圧痕あり。	1cm以下~2mmの大長石・石英 粒多く。1~3mm大の淡赤褐色 やや多い。	外: SYR8/4 ~6.25SYR7/6 内: SYR7/6 ~5.25SYR7/6	外: SYR8/4 ~6.25SYR7/6 内: SYR7/6 ~5.25SYR7/6	ふつう
9	輪臘形	翼部 ?	外	背面: 風化のため調整不明。 内面: 風化のため調整不明。	1cm大～それ以下の長石粒多 く含む。1~3mm大の赤褐色粒立た ない。	外: 10YR7/2 内: 10YR7/3	外: 10YR7/2 内: 10YR7/3	10、11と同一個体?
10	輪臘形	翼部 ?	外	背面: ヨコハケ (4本程度/cm)。 内面: 風化のため不明。斜めハケメ?	1cm大～それ以下の長石粒多 く含む。	外: 10YR7/3 内: 10YR7/4	外: 10YR7/3 内: 10YR7/4	9、11と同一個体?
11	輪臘形	翼部 ?	外	背面: 風化のため調整不明。 内面: 風化のため調整不明。	1cm大～それ以下の長石粒多 く含む。1~3mm大の赤褐色粒 立たない。	外: 10YR7/3 ~10YR7/2 内: 10YR7/3	外: 10YR7/3 ~10YR7/2 内: 10YR7/3	9、10と同一個体?
12	輪臘形	翼部～受部	外	背面: 風化のため調整不明。 内面: 風化のため調整不明。	1cm以下~2mmの大長石・石英 粒多く。1~3mm大の赤褐色粒 立たない。	外: SYR8/3 ~8.75SYR7/3 内: 7.5SYR7/2 ~5SYR8/2	外: SYR8/3 ~8.75SYR7/3 内: 7.5SYR7/2 ~5SYR8/2	13と同一個体?
13	輪臘形	口縫部～受 部	外	背面: 風化のため調整不明。 内面: 横~斜め方向のハケメ (5本/cm)。	1cm以下~2mmの大長石・石英 粒多く。1~3mm大の赤褐色粒 立たない。	外: 7.5SYR8/4 ~8.75SYR7/3 内: 8.75SYR8/3	外: 7.5SYR8/4 ~8.75SYR7/3 内: 8.75SYR8/3	12と同一個体?
14	円筒	三段目 ～基底部	径(基底部) (24.6) タガ(下底) 1.7 (上底) 0.9 (高さ) 0.7	背面: タテハケ (4~5本/cm) 後ヨコナダ (C種?・4~5本/cm)。基底部、横方 向工具ナダ?。タガ周辺ヨコナダ。 内面: 一次調整タテハケ (4~5本/cm)。 タガ周辺ヨコナダ。タテハケ (4 ~5本/cm) 後横～斜め方向のケズリ 又は強いナダ。	1cm大～それ以下の長石粒多 く含む。1~3mm大の赤褐色粒 立たない。	外: SYR8/3 ~7.5SYR7/4 内: SYR7/4 ~7.5SYR7/3 (基底部) 外: 7.5SYR7/2 ~7.5SYR7/4 内: 7.5SYR7/3	外: SYR8/3 ~7.5SYR7/4 内: SYR7/4 ~7.5SYR7/3 (基底部) 外: 7.5SYR7/2 ~7.5SYR7/4 内: 7.5SYR7/3	堅壁 外に赤褐色料残存。 透かし孔あり。

番号	部類	形態	古文 (単位: cm)	地質	出土	色調	説定	備考
15	円筒	基底部 - 二段目 柱(最下段タガ) (下底) 2.0 (上底) 1.0 (高さ) 0.8	外面: タテハケ(5本程度/cm)の後ヨコハケ(2.0cm)。タガ周辺ヨコナ。基底部二次調節省略。	1m以下約2cmの長石・石英粒多い。2~3mm	外面: 7.5TR7/6 ~6.25TR7/6 内面: 6.25TR7/6	ふつう		
16	円筒	基底部 柱(最下段タガ) (下底) 2.5 (上底) 1.0 (高さ) 0.8	外面: タテハケ(4~5本/cm)の後ヨコハケ(0.8~4.5cm)。タガ周辺ヨコナ。内面: 花崗岩のため調整不良。	1m以下~2m大の長石・石英粒多い。2~3mm	外面: 2.5TR6/6 ~3.75TR6/8 内面: 2.5TR6/8 ~3.75TR6/8	ふつう		
17	円筒	基底部 柱(最底節)(24.0) 最下段タガ (下底) 2.6 (上底) 1.3 (高さ) 0.7	外面: タテハケ(4~5本/cm)の後ヨコハケ(0.8~4.5cm)。タガは板状工具によるヨコハケ(押抜法)。内面: 縦方向のケズりがあるいは複数ナダ。	1m以下~2m大の長石・石英粒多い。1~3mm	外面: 2.5TR6/8 ~10TR7/4 内面: 9.75TR7/6 ~8.75TR8/5	ふつう		
18	円筒	基底部 柱(最底節)(25.0) 最下段タガ (下底) 2.3 (上底) 1.5 (高さ) 0.5	外面: タテハケ(4~5本/cm)の後ヨコハケ(0.8~4.5cm)。タガは板状工具によるヨコハケ(押抜法)。内面: 縦方向のケズりがある。	1m大~それ以下の長石・石英粒多い。1~3mm	外面: 10TR7/4 ~5TR7/6 内面: 7.5TR7/4 ~7.5TR6/5	ふつう	22と同一個体?	
19	円筒?	基底部 柱(最底節) タガ(下底) 1.9 (上底) 0.8 (高さ) 0.8	外面: タテハケの後ヨコハケ(径・5~8本/cm)。下端ヨコハケ周辺のヘラケズリ。タガ周辺ヨコナ。	1m大~それ以下の長石粒多い。2~3mm	外面: 10TR8/4 ~7.5TR7/3 内面: 5TR6/6 ~7.5TR6/6	ふつう		
20	円筒	基底部 柱(下底) (上底) 0.9 (高さ) 0.8	外面: タテハケ(5本/cm)、二次調節省略。タガ周辺ヨコナ。内面: 縦・斜め方向のケズり。	1m以下約2cmの長石・石英粒多い。1~3mm	外面: 5TR7/6 内面: 5TR7/4 ~5TR7/3	ふつう		
21	円筒	基底部 柱(下底) 2.1 (上底) 1.0 (高さ) 0.9	外面: タテハケ(5本/cm)。部分的に縱方向のケズリ。タガ周辺ヨコナ。	1m以下約2cmの長石・石英粒多い。2~3mm	外面: 6TR7/6 ~5TR6/6 内面: 5TR7/4 ~5TR6/4	良好		
22	円筒	基底部 柱(下底) 2.2 (上底) 1.8 (高さ) 0.7	外面: タテハケ(5本/cm)。柱は押抜法。内面: 縦・斜め方向のケズり。	1m大~それ以下の長石粒多い。1~3mm	外面: 8.75TR7/4 内面: 10YR7/3	ふつう	18と同一個体?	
23	円筒	柱(二段目) 25.2 (基底部) 23.8 タガ(下底) 2.5 (上底) 1.2 (高さ) 1.2	外面: タテハケ(4~5本/cm)後ヨコハケ(5~6本/cm)。基底部要板状工具(?)による縦・斜め方向のケズリ。タガ周辺ヨコナ。	1m大~それ以下の長石粒多い。2~3mm	外面: 2.5TR6/6 ~3.75TR7/6 内面: 3.75TR6/8 ~5TR6/8	ふつう		
24	円筒	基底部 柱(前部) 24.5 最下段タガ (下底) 2.0 (上底) 1.2 (高さ) 0.6	外面: ヨコハケ(5本/cm)後ヨコハケ(5本/cm)。基底部方向のケズリ。底部に複数の圧痕等あり。内面: 縦・斜め方向のケズリ後ダ。	1~2m大から1m以下の長石粒多い。2~3mm	外面: 3.75TR6/8 ~6.25TR7/4 内面: 3.75TR6/8 ~2.5TR6/8	ふつう		
25	円筒	基底部 柱(前部) 25.1 最下段タガ (下底) 2.0 (上底) 1.2 (高さ) 0.5	外面: タテハケ(5本程度/cm)後ヨコハケ(5本/cm)。基底部要板状方向のケズリ。下端附近にナダ。最下段タガが押抜法。	1~2m大~それ以下の長石粒多い。1~3mm	外面: 6TR7/3 ~5TR7/6 内面: 7.5TR7/4 ~7.5TR7/6	ふつう		
26	円筒?	基底部 柱(前部) 22.7 最下段タガ (下底) 2.8 (上底) 1.5 (高さ) 7.0	外面: ヨコハケ(7~8本/cm)。基底部要板状方向のケズリ。底部に複数の圧痕あり(偏平化)。内面: 風化のため不明。	1~2m大~それ以下の長石粒多い。1~3mm	外面: 2.5TR6/6 ~2.5TR6/8 内面: 5TR6/8 ~7.5TR7/6	ふつう		
27	円筒?	基底部 柱(前部) 20.9 最下段タガ (下底) 2.5 (上底) 1.7 (高さ) 0.5	外面: 縦方向のケズリ(偏平化)・砂粒移動痕(?)。下端附近に横方向工具ナダ(ヨコハケの痕跡)。底部に複数の種類な凹凸。内面: ケズリ? (砂粒移動痕)後ナダ。下端附近に縦横方向工具ナダ。	1~2m大の長石粒多い。2~3mm	外面: 6.75TR8/3 内面: 10W7/3	ふつう	内外面とも比較的の土が柔らかいうちにナダ・ナダ等、施されている。	
28	円筒?	基底部 柱(タガ下) 最下段タガ (下底) 2.5 (上底) 1.0 (高さ) 0.6	外面: 縦方向のケズリ。タガに押抜法。内面: 花崗岩のため不明。	1m大~それ以下の長石粒多い。2~3mm	外面: 5TR6/4 ~7.5TR6/6 内面: 5TR7/4 ~7.5TR6/6	ふつう	29と同一個体。なお、既出品は、健太のゆがみや部分的なものである可能性が高く、固ではNHLに合わせた。	
29	円筒?	基底部 柱(基底部) (32.0)	外面: 花崗岩により不明瞭だが、縦方向のケズリ。内面: 花崗岩により不明瞭。ケズリと見われる凹凸あり。	1m大からそれ以下の長石粒多い。1~2mm	外面: 5TR6/4 ~7.5TR6/5 内面: 5TR7/4 ~7.5TR6/6	ふつう	29と同一個体	
30	円筒?	基底部 柱(最下段タガ) (下底) 2.0 (上底) 1.6 (高さ) 0.6	外面: 圧痕不明。ケズリか?。タガに押抜法。内面: タテハケ(4本/cm)。	1m大~それ以下の長石粒多い。1~2mm	外面: 6.25TR7/4 内面: 6.25TR8/4	ふつう		
31	円筒?	基底部 柱(最下段タガ) (下底) 2.2 (上底) 1.5 (高さ) 1.0	外面: ケズリ?タガ剥離面にタテハケ(4本/cm)。最下段タガに押抜法。内面: タテハケ(4本/cm)。	1m大~それ以下の長石粒多い。1~2mm	外面: 5TR7/4 内面: 6.25TR8/4	ふつう		

番号	種類	部位	性質	原因	粒度	色調	度成	備考
32	円筒?	底部	外面: 二段目ヨコハケ(4本/cm)。タガに押捺抜き。 (下底) 2.4 (上底) 1.4 (高さ) 0.8	1mm以下~それ以下の長石粒多い。	外面: 2.5V87/4 内面: 2.5V86/6 ~2.5V86/8	ふつう		
33	鉛錠形?	底部 ~側部?	タガ(下底) 2.1 (上底) 1.0 (高さ) 0.7	外面: ヨコハケ(?)タガハケ(5本/cm)。底部ヨコハケ? 内面: 横方向板状工具によるナデ。	1mm以下~2mmの大長石・石英粒多い。	外面: 5V86/8 内面: 5V87/4 ~6.25V86/4	ふつう	38、39と同一個体?
34	円筒	口縁部	外面: 風化のため調整不明。ヨコハケ (上底) 0.9	1mm以下~2mmの大長石粒多い。 内面: ヨコハケ近ヨコナデ。	1mm以下~3mmの多赤色粒まばらに含む。	外面: 10V88/1 内面: (風化面)5V87/4 ~6.25V87/4	ふつう	
35	円筒?	底部	タガ(下底) 1.6 (上底) 0.7 (高さ) 0.8	外面: ヨコハケ(5~7本/cm)。タガ周辺ヨコナデ。 内面: 風化のため不明。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。 内面: 1~2mmの大赤褐色粒まばらに含む。	外面: 10V88/1 内面: 5V88/1 ~7.5V87/4	ふつう	
36	円筒?	側部?	タガ(下底) 2.1 (上底) 1.0 (高さ) 0.8	外面: ヨコハケ(5本/cm)。 内面: タガハケ(?)	1mm以下~それ以下の長石粒多い。 内面: 1~2mmの大赤褐色粒まばらに含む。	外面: 5V86/6 内面: 5V87/4 ~7.5V86/4	ふつう	
37	円筒?	底部	タガ(下底) 2.7 (上底) 1.6 (高さ) 0.9	外面: 風化のため調整不明。 内面: 細め方向ハケメ	1mm以下~2mmの大長石粒含む。 内面: 1~2mmの大赤褐色粒まばらに含む。	外面: 2.5V86/6 内面: 3.75V85/6 ~3.75V85/8	ふつう	透かしもあり
38	円筒?	翼部	外面: ヨコハケ(4~5本/cm)の後ヨコハケ(5本程度/cm)	1mm以下~2mmの大長石粒多い。 内面: 横方向のハケメ。	1mm以下~2mmの大長石・石英粒含む。	外面: 5V86/6 内面: SYR7/8 ~6.25V87/6	ふつう	48と同一個体?あるいは233、39と同一個体?
39	鉛錠形?	底部	タガ(下底) 2.1 (上底) 1.0 (高さ) 0.8	外面: 風化のため調整不明。 内面: 風化のため不明。	1mm以下~2mmの大長石・石英粒含む。	外面: 5V86/6 内面: SYR7/8 ~3.75V86/8	ふつう	38、39と同一個体?
40	円筒	口縁部	外面: ヨコハケ(5本程度/cm)。底部付近ヨコナデ。	1mm以下~それ以下の長石粒多い。	1mm以下~それ以下の長石粒多い。	外面: 7.5V87/3 内面: 7.5V87/2	ふつう	41、42と同一個体?
41	円筒	側部?	外面: ヨコハケ(4~5本/cm)	1mm以下~それ以下の長石粒多い。	1mm以下~それ以下の長石粒多い。	外面: 7.5V87/4 内面: SYR7/2 ~5V88/2	ふつう	ハラ記号。40、42と同一個体?
42	円筒	底部	タガ(下底) 2.0 (上底) 1.0 (高さ) 0.8	外面: ヨコハケタガ周辺ヨコナデ。 内面: 細め方向のハケメ(4本/cm)	1mm以下~それ以下の長石粒多い。 内面: 1mmの大赤褐色粒まばらに含む。	外面: 7.5V87/3 内面: 7.5V87/4 ~7.5V87/3	ふつう	40、41と同一個体?
43	円筒	口縁部	外面: 風化のため調整不明。 内面: 風化のため調整不明。	1mm以下~それ以下の長石粒多い。 内面: 1~2mmの大赤褐色~黒褐色粒まれて色斑まれる。	1mm以下~それ以下の長石粒多い。 内面: 1~2mmの大赤褐色~黒褐色粒まれて色斑まれる。	外面: 3.75V86/8 内面: 3.75V86/8	ふつう	
44	円筒	口縁部	外面: ヨコハケ(5本/cm)。端部付近ヨコナデ。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。	外面: 5V86/6 内面: 6.25V87/4	ふつう	
45	円筒	口縁部	外面: ヨコハケ(4~5本/cm) (後ヨコハケ)、底部付近ヨコナデ。	1mm以下~それ以下の長石粒多い。 内面: 1mmの大赤褐色粒含まれる。	1mm以下~それ以下の長石粒多い。 内面: 1mmの大赤褐色粒含まれる。	外面: 3.75V86/8 内面: 3.75V87/6	ふつう	
46	円筒	側部?	外面: ヨコハケ(4~5本/cm)。タガ周辺ヨコナデ。	1mm以下~それ以下の長石粒多い。 内面: 細め方向のハケメ(5本程度/cm)	1mm以下~それ以下の長石粒多い。 内面: 1~2mmの大赤褐色粒含まれるが目立たない。	外面: 5V86/3 ~5V86/6 内面: 5V86/6 ~5V86/8	ふつう	透かしもあり。38と同一個体?
47	円筒?	底部	外面: ヨコハケ(5本/cm)後ヨコハケ(6本/cm)。	1mm以下から2mmの大長石粒多い。 内面: 不明。	1mm以下から2mmの大長石粒多い。 内面: 1~2mmの大赤褐色粒含まれる。	外面: 3.75V86/6 内面: 2.5V86/6 ~2.5V86/8	ふつう	透かしもあり。38などと類似。ヨコハケの特徴は異なるが、羅のヨコハケが重なったものである可能性もある。
48	円筒	側部	外面: ヨコハケ(5本・6本/cm)・停止間隔2cm	1mm以下~それ以下の長石粒多い。	1mm以下~それ以下の長石粒多い。	外面: 8.75V87/6 ~8.75V87/7 内面: 7.5V88/4 ~8.75V87/4	ふつう	
49	円筒?	側部?	タガ(下底) 2.3 (上底) 0.7 (高さ) 0.8	外面: ヨコハケ(5本/cm)。タガ周辺ヨコナデ。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。	外面: 5V86/6 内面: 1mm以下~2mmの大赤褐色粒含まれる。	ふつう	51と同一個体?
50	円筒?	側部?	タガ(下底) 2.3 (上底) 0.7 (高さ) 0.7	外面: ヨコハケ(5本/cm)。タガ周辺ヨコナデ。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。 内面: 風化のため不明。	外面: 5V86/6 内面: 1mm以下~2mmの大長石粒多い。 内面: 1mm以下~2mmの大赤褐色粒含まれる。	ふつう	
51	円筒?	側部?	タガ(下底) 2.0 (上底) 1.0 (高さ) 0.8	外面: ヨコハケ(4~5本/cm)。タガ周辺ヨコナデ。	1mm以下~それ以下の長石粒多い。 内面: 細め方向のハケメ(4~5本/cm)	1mm以下~2mmの大長石粒多い。 内面: 1mm以下~2mmの大赤褐色粒含まれる。	ふつう	49と同一個体?
52	円筒?	側部?	外面: ヨコハケ(4~5本/cm)	1mm以下~それ以下の長石粒多い。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。	外面: 7.5V86/6 内面: 6.25V86/6	ふつう	
53	円筒?	側部?	タガ(下底) 1.9 (上底) 0.8 (高さ) 0.8	外面: ヨコハケ(5本程度/cm)。タガ周辺ヨコナデ。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。 内面: 不明。	外面: 6.25V87/6 ~5V86/6 内面: 5V87/4	ふつう	
54	円筒?	側部?	外面: ヨコハケ(4~5本/cm)	1mm以下~2mmの大長石粒多い。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。	外面: 5V86/4 内面: 5V87/3	ふつう	
55	円筒?	側部?	外面: ヨコハケ(5本程度/cm)	1mm以下~2mmの大長石粒多い。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。	外面: 5V86/6 内面: 5V87/6 ~5V88/6	ふつう	
56	円筒?	側部?	外面: ヨコハケ(5本/cm)	1mm以下~2mmの大長石粒多い。	1mm以上~2mmの大長石粒多い。	外面: 6.25V87/6 内面: 7.5V87/4	良好	透かしもあり

番号	種類	部位	測量 (単位: cm)	説明	出土	色調	造成	備考
56	円筒?	葉部?	外面: ヨコハケ(4~6本/cm) 内面: 縫め方向のハケメ(4~6本/cm)	1mm以下~2mmの大長石粒多い。 1~2mmの灰色~赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 10YR7/3 内面: 10YR7/2 ~1.25YR7/3	ふつう	ヘア記号あり	
57	円筒?	葉部?	外面: タテハケ後ヨコハケ(5本/cm) 内面: 方向のケズリがあるといなナダ	1mm大~それ以下の長石粒多 い。1~2mmの大赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 2.5YR8/4 内面: 6.25YR8/6	良好		
58	円筒?	葉部?	タガ(下底) 1.7 (上底) 1.0 (高さ) 0.8	外面: 氷化のため調整不明。 内面: 氷化のため調整不明。	1mm大~それ以下の長石粒多 い。1~2mmの大赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 7.5YR6/6 内面: 7.5YR7/4 ~7.5YR6/6	ふつう	
59	円筒?	葉部?	タガ(下底) 2.4 (上底) 0.9	外面: 氷化のため調整不明。 内面: 黒化のため調整不明。	1mm以下~2mmの大長石粒多 い。 1mm以下~3mmの大赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 3.75YR8/6 内面: 3.75YR8/8	ふつう	
60	円筒?	葉部?	外面: ヨコハケ(5本/cm) 内面: 縫め方向のハケメ(4~6本/cm)	1mm以下~2mmの大長石粒多 い。 1mm以下~6mmの黄英粒、1~2mmの大 赤褐色粒まれて含む。	外面: 7.5YR7/6 内面: 8.75YR7/5	~7.5YR6/6		
61	円筒?	葉部?	外面: ヨコナデ(4~6本/cm) 内面: クズリあるいは強いナダ	1mm以下~6mmの長石、石英 粒多い。 1~2mmの大赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 6.25YR8/6 内面: 6.25YR7/4	良好		
62	円筒?	葉部?	外面: タテハケ(6本程度/cm)後ヨコハ (赤褐色粒/5cm) 内面: 縫め方向のハケメ(5本/cm)	1mm以下~6mmの大長石粒合 む。 それ以下の赤褐色粒まれて 含む。	外面: 3.75YR8/4 内面: 7.5YR6/6	良好		
63	円筒?	葉部?	外面: タテハケ(7本/cm) 内面: 不明	1mm以下~2mmの大長石粒多 い。 1mm大~それ以下の長石粒多 い。 1~2mmの大赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 2.5YR6/8 内面: 3.75YR8/6	ふつう	タガ剥離	
64	円筒?	葉部?	タガ(下底) 2.0 (上底) 0.7 (高さ) 0.8	外面: 別離しない。タテハケ(6本程度/cm)後ヨコハケ(非常に細かい) 内面: 不明	1mm以下~2mmの大長石、石英 粒多い。 1~3mmの大赤褐色粒 まばらに含む。	外面: 6.25YR8/6 内面: 6.25YR7/3 ~6.25YR8/6	ふつう	
65	円筒?	葉部?	タガ(下底) 2.0 (上底) 0.7 (高さ) 0.9	外面: ヨコハケ 内面: 黒化のため不明	1mm以下~2mmの大長石、石英 粒多い。 2~3mmの大赤褐色粒 まばらに含む。	外面: 7.5YR7/4 内面: 7.5YR7/6	ふつう	
66	円筒?	二段目 ~基底部	最下段タガ 2.0 (上底) 1.0 (高さ) 0.5	外衝: 調整不明。ケズリか? タガは押 圧痕迹。 内面: 調整不明。ケズリか?	1~2mm大~それ以下の長石粒多 い。 2~3mmの大赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 7.5YR7/6 内面: 7.5YR7/6	ふつう	
67	円筒?	葉部?	タガ(下底) 2.0 (上底) 0.7 (高さ) 0.7	外面: 氷化により不明。 内面: 氷化により不明	1mm大~それ以下の長石粒多 い。 1~3mmの大赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 2.5YR4/6~ 内面: 3.75YR7/6	ふつう	ヘア記号?
68	円筒?	最下段タガ	(下底) 2.5 (上底) 1.5 (高さ) 0.9	外面: 二段目ヨコハケ(4本/cm)。タガに 押圧痕迹。 内面: ケズリ?	1mm大~それ以下の長石粒多 い。 1~2mmの大赤褐色粒ごく まれに含む。	外面: 3.75YR7/6 内面: 2.5YR7/4	ふつう	
69	円筒	葉部	タガ(下底) 1.9 (上底) 1.2 (高さ) 1.0	外面: ヨコカケ? タガ周辺ヨコナデ。	1mm大~それ以下の長石、石英 粒多い。 2mm程度の赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 10YR7/3 内面: 10YR7/2 ~10YR7/3	ふつう	
70	形象	基底部?		外面: ケズリ? 内面: ナデ?	1mm大~それ以下の長石粒多 い。 1~3mmの大赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 7.5YR8/4 内面: 5YR7/6	ふつう	
71	円筒?	基底部		外面: タテハケ? 内面: 調整不明	1mm大~2~3mmの大長石、石英 粒多い。 1~3mmの大赤褐色粒 まばらに含む。	外面: 10YR8/2 内面: 8.75YR8/8	ふつう	
72	形象	基底部?		外面: ケズリ? 氷化のため調整不明。 内面: 氷化のため調整不明。	1mm大~それ以下の長石、石英 粒多い。 1~3mmの大赤褐色粒 まばらに含む。 1mmの大粘土 粒? 明るい色~淡褐色粒 やや多い。	外面: 8.75YR7/4 内面: 7.5YR7/4	ふつう	外面に黒斑あり
73	円筒	基底部		外面: 縫~縫め方向ケズリ 内面: 縫~縫め方向ケズリ?	2mm大から1mm以下の長石粒多 い。 1mm以下の石英、角閃石ま れに含む。 1~5mmの大赤褐色 粒まれて含む。	外面: 3.75YR8/6 内面: 3.75YR8/6	ふつう	
74	円筒?	基底部	(30.5)	外面: 調整不明 内面: 調整不明	1mm大~それ以下の長石、石英 粒多い。 2~5mmの大赤褐色粒 比較的多い。	外面: 5YR2/6 内面: 5YR7/4 ~2.5YR6/6	ふつう	他の円筒より径が大き く復元できる。
75	円筒	基底部		外面: 融方向ケズリ 内面: 氷化のため調整不明。押圧痕 と見われる凹凸あり。	1mm大~それ以下の長石、石英 粒多い。 2~3mmの大赤褐色粒ま ばらに含む。	外面: 2.5YR8/6 内面: 3.75YR8/6	ふつう	
76	形象?	不明		外面: ナデ? 内面: ナデ?	1mm大~それ以下の長石粒多 い。 1~2mmの大赤褐色粒や 多い。	外面: 7.5YR7/4 内面: 7.5YR7/3	ふつう	破片の上下なども不明。 様子は大きく複数か ないよう。
77	蓋形	笠部	笠部径 (58.7)	外面: 笠部調査不明。笠部部に平行して 沈跡? 有。笠部内面には横方向のケ ズリ状の痕跡が認められる。 内面: 氷化のため不規則。笠部接合部の裏 面には明瞭な痕跡が認められる。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。 1~3mmの大赤褐色粒~暗赤褐色 粒まばらに含む。	外面: 8.75YR6/6 内面: 10YR8/3 ~10YR7/4	ふつう	
78	蓋形	笠部		外面: 融受部ヨコナデ。笠部は氷化の ため調整不明。笠半端には墨の墨 線が存する。笠部中央突起にあ る平行筋膜あり。古部タテハケ(5本 /cm)。 内面: 融受部は横方向のハケの後上部 にヨコナデ。笠部へ合せる部は無いた。	1mm以下~2mmの大長石粒多い。 1mmの大石英粒、1~3mmの大赤 褐色粒まばらに含む。	外面: 5YR7/6 内面: 3.75YR6/6 ~5YR7/6	ふつう	笠上半部の垂繩は1箇 に6組か?

番号	説明	部位	法量 (単位: cm)	調整	筋土	骨盤	地成	魔考
79	直形?	笠瘤部?		外面: 痢め方向のハケメ後ヨコハケ(10本程度/cm) 内面: 摩擦圧痕顕著。端部付近はヨコナダ?	1cm大~それ以下の長石・石英粒多い。2mm大的赤褐色~淡赤褐色粒まれに含む。	外側: 6.5V87/4 内側: 6.5V87/4	良好	
80	直形?	笠瘤部?		外面: ヨコハケ後ナダ?	1cm大~それ以下の長石・石英粒多い。1~2mm大的赤褐色粒比較的多い。	外側: 7.5V87/6 内側: 7.5V87/6	良好	
81	直形?	笠瘤部?		外面: ヨコナダ? 内面: ヨコナダ?	1cm以下~2mm大的長石・石英粒多い。1~3mm大的赤褐色粒比較的多い。 1~3mm大的赤褐色粒比較的多い。	外側: 7.5V87/6 内側: 8.75V87/6	良好	
82	形象(不明)	筋(三段目上端) 筋(基底部附近) タガ(下端) (上端) 1.5 (高さ) 0.8	15.0 13.4 1.5 0.8 0.8	外面: 條状の筋下端タガハケ(5本/cm)。 二段目は(タガハケ後)ヨコハケ(5本/cm)。 3段目はタガハケの後ヨコハケ(8~13本/cm)、最上段は筋方向の強いナダか? タガ周辺ヨコナダ。	1cm以下~2mm大的長石粒多い。石英粒は目立たない。1~3mm大的赤褐色粒比較的多い。	外側: 6.25V86/6 内側: 2.5V86/6 ~5V86/1	かつう かつう	筋下段は二次調整を省略することから基底部と見えられる。最上段は大きく扯がっており、上に筋分岐が存在したものと思われる。赤褐色粒わずかに残存。三段目は長方形溝かし孔あり、二段目には通かし孔無し。
83	不明	不明		外面: 簡何学的文様が描かれる。調整は風化のため不明。 内面: 風化のため調整不明。	1cm大~それ以下の長石粒多い。石英粒はまばらに含む。1~3mm大的赤褐色粒比較的多い。	外側: 7.5V87/6 内側: 6.25V87/6	かつう	
84	直形?			外面: 風化のため調整不明。突唇上に筋紋。 内面: 不明	1cm以下~2mm大的長石・石英粒多い。1~2mm大的赤褐色粒比較的多い。 まばらに含む。	外側: 5V87/6 ~5V87/4 内側: 7.5V87/2 ~7.5V86/6	かつう	
85	直形?			外面: 風化のため調整不明。突唇上に筋紋。 内面: 不明	1cm以下~2mm大的長石粒多い。石英粒はまばらに含む。1~3mm大的赤褐色粒比較的多い。	外側: 7.5V87/4 内側: 7.5V88/3	かつう	赤色顔料残存部。
86	形象(不明)			外面: 風化のため調整不明。 内面: 強いナダ	1cm以下~2mm大的長石粒多い。1~2mm大的赤褐色粒比較的多い。 1~3mm大的赤褐色粒比較的多い。	外側: 6.25V87/6 内側: 2.5V86/6 ~5V86/8	かつう	
87	直形			外面: 風化のため調整不明。縦唇には筋紋、細密文を組み合わせた所。唇結合部は横方向のナダ。 内面: 横方向ナダ	1cm以下~2mm大的長石粒多い。1~3mm大的赤褐色粒比較的多い。 1~3mm大的赤褐色粒比較的多い。	外側: 7.5V87/6 内側: 7.5V88/4 ~10V88/4	良好	唇縫上部がすぼまるようで、上に筋分岐が見るものと見えられる。 88-89と同一個体。
88	直形			外面: 風化のため調整不明。文様ははっきりしないが、縦唇文と思われる。 唇結合部は横方向のナダ。 内面: ナダ?	1cm以下~それ以下の長石・石英粒多い。 1~3mm大的赤褐色粒比較的多い。	外側: 8.75V87/4 内側: 5V87/6 ~10V88/4	良好	
89	直形			外面: 表面剥離 内面: ナダと思われる凹凸あり	1cm大~それ以下の長石・石英粒多い。 1~2mm大的赤褐色粒比較的多い。	外側: 7.5V87/6 内側: 5V87/6 ~3.75V87/6	良好	
90	直形?			外面: 縦縫に沿って筋紋状あり。 内面: 強いナダ	1cm以下~それ以下の長石粒多い。 1~3mm大的赤褐色粒比較的多い。	外側: 6.25V87/6 内側: 6.25V87/6 ~7.5V87/6	かつう	
91	直形?			外面: 横方向ハケメ(4~5本/cm)。唇結合部は横方向の強いナダ。	1cm以下~2mm大的長石粒多い。 角閃石もまばらに含む。	外側: 5V86/4 内側: 5V86/6	かつう	
92	直形? 唇部あるいは は貴の一部			外面: 調整不明。側縫に沿って沈縫はあります。 内面: 不明	1cm以下~2mm大的長石・石英粒多い。 1~3mm大的赤褐色粒~黒色粒もまばらに含む。	外側: 6.25V87/4 内側: 6.25V87/6 ~5.5V87/4	良好	

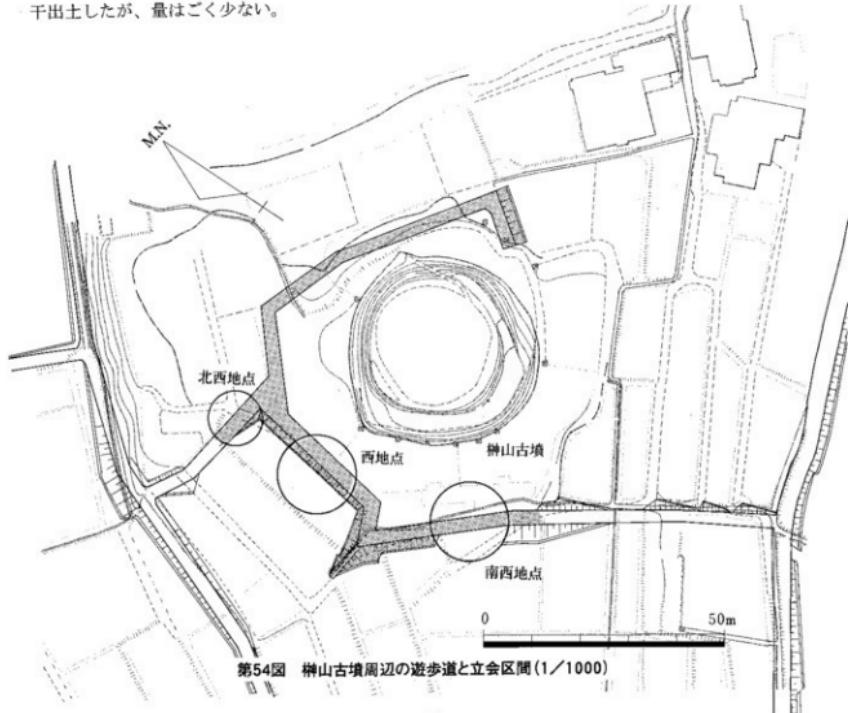
第V章 遊歩道整備事業に伴う立会調査

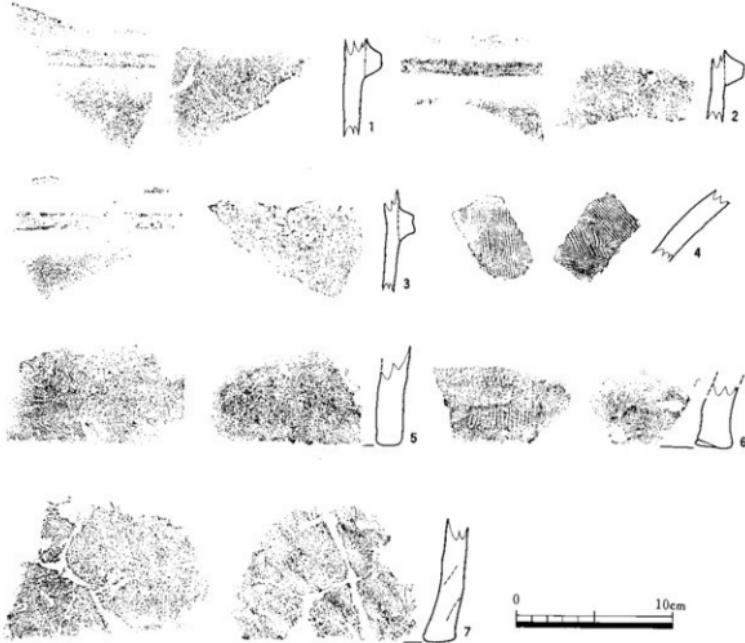
1) 榛山古墳(造山第1号古墳)周辺の調査

榛山古墳(造山第1号古墳)周辺では遊歩道4号線の工事に伴い、第54図の範囲を立会調査した。工事は基本的に表土のみの掘削であり、特に南西地点などの古墳関連の遺構が指摘されている部分では掘削を極力ひかえた。逆に、西側や南東側の擁壁部分など地形や設計上掘削が深くなる部分もあった。立会では古墳に関連すると考えられる遺構等は検出できなかったが、南西地点、西地点、北西地点(3-2号線)では埴輪などの遺物を採集した。

南東地点 榛山古墳の尾根筋にある部分で、島崎東により陶質土器などが採集されており、前方部(造り出し)が存在するとの説もある地点である。掘削を特に浅く限定したこともあり、遺構等は検出されなかった。表土中から須恵器片と埴輪片を採集した。

西地点 現状の墳丘からは15mほど離れているが、擁壁基礎部分の掘削が地形の関係上やや深く、地山と考えられる花崗岩風化土層を検出したほか埴輪片数点を採集した。地山は地点の中央付近で高く、南北両方向に下っている。地山より上層は流土と考えられ、埴輪片数点のほか葺石と考えられる角礫も若干出土したが、量はごく少ない。





第55図 榊山古墳周辺出土埴輪(1)(1/3)

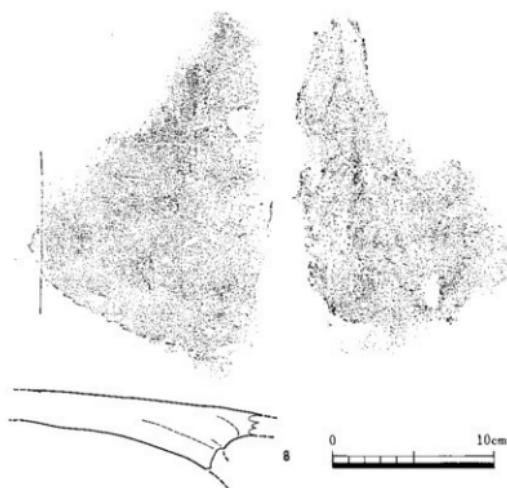
北西地点 遊歩道4号線と3-2号線が合流する部分であり、高橋護が指摘する「方形壇」の南西の辺付近にある。工事に伴い削った北側の畑地斜面から埴輪片数点が出土した。畑地斜面の観察では出土部分が何らかの盛土であるのか、流土あるいは畑地区画に伴う土層であるのかは判断できなかった。

出土遺物 出土遺物は埴輪片と須恵器片である。小破片が多く、風化の激しいものが大半を占める。埴輪片は図示できたものは8点がある(第55図、第56図)。

4は南西地点から出土したものである。破片の湾曲や調整から朝顔形埴輪の口縁部ないし受部の破片と考えられる。

1、8は西地点から出土したものである。1は円筒埴輪と思われる。風化が激しく調整などは観察できないが、タガはやや低く、胎土の特徴は第2号古墳のものによく似ている。小破片のため断定できないが窯窓焼成の可能性が高い。8は盾形埴輪の盾部と思われるが、盾部の厚さに対し筒部が薄く、盾部もかなり平坦なものであることから他の形象埴輪である可能性もある。盾面には中央に近い側に縦方向の沈線1条が存在する。調整は盾面は丁寧なナデであろうか。内面と盾部の接合部分には縦方向の強いナデが観察できる。焼成は良好で窯窓焼成と判断できる。

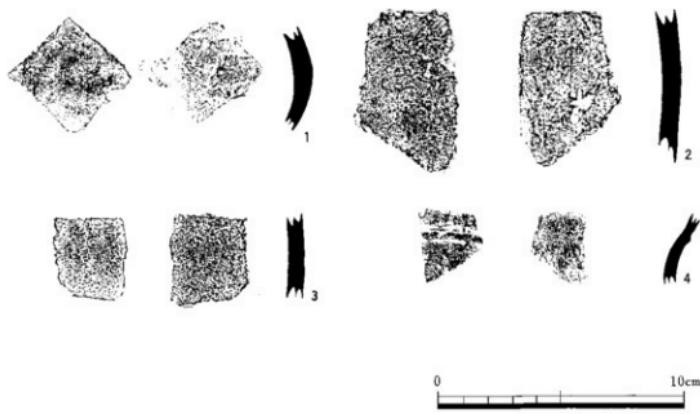
2、3、5~7は北西地点から出土したものである。2、3は円筒埴輪(?)のタガ部分の破片で、調



第56図 桧山古墳周辺出土埴輪(2)(1/3)

は異なり、造山古墳本体と同じ特徴を持つ一黒斑のある一埴輪が伴うとしているが、今回出土した埴輪にはそうした特徴を指摘できるものは存在しない。

須恵器片はすべて南西地点から出土したもので、第57図にあげた4点がある。1は壺などの胴部と思われる丸みの強い破片である。外面にはガラス質の自然釉、内面は自然釉とともに土(?)が付着しており、調整等を観察することができない。胎土は1mm以下の砂粒をわずかに含む精緻なもので、焼成も堅



第57図 桧山古墳周辺出土須恵器(1/2)

整などは風化のため観察できない。5～7は基底部の破片である。6は外面にタテハケ(5本/cm)が観察できる。7はさほど風化しているとは見えないが、調整は判断しがたい。ハケメの条線は見えないことからケズリであろうか。内面はいずれも縦～斜め方向に強いナデを施している。

出土した埴輪片は、胎土は長石の砂粒を多く含むもので、第2号古墳などのものと非常によく似ている。焼成は小破片が多いため判断できないものも多いが、窯窯焼成である可能性が高い。なお、高橋護は方形壇には古墳群のものと

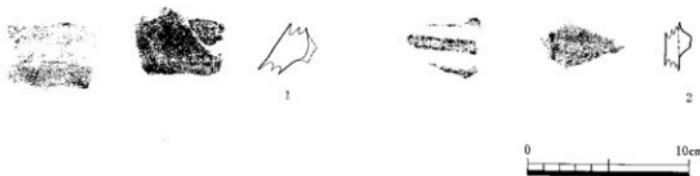
い。色調は自然釉のため観察し得ないが、断面では黄灰色を呈する。2、3はやや大形の器種の破片と思われる。内外面とも摩滅のためか、丁寧な調整のためか平滑で調整痕を観察することが困難である。2の外面にはわずかにタタキかと思われる痕跡が認められる。内面はヘラの角があたったような線があり、工具ナデであろうか。胎土はいずれも1mm以下の砂粒をまばらに含むもので、焼成は堅緻である。4は壺などの口縁部の破片と思われる。外面に断面三角形の弱い突帯があり、その上はわずかに内湾気味に立ち上がっている。器壁が極めて薄く、内外面ともヨコナデで仕上げられている。胎土は1mmの砂粒をごくわずかに含む精緻なもので、焼成も堅い。なお、この地点は島崎東により陶質土器が採集されている地点である。今回出土した須恵器片は小片のため、部位や器種、形態を推定することが難しいが、これらも伽耶系の陶質土器である可能性がある。

2) 造山古墳前方部西端の調査

遊歩道3号線の整備に伴う側溝の付け替えで、造山古墳前方部南西端付近の農道に土管を埋設した(第58図スクリーントーン部分)。立会では、掘削が北側の造山古墳墳端のレベルまで到達しなかったこともあり、遺構等は検出しなかった。掘削部分の土層は流土および農道の盛土と考えられ、流土と見られる下層からはわずかながら葺石と思われる角礫、亜角礫と埴輪片2片が出土した。埴輪片はいずれも小片で風化も激しい。1は朝顔形埴輪の口縁部一受部間の破片と見られる。厚みから判断する限り、かなり大きな個体となるようだ。2は円筒埴輪のタガ部分と見られる。胎土は1mm程度の長石が目立つもので、焼成は比較的良好なようである。野焼きか寄窯焼成かは判断しがたい。



第58図 造山古墳前方部西端立会地点(1/1000)



第59図 造山古墳前方部西端出土埴輪(1/3)

第V章 道路整備事業に伴う立会調査

表4 樺山古墳周辺出土埴輪観察表

番号	種類	部位	法長 (単位: cm)	調査	地質	色調	集成	備考
1	円筒?	筒部?	タガ(下底) 2.4 (上底) 0.7 (裏さ) 1.0	外面: 風化のため不明 内面: 風化のため不明	1m大からそれ以下の長石、石英粒多い。1~2mmの大赤褐色 色斑比較的多く含む。	外面: 6.25/8/4 内面: 7.5/8/7 ~6.25/8/6	ふつう	西地点出土
2	円筒?	筒部?	タガ(下底) 2.2 (上底) 0.8 (裏さ) 1.3	外面: 風化のため不明 内面: 風化のため不明	1m以下~2m大の長石を多く含む。1~3mmの大赤褐色 色斑比較的多く含む。	外面: 7.5/8/3 内面: 7.5/8/3 ~7.5/8/5	ふつう	北西地点出土
3	円筒?	筒部?	タガ(下底) 2.2 (上底) 1.0 (裏さ) 1.1	外面: 風化のため不明 内面: 風化のため不明	1m以上~3mm大の長石、石英 粒多量。他の地盤より赤土の 風化層かい。	外面: 7.5/8/4 内面: 7.5/8/3 ~7.5/8/5	ふつう	北西地点出土
4	輪形	口縁部 or受部		外面: タテハケ(7本/cm)。一段斜め~横 方向のハケ。 内面: 壊~崩め方向ハケメ(6~7本/cm)	1m以下の長石まばら。1m大の 赤褐色斑しま。	外面: 10/8/7/4 内面: 10/8/7/4	良好	南西地点出土
5	円筒?	基底部		外面: 風化のため不明 タテリ? 内面: 風化のため不明 強いナデ?	1m大からそれ以下の長石粒 多量。1~3mmの大赤褐色斑しま る。	外面: 2.5/8/6/3 内面: 2.5/8/6/4	ふつう	北西地点出土
6	円筒?	基底部		外面: タテハケ(5本/cm)。下面に棒状凹 部。 内面: 剥離強しい、強いナデ?	1m大からそれ以下の長石粒 多量。1~3mmの大赤褐色斑しま る。	外面: 2.5/8/6/9 内面: 2.5/8/6/6	ふつう	北西地点出土
7	円筒?	基底部		外面: 棒状凹部のナデ? 内面: 縦へ斜め方向の強いナデ?	1m以下~3mm大の長石、石英 粒多量。	外面: 7.5/8/7 内面: 7.5/8/7/4	良好	北西地点出土
8	直?	通部?		外面: 裏面に縦方向の花巻1条。直面 ナデ。接合部縦方向の強いナデ。 内面: 縦方向の強いナデ?	1m以下~2mmの大長石、石英 粒多量。1~5mmの大赤褐色 色斑まれに含む。	外面: 7.5/8/2 内面: 7.5/8/4 ~7.5/8/3	良好	西地点出土

表5 樺山古墳周辺出土須恵器観察表

番号	種類	部位	法長 (単位: cm)	調査	地質	色調	集成	備考
1	壺?	胴部?		内外面とも自然釉付着	1m以下の砂粒まれに含む。	割れ口: 2.5/6/1 他は鏡面不規則。	灰黒	
2	不明	不明		外面: 表面が平滑で調整不良。たたき? 内面: 工具ナデ?	1m以下の砂粒をまばらに含む。	外面: 2.5/3/3/1 内面: 5/6/1 ~3/0/0 ~5/6/1	灰黒	
3	不明	不明		内外面とも不明	1m以下の砂粒をまばらに含む。	外面: 5/6/1 ~7.5/5/1 内面: 5/5/1	灰黒	
4	壺?	口縁部?		内外面ともヨコナデ	1m以下の砂粒をわずかに含む。	外面: 2.5/6/1 内面: 2.5/6/1 ~2.5/6/1	灰黒	

表6 造山古墳前方部西端出土埴輪観察表

番号	種類	部位	法長 (単位: cm)	調査	地質	色調	集成	備考
1	輪形?	口縁部~ 受部?		外面: 風化のため不明 内面: 風化のため不明	1m大の長石、石英粒多量。 1m大の赤褐色斑しまる。	外面: 6.25/8/7/6 内面: 6.25/8/6/6 ~6.25/8/7/6	良好	
2	円筒?	筒部?	タガ(下底) 2.7 (上底) 1.0 (裏さ) 1.1	外面: 風化のため不明 内面: 風化のため不明	1m大からそれ以下の長石、 石英粒多く含む。1~3mmの大赤褐色 色斑比較的多い。	外面: 8.7/8/3/4 内面: 8.7/8/7/6	ふつう	

第VI章



調査の成果と展望

第2号古墳の調査では、埴輪列出土のものだけで110個体という多量の埴輪を検出し、検討することができた。造山・作山古墳周辺の埴輪資料は近年、造山第4号古墳⁽¹⁾、折敷山古墳⁽²⁾、山陽道・岡山道関連の調査⁽³⁾など確実に増加しつつある。とはいっても、特に造山古墳をはじめとする大古墳の状況はいまだ表採資料に頼らざるを得ない状況である。第2号古墳の埴輪は調査も取り上げたものも限定的であったとはいっても、量的にも検出された状況でも極めて充実したものであることは疑い得ない。第IV章では、第2号古墳の円筒埴輪を調整や形態的な特徴からいくつかのグループに分類した上で、第2号古墳の埴輪群とその各グループの関係を埴輪の企画や胎土、混和剤の採集を同じくする集団と、その胎土、混和剤の供給を得て調整や胎土と混和剤の混合、焼成の状況に特徴の異なる集団内のグループや個々の工人差といった関係の現れと推定した。ここではこれを基に、第1に造山・作山古墳周辺地域の埴輪の特徴について、第2に第2号古墳と同様の状況が他の古墳出土埴輪にも認められるか、第3に造山・作山古墳周辺地域の埴輪生産体制について若干検討してみたい。

1) 造山・作山古墳周辺の埴輪の特徴

円筒埴輪においては小造山古墳などの口縁部に突帯を持つものが畿内色の強いものと指摘されているが、逆に在地色を抽出することは難しい。蓋形埴輪については在地色の顕著な個体と、在地色をほとんど見いだせない個体があり、造山古墳ではこれが併存していることが松木武彦により指摘されている⁽⁴⁾。蓋形埴輪の在地的な特徴には、笠縁の垂下の度合いが浅い、笠部が無文のものがある、などがあげられており、「畿内の蓋形埴輪の形状や表現に関する情報を隨時得る機会をもった在地の人が製作していた状況を示す」と解釈されている。円筒埴輪の在地色に関しては川西宏幸により押圧技法が最下段タガに盛んに用いられることが指摘されている⁽⁵⁾が、作山古墳や造山第2号古墳の「板状工具によるナデ仕上げ」はこの初現的なものと見てよい。しかし、畿内などの同時期の古墳にも一定量の押圧技法が認められることから、吉備の特徴としては疑問視する意見⁽⁶⁾、逆に作山古墳などの初現的な例から吉備で発生し各地に波及したものと評価する意見⁽⁷⁾など見解が分かれている。また、B種ヨコハケの頻度が低いことも在地色としてあげられようか。備中西部の笠岡市双つ塚古墳⁽⁸⁾、美作・津山市十六夜山古墳⁽⁹⁾、備前・牛窓町黒島1号墳⁽¹⁰⁾、備後・吉舎町三玉大塚古墳⁽¹¹⁾の埴輪にはB種ヨコハケが盛んに用いられており、造山・作山古墳周辺地域を中心とする特徴である可能性もある。また、円筒埴輪には口径が30cm程度の小型のものと40cm程度の大型のものがあるようである。高さやタガ間の幅などを比較できる資料が少ないので、確実なことは言えないが、かなり企画性の高い埴輪生産が行われていた可能性が高い。黒島1号墳では径は20cm程度とさらに小型で、こうした企画も造山・作山古墳周辺地域を中心とする特徴としてあげられる可能性がある。

2) 造山・作山古墳周辺地域における埴輪群

次に第2号古墳の埴輪群を分類、検討した視点から、造山・作山古墳周辺地域の古墳の埴輪群の状況を検討してみよう。造山古墳、造山第4号古墳、作山古墳、小造山古墳、宿寺山古墳などの資料を観察できた。しかし、調整などの観察できないものも多いため、大型のもの、小型のものといった円筒埴輪のタイプのあり方や胎土のバリエーションなどを中心に見ていきたい。

造山第4号古墳 報告では窯窯焼成の埴輪と野焼きの埴輪が存在していることを指摘した。野焼きの埴輪は短甲形埴輪1個体であるが、窯窯焼成と判断される円筒埴輪においてもいくつかに分類できるようである。円筒埴輪は大部分が小型のものと考えられる。破片のため不明な部分も多いが、径36cm程度に復元できるものもあり(注1文献第13図14など)、大型の円筒埴輪が含まれる可能性もある。胎土は長石粒の目立つ、おおかた共通するものであるが、詳細に見ると次のようなものが存在する。

- 1 比較的精良な胎土で焼成も非常に良好なもの。
- 2 胎土の砂質が強く焼成は軟質だが浅黄橙色に発色するもの。
- 3 胎土中に暗赤色粒が目立ち、焼成はややあまく橙色～明赤褐色を呈するもの。

調整も1ではハケメの密度が7～8本/cm程度、2が4～5本/cm程度、3が10～12本/cm程度とほぼ対応している。大型円筒埴輪である可能性のあるものは特に堅緻な焼成で、胎土、調整は1のものと共通している。ただし、個体数が少ないため個体差にとどまるものである可能性も否定できない。

造山古墳 表採資料のため不明な部分が多く、観察し得た資料も多くない。円筒埴輪は大型のもの、小型のものが存在するようである。野焼きと考えられるものと窯窯焼成のものが併存しているようである。また、次にふれる作山古墳例に類似する大粒の石英・長石粒を多量に含む大型の円筒埴輪が林コレクション・備中高松城資料館所蔵の造山古墳採集資料中に存在する⁽¹²⁾ほか、小造山古墳などで採集されている口縁部外面に突帯を貼り付けるものも存在する⁽¹³⁾。口縁部外面に突帯を貼り付けるものは胎土や焼成も小造山古墳例に類似した、緻密な胎土で堅緻な焼成のものである。円筒埴輪以外では、松木の指摘する蓋形埴輪の在地色の顕著な個体と、在地色をほとんど見いだせない個体の併存も注目される。

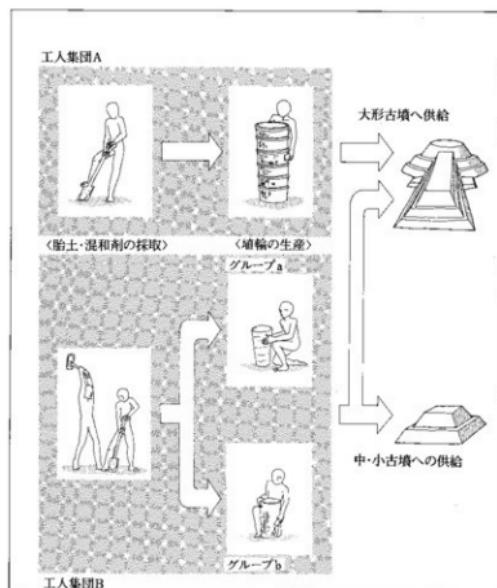
作山古墳 大型のもの、小型のものが存在する⁽¹⁴⁾。また、基底部の高さが9.6～9.2cmのaグループと14.5～13.3cmのbグループとに分かれるとの指摘もある⁽¹⁵⁾。ハケメの密度には5本/cm程度のもの、7～9本/cm程度のもの、10本以上のものがあるようだが、他の特徴との関連を検討することはできなかつた。胎土はやはり長石粒の目立つほぼ共通するもので、焼成、色調の特徴と合わせ次の傾向が認められる。

- 1 焼成が比較的良好で胎土に暗赤色の粒子を含むもの。
 - 2 赤橙色～橙色の色調で胎土は長石粒が目立ち、微細な焼土状の赤橙色粒を含むもの。
- また、これら以外に明らかに胎土の異なるもの
- 3 焼成があまく大粒の石英・長石粒を多量に含む褐色に近い色調を呈するもの
- が存在する。このうち1、3は大型の円筒埴輪に多く見られる。また、第Ⅲ章で述べたように第2号古墳出土埴輪と同工品と見られる個体が存在することが注目される。
- 宿寺山古墳・小造山古墳** 大型のもの、小型のものがあると見られる。口縁部外面に突帯をもつ大型の円筒埴輪が存在しており、畿内系の円筒埴輪と評価されている⁽¹⁶⁾。胎土などの特徴には

- 1 焼成が良好で胎土も緻密なもの
- 2 赤橙色～橙色の色調で胎土は長石粒が目立ち、微細な焼土状の赤橙色粒を含むものがあり、先の畿内系といわれるものは1の特徴を持っている。

3) 造山・作山古墳周辺地域の埴輪生産

ここまでにごく簡単ではあるが見てきた埴輪の特徴を整理すると、判断の難しいものもあるが、第2号古墳出土埴輪に見たような円筒埴輪の小グループは他の古墳でも認められると判断できるだろう。さらに、特に大型円筒埴輪では、大粒の石英・長石粒を多量に含むものや口縁部外面に突帯を貼り付けるものなど比較的明瞭な差も認められる。また、第2号古墳と柳山古墳、作山古墳の同工品の可能性を指摘したもののように、類似した特徴を持つ埴輪が複数の古墳にまたがって認められること、造山・作山古墳周辺地域に認められる特徴や企画性が存在することも注意される。このことから、造山・作山古墳周辺の地域では、古墳の築造の度に埴輪製作の集団が組織されたのではなく、ある程度継続的に生産が行われ、周辺の古墳に供給されていた可能性が高いと考えられる。



第60図 吉備 中枢地域における埴輪生産体制

第4号古墳の報告では造山古墳などの野焼き、窯窓焼成の埴輪の混在状況や第4号古墳の埴輪を、器種にある程度対応した複数の工人集団による埴輪生産、供給の結果と考えた⁽¹⁷⁾。造山古墳における蓋形埴輪の在地色の顕著な個体と、在地色をほとんど見いだせない個体の併存についても畿内の蓋形埴輪を生産する集団と在地色の強いものを生産する集団が併存、協業体制にあったとえらわれている。また、和田剛によると造山古墳、第2号古墳の盾形埴輪においても同様の状況が認められるという⁽¹⁸⁾。円筒埴輪においても、「比較的明瞭な差」とした大粒の石英・長石粒を多量に含む胎土のものと口縁部外面に突帯を貼り付ける精良な胎土のものの差はこうした工人集団の差を示しているものと思われる。一方、小型の

円筒埴輪に限られる第2号古墳の埴輪の中には造山・作山古墳の大型円筒埴輪に認められる大粒の石英・長石粒を多量に含む胎土は認められないことから、ある程度の器種による分業的生産も、どの程度器種に対応し単位集団がどの程度の器種にわたって製作しているかなど不明な点も多いが、存在する可能性が高い。

第4号古墳では特徴的な差が円筒埴輪と形象埴輪一短甲形埴輪との間に認められたため、器種による分業的生産を考えたが、以上から単に器種ごとの分業生産ではなく、畿内的な埴輪体系をもった集団、在地的な集団、器種ごとに分業的に生産する集団などが重層的に組織されていたものと思われる。これらの集団は一定の企画に従いながら、粘土、混和剤などの調達はそれぞれの工人集団で行い、さらに第IV章で検討した集団内のグループ単位に胎土の製作から埴輪の成型、焼成を行っていたものと想定される。

注

- (1) 安川 漢 1998『造山第4号古墳』岡山市教育委員会
- (2) 谷山雅彦 1987『折敷山古墳』『総社市史』考古資料編
村上幸雄・前角和夫 1993『折敷山古墳の調査』『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
- (3) 萩原克人・正岡陸夫 1997『後池内遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89 山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』日本道路公团広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会
浅倉秀昭・柴田英樹 1994『甫崎天神山遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89 山陽自動車道建設に伴う発掘調査8』日本道路公团広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会
椿 真治 1997『中山遺跡・中山古墳群』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121 中中国横断自動車道建設に伴う発掘調査4』日本道路公团中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会
柴田英樹・椿 真治 1997『西山遺跡・西山古墳群』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121 中中国横断自動車道建設に伴う発掘調査4』日本道路公团中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会
- (4) 松木武彦 1994『吉備の蓋形埴輪—器財埴輪の地域性研究に関する予察ー』『古代吉備』第16集
- (5) 川西宏幸 1978『円筒埴輪絶論』『考古学雑誌』64-2
- (6) 高橋克壽 1999『畿内からみた吉備の埴輪』(考古学研究会第4回シンポジウム発表)
- (7) 野崎貴博 1999『埴輪製作技法の伝播とその背景』『考古学研究』第46巻第1号
- (8) 鎌木義昌 1986『長福寺裏山古墳群』『岡山県史』考古資料
調整の内容等に関しては和田剛氏のご教示による。
- (9) 尾上元規・金田善敬 1998『十六夜山古墳・十六夜山遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130 県立津山高等学校校舎改築に伴う発掘調査』岡山県教育委員会
- (10) 亀田修一 1997『黒島一号墳』『牛窓町史』資料集II
- (11) 桑原隆博ほか 1983『三王大塚』広島県教育委員会・吉舎町教育委員会
- (12) 林 信夫氏のご好意により観察させていただいた。
- (13) 野崎貴博氏の考古学研究会第4回シンポジウム発表による。
- (14) 村上幸雄・前角和夫 1993『周辺古墳出土の埴輪について』『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
- (15) 春成秀爾 1983『造山・作山古墳とその周辺』『岡山の歴史と文化』
- (16) 村上幸雄・前角和夫 1993『小造山古墳の埴輪について』『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』10
- (17) 注1文献
- (18) 和田剛氏のご教示による。なお、氏の盾形埴輪に関する論文を付章に掲載させていただいた。

付章 1



伝・千足古墳出土遺物

平成10(1998)年、一群の遺物が岡山市教育委員会に寄贈された。これらは千足古墳(造山第5号古墳)の出土品といわれ、1912年(明治45年)の乱掘に伴い出土したもの一部と伝えられる。銅鏡(だ龍鏡)1面、巴形銅器8点、玉類33点という内容である。

1) だ龍鏡

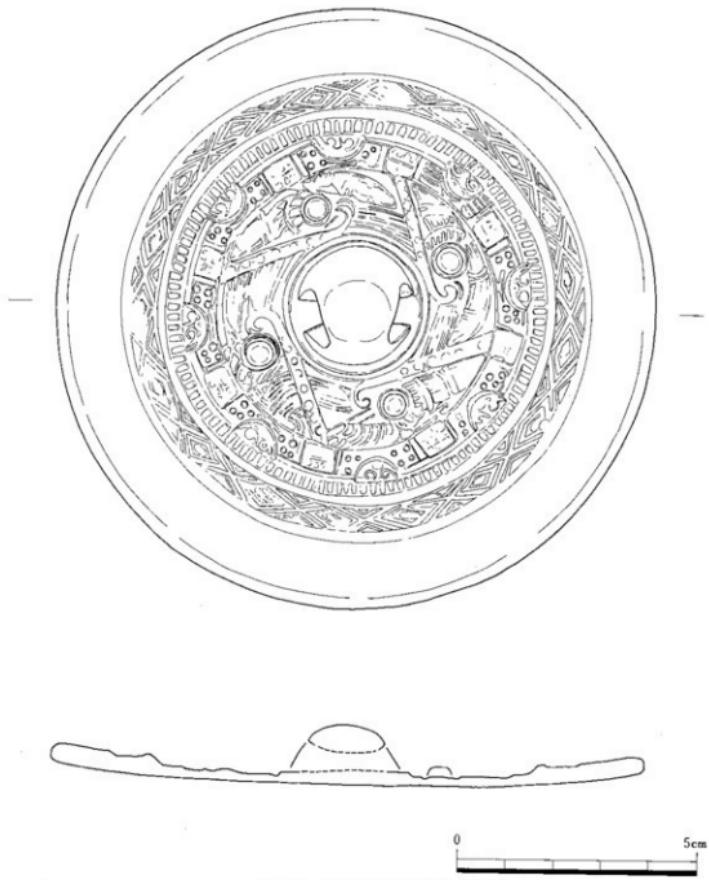
径124.3mm、鋤径24.6mm、鋤部分の厚さ10.8mm、平縁部分の厚さ4.1mmの仿製だ龍鏡。鏡自体の保存状態は大変よいが、出土後の錆落としのためか、鏡背、鏡面とも細かい削痕が多く見られ、文様もかなり摩滅している。文様の凹部には一部、白色粘土質の土が残っている部分があり、その部分には赤色顔料が認められる。文様は内側から主文帯、半円方形帯、櫛齒文帯、菱形文帯の構成をとる。主文帯と半円方形帯からなる内区は径74.3mmを測る。主文は獸の表現はくずれ頭部もなくなつておらず、「獸毛鏡」に近い表現になっている。獸がくわえていた「巨」の表現が4対残っている。半円方形帯の半円形は突線で3対の波頭形を入れたものとみられ、方形は中を細かく区切ったものようである。外区の菱形文帯は菱雲文のくずれたものと思われる。

2) 巴形銅器

残存状態はあまり良くなく、割れ口が白くなっている部分もある。また、掘り出された時点や錆落とともに伴うものと思われる傷や削痕が随所に認められる。完形のものはない。巴の尾の部分はすべて反時計回りで、1のように幅の広いものと、2~4のようにせまいものがある。

3) 玉類

勾五 2点存在する。どちらもメノウ製で、長さ32mm、幅20mm程度のものである。J1はC字形に近い形態である。右側面からの片面穿孔で、左側面の紐孔孔末には小さな断口がある。胴断面はやや方形に近い。両面に小さな剥離痕が認められるが、掘り出された時の傷であろうか。赤橙色~赤褐色を呈する。J2はやや「コ」の字状に近い形態で、胴断面はJ1に比べ丸みが強い。左側面からの片面穿孔で、右側面の紐孔孔末に断口がある。右側面の胴部下部には艶のない部分があり、原石の表皮が残存したものと思われる。また、左側面には細かい削痕がある。以上のことから、板状の原石を主に研磨によって



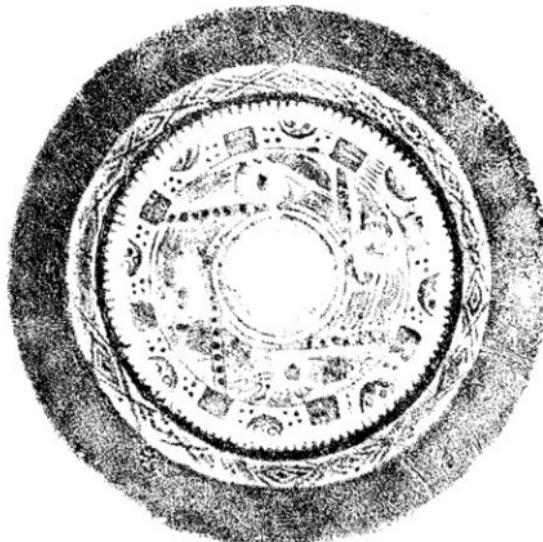
第61図 伝・千足古墳出土鏡(1/1)

整形したもの⁽¹⁾である可能性が高い。赤褐色～橙色を呈するが、J 1に比べ濁っている。

管玉 17点がある。すべて碧玉製と思われる。大きさは長さ37.3～15.7mm、最大径8.4～3.9mmとやや幅がある。穿孔は両面からなされており、中にはJ 3のように孔が偏ったためあけ直されているものもある。色調はオリーブ灰色～緑灰色である。

棗玉 3点がある。すべて碧玉製と考えられる。J 20、J 21は中央部に稜があり、算盤玉状品に近い形状をしている。両面穿孔で、色調は明緑灰色を呈している。J 22はほかの2点より小形で、稜も明瞭でない。色調もやや暗いオリーブ灰色を呈している。これも両面穿孔である。

ガラス小玉 11点がある。かなりいびつな形状をしており、大きさもばらつきがある。緑がかった青

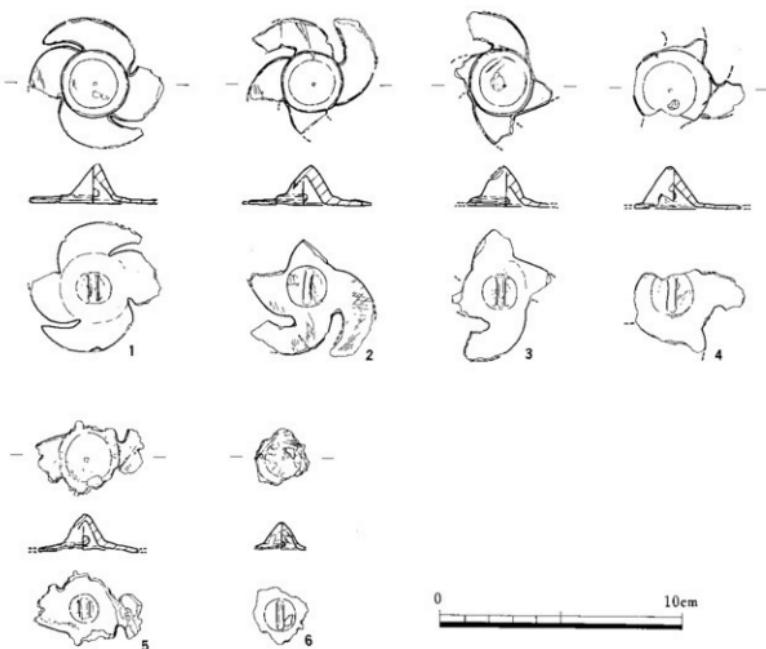


第62図 伝・千足古墳出土鏡(拓本) (1/1)

色から青色呈している。J33のみは黒色で、形も整っておりガラス製ではない可能性もある。

4) まとめ

千足古墳は1912年(明治45年)1月に乱掘され、出土品は同時に乱掘された柳山古墳(造山第1号古墳)の出土品とともに一時、倉敷警察署に保管された。その後、1913(大正2)年に和田千吉が調査に訪れた^④が、すでに千足古墳、柳山古墳の遺物が混乱し、区別しがたい状況であったようだ。また、「当時この報告を公にせんとせしも、遺物全部は倉敷警察署に保管ありて見ること能はざりしに、今回一覧するの便を得しかば、玄に報告を公にするを得るに至れり」とされていることから、和田が遺物を実見したのはさらに後のことだったようである。和田の報告によると、千足古墳から出土したものと記されているものには、半円方形帶変形五獸鏡、変形五獸鏡、萬字形金具(巴形銅器)12点、碧玉製勾玉1点、鉄鎌(数量不明)、兜鏡残欠があり、出土状況を復元した図(第七図)から、碧玉製管玉、ガラス小玉、刀、斧、鎧破片(兜鏡残欠と同じものか)が出土したとされる。これはすべて発掘者である宗高善作氏からの聞き取りによるもので、疑問を呈する向きもある。また、千足古墳、柳山古墳の遺物は一旦、宮内省帝室博物

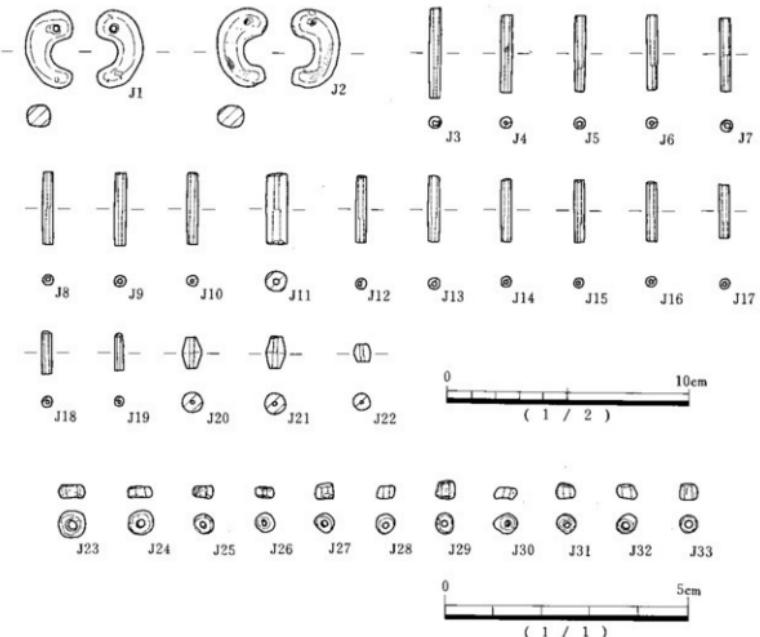


第63図 伝・千足古墳出土巴形銅器(1/2)

館に運ばれたようだが、榎山古墳出土といわれる馬形帶鉤などの御物となった一部を除き、地元に返されたという。

それでは、今回報告した伝・千足古墳出土品を見てみよう。巴形銅器は千足古墳出土という記述ともよく合致し、形態的にも和田があげる略図(第十四図)ともよく似ており、明治末年に出土したもの的一部である蓋然性が高い。しかし、図にあげられた2点とは同一個体と考えられるものはなく、和田が実見した12点の一部であるのか、他の一群であるのかは不明である。管玉は「細形にして色薄し長四分五厘乃至一寸五厘」とされており、今回の遺物の特徴と類似している。また、管玉の計測値も千足古墳の年代観と矛盾しないものである¹⁹。ガラス小玉も記述からは判断しがたいが、青色から薄青色ということであり矛盾はないようである。一方、鏡は報告されている2面とは異なる。また、メノウ製勾玉と碧玉製棗玉も記述にはないものである。このうち鏡、棗玉は古墳の年代観としては矛盾はない。

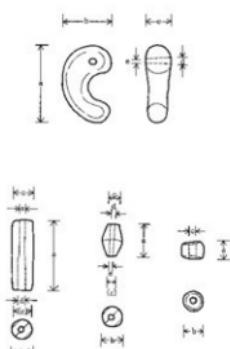
吉備においてはメノウ製勾玉は5世紀前葉の久米郡久米町久米三成4号墳出土例を初現としている。しかし、今回の2点、特にJ2は「コ」の字状の形態や原石の表皮部分を残すことなどやや新しい特徴を持っている。高橋進一によるところした特徴は後期古墳から出土するものに特徴的なもので、製作技法の変化に対応しているという²⁰。ただ、2点とも紐孔の断口はごく小さいものであるほか、古墳時代中期の広島県浄楽寺12号墳²¹、同四拾貫小原1号墳²²からも形態的に類似したメノウ製勾玉が出土していることから、この2点が千足古墳から出土したものではあり得ないとはいえないようである。



第64図 伝・千足古墳出土玉類

表7 玉類計測表

No.	種類	材質	測量 (単位: mm)					色調
			a	b	c	d	e	
1	玉類	ガラス	31.0	16.0	5.2	3.7	—	透明～淡青色
2	玉類	ガラス	32.0	20.0	10.5	2.0	—	透明～淡青色
3	管玉	ガラス	37.3	4.6	4.2	2.2	1.6	SGV6/1
4	管玉	ガラス	32.5	4.6	4.4	2.6	1.8	SGV6/1
5	管玉	ガラス	32.1	4.3	4.0(3.8)	2.4	1.8	SGV6/1
6	管玉	ガラス	31.6	4.3	4.0(4.1)	2.2	1.8	SGV6/1
7	管玉	ガラス	30.7	4.4	4.1	2.4	2.0	SGV5/1
8	管玉	ガラス	30.3	4.2	4.0(3.9)	1.9	1.7	SGV5/1
9	管玉	ガラス	30.3	4.5	4.3	2.0	1.7	SGV5/1
10	管玉	ガラス	29.9	4.3	4.1(3.9)	2.0	1.6	SGV6/1
11	管玉	ガラス	29.5	8.4	(縫隙)	2.9	2.2	SGV5/1
12	管玉	ガラス	28.1	4.3	4.1(4.0)	2.0	1.8	SGV5/1
13	管玉	ガラス	27.7	4.5	4.2(4.2)	2.5	1.7	SGV6/1
14	管玉	ガラス	26.5	4.1	4.0(3.9)	2.0	2.0	SGV5/1
15	管玉	ガラス	26.5	4.1	3.9(3.7)	2.0	1.8	SGV4/1～5/1
16	管玉	ガラス	24.9	4.3	4.0	2.0	2.0	SGV4/1～5/1
17	管玉	ガラス	22.8	4.2	4.0(3.9)	2.0	1.8	SGV4/1～5/1
18	管玉	ガラス	18.1	4.2	4.1(4.0)	1.8	1.8	SGV5/1
19	管玉	ガラス	15.7	3.9	3.5	1.9	1.1	SGV6/1
20	管玉	ガラス	13.4	8.3	3.8(3.6)	1.8	1.6	SGV8/1
21	管玉	ガラス	13.3	8.3	4.3(4.0)	2.0	1.9	SGV7/1～6/3
22	管玉	ガラス	7.4	6.8	4.7	1.5	1.5	SGV5/1
23	小玉	ガラス	2.8	1.5	5.3	2.5	—	縫がかった青
24	小玉	ガラス	2.2	1.5	2.0	2.2	1.6	やや青い縫がかった青
25	小玉	ガラス	2.7	1.4	2.8	1.6	1.3	やや青い縫がかった青
26	小玉	ガラス	2.4	1.4	2.0	1.5	0.7	青
27	小玉	ガラス	3.2	4.3	—	1.5	—	縫がかった青
28	小玉	ガラス	2.8	3.8	1.8	1.3	—	縫がかった青
29	小玉	ガラス	3.1	4.2	2.8	1.6	0.8	縫がかった青
30	小玉	ガラス	2.7	1.8	4.2	—	—	やや青い縫がかった青
31	小玉	ガラス	3.1	3.9	3.7	1.7	—	縫がかった青
32	小玉	ガラス	3.0	4.5	4.1	2.2	2.0	青い縫
33	小玉	ガラス?	3.2	3.7	—	1.7	—	黒



第65図 玉類の計測部位

付章1 伝・千足古墳出土遺物

以上からこれらの遺物の出土と伝世について柳山古墳の遺物との混乱をとりあえず考えなければ、すべて千足古墳から出土したものとした場合、①帝室博物館から地元に返却された遺物の一部、②倉敷警察署に届けられず地元に残っていた一群、③返却されたもの（巴形銅器など）と地元に残されていたもの（鏡など）が混在したもの、などの可能性が考えられる。また、④千足古墳出土のもの（巴形銅器など）に他の古墳の出土品が混入したもの、である可能性もある。以上からこれらの遺物を千足古墳出土のものと断定することはできない。しかし、その内容や地元で千足古墳出土として伝わっていたことからその可能性は高いものと考えておきたい。

注

- (1) 高橋進一 1992「玉作遺跡と玉製品」近藤義郎編『吉備の考古学的研究(下)』山陽新聞社
なお、玉類の記述に関しては高橋進一氏のご教示による部分が大きい。
- (2) 和田千吉 1919 「備中都窪新庄下古墳」『考古学雑誌』第9巻第11号
- (3) 注1文献
- (4) 注1文献
- (5) 松崎寿和・潮見浩 1969「三次淨業寺古墳群発掘調査概報」『広島大学文学部紀要』
- (6) 潮見浩 1969『四十貫小原』四十貫小原発掘調査団

付章2



形象埴輪から見た造山第2号古墳

和田 剛

1)はじめに

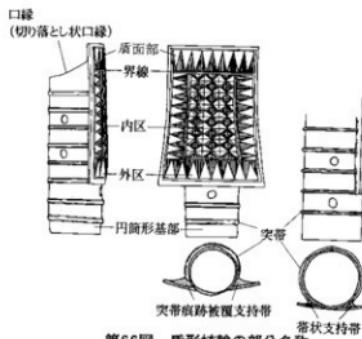
造山第2号古墳の発掘調査においては、造山古墳群としては比較的大量の形象・器財埴輪の出土を見た。またそれらの多くが、ほぼ原位置、あるいはそれに近い場所で出土しており、それらを検討することは第2号古墳の年代的位置付けや歴史的評価とも密接に関わってくることであろう。中でも盾形埴輪は埴輪列内においてそのほとんどが原位置をとどめており、また文様や製作技法においても比較するべき要素が多い。そこで本論では、まず第1に盾形埴輪の研究史を概観しその問題点について記述する。更に第2に本論を進めるにあたっての分類諸概念の設定を行う。第3に設定した概念に基づき盾形埴輪の分類・編年を行いそれにに基づき第2号古墳出土各資料の位置付けを考えていきたい。

盾形埴輪の部分名称については田中秀和¹⁰と小栗明彦¹¹が整理しており両者の案とも概ね賛同できる。ここでは特に盾形埴輪全体の構造全体については小栗明彦の案を基本としながら、盾面部に描かれる文様帯の区分については田中秀和の案を採用することとする。尚、盾部の背後に用いられる円筒状の基部についてはその形状から円筒形基部とし、小栗が支持部とする盾部を支える部位についてはその形状から帯状支持帯と突帶上被覆支持帯の二者を呼び分ける必要性を提起しておくがこの二者については後述することにする。本論で使用する部分名称については第66図に示す。

2)盾形埴輪を巡る研究史の展開

盾形埴輪の研究の発端は比較的古く、戦前にまで遡る。後藤守一は関東地方出土の盾形埴輪を検討する中で盾面部に描かれた文様の類型化を行った。後藤の研究は盾形埴輪の機能論的な研究と同時に実用盾との比較検討に基づくモデル盾の類推を行うという現在に至るまでの視点となつた¹²。

勝部明夫は後藤の研究視点を受け継ぎ盾形埴輪は古墳出土の副葬品盾を模したものであるとの結論を得た¹³。水野正好は「埴輪」というものは（中略）「埴輪」として形作られるだけの目的があり、そうした目的なり意義を果たすため一つの体系をもっていた」とし、埴輪の意味論、祭祀論から古墳時代権力の像



第66図 盾形埴輪の部分名称

を浮かび上がらせる試みた。この中で水野は盾形埴輪にもふれ、盾形埴輪は首長權威を表示するものとして配列されるのである。そうした意味の生産と消費を通じて古墳時代社会の政治秩序が作り出されると理解したのである¹⁰。水野の視点は非常に傾向に満ちているが、盾形埴輪、ひいては形象埴輪全体の通時的变化に関する視点がなかったため古墳時代社会の通時的变化を言及することができず、この後継承されていくことはなかった。

盾形埴輪そのものの通時的变化について最初に述べたのは近藤義郎であろう。近藤は編年する上でその規格性の有無を重視しており、金蔵山古墳の盾形埴輪がなんらかの企画性のもとに製作されていたことを指摘している¹¹。続いて小林行雄が「古くは円筒帯の半面に盾の形を貼り付けたものであったが、後には細い円筒部の上部に盾の形をのせたものとなつた。」と製作技法上の変化を指摘し、それが生産体制の変化を作りうるものである可能性を想定した¹²。1980年代に入ります田中憲治¹³が、そして1985年には楠本哲夫が石見型盾形埴輪も含めた盾形埴輪全体を視野に入れる編年案を出した¹⁴が、あくまで既成の古墳の年代観により検証したにとどまり盾形埴輪そのものの型式学的検討には成功したわけではなかつた。

1985年には埋蔵文化財協会を中心にして『形象埴輪の出土状況』が編纂され盾形埴輪を含む形象埴輪研究一般の活発化が促進された。1988年には高橋克壽が鞆形埴輪、甲冑形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪の4器種をあげ、変遷を5期の様式に整理した。器財埴輪の変遷が古墳祭祀を巡る観念の変化に起因するものであったと結論づけた。その中で盾形埴輪についてはモデルとなった盾の変化に応じて変化するものと考え木盾を模したI類から副葬品盾である革盾を模したII類への変化を説いた¹⁵。その後高橋工¹⁶、櫻井久之¹⁷、小栗明彦¹⁸等が高橋の視点を受け継ぎ文様の形態や内外区の仕切方などに基づいて分類を試みたがいずれも盾形埴輪全体の変化や歴史的意義を論ずるまでには至らなかつた。これに対し田中秀和¹⁹は盾形埴輪そのものの製作技法による分類を提案し、盾形埴輪は初めて独自の型式学的視点に基づく編年確立への歩みを開始したといえる。

注10	注1	注17	本論	模式図
I類	a類			
	b類		81P	
	c類			
II類			I類	
	d類		81P	
III類			II類	
			III類	

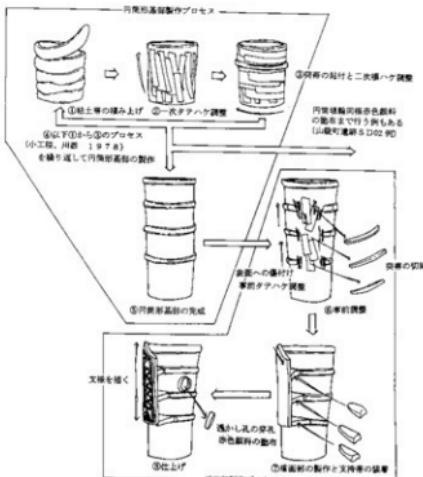
第66図 盾形埴輪分類(案)と高橋(1988)、
田中(1994)、伊達(1997)の対応関係

3) 盾形埴輪の基本的分類と整理

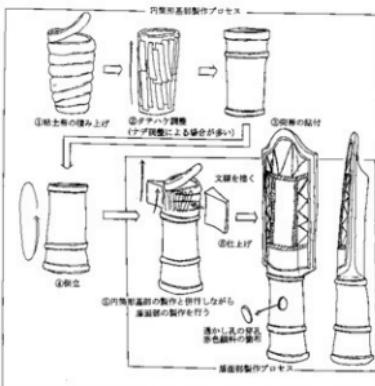
さて、分類における私見を田中秀和⁽¹⁰⁾の分類案についてやや詳しく批判、検討する形で提示したい。なお、高橋克壽⁽¹¹⁾、伊達宗泰⁽¹²⁾、田中秀和の分類案と本論の分類案の対応関係を提示しておく（第67図）。

田中はまず盾形埴輪をまず口縁形態に基づき第Ⅰ類と第Ⅱ類の二つに大分類した。さらにそれぞれを盾形埴輪の盾面部と円筒形基部の接合法方にに基づきA、B、C、Dの四つに分類した。すなわち盾面部と円筒形基部が別々に製作され、接合に際して盾面部と円筒形基部との間にくさび状の支持帯を挟むA類、盾面部と円筒形基部が別々に製作されるものの、盾面部の一部は円筒形基部の表面を利用するB類、そして盾面部の取り付け位置が大きく縮小し、また盾面部の形状も湾曲を失いほぼ垂直となるC類、そして支持帯を失い盾面部が円筒形基部に対し盾状に取り付けられるD類である。そしてこれらを川西宏幸の円筒埴輪編年にあわせて検証しその時間的変遷を述べた⁽¹³⁾。

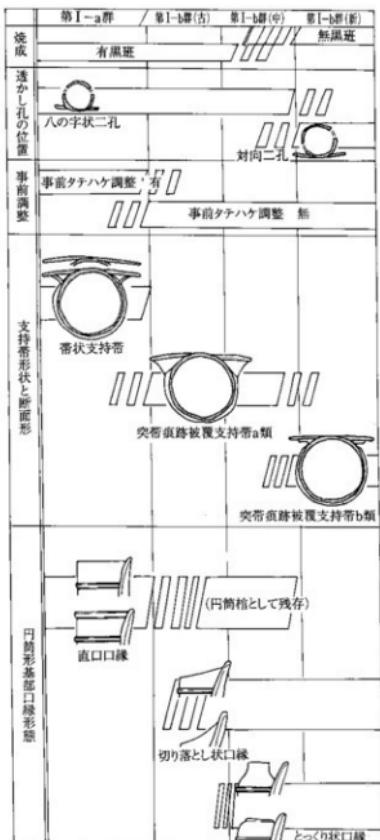
ここで田中がいう第Ⅰ類と第Ⅱ類であるが、この両者は氏も述べておられるように出現の当初から併存し、時期差とはみなし難い。更に用いられたものこの両者が埴輪としても円筒棺としても用いられることがあることから機能・用途差ともみなしがたい。ゆえに大分類の基準としてこの2つを用いるのには若干の疑問がある。器財埴輪研究におけるトピックの一つとしてモデルの追求があり、盾形埴輪もその例外ではないことは間違いない。しかし、盾形埴輪そのものの歴史的意義、役割を論じていく中で、その大分類の基準をモデルの違いにおくことは、モデルとして考えられる副葬品盾の詳細な構造が把握困難な現状では研究進展の足かせとなる可能性もある。そもそも田中のあげる製作技法における分類の中で、最も本質的な変化は、盾面部が円筒形基部の前面に貼り付けられ、支持帯を持つA、



第68図 円筒形基部先行製作技法



第69図 盾面部・円筒形基部併行製作技法



第70図 第I群の細分類と各要素の対応関係

れるのではなく、その当初からむしろB類の特徴と呼べる円筒形基部の一部を盾面部として利用していたことが想定されるのであり、私見ではA類とB類は時期差ではなく系列差として認識しておいた方が良いのではないかと考えている。

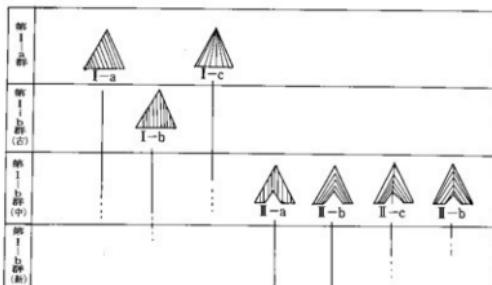
次に円筒形基部への盾面部貼付の際に「事前調整」の有無である。この「事前調整」は先にあげた「円筒形基部先行製作技法」と不可分の関係にある製作技法であり本論での分類案である「第I群」と「第III群」に見られる。これは盾形埴輪の製作に先行して円筒形基部の製作が行われるため、盾面部の貼付に際して突帯の切除を行う他、盾面部の貼り付けられる円筒形基部の表面にタテハケや櫛状の工具により傷つけを行い、盾面部の接合を円滑化し、またその接合の強度を高めようとする一連の製作過程を指す。この過程の存在から円筒形基部の製作と円筒埴輪の製作が連動していることと、円筒形基部

B、C類と、支持帯を失い盾面部が円筒形基部に対してひれ状に貼りつくD類との間にあるものと考えられよう。この違いは、円筒形基部と盾面部の接合を、あらかじめ円筒埴輪と同様の制作手順を踏んで製作されていた円筒形基部の突帯を削り取ってから行う「円筒形基部先行製作技法」(第68図)と円筒形基部の製作途上においてある段階から円筒埴輪とは形態上大きく異なる、細いソケット状の円筒形基部の製作と併行して盾面部を鱗状に貼り付ける「盾面部・円筒形基部併行製作技法」(第69図)という製作技法上の差異に起因するものである。更にこの両者の違いは単に製作技法の差異にとどまらず円筒埴輪生産との製作技法上における連動関係にも関わっていく問題であり、盾形埴輪そのものの歴史的意義の検討においてこの視点による分類がより有効な手がかりを提出できると考える。そこで田中氏のいうA類、B類、C類からD類への時間的变化を「第I群」から「第II群」への時間的変化と把握する新たな大分類案を提出したい。また先述の伊達宗泰⁽¹⁹⁾、団正雄⁽²⁰⁾、西光慎二⁽²¹⁾の指摘を受け特に縫付円筒埴輪製作と連動性を持つ「盾付き鱗(形埴輪)」の一群を「第III群」として把握する。

ところで田中があげたA類の盾面部と円筒形基部を別々に製作した後、貼り合わせる製作技法であるが、氏がこの類型に属する諸例としてあげるマエ塚古墳⁽²²⁾、長原40号墳例⁽²³⁾にはこの特徴が見られない。また瓦谷一号墳例に⁽²⁴⁾よればこのA類の盾形埴輪は盾面部と円筒形基部が別々に製作さ

の製作が盾面部の接合に対して先行して行われていることの二つが推定される。これは田中氏のいうA類、B類、C類に認められる技法であり、「盾面部・円筒形基部併行製作技法」により製作されるD類には存在しない技法なのである。

第4には支持帯の形状である。支持帯とは特に「円筒形基部先行製作技法」により製作さ



第71図 各群における埴輪文の形態とその変遷

れる「第I群」の盾形埴輪にのみ見られる特徴である。これは円筒形基部と盾面部との接合をより強固なものとするために円筒形基部と盾面部との接合部分に貼り付ける粘土塊のことと、貼り付ける部位とその形状から、「帯状支持帯」と「突帶痕跡被覆支持帯」とに分類が可能である。このうち「帯状支持帯」とは小栗明彦がその存在を指摘した支持帯であり²⁰、盾面部と円筒形基部との間に垂直方向に取り付けられる大形の支持帯である。帯状の形状をなし、鱗状に張り出した盾面部の裏面全体に貼り付けられる。この支持帯を装着することにより沿直方向張り出しや盾面部表面のねじれなど微妙な表現が可能となると考えられる。この支持帯は田中氏がA類としてあげられる盾形埴輪に見られる特徴のようである。また、「突帶痕跡被覆支持帯」は「事前調整」の際、突帶を切削したその痕跡に盾面を支えるように貼り付ける支持帯である。盾面が支える範囲は局所化しているため、帯状支持帯に比して大形の盾面部を支えることが難しく、盾面部表面の鉛直方向への微妙な表現が行えない。このことは盾面部を側面から見ればよくわかる。以上から「帯状支持帯」から「突帶痕跡被覆支持帯」への型式学的变化が想定できる。

また「突帶痕跡被覆支持帯」は形状に基づき更に三つに細分類が可能である。すなわち楔状を呈し大きく盾面部の裏全体に貼り付けられる「突帶痕跡被覆支持帯a類」と、小形で立方体状をなす「突帶痕跡被覆支持帯b類」である。この突帶痕跡被覆支持帯b類は明らかに盾面部を支える支持帯としての機能は乏しく、突帶痕跡被覆支持帯a類の痕跡機関として捉えることができる。このことから突帶痕跡被覆支持帯a類からb類への型式学的变化が想定される。この変化を第I群の細分類の基準とし、それぞれ「帯状支持帯」を持つ第I-a群、「突帶痕跡被覆支持帯a類」を持つ第I-b群古相、「突帶痕跡被覆支持帯b類」を持つ第I-b群新相という通時的变化を想定したい。

後述するが第2号古墳出土資料は全てこの第I-b群に属する。そこで、「第I群」の細分を行い「型式」を設定し、第2号古墳出土資料の位置付について考えて行きたい。具体的には法量や盾面部の形状、あるいは盾面部に描かれる界線や文様の特徴、更に円筒形基部の口縁形態やハケ目調整痕など外面の特徴などに基づき細分類が可能となるものと考えている。

尚ここまで論じてきた各要素の対応関係については第70図・第71図に示した。

4) 各群の変遷の把握と盾形埴輪の編年

これまでに確認してきた第I-a群、第I-b群のさらなる細分類を試み、その第I群全体の通時的変遷について考えていきたい。

第I群は「円筒形基部先行製作技法」を採用する盾形埴輪の一群である。この製作技法を採用するため盾面部の接合に際して「事前調整」を用いる必要がある。また、前節では帯状支持帯を持つ第I-a群から突帯痕跡被覆支持帯を持つ第I-b群への変化を想定した。ここからは第I-a群について述べていく

a. 第I-a群とその諸型式

第I-a群はこれまで検討してきたように最古の盾形埴輪となる一群である。これは盾面部の製作技法や形状、盾面部に描かれる文様の違いなどにより更に二つの型式に分けることが可能である。ここからはI-a群に属する諸型式の特徴を述べていきたい。

第I-a群佐紀陵山型盾形埴輪 奈良県佐紀陵山古墳出土例⁽²⁶⁾を標準とする型式である。ほかに奈良県マエ塚古墳⁽²⁷⁾、京都府瓦谷1号墳⁽²⁸⁾からの出土が知られる。

粘土支持帯の形状は、マエ塚古墳例では盾面部の背面には帯状に薄い粘土帯が貼り付けられており、これが「帯状支持帯」となるものと考えている。円筒形基部の特徴を列記していくば、断面形態はやや梢円形となる。外面調整はストロークの長いヨコハケ調整が施されており、これは川西宏幸のいうA種ヨコハケ⁽²⁹⁾に相当するものと考えている。事前調整としては突帯の切除と、その後に瓦谷一号墳出土例においてはタテハケ調整が施されており円筒形基部に施された二次調整のヨコハケが入念に消されている。また、口縁形態は佐紀陵山古墳例に見る限り直立しているものと考えられる。出現時期としては通説的年代で4世紀の後葉になるものと考えられる。

佐紀陵山型の後継型式について 佐紀陵山型の後継型式としてあげられるのは三重県石山古墳例⁽³⁰⁾や大阪府萱振1号墳例⁽³¹⁾、奈良県渋谷向山古墳例⁽³²⁾にみるように外区に直弧文を描く一群の盾形埴輪である。これら一群の盾形埴輪は全てI-a群ではなくI-b群に属し、I-a群に属する佐紀陵山型の後継型式として考えて良い。内区は平行沈線帯が描かれる石山古墳例や萱振1号墳例の他は明らかでない。

第I-a群山陵町遺跡型盾形埴輪 第I-a群に属する第二の型式としてあげられるのは、奈良県山陵町遺跡SD02地区出土の盾形埴輪⁽³³⁾を標準とする山陵町遺跡型である。他にも畿内では奈良県富雄丸山古墳⁽³⁴⁾、櫛山古墳⁽³⁵⁾、大阪府五手治古墳⁽³⁶⁾等からの出土が知られる他、最近の調査では佐紀陵山古墳⁽³⁷⁾からの出土も報告されている。

ここでは比較的全形の把握が容易な、山陵町遺跡SD02地点出土例を用いてその特徴をあげておこう。支持帯は帯状支持帯であり、支持帯の一部と考えられる小破片に加えて盾面部の裏側に貼付痕跡が残されている資料も多い。事前調整としては突帯を切除した後、縦方向のハケメが何回にもわたって施されている資料と先端の鋭利な工具で円筒形基部の表面に傷付けを行う資料がある。

円筒形基部の特徴は、佐紀陵山古墳例には突帯の貼付位置を作業前に割り付けておくためにあけられると考えられる方形刺突痕跡が存在する。方形刺突は大和北部地域の古墳群の埴輪を中心に採用される技法であり、規格性の高い埴輪を生産することを目的として採用された技法であると考えられている⁽³⁸⁾。

山陵町遺跡出土の円筒埴輪と盾形埴輪は突帯接合位置に関して非常に似かよった規格のもとに製作されていることが指摘されている。更に盾面部の接合の前に赤色顔料が塗布されている円筒形基部が少数であれ存在することも見逃せない。一般に赤色顔料の塗布は円筒埴輪製作の最終工程としてなされると考えられている⁽³⁹⁾。したがって円筒形基部の一部が一度円筒埴輪と同様の製作手順を踏んで製作されたのち赤色顔料の塗布まで完了し、盾形埴輪の円筒形基部として事前調整を経て、盾形埴輪へと加工された様子が想定される。なお、口縁の形態は他の円筒埴輪と同様に直立し、端部は粘土帶が貼り付けられ肥厚されているものと考えられる。これからから、円筒埴輪製作と盾形埴輪製作との間に密接な連動関係が存在したものと考えられる。

文様は内外区を仕切る界線として単線によりII字形に仕切られ、外区は内向の鋸歯文I-a形態が描かれている。I-a形態はこの型式のみに見られる。内区は平行沈線帯が描かれているが内区の四隅でそれぞれが交わり更に沈線で目地形に仕切られている。

なお從来の研究では山陵町遺跡型に見るような鋸歯文を描き内外区を界線で仕切る盾形埴輪群は先述の佐紀陵山型に対して遅れて出現するものと考えられていたが先述のように佐紀陵山古墳において両型式の併存の可能性が出てきた以上、時期差とするには問題が残り、今の所は系列差として認識するのが妥当と思われる。盛行期間としては4世紀の後葉から一部末葉にまで及ぶものと考えられる。

b. 第I-b群の諸型式とその変遷

第I-b群は支持帯の形状から第I-a群の後継群と考えた群である。この第I-b群は法量をはじめとし盾面部に描かれる文様の内外区を刺繡表現により仕切る点や外区に描かれる鋸歯文、さらには内区の文様などに地域を超えた広い齊一性が成立すると指摘できる群である。この群は盾面の形状や文様さらには円筒形基部の口縁の形態などからいくつかの型式への細分類が可能である。

第I-b群金蔵山中央棺型盾形埴輪 第I-b群に属する型式として最初に出現するのは岡山市金蔵山古墳中央棺におけるAW14号並びにAE14号盾形埴輪⁽⁴⁰⁾を標準とする金蔵山型中央棺型である。他にも京都府蛭子山1号墳⁽⁴¹⁾、大阪府長原40号墳⁽⁴²⁾、岡古墳⁽⁴³⁾等から出土が知られる他、盾形埴輪ではないが形態から大阪府美園1号墳出土の家形埴輪の柱に描かれた盾⁽⁴⁴⁾もあげられる。

支持帯は突帯痕跡被覆支持帯a類。事前調整において突帯を切除した後、円筒形基部への傷つけが行われる点はI-a群と変わらない。しかし突帯を切除する範囲はI-a群よりはるかに広い。これは支持帯の形状変化に伴う変化であると考えられる。そもそも帯状支持帯と突帯痕跡被覆支持帯の違いは、支持帯としての性格上、盾面の形状変化に起因するものである。帯状支持帯の装着理由は先述のように盾面部の背後全体を支えることにより盾面部のそり他、微妙な表現の製作を容易にし、側面から見れば盾面部に曲線的なラインを与えることを目的としている。しかし金蔵山中央棺型の諸例を側面から見ればより直線的なラインをなすことが多い。このことから、突帯痕跡被覆支持帯の装着は盾面部の支持帯の貼付を局所化したため、盾面の表面に曲線的なラインを表現することが難しくなったものと評価できよう。また事前調整における突帯を切除する面積の拡大は盾面部における円筒形基部の表面を平坦にする面積の拡大につながり、その点からも盾面の側面の形状が曲線的なラインから直線的なラインを基調とした形態へと変化したことを見かがうことができる。

円筒形基部の外面調整はI-a群と同様に円筒埴輪のそれと大きく変わるものではない。すなわち金

藏山古墳例に見るように一次調整タテハケ、突帯貼付の後、二次調整を加えて完成する。二次調整はストロークの長いヨコハケであることが多い。また、黒斑を有することから野焼きと判断される。赤色顔料の塗布がどの段階で行われるかは不明であるが、透かし孔の穿孔後に施されている可能性が高いことから盾形埴輪として製作が完了した後に塗布されるものと考えている。

盾面部の形状は盾面部の頂に緩やかな山形の張り出しがつくようになるが正面觀は長方形を基調とするものとみて良い。文様は界線として刺繡表現が初めて登場し界線によりII字形の盾面全体が仕切られる。刺繡は二重ないしは三重の平行線の間に短い斜線を充填するものである。炬甲や胄などの部品接合用の革縫じを表現したものと考えられており、この表現をもつ盾形埴輪のモデルが革盾であったことを推察させる根拠となっている。また、界線が内区や外区の文様に対して先行して描かれている。界線は文様区の輪郭線の役割をなすため、界線を先行して描くことにより、文様区の割付が可能となる。更に文様そのものにも割付がなされている。外区の文様はI-b形態鋸歯文が描かれている。内区は大形の鋸歯文I-b形態などが描かれている場合が多いようであるが、金藏山古墳においてはかなりバラエティーに富んでいる。盛行期間は4世紀の末から5世紀の初頭頃と考えられる。

第I-b群室の宮山型盾形埴輪 第I-b群に属する型式として二つめにあげられるのは奈良県宮山古墳M号盾⁽⁴⁶⁾を標準とする室の宮山型である。他に奈良県ナガレ山古墳⁽⁴⁷⁾、大阪府土師の里遺跡の27号並びに28号盾形埴輪用埴輪棺⁽⁴⁸⁾、豊中大塚古墳⁽⁴⁹⁾などがある。

円筒形基部や盾面部の形状などは金藏山中央棺型などと比べても大差はない。内区は重格文であり外区には鋸歯文I-b形態が描かれている。内区の連鎖菱形文は後継型式に継続していくものと考えられるため、金藏山中央棺型より相対的に新しく位置付けられるものと思われる。盛行期間は5世紀前葉の比較的短い時間であったと思われる。

第I-b群誉田御廟山型盾形埴輪 金藏山中央棺型、室の宮山型の後継型式として出現するのは大阪府誉田御廟山古墳山外提出土資料群⁽⁵⁰⁾を標準とする誉田御廟山型であろう。この型式に属する資料はこれまでの型式に比してその数を一気に増加し、大阪府墓山古墳⁽⁵¹⁾、奈良県平塚一号墳⁽⁵²⁾、柳本飛行場例⁽⁵³⁾、市尾今田2号墳⁽⁵⁴⁾、室の宮山古墳⁽⁵⁵⁾、兵庫県行者塚古墳⁽⁵⁶⁾、岡山市金藏山古墳南棺⁽⁵⁷⁾、造山古墳⁽⁵⁸⁾、総社市西山26号墳⁽⁵⁹⁾、邑久郡長船町土師茶臼山古墳⁽⁶⁰⁾などがあげられる。

支持帯の形状は突帯痕跡を覆支持帯a類である。事前調整においては突帯を切除し、更に表面に対して傷付けを行う。この型式に属する資料群の円筒形基部もこれまでに述べてきた型式と変わらず円筒埴輪と同様の製作手順を踏んで製作されるものとみて良い。さて、この型式の円筒形基部の最も特徴的な部分はその口縁形態にある。この切り落とし状口縁は円筒埴輪の口縁端にさらにいくらかの粘土帶を積み上げ、盾面部の裏側全体を支える役目をなす。文様帶の内外区は二重ないしは三重刺繡界線によりII字形、凹凸字形、界の字形に仕切られる場合が多い。界線は他の文様に対して先行して描かれる点はこれまでの型式と共にしている。外区の文様は鋸歯文であり、I-c形態ほか新出のII形態のうちII-a形態、II-b形態、II-c形態が出現する。内区の文様はほぼ全て連鎖菱形文に統一されるものと見て良いが、部分的に青海波紋帯等も用いられる。また造山古墳出土例や誉田御廟山古墳外提出土例に見るように、界線は先行して描かれる他、外区の鋸歯文や内区の重格文などにも薄く二重に見える部分があることから割付線の存在が想定される。盛行期間は5世紀の前葉の末頃から中葉に至るものと思われる。

第I-b群はさみ山型盾形埴輪 特徴はほぼ誉田御廟山型のそれと共通するのだが、円筒形基部の口縁の形状が切り落とし状口縁ではなく「とっくり状口縁」となる一群を特にはさみ山型盾形埴輪として

設定しておきたい。この型式に属する資料としてはこの大阪府はさみ山遺跡⁽⁶⁾、高廻り2号墳⁽⁶⁾、奈良県室の宮山古墳⁽²⁾などがある。

この型式が注目を浴び始めたのは比較的最近のこと、高廻り2号墳例の発見により、この種の盾形埴輪が口縁に冑形埴輪が挿入された初現的な盾持ち人形埴輪として理解されるようになってからである⁽³⁾。また室の宮山古墳例においては、他の盾形埴輪と比して一回り小形の盾形埴輪に冑形埴輪を挿入する状態で方形埴輪列内に配列されていたことが想定されている。

ところで、室の宮山古墳の冑形埴輪はやはり先細りのソケットが接続されており、冑そのものの表現にしころと冑部の接続状態と鉄小札をより立体的に表現したものと考えられる段差を表現した粘土帯が貼り付けられている。ところが、高廻り2号墳出土資料にはこの段差の表現がしころと冑との接合部位と考えられる部位にのみ貼り付けられており、小札の表現はない。のことから写実表現技術という側面から見て、室の宮山古墳出土の資料に比して高廻り2号墳出土資料はやや劣っているとみて良い。すなわち、室の宮山古墳の出土資料に比して高廻り2号墳の出土資料はやや新出となる可能性が想定される。ここで室の宮山古墳例をはさみ山型古相、高廻り2号墳やはさみ山古墳例をはさみ山型新相として把握しておきたい。なおはさみ山型古相は5世紀の前葉、新相は5世紀の中葉に盛行するものと考えている。

第I-b群市尾今田二号型盾形埴輪　　今の所この市尾今田二号墳⁽⁴⁾以外の出土を見ない。円筒形基部や事前調整の特徴は第I-b群のそれと共通するが、盾面の形状において特徴を持つ。この形態は本稿における分類としては第III群となる石見型盾形埴輪のそれと共通し、文様においても文様帶を四つに区画する点や直弧文を描く点などの共通点が多くその初現形態と考えられている。市尾今田二号墳からは誉田御廟山型に属すると考えられる盾形埴輪が共伴しておりこの型式とほぼ同時期の所産であると考えられる。

第I-b群市野山型盾形埴輪　　誉田御廟山型の後継型式であり第I-b群の最終末段階に位置するのは大阪府藤井寺市の市野山古墳出土例⁽⁵⁾を標準とする市野山型盾形埴輪である。他にこの型式に属する資料としては大阪府黒姫山古墳⁽⁶⁾、鳥取県長瀬高浜遺跡例⁽⁷⁾、福岡県冢原古墳⁽⁸⁾、御塚古墳⁽⁹⁾などがあげられる。

支持帶の形状は突帶痕跡被覆支持帶b類であるが、大阪府長原84号墳⁽¹⁰⁾例にも見るよう支持帶を持たないものも存在するらしい。また、事前調整は突帶の切除と円筒形基部への傷つけが行われるもの、その範囲はこれまでの型式に比して極端に狭く、突帶を切除する範囲も大幅に小さくなっている。こうした変化は全て円筒形基部の小型化と、それに連動する盾面部の形状変化に關係している。

円筒形基部の特徴は誉田御廟山型と大きさは変わらないものと考えてよい。やはり円筒埴輪の製作手順と同様の製作手順を踏み製作され、二次調整ヨコハケまで行った後透かし孔の穿孔以前に事前調整が施され盾形埴輪への加工が始まる。ヨコハケ調整としてはB種ヨコハケの他、C種ヨコハケなどが存在し、一部ではあるが二次調整ヨコハケを持たない、一次調整ヨコハケのみとなるものも存在するらしい。口縁形態は切り落とし状口縁となるものが多い。

盾面に描かれる文様は特に退化が著しい。文様帶を仕切る界線やはり他の文様に先行して描かれ、刺繡表現によるものが多い。しかし、二重刺繡表現や三重刺繡表現のものは平行線の間に描かれる革縫じの表現が誉田御廟山型などに比して曖昧となり、省略されて階段状の表現を描く大阪府紅葺山古墳例などもある。内外区に描かれる文様も大きく変化するが特に鎧文においてその変化は顕著である。鎧文

文そのものも誇張して描かれ、塚堂古墳例などのように極端に大形の鋸歯文を描く場合すら存在する。

以上の市野山型とした盾形埴輪では、概して第I-b群に見た比較的高い規格性は崩れ、「円筒形基部先行製作技法」と文様における鋸歯文や刺繡表現など第I-b群と共通する統一的規範を継承しながらも、そうした統一的規範内部での形骸化、多様化が進行していると評価できるのである。したがって、市野山型はより細かく細分が可能であると考えられるが、現段階ではその量的保証が難しい。ここでは多様化、個別化著しいこの段階の盾形埴輪を、そうした多様性、個別性そのものを一つの要素として捉えておきたい。盛行時期は5世紀後葉から一部末葉にかけてとなろう。

第I-b群塚堂型盾形埴輪 第I群最後の型式としてあげられるのは、形態から第I-b群はさみ山型盾形埴輪の後継型式と考えられる福岡県塚堂古墳出土例⁽¹⁷⁾を標識とする塚堂型盾形埴輪である。塚堂古墳では周濠内からおよそ50個体にもなる多量の盾形埴輪の出土を見た。前節で検討したようにこの古墳の盾形埴輪は市野山型盾形埴輪に属するものであると考えられる。またこの多量の盾形埴輪の中に口縁部が丸みを持ちあたかも朝顔形埴輪の肩部のような形態をなす盾形埴輪が存在する。また、この盾形埴輪付近からは鯨面の人物形埴輪の頭部と考えられる破片が出土しているが、首から下は存在せず、頭部のみ単独で存在したものと想定されている。報告者である石山薫はこの人物形埴輪と盾形埴輪が円筒形基部の口縁部に人物形埴輪の頭部をのせて用いる、盾持ち人形埴輪の祖型であるとする⁽¹⁸⁾。

さて、この塚堂型盾形埴輪と同様の特徴を盾持ち人形埴輪の祖型として考えられる型式としても一つ、熊本県中ノ城古墳例⁽¹⁹⁾をあげておきたい。これと同形態をなす盾形埴輪が埼玉県埼玉稻荷山古墳にも存在し、やはり盾持ち人形埴輪の原型と考えられている⁽²⁰⁾。中ノ城古墳例はその特徴から市野山型に属すると考えられる盾形埴輪であるが円筒形基部が塚堂型と同様に丸みを持ちその上部に連続して人物形埴輪の頭部をのせている。ところで、高橋工は先述の盾形埴輪から人物形埴輪への変化を①本稿のはさみ山型である盾形埴輪と人物表現を持たない青形埴輪を別造りする、室の大墓例、高廻り2号墳例から②本稿の塚堂型である盾形埴輪と人物表現を持つ頭部とを別造りとする塚堂古墳例への変化を想定し、さらに③盾形埴輪と円筒形基部の口縁に人物形埴輪の頭部を連続して製作する盾持ち人形埴輪へと変化すると説いた⁽²¹⁾。また高橋は塚堂古墳例から盾持ち人形埴輪との間に④本稿の第I群の形態を持つ盾形埴輪の円筒形基部と人物表現を連続して作る盾形埴輪の存在を想定し、盾形埴輪から盾持ち人形埴輪への変化が畿内を介してではなく九州の内部で独自に行われた可能性を指摘していた。まさにこの中ノ城古墳例の存在こそは高橋の想定を実証するものと言えよう。

以上の成果を基礎として本稿では盾形埴輪から盾持ち人形埴輪への変化を、はさみ山型から塚堂型をへと至る系譜関係として把握したい。

c. 第I群の変遷とその系譜

第I群はこれまで検討してきたように、4世紀後葉に出現する第I-a群である佐紀陵山型、山陵町遺跡型から、4世紀末葉から5世紀初頭の第I-b群である金蔵山型、5世紀前葉には室の宮山型が出現した後、5世紀中葉の普田御廟山型を経て5世紀後葉の市野山型へという系譜関係が把握できる。特に第I-b群においては「円筒形基部先行製作技法」や文様に見る界線や鋸歯文などに比較的高い齊一性が生まれる一方、基本的には円筒埴輪と同様の製作手順を踏み製作される円筒形基部に対し「事前調整」を施すにとどまる加工しか行わないため円筒形基部の形状に大きく規制される、いわば円筒埴輪生産にたいして「受動的盾形埴輪生産」を行うにとどまる第I-b群古段階。口縁への新たな加工部位を

施すなど、円筒埴輪生産にたいして「能動的盾形埴輪生産」獲得したことにより、新たな外観を持つ埴輪として、盾持ち人形埴輪への系譜や、市尾今田型などを生み出した第I-b群中段階。そして誉田御廟山型から円筒形基部先行製作技法や文様における界線や縦目文などの要素を受け継ぐにも関わらず、そうした要素全体が形骸化・多様化をたどり、盾形埴輪一個体レベルでの個別性が目立ち始める第I-b群新段階の三段階に整理可能である。

次節ではここまで得られた成果を元にして第2号古墳資料について検討したい。

5) 造山第2号古墳出土資料の位置付け

a. 造山第2号古墳における形象・器財埴輪の出土状況

第2号古墳の埴輪列の配列は円筒埴輪を5本挟んで盾形埴輪と朝顔形埴輪との両者が交互に入れ替わながら配列されるという非常に規則的な特徴を持つものであった。こうした配列は京都府黄金塚2号墳の埴丘裾で発見された埴輪列や、また盾形埴輪の原位置が把握されてはいないがその可能性として大阪府藤井寺市に所在する、誉田御廟山古墳の陪塚の一つと考えられている栗塚古墳などがあげられる。

また周溝内部からも多量の埴輪が出土しており、埴丘側からの流入と推定されている。盾形埴輪、衣蓋形埴輪、韌形埴輪(?)、不明小形円筒がある。ここでは盾形埴輪についての検討を行い、引き続いでの他の形象埴輪についても言及したい。

b. 盾形埴輪の特徴とその位置付け

結論から先にいえば、第2号古墳における盾形埴輪はその特徴からほぼ二相にわかれるものと考えて良い。それはその分布にも顕著に現れており、その第一は埴輪列の盾形埴輪、第二は周溝内の盾形埴輪である。

埴輪列の盾形埴輪　埴輪3、15、27、39、51、63、75、105などである。全容が把握可能なのは27のみであるが、ここではおりにふれてほかの資料も利用しつつ、埴輪列の盾形埴輪の特徴をまとめよう。27によれば復原全高は約70cmと小形であり、円筒形基部は径26から28cm程度の円筒形で51に見るかぎり外面二次調整としてC種ヨコハケ技法が施される。ハケメのストロークは長く、タガ間を2、3回繰り返し施す点や胎土において他の円筒埴輪とあまり変わらない。このことからも盾形埴輪の円筒形基部と円筒埴輪の製作工人とが非常に密接な関係性のもとでその製作にあたっていたことがわかる。しかし27の資料を見る限り、盾形埴輪の円筒形基部の第一段突堤は最下部から20cm程度の所、盾面部の最下部に接する形に貼り付けられており、円筒埴輪のそれと比べて最下段突堤の貼付位置が10cm程も高い(第72図)。このことから埴輪列の他の円筒埴輪と同様の手順を踏んで製作されながら突堤の張り付け位置に関して特殊な円筒形基部を作り分けていることがわかる。また27の盾面部の上部左側の裏面には支持帯が貼り付けられた痕跡が残っている。このように盾面部の比較的高い位置に突堤を持つ場合、その円筒形基部の形態は直口口縁か切り落とし状口縁の二つの可能性が想定できるが、盾面部の上端付近は円筒形基部の表面を利用することなく粘土板のみで盾面部を製作していることから円筒形基部の口縁形態

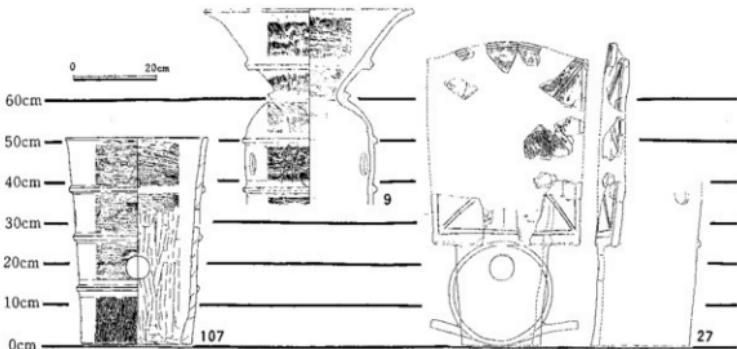
は切り落とし状口縁となる公算が大きく、突帯の貼り付け位置を含め、円筒埴輪生産と非常に強い運動性を持ちながらも、盾形埴輪としての独自の表現を獲得するため円筒形基部の一部に加工などを施す「能動的盾形埴輪生産」により製作された蓋然性が高い。

27では支持帯は突帯痕跡被覆支持帯b類であり、事前調整として15、51では突帯の切除と先端の銳利な工具での円筒形基部への傷付けが行われている。事前調整におけるハケ調整は行われてはいないようである。以上の特徴を整理すれば埴輪列の盾形埴輪は第I-b群新相それも市野山型に属する可能性が高いものと考えている。このことは伴出している円筒埴輪の年代観とも矛盾しない。

文様は27では単線の界線により内外区を回の字形に仕切、内区の長方形区画に対して盾面部の角から複線の斜行線が引かれている他、盾面部の下端線中央から内区に対して垂直線が引かれるものと考えて良い。こうした文様は誉田御廟山古墳外堤例¹⁶⁾に近いものが見られる他は畿内では見られないものであり第2号古墳例に特徴的と言える。このことから考えて少なくとも文様に関しては吉備の在地の工人が関わって描かれた可能性が高いものと考える。

次に3の盾形埴輪付近で出土した胃形埴輪について考えよう。この胃形埴輪はしころと考えられる部位を欠損しているため全形はわからないが、衝角付き胄を模したものと思われる。またこうした胃形埴輪は粘土の貼りつけや沈線により小札や帶金、鉢などの表現がなされるがこの例にはそうした特徴は見られない。また顔面となる部位には透かし孔が開けられるのみであり、これは高橋克壽の研究によると5世紀前葉から中葉にかけての特徴であるらしい¹⁷⁾。付近には甲胃形埴輪の破片は見つかっておらず盾形埴輪に胃形埴輪を挿入する初期の盾持ち人形埴輪と考えたはさみ山型に属するものであろう。こうした胃形埴輪である可能性を持つ個体は他に39が見られる。

3、39は胃形埴輪を盾形埴輪の口縁に挿入する盾持ち人形埴輪になるものと考えられる。残念なことに3、39の盾形埴輪は全形が不明であるため口縁形態を含めた盾形埴輪そのものの特徴は押さえられない。しかし埴輪列の他の盾形埴輪が第I-b群の新相に属することを勘案すれば、人物の顔面の表現を行わない第I-b群中段階のはさみ山型とそれを行う第I-b群新相の塚堂型盾形埴輪との間に位置付けられる資料と考えて良い。このことは第2号古墳埴輪列の円筒埴輪が全て二次調整まで施しているのに対して、塚堂古墳、中ノ城古墳の両古墳においては一部ではあれ一次調整タテハケのみで製作を終わる



第72図 第2号古墳出土埴輪の規格比較(1/12)

川西宏幸のV期⁽¹⁰⁾に属する円筒埴輪が存在し、第2号古墳の方が古相に位置付けられることとも矛盾せず理解することができよう。

周溝出土の盾形埴輪 第47図87は盾形埴輪の上半部となる資料であり、全形は明らかでない。円筒形基部は口縁に近づくにつれすぼまり、とっくり状をなしているものと考えられる。加えて断面における接合痕跡の観察から、盾面部は上端に至るまで円筒形基部の表面を利用していることがわかる。事前調整としては突帯の切除が行われたことが確認できる他は不明である。盾面部は長方形をなすものと考えられ、側面から見れば緩やかな弧を描いたラインをなすものらしい。盾面部の外側調整は劣化のため不明であるが、埴輪列の盾形埴輪と同様ハケ調整によるものであった可能性は高い。界線によりⅡの字、ないしは凹凸字形に仕切られ、外区は鋸齒文Ⅱ-a形態、内区は重格文となる。鋸齒文は整然と描かれており、一部に割り付け線の使用が認められる。これらの点を総合してこの資料も埴輪列の3、39の様に背形埴輪を挿入する盾持ち人形埴輪と考えられ、文様等の特徴から考えてはさみ山型新相に属する資料と考えられる。埴輪列の盾形埴輪に比して畿内の影響が強くはさみ山遺跡例などの製作に関わった工人の吉備への招聘が考えられる。

第2号古墳出土資料の位置付け 盾形埴輪全体として見れば、周溝内の資料が埴輪列の資料に対して一段階古く第I-b群中段階に属し、埴輪列の資料が第I-b群の新段階に属するが、盾持ち人形埴輪の形状から考えて新段階の比較的古い時期に位置付けられるものと考えた。また畿内の製作技術との比較で特に文様の面において畿内から直接招聘された可能性のある工人と、吉備在地の工人の両者がその生産に関わったものと考える。現状で周溝内と埴輪列との円筒埴輪で明確な時期差が見出しづらい以上、第2号古墳における両資料は第I-b群中段階から新段階の移行期間にあったと位置付けられる。大まかな絶対年代としては5世紀中葉の末から後葉の初頭となるものと思われる。

その他の形象・器財埴輪について 周溝内からは盾形埴輪の他に、鞍形埴輪片と蓋形埴輪、不明小形円筒の3種類の器材埴輪が検出されている。

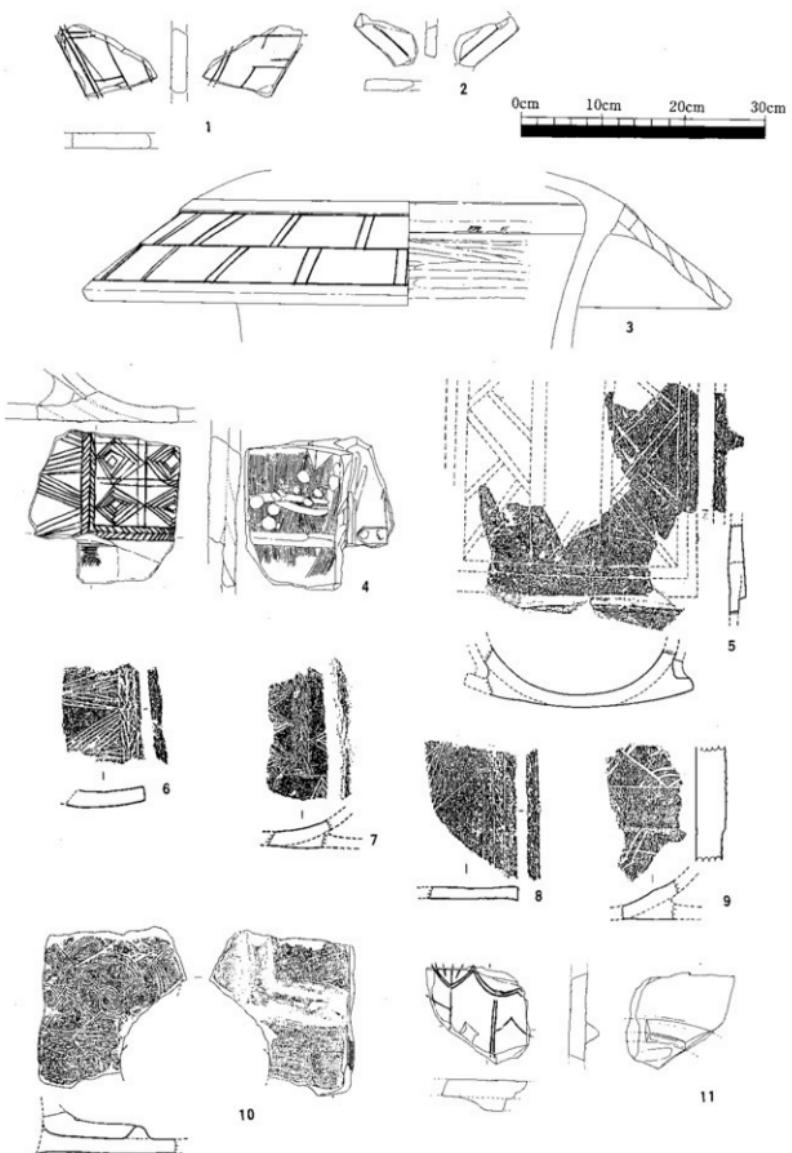
まず蓋形埴輪はほぼ同一の特徴をなす。第45図77は笠部先端にそって沈線が一周まわっている。78は軸受け部下帯突帯をもち、笠上半部に沈線により笠の布張りの表現を描く。松木武彦⁽¹¹⁾の研究を参考にすれば、氏のいう津堂城山タイプ新相の特徴を持つと言える⁽¹²⁾。しかし笠の布張りの表現は黒姫山古墳例⁽¹³⁾に最も近いが、黒姫山古墳例は笠の端部近くまで二状の沈線を先端に対して垂直に描いており、若干異なる。やはり埴輪列の盾形埴輪同様、外表面に描かれる文様については吉備在地の工人が関与しているものと思われる。

鞍形埴輪（第46図84、85）は小破片で判然としない。可能性として矢筒部の破片であることが考えられる。

・不明小形円筒（第46図82）とした個体は円筒埴輪のように突帯により何段かに筒部が仕切られ、二次調整としてB種ヨコハケ調整が認められる。向かって上方に向かって朝顔形埴輪のよう開く。透かし孔は方形である。こうした特徴をなす例は今の所、岡山県月の輪古墳例⁽¹⁴⁾が知られるのみであり、きわめて吉備在地色の強い個体と言える。その個体の製作に、特に古市古墳群を中心に発達するB種ヨコハケ技法が用いられている点は示唆的である。やはりこの個体にも吉備と畿内の2つの工人が協業する形で製作にあたっているものと考えることができる。

第2号古墳からはこれまで述べたように多くの形象・器財埴輪が出土したが、一概にいって畿内の技術系譜を根幹に置きながらも、特に視覚的に判別できる文様において吉備在地色が見て取れる。また不

付章2 形象埴輪から見た造山第2号古墳



第73図 造山古墳表探の形象・器財埴輪(1/6)

5~10は注58文献より引用転載

明小形円筒に見るように吉備在地の器材埴輪の工人が積極的にその製作に関わっていたものと考えられる。こうした状況は第2号古墳の築造に際して儀礼執行者である首長が畿内から招聘した工人と吉備の在地の工人との間で協業体制による製作により引き起こしたものであると言え、この協業の場を通じて形象・器材埴輪の製作技術の両地域での統合と差異化が同時に進行したものと考える。

c. 造山古墳と造山第2号古墳の盾形埴輪から見た造山古墳群

では最後に第2号古墳の主墳であると考えられる造山古墳における形象・器材埴輪との比較を通じて、両者の関係について考えたい。造山古墳では盾形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪、船形埴輪などの表採例が知られる⁽³³⁾(第73図)。盾形埴輪では第I-b群中段階に属する5世紀中葉頃出現する誉田御廟山型の盾形埴輪が表採されている(第73図4)。事前調整としては突帯の切除が行われたことが確認できる他は不明である。盾面部は長方形をなすものと考えられる。盾面部の外面調整はタテハケ調整である。界線によりIIの字、ないしは凹凸字形に仕切られ、外区は鋸歯文II-a形態、内区は連鎖菱形文となる。鋸歯文は整然と描かれており、一部に割り付け線の使用が認められる。文様等の特徴は第2号古墳出土のそれとほぼ代わりはない。このことから造山古墳における盾形埴輪製作に從事した集団と第2号古墳における集団とが同一の集団、あるいは直接の影響下にある在地の集団であった可能性が高いものと考える。ところが第73図5に見るよう、明らかに在地的な特徴をもつ盾形埴輪も混在している。この個体は盾面部が小形で外区に平行複線を交互に斜めに描くなどかなり特殊な文様と形態を持つ。こうした個体が造山古墳に存在することは①畿内における副葬品盾は異なる盾形埴輪が吉備に存在しそれをモデルとして畿内の製作集団が製作にあたったか②吉備で独自の埴輪製作集団が存在した、の二つの可能性が想定できる。いずれにせよこれが造山古墳群における埴輪の製作環境で独自に生み出された可能性は高く造山古墳の盾形埴輪は決して特定の集団により排他的に製作されたのではなく、畿内の技術的影響下にある集団とともに吉備で独自に編成された集団との協業という形でなされた⁽³⁴⁾ものと考えた方が良いようであり、第2号古墳の場合とあわせてこうした両地域の工人の協業体制が造山古墳群の器財埴輪製作にあたって一般的なものであったと考える。

器材埴輪の検討を通じて造山古墳群の生産環境は基本的に畿内の製作技術を根幹としながらも、吉備の在地の工人がそれに積極的に関わる状況が見て取れ、そこから吉備の首長の活発な工人招聘活動と、工人同士での製作技術の統合と差異化が促進されたことを説いた。二つの技術系譜、特に文様を主体とする外観に二つの系譜が作り出されるのであり、儀礼の執行の際、その目撃者は両技術系譜、外観の統合と差異を同時に見出すことが可能であったろう

以上のことから第2号古墳の埴輪列の器材埴輪製作と消費において、製作者としての埴輪工人、配列と目撃を通しての儀礼参加者、そして首長の工人招聘活動と儀礼の実践という、三つの位相で執り行われた社会的実践活動が、吉備と畿内の間でのアイデンティティーの統合化と差異化の両者に寄与していたものと推察するのである。

本論考は1999年度卒業論文として提出した「盾形埴輪から見た古墳時代の変革-古墳時代象徴消費様式の構造転換-」の一部を書き改めた物である。論文作成にあたっては稲田孝司、新納泉、松木武彦の諸先生方に多くの助言を頂いた。山陽学園所蔵資料の実見、実測にあたっては西川宏氏の便宜を図って

付章2 形象埴輪から見た造山第2号古墳

頂いた。資料面と解釈論の両面で助言をくださった岡山市教育委員会の安川満氏、院生勉強会において発表した際、岡山大学大学院文学研究科考古学履修コースの諸先輩方、同輩、後輩にも多くのご助言を頂いた。加えて資料の実見、実測にあたり以下の諸機関の方々にお世話になった。記して感謝とする。

牛窓町教育委員会、岡山理科大学、長船町教育委員会、笠岡市教育委員会、樅原考古学研究所、倉敷考古館、古代吉備文化財センター、山陽学園、月の輪郷土館（50音順）

注

- (1) 田中秀和 1994 「畿内における盾形埴輪の検討—革盾模倣盾形埴輪を中心として—」『大阪市文化財論集』
(財) 大阪市文化財協会
- (2) 小栗明彦 1994 「山陵町遺跡SD-02及びSD101出土の埴輪について」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第67冊 平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪』奈良県教育委員会
- (3) 後藤守一 1942 『埴輪』アルス叢書15
- (4) 勝部明夫 1987 「古代盾と宗教観」『呪法と祭祀・信仰』日本考古学論集 第2巻 吉川弘文館
- (5) 水野正好 1974 「埴輪体系の把握」『埴輪と石の造形』古代史発掘 第10巻 講談社
- (6) 近藤義郎 1958 「吉備国における埴輪の変遷」『古代吉備』第2集
- (7) 小林行雄 1976 『埴輪』『古墳文化論考』平凡社
- (8) 田中憲治 1981 「盾形埴輪について」『古市遺跡群III』羽曳野市教育委員会
- (9) 橋本哲夫 1985 「大和における盾形埴輪の系譜」『平等坊・岩室池古墳』天理市教育委員会
- (10) 高橋克壽 1988 「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻2号
- (11) 高橋工 1991 「盾形埴輪の検討」『長原遺跡発掘調査報告IV』(財) 大阪市文化財協会
- (12) 桜井久之 1991 「長原40号墳」『長原遺跡発掘調査報告IV』(財) 大阪市文化財協会
- (13) 注2文献
- (14) 注1文献
- (15) 注1文献
- (16) 注10文献
- (17) 伊達宗泰 1997 「盾形埴輪考」『黄金塚2号墳の研究』花園大学黄金塚2号墳の研究
- (18) 注1文献
- (19) 注17文献
- (20) 団正雄 1997 「鱗付き円筒埴輪と盾形埴輪の配列」『黄金塚2号墳の研究』花園大学黄金塚2号墳の研究
- (21) 西光慎二 1997 「鱗付き円筒埴輪と盾形埴輪の配列」『黄金塚2号墳の研究』花園大学黄金塚2号墳の研究
- (22) 奈良県教育委員会 1969 「マエ塚古墳」樅原考古学研究所編、
樅原考古学研究所附属博物館 1984 「マエ塚古墳」『大和考古資料目録第11集』
- (23) 長原遺跡調査会 1977 「長原遺跡発見の盾形埴輪を軸用した埴輪館」『瓜破北・瓜破遺跡発掘調査概要』

- (24) (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997 『京都府遺跡調査報告書第23冊 瓦谷古墳群』
- (25) 注2文献
- (26) 石田茂輔 1967 「日葉酢緩御陵の資料について」『書陵部紀要』第19号
- (27) 注22文献
- (28) 注24文献
- (29) 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号
- (30) 京都大学文学部博物館 1993 『京都大学文学部博物館図録第6冊 紫金山古墳と石山古墳』
- (31) 大阪府教育委員会 1992 『大阪府文化財調査報告所第39号 莳振遺跡』
- (32) 石田茂輔 1967 「景向天皇山辺御陵の出土品」『書陵部紀要』第26号
- (33) 奈良県教育委員会 1994 『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第67冊 平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪』
樞原考古学研究書編
- (34) 奈良県立樞原考古学研究所附属博物館 1984 「富雄丸山古墳」『大和考古資料目録第11集』
- (35) 樞原考古学研究所附属博物館 1984 「櫛山古墳」『大和考古資料目録第11集』
- (36) 高橋浩二 1999 「古市古墳群成立期の中小古墳-五手治古墳の調査成果から-」『埴輪論選』第一号
- (37) 福尾雅彦・徳田誠志 1992 「狭木之寺間陵の墳丘外形調査」『書陵部紀要』第43号
- (38) 高橋克壽 1994 「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻2号、
板浦 1994 「奈良県の円筒埴輪」『樞原考古学研究所論集』第11巻樞原考古学研究所
- (39) 注29文献、赤堀二郎 1979 「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』90号
- (40) 西谷真治・鎌木義昌 1959 『金城山古墳』倉敷考古館
- (41) 埋蔵文化財研究会 1985 『(資料) 形象埴輪の出土状況』
- (42) 注12文献
- (43) 藤井寺市教育委員会 1989 『岡古墳-古市古墳群の調査報告 I-』藤井寺市文化財報告第5集
- (44) 渡辺昌宏編 1985 『美園』(財) 大阪文化財センター
- (45) 秋山日出雄・網干善教 1959 『室の大墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第18冊 奈良県教育委員会
- (46) 川合町教育委員会 1998 『国指定史跡ナガレ山古墳』
- (47) 大阪府教育委員会 1990 『大阪府藤井寺市所在土師の里遺跡、盾塚、珠金塚、鞍塚他発掘調査概要 I-府営道明寺南住宅建設に伴う発掘調査1987、1988年度調査区-』
- (48) 大塚古墳発掘調査団 1992 『摂津豊中大塚古墳第三次調査概要報告書 大阪府豊中保険所建替工事に伴う発掘調査』
- (49) 大阪府教育委員会 1981 『応神陵古墳外堤調査概要』
- (50) 羽曳野市教育委員会 1997 『墓山古墳』『羽曳野市史』
- (51) 注40文献
- (52) 注40文献
- (53) 注40文献
- (54) 注44文献
- (55) 加古川市教育委員会 1997 『加古川市文化財調査報告書15 行者塚古墳発掘調査概報』

付章2 形象埴輪から見た造山第2号古墳

- (56) 注40文献
- (57) 春成秀爾 1983「造山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』
- (58) 岡山県古代吉備文化財センター 1997「西山遺跡・西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121』中国横断道建設に伴う発掘調査4』日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会
- (59) 亀田修一 1997「土師茶臼山古墳」『長船町史』考古資料編
- (60) 注41文献
- (61) 注11文献
- (62) 注45文献
- (63) 注11文献
- (64) 注41文献
- (65) 注41文献
- (66) 森浩一 1953『黒姫山古墳の研究』大阪府文化財調査報告第1号
- (67) 鳥取県教育文化財団 1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告IV：埴輪編』
- (68) 馬田弘稔編 1983『塚堂古墳の調査』『浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 塚堂遺跡I』福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査
- (69) 久留米市教育委員会 1995『史跡御塚、權現塚古墳 久留米市文化財調査報告書第101集』
- (70) (財)大阪府文化財協会 1991『長原・瓜破遺跡発掘調査報告II』
- (71) 注68文献
- (72) 注68文献
- (73) 熊本大学文学部考古学研究室 1994『熊本大学文学部考古学研究室研究報告第1集』
- (74) 右島一夫 1990「古墳から見た5、6世紀の上野地域」『古代文化』第42巻7号
- (75) 注11文献
- (76) 一瀬和夫 1988「古市古墳群における大形古墳埴輪集成」『大水川改修に伴う発掘調査概要・V』大阪府教育委員会
- (77) 注10文献
- (78) 注29文献
- (79) 松木武彦 1990「蓋形埴輪の編年と面期-畿内を中心に-」『鳥居前古墳-總括編-』大阪代文学部考古学研究室
- (80) 蓋形埴輪については松木武彦氏に直接ご教示頂いた。
- (81) 注67文献
- (82) 近藤義郎 1960『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会
- (83) 注58文献
- (84) 同様の見解は造山古墳表採の蓋形埴輪の検討を通じて松木武彦によっても提出されている。
- 松木武彦 1994「吉備の衣蓋形埴輪-器材埴輪の地域性研究に関する予察-」『古代吉備』第16集



第2号古墳遠景(造山古墳から)

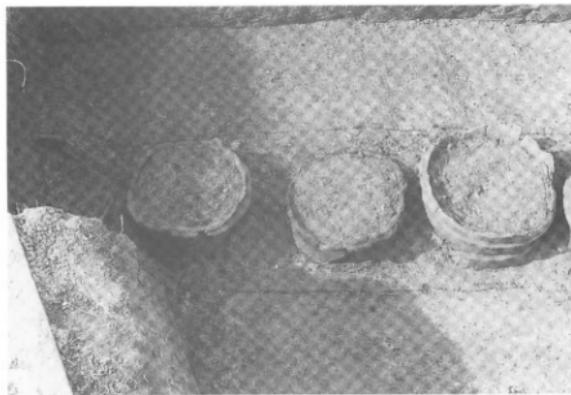


埴輪列(西から)

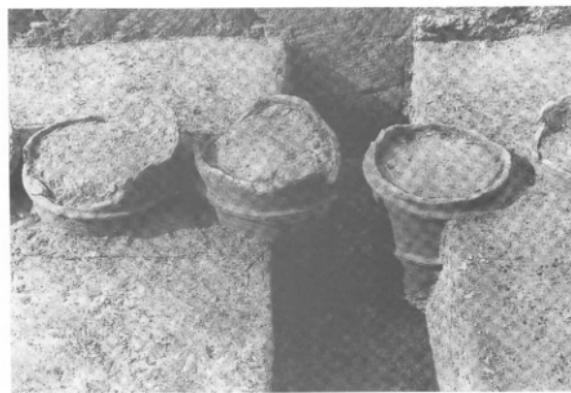


埴輪列(東から)

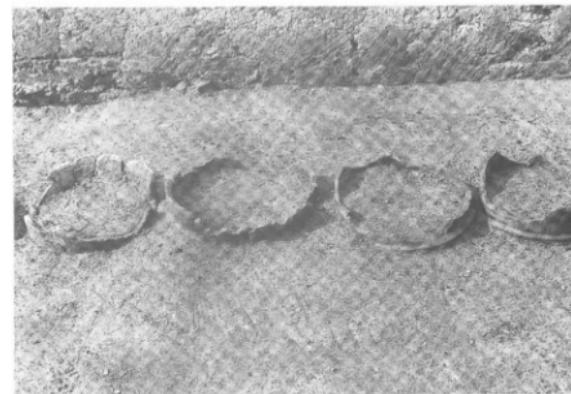
図 版 2



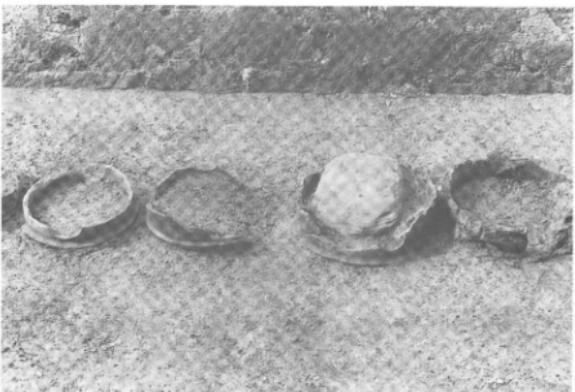
埴輪列(埴輪1~4)



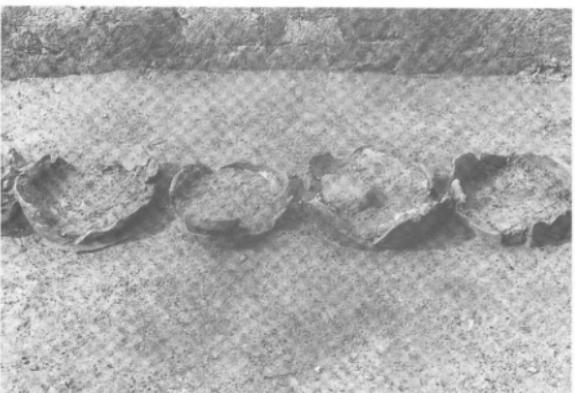
埴輪列(埴輪5~7)



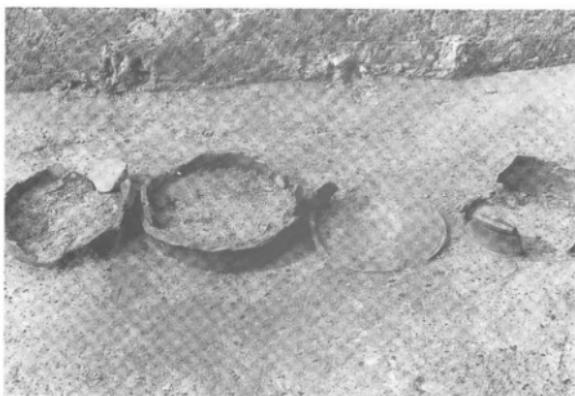
埴輪列(埴輪8~11)



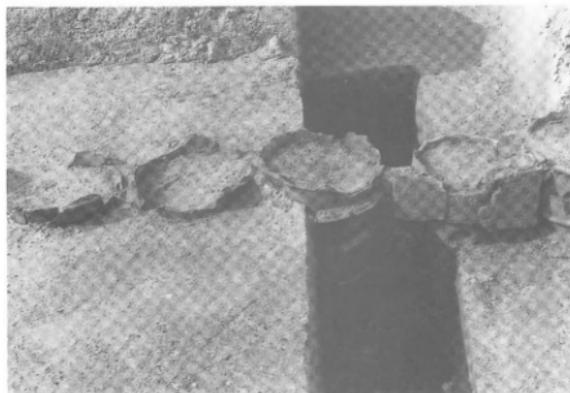
軸輪列(軸輪12~15)



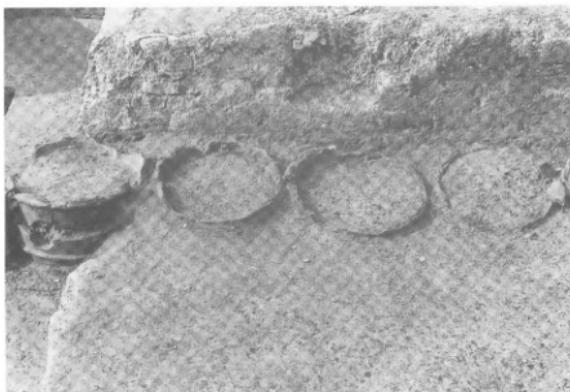
軸輪列(軸輪16~19)



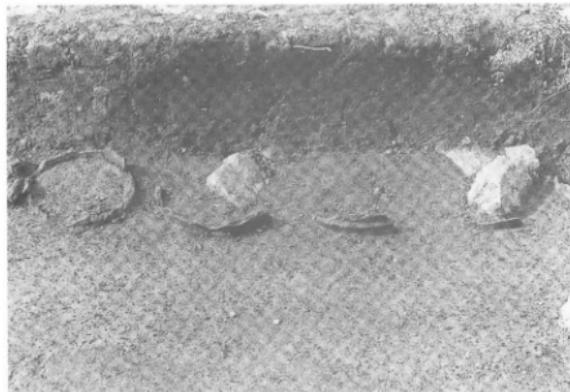
軸輪列(軸輪20~23)



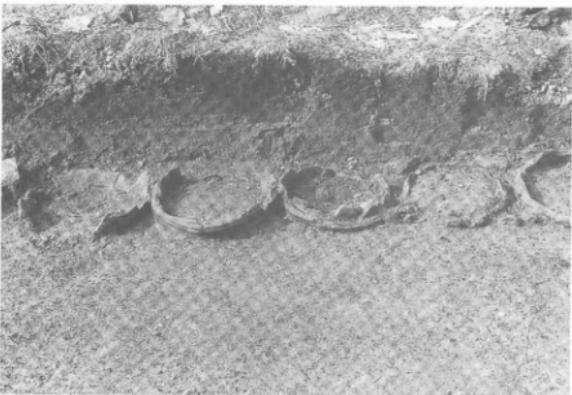
埴輪列(埴輪24~27)



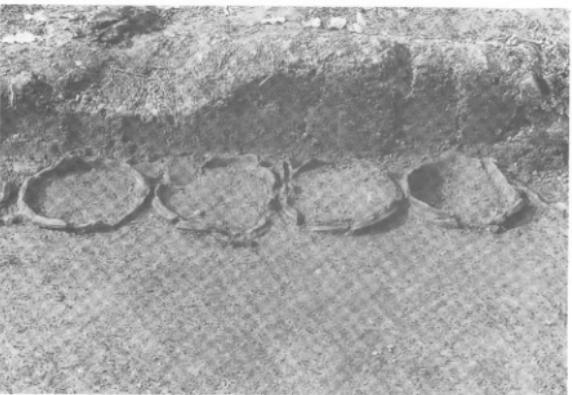
埴輪列(埴輪28~31)



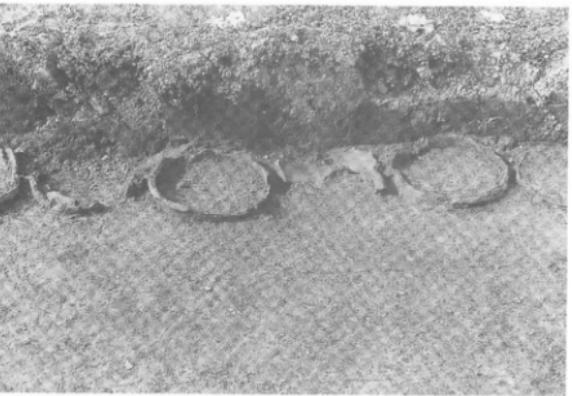
埴輪列(埴輪32~35)



埴輪列(埴輪36~39)



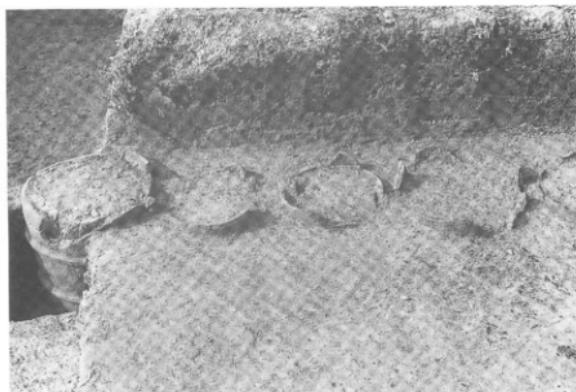
埴輪列(埴輪40~43)



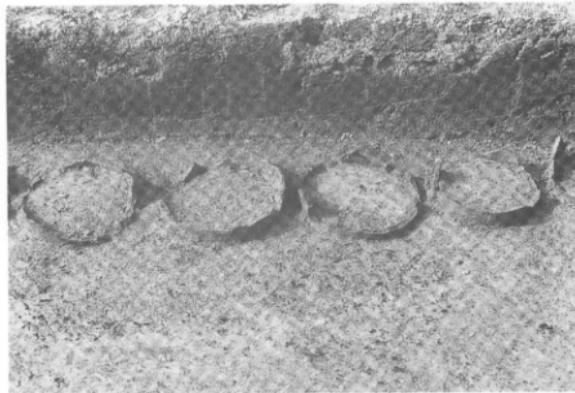
埴輪列(埴輪44~47)



埴輪列(埴輪48~51)



埴輪列(埴輪52~55)



埴輪列(埴輪56~59)